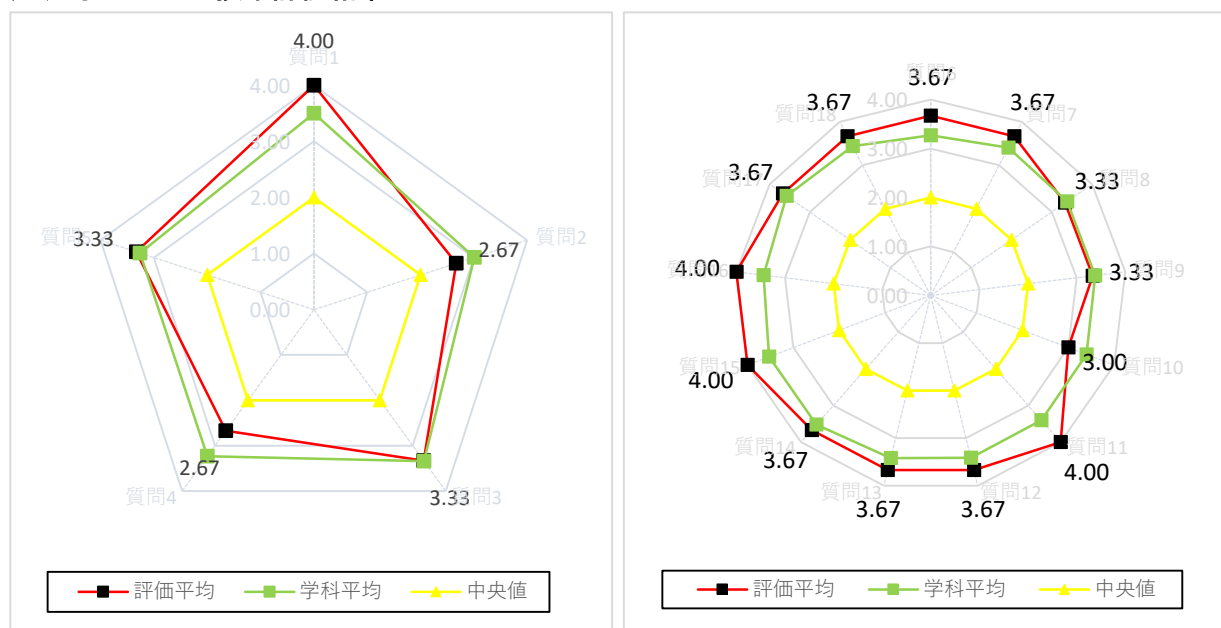


学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

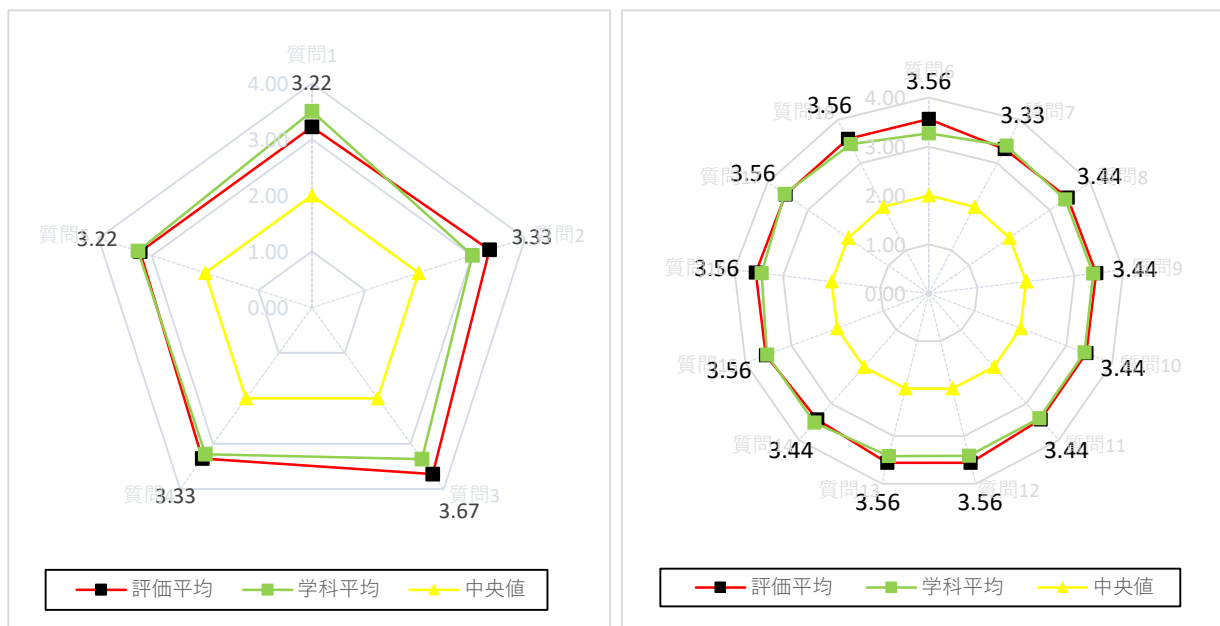
質問項目の2及び4が低いのは、学生自身の問題よりもそこへの働きかけが足りなかったという問題であると言える。質問の項目6から18に関しては学科平均より高く、概ね高得点である。ただ質問10が低い結果となっている。これはゼミ別の指導の際に視聴覚機器の活用が適切でなかったことであると真摯に受け止め反省をしたい。

（３）次年度に向けての取り組み

特にゼミ別の際に、視聴覚機器を適切に用い、学生自身が考え、授業理解を促進させるような指導を展開していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	13名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

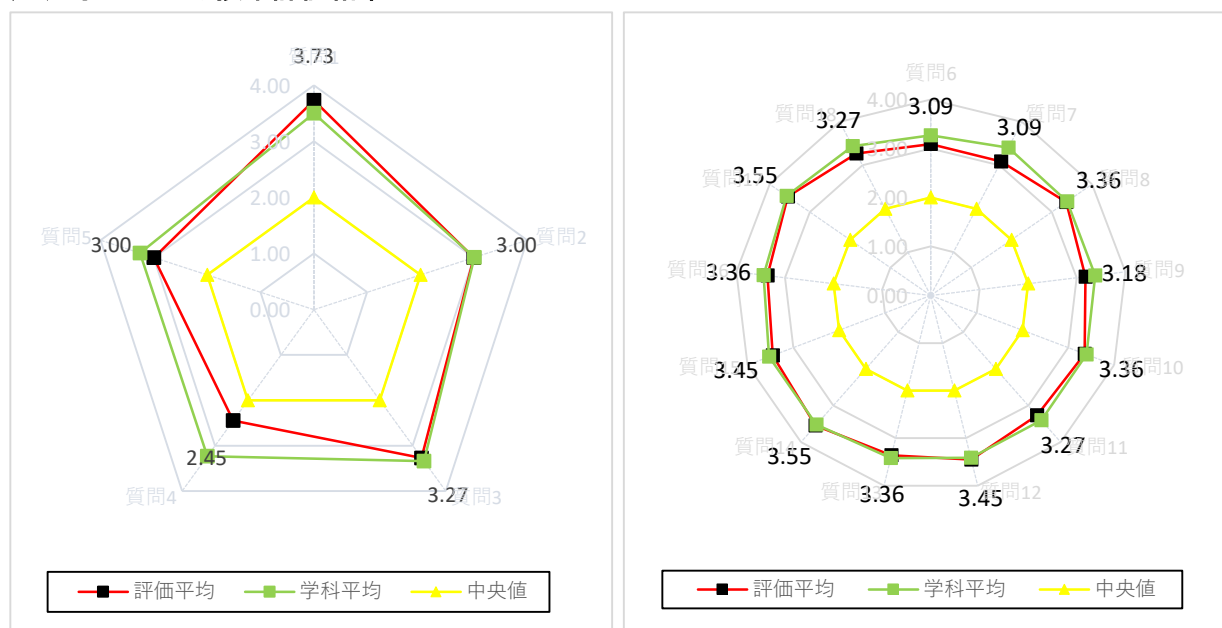
例年に比べて少人数のゼミで指導できたので、一人ひとりの状況を把握しやすかったです。学生たちが授業中に発言する機会も多く得られたと思います。

（３）次年度に向けての取り組み

1年生のゼミは一人ひとりの状況把握が大切になりますので、次年度以降も一人ひとりに目をかけていくことを心がけていきます。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ 基礎（初年次教育含）	13名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

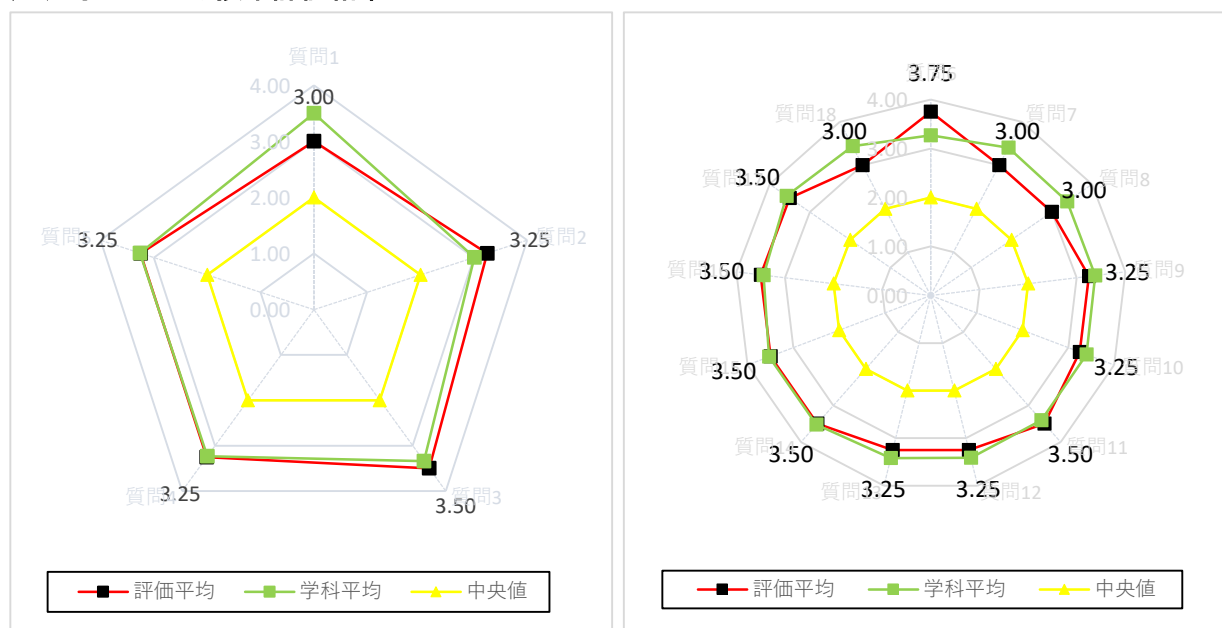
「質問4 あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか。」「質問6 シラバス（授業計画）について説明がありましたか。」「質問7 教員は授業の到達目標を明確にして、授業を展開していましたか。」が、学科平均より低い得点であった。この授業は、全体授業とゼミ別授業がランダムに進行していくものであり、学生にとっては予習をどのようにすればいいか分かりにくくなっているかと推察される。また到達目標も明確に伝えることが、教員自体なかなかできなかったため、このような評価になったと考えられる。

（３）次年度に向けての取り組み

授業内容の体系的に整理することを、学科全体で取り組み、さらに学生には「何を目的に行うか」到達を明確に毎時間伝える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

「あすなろうⅠ 基礎」については、年間計画において全体で行われるもの、ゼミごとに行われるものに大別される。さらに、全体の中で進められたものであっても、それを踏まえてゼミに持ち帰ってさらに一人ひとりが活発に意見し、メンバーで考えるという討論の機会が設けられており、より発展したものになるよう方向づけがなされている。

また、大学入学と同時に自らの生活をポートフォリオを通じて振り返ったり、大学生活の中で必要不可欠なマナーの点などを見直す機会にもなっている。ポートフォリオについては、修学ポートフォリオを更新しない学生がおり、注意したがなかなか改善されなかった。学生自身の意識の低さが目立つため、今一度あすなろう精神の再確認が必要である。

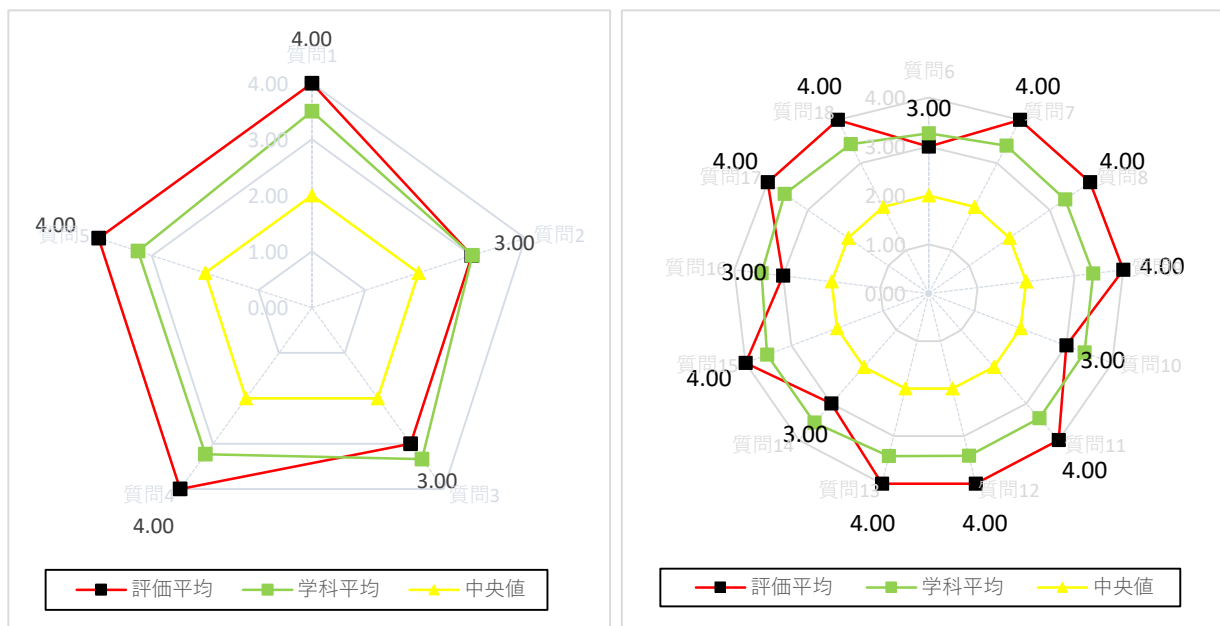
（３）次年度に向けての取り組み

次年度においては、今回の反省点を踏まえ、一人ひとりの学生に対し、より配慮したサポートができるよう、特にゼミごとの時間を大切にして取り組んでいきたいと考える。

また、年間計画に基づく到達目標の明確化についても、一人ひとりの学生が十分理解できるよう工夫して臨みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	8名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

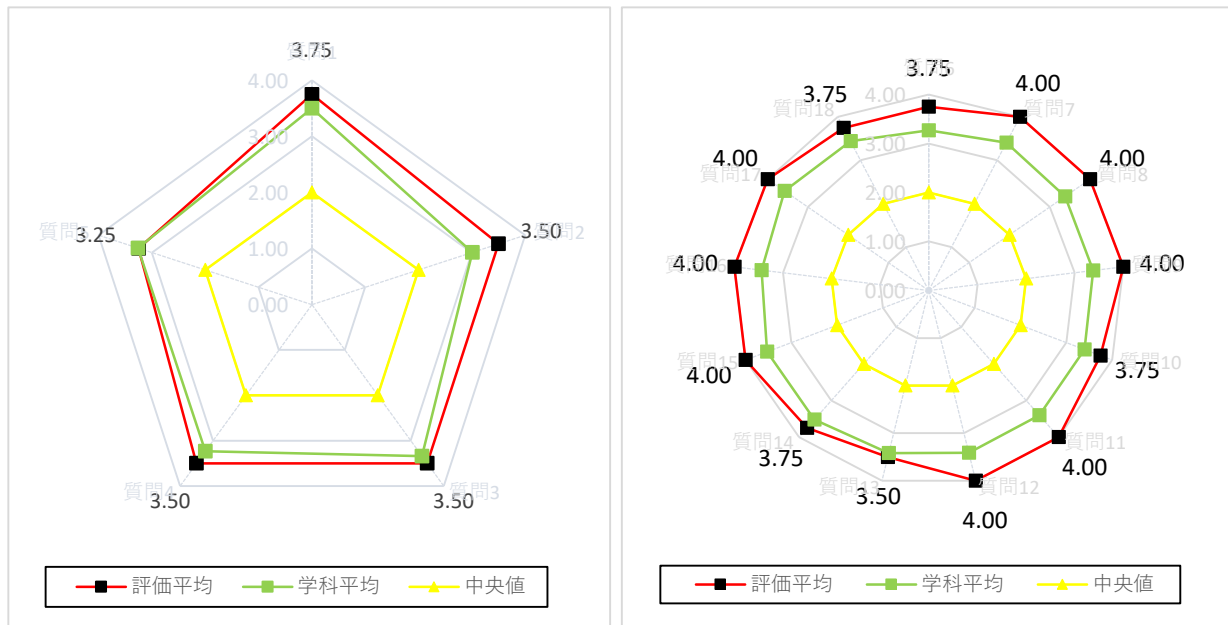
1名の回答である。妥当性が低い。質問?視聴覚機器、板書の活用、14質問への対応、16双方向的対応が3の「やや良い」に止まり、学科平均より低い。授業の内容から、板書等は活用しない、また、質問への対応、双方向的やり取り、両者については授業者が心がけたつもりであったが、十分とは言えなかったと思われる。この改善を心がけたい。

（３）次年度に向けての取り組み

「あすなろうⅠ基礎」に於いては、受講者との対話が重要である。その充実を心がけるべきである。今後、評価が十分には高くなかった、質問への対応、双方向的やり取り、両者については、この改善を心がけたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	8名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

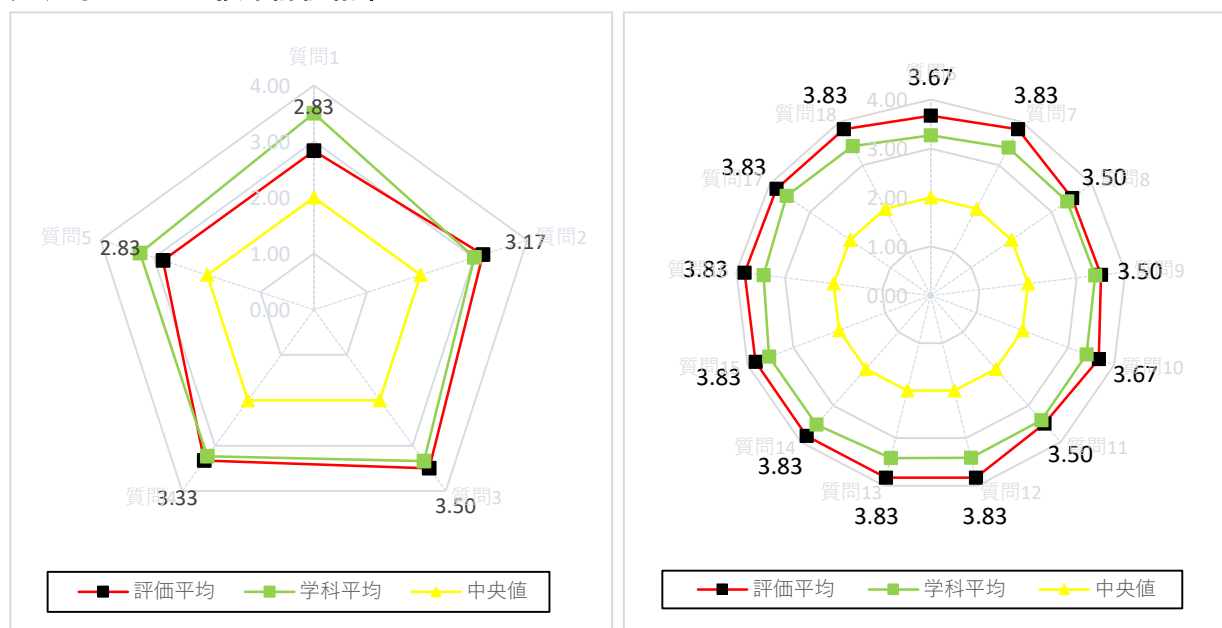
学生同士のコミュニケーションがととてもよく、みな積極的な学習態度であった。レポートや宿題等の提出もきちんとなされ、授業のねらいは達成できたと思う。また、校外学習で柳川市の北原白秋文学記念館に学生を連れて行ったが、実に意欲的な学びを見せてくれた。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度も座学と体験とのバランスを考えた学習や授業をつくっていききたい。とりわけ、大学に入学してきた1年生ゆえ、大学で学べきスタディ・スキルの定着を図っていききたい。平成31年（令和元年）度は、昨年度末に学科全体で見直した計画にしたがって実施していくので、実施後の確実な評価と省察を大切にしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ 基礎（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

本科目は、学士としての基礎を固める初年次教育を行い、幅広くかつ明確な職業観を養うための基礎を身につけるとともに、社会人として求められる基礎力を理解することをねらいとする科目である。授業の多くをゼミ形式で行っており、当ゼミは今期7名が履修した。

項目ごとの評価平均点は、どの項目も学科平均点を上回っていた。質問6～18の平均も3.73で、良好に授業が展開されたと考える。しかし、授業への興味・関心、授業の分かりやすさ、教科書や配布資料の有用性に関する項目の評価平均点は、他の項目と比較して0.2～0.3程度低く、改善の必要がある。

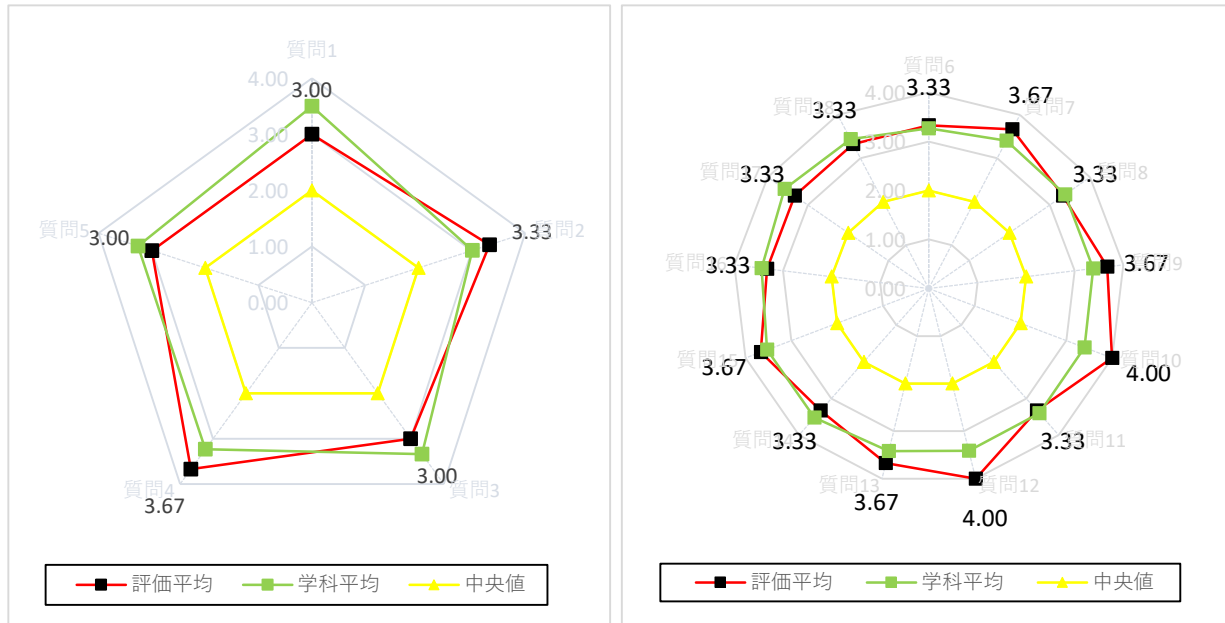
授業のほか、各種ポートフォリオの提出も学生に課されたが、期限までの提出の未了や未提出も少なくなく、ポートフォリオの記入・提出の習慣化についても、より一層学生に働きかける必要があると感じた。

（３）次年度に向けての取り組み

※担当教員の学内異動により、次年度以降、本学科における本科目は担当しない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	15名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

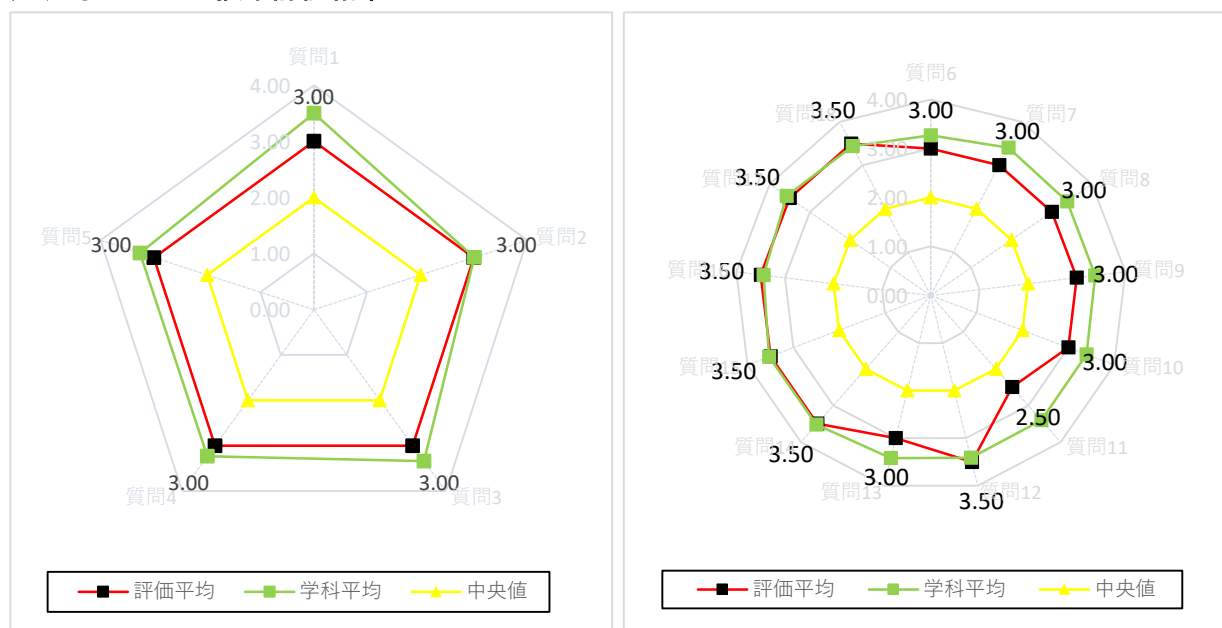
例年、学科平均とほぼ同じだが、今年度は質問10「視聴覚機器や板書の用い方は適切でしたか。」や、質問12「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか。」が学科平均を大きく上回ったので励みにしたい。

（３）次年度に向けての取り組み

若干、学科平均より下回っている項目もあるので、次年度は改善したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	9名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

担当学生9名のうち2名（交換留学生のみ）が本アンケートに答えている。上記集計は、学科の受講者全体のものと思う。

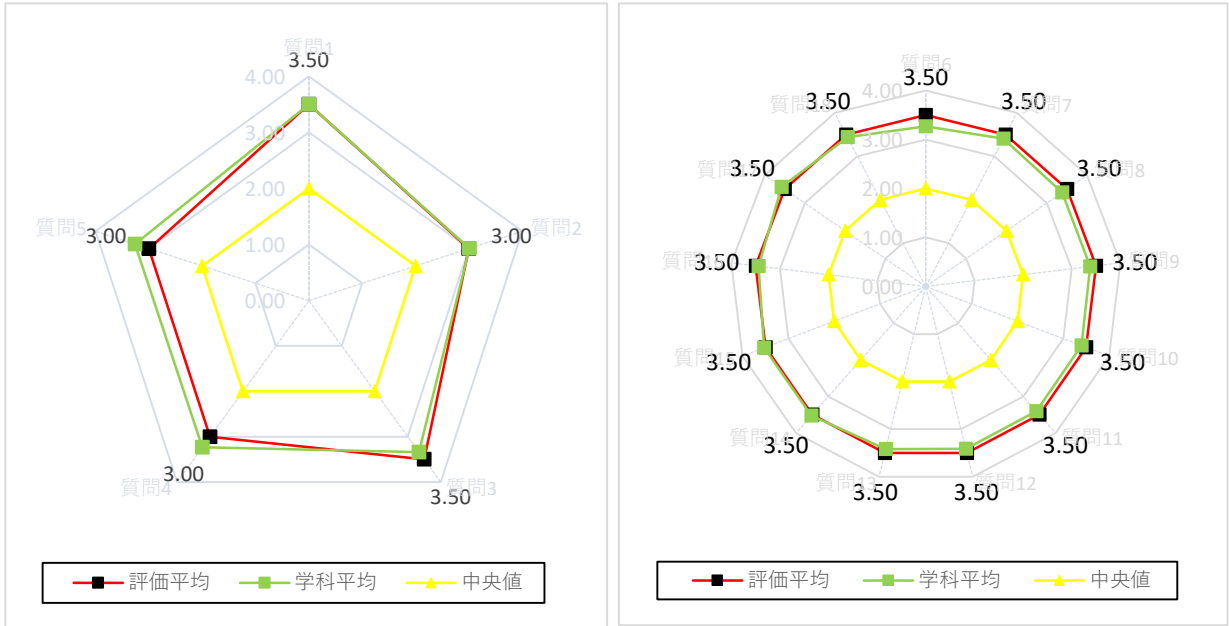
後期から交換留学している学生の評価は、おおむね3.5か3.0である。質問11のみ平均が2.5で、二人は、当初からテキストを買い求めなかった。上記の学年全体の集計でもテキストに対する評価が低い。ゼミ学生は、下記の体験において問題が生じたが、誠実に対応し、後期の授業態度は良かった。

（３）次年度に向けての取り組み

大学共通の科目として、また、学科で決められた授業として、ほとんどの学科教員に分担されながら、教員の積極性や、独自性などがほとんど考慮されていない。キャリア教育への教員のかかわりが見えるようにすべきだと思う。授業改善といっても決められたプログラムだから、教員一人一人の努力では難しいのではないと思う。科目の位置づけについて、もっと個々の教員の主体性が発揮できるように見直しが必要ではないかと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	8名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

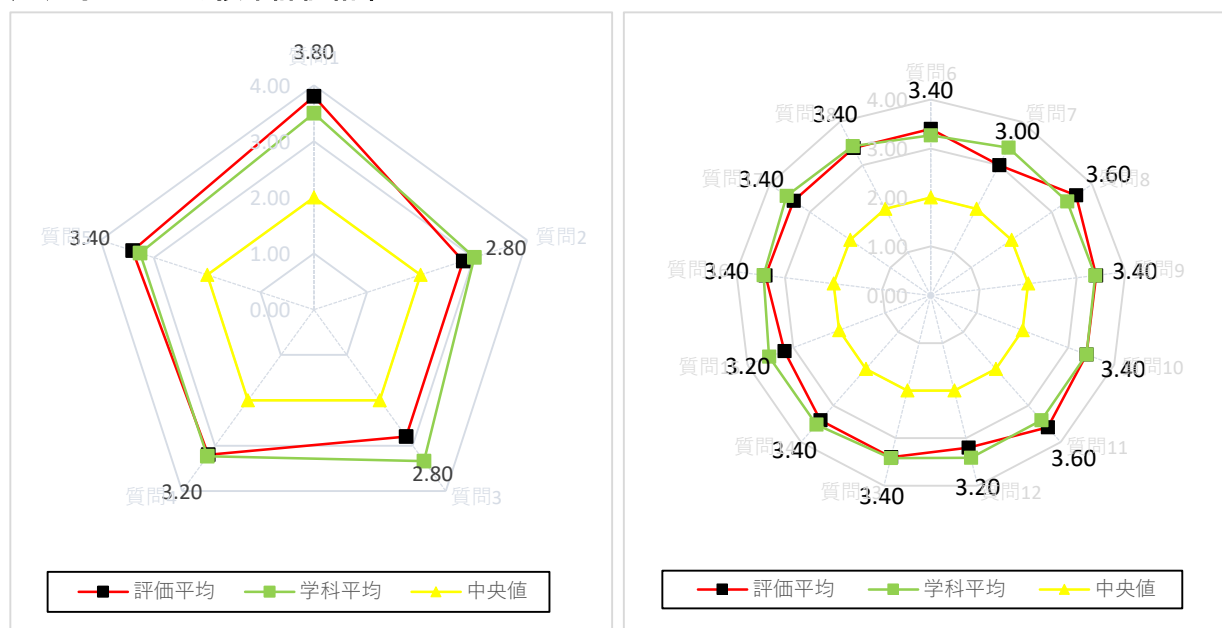
学科平均とほぼ同等がそれ以上の評価であったと考える。

（３）次年度に向けての取り組み

ゼミ別活動時において、学生がより興味を持てるように、新たな題材を取り入れることを予定している。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初年度教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

年度当初のゼミ別指導、全体指導の区分があいまいな部分もあり、ゼミ別指導がこまざれになりがちであった。その関係もあり、「計画的な指導・支援」という点が弱みになった。

レポートの作成、資料の検索、メールの作成など、初年度教育としての内容に重点を置いて、ゼミ別指導を行った。

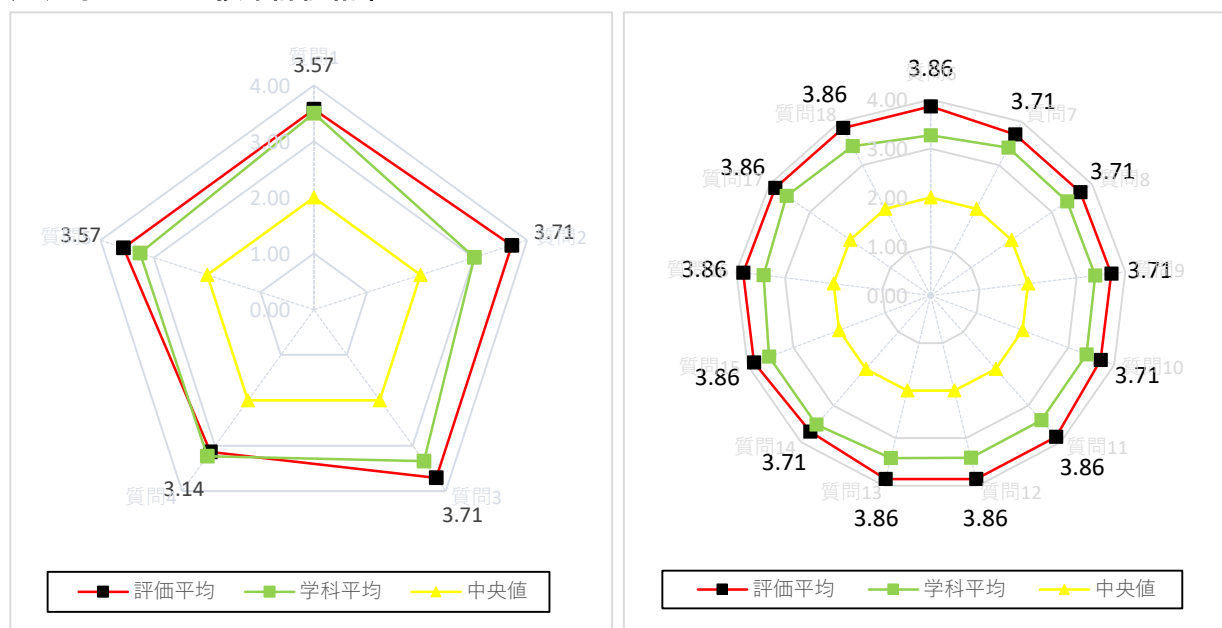
（３）次年度に向けての取り組み

全体計画が一新され、初年度教育としての内容精選が行われた。それに伴い、ゼミ別指導もその目的が明確化された。

学生のPC活用能力やレポートの作成技能のアップなどを前期に集中的に取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

回答率（7/7、100%）、自由記述なし。

本授業の到達目標は、大学での生活を快適にするための知識習得・環境構築と、大学生としての学びを可能にするためのスタディ・スキルの習得をととして、学士力養成のための学習基礎を定着させることである。

質問4以外はすべて、学科平均を上回る評価であり、質問6～18については、高い評価を得た（3.71～3.86）。

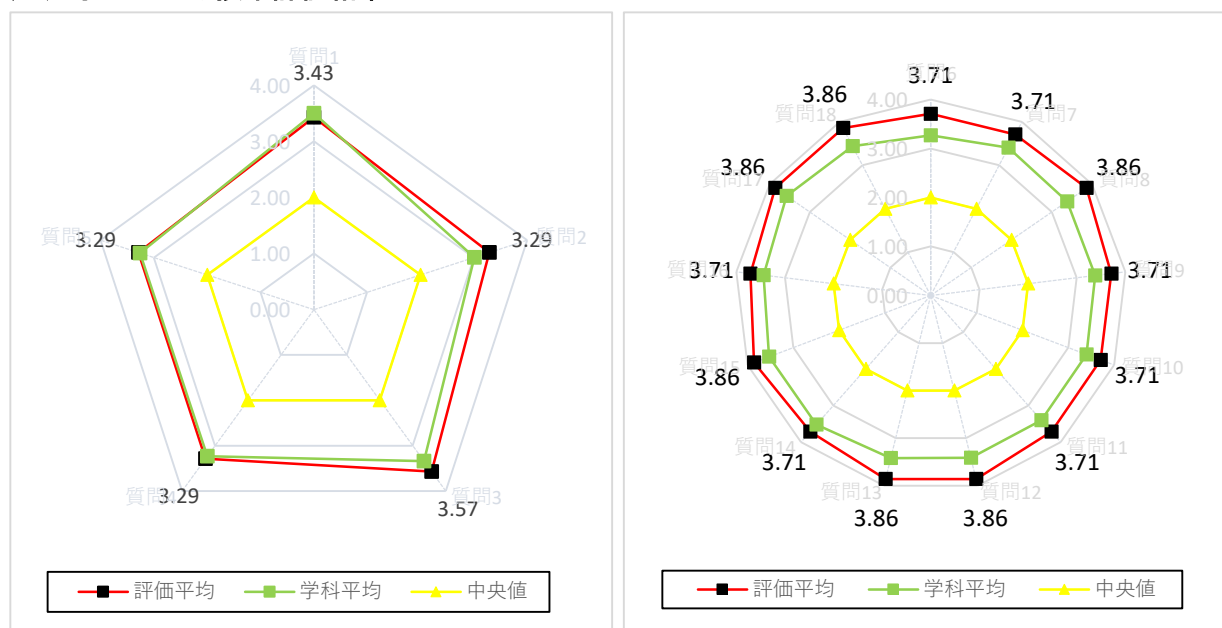
質問4「授業を理解するために自分で何か工夫をしたか」の項目が3.14と最も低い評価であった。授業の中で、学生が主体的に学ぶ環境設定をするべきであった。

（３）次年度に向けての取り組み

最も評価の低かった「授業を理解するために自分で何か工夫をしたか」について、学生が主体的に学習する環境を設定し自分で工夫するための学び方についても教示していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

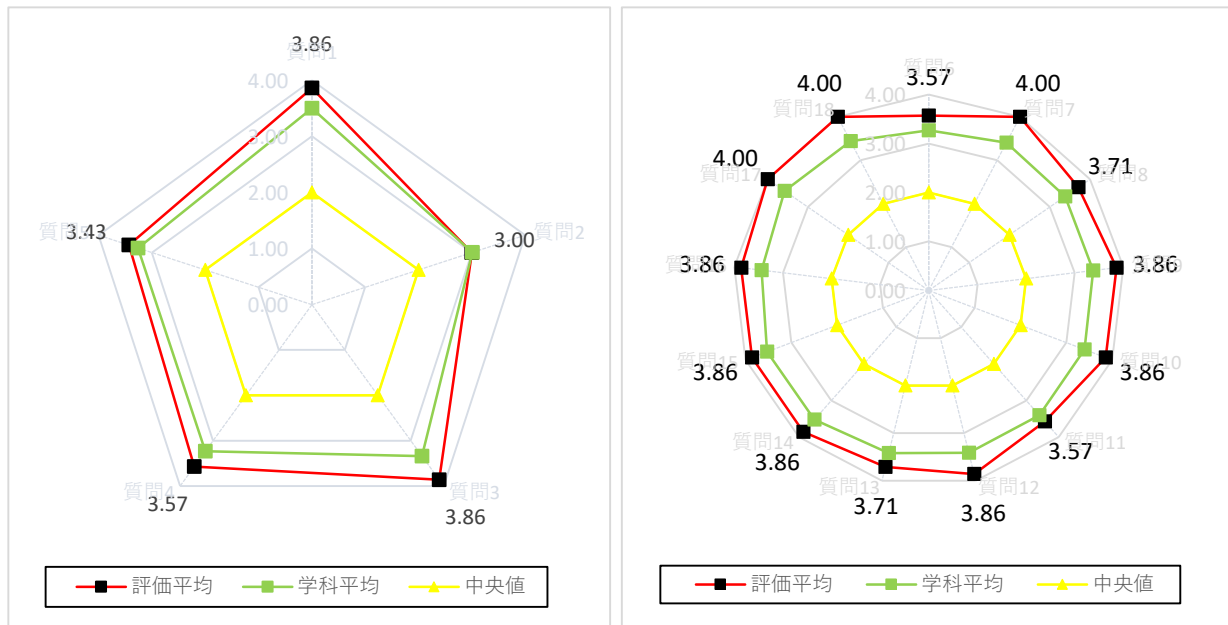
全ての項目で学科平均を上回る結果となった。
自由記述での評価において、「落ち着いた口調ではっきりとした話し方で聞きやすかった」との記述や、「アドバイスをする時も無下にしたような言い方は一切なかったの、きちんと直そうという気になれた」との記述もあり、今後も今年度の姿勢を維持発展していきたい。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度においても、全体へ向けては指示の明瞭さに留意し、また学生には誠実・公平に接する姿勢を重視して、教育に取り組んでいく。
また、一人一人のポートフォリオも小まめに確認し、あすなろう体験実習の進捗や生活状況などを把握するなかで、気になることがあれば早めに声をかけることで、学生が大学生活を滞りなく送ることができるよう支援を行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ 基礎（初 年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

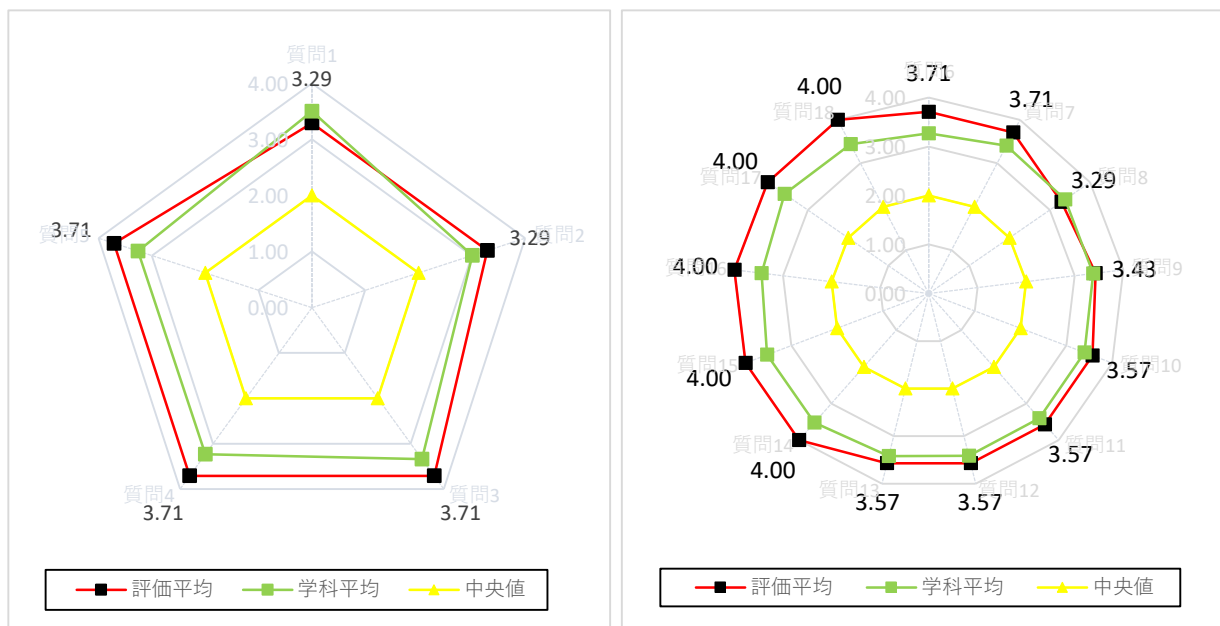
全般的にきわめて良好な結果となった。各学生の課題への取り組みもたいへん良かった。

（３）次年度に向けての取り組み

基本的には今年度と同様の構えでよいと思われるが、新たな特徴をもつ学生にも柔軟に対応していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ 基礎（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

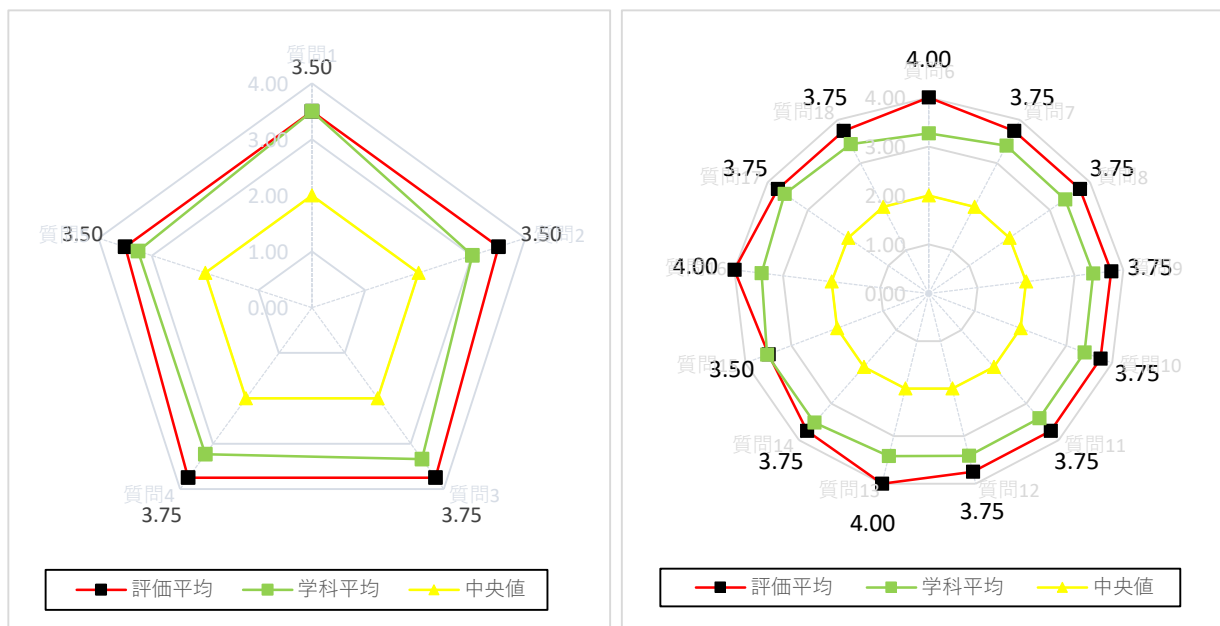
評価平均が3.67と高い評価であったが、授業に興味関心が持てるような工夫が十分ではなかった。授業の目標が学生にとっては、受け身的な内容で、興味関心が持てなかったのではないだろうか。（社会人基礎力講座、キャリア講座など、外部の講師の話を受身的に聞く。）

（３）次年度に向けての取り組み

社会人基礎力をつけることを目標に設定されている「あすなろうⅠ 基礎」の授業だと思うが、学生にとっては、あまり興味関心が持てないと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう体験Ⅲ（応用実践）	6名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

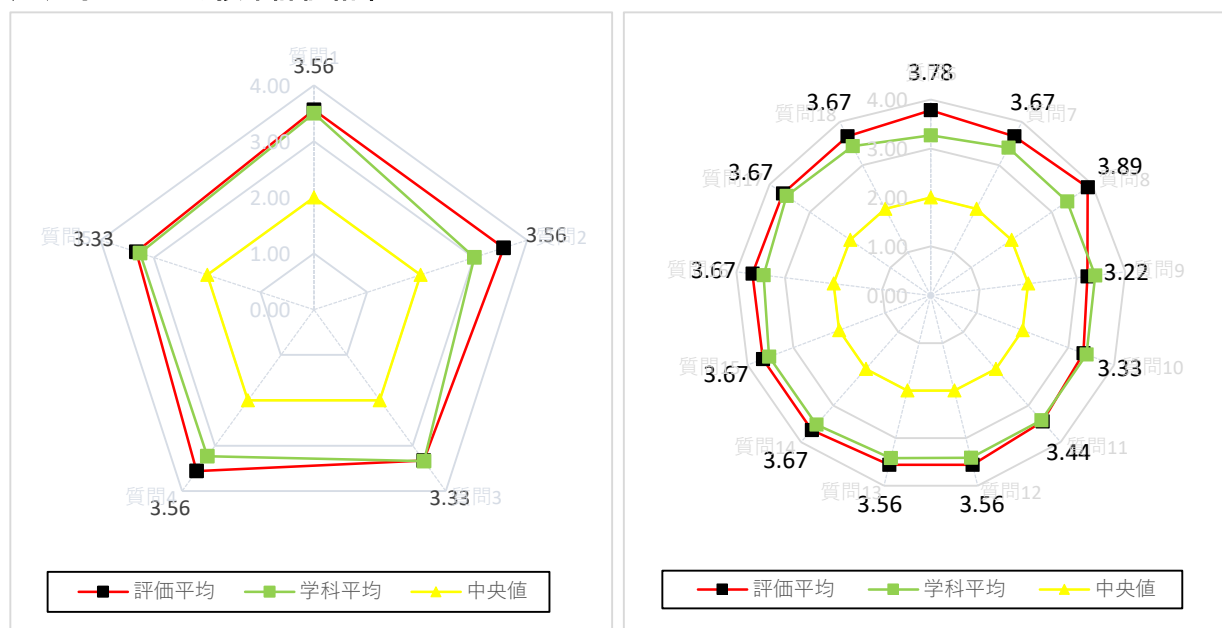
ほとんどの項目で、学科平均を超える得点であった。これは、学生に主体的に企画立案・運営を行わせ、そこに教員も同席しながらPDCAサイクルに則って授業展開したことの結果と考えられる。

（３）次年度に向けての取り組み

今年度同様、学生の企画立案・運営を地域型授業で育成していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		生活支援	11名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

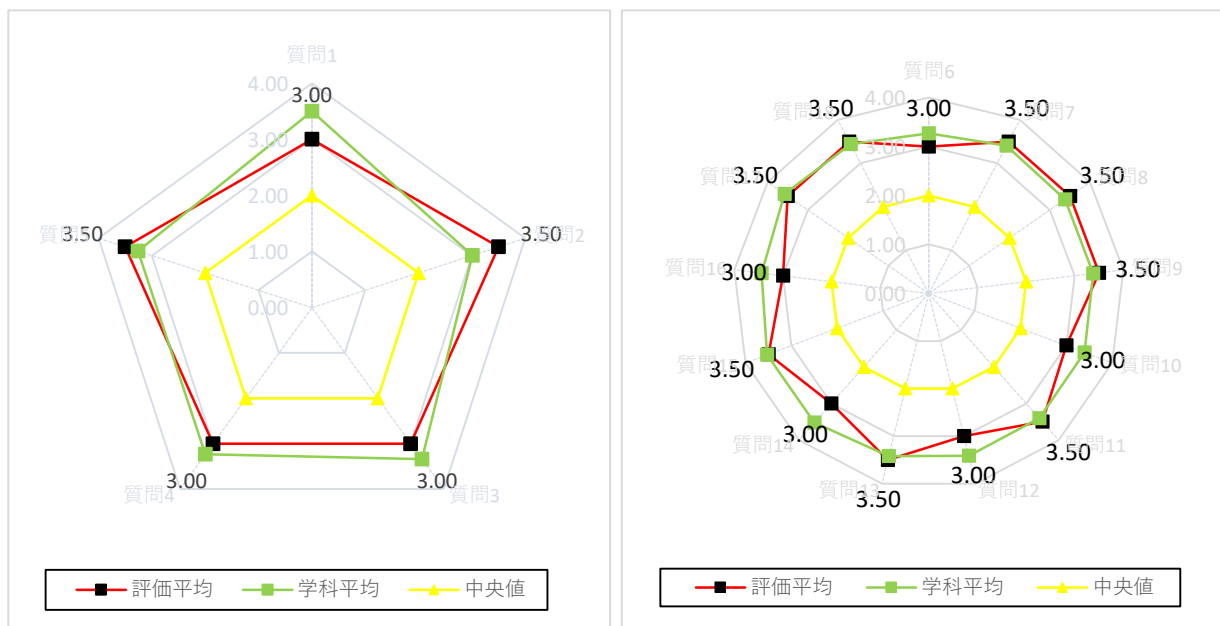
全ての項目において、ほぼ平均と同じ値の評価が得られた。
特に、質問8の評価が高く、オムニバス形式の特長が反映された結果となった。

(3) 次年度に向けての取り組み

本科目は各学科から計9名の教員が担当するオムニバス形式で実施されていることから、内容の統一化と共に、受講学生に戸惑いや不安感を与えないよう引き続き注意しながら展開していく必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		地域連携	4名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

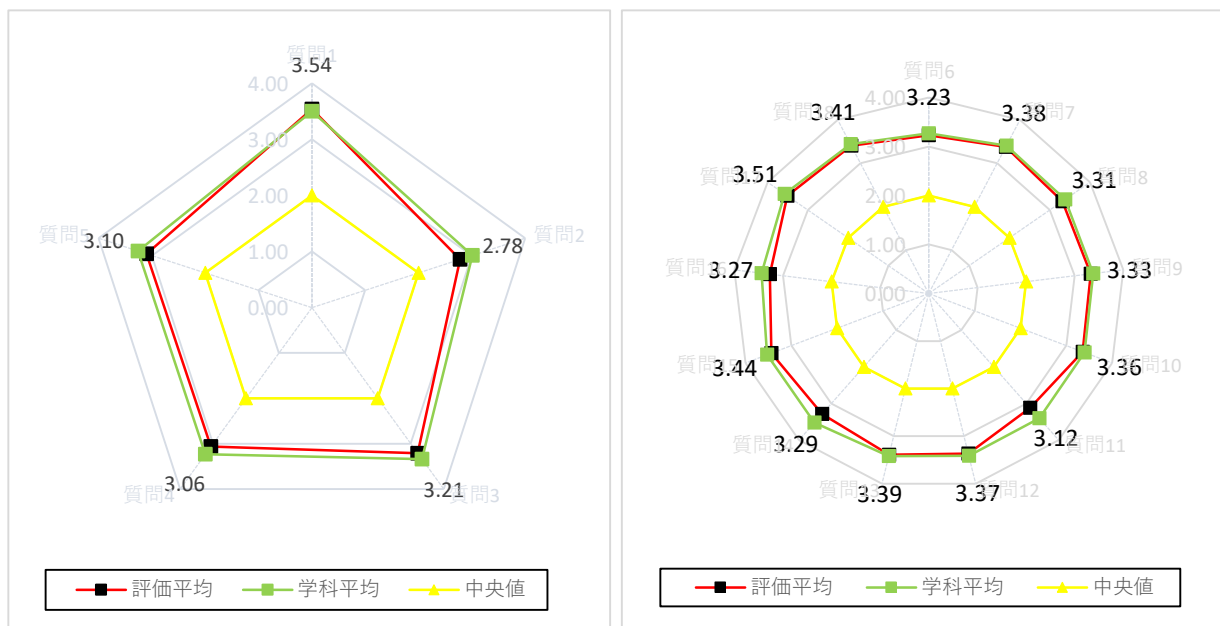
シラバスの活用に関して、学生・教員間での認識のずれが大きい。教員評価では、10、12、14、16での評価が低い。複数の教員が担当するオムニバス形式の授業であるからの反応である可能性がある。とくに14、16の質問項目はアクティブラーニング的要素が強い。今後の修正がのぞまれる。

(3) 次年度に向けての取り組み

評価項目の数値が低い項目に関しては、担当者間で共有し修正を図っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉		現代社会と倫理	205名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

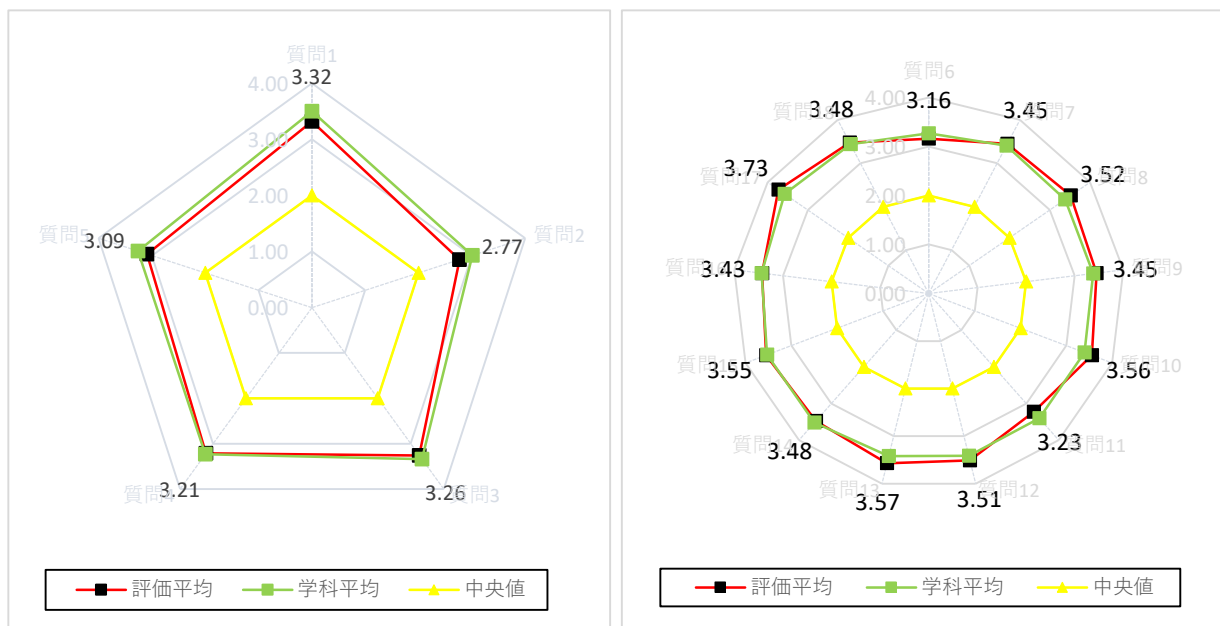
シラバスの説明、教科書、学生の質問、双方向授業、の4項目で学科平均を下回っている。

(3) 次年度に向けての取り組み

学科平均値を下回っている項目に関しては、さらに気をつけた授業運営に取り組みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉		人間論と現代思想	201名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

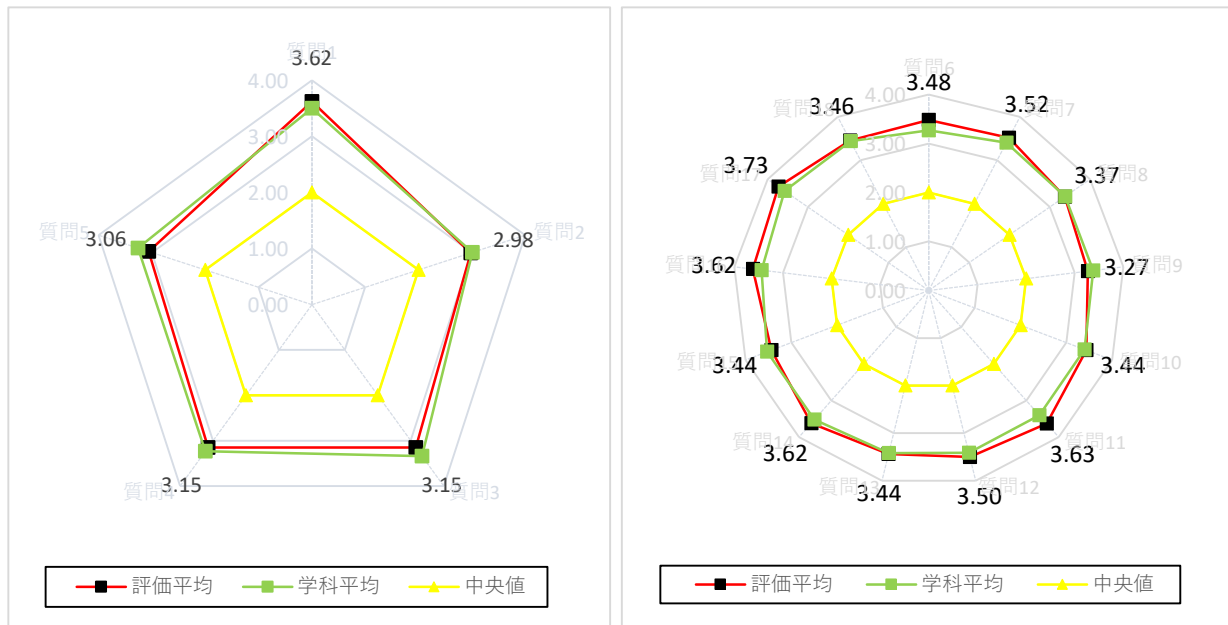
ほぼすべての項目で学科平均値に近い数値を示している。シラバスの説明、教科書についての評価が若干低くなっている。

(3) 次年度に向けての取り組み

シラバスの説明は行っているが、まだ十分に認識されていないことがわかった。教科書も使用しないことを説明しているが、こちらも十分に認識されていない。次年度は説明をもっと十分に行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		文学と言語	84名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

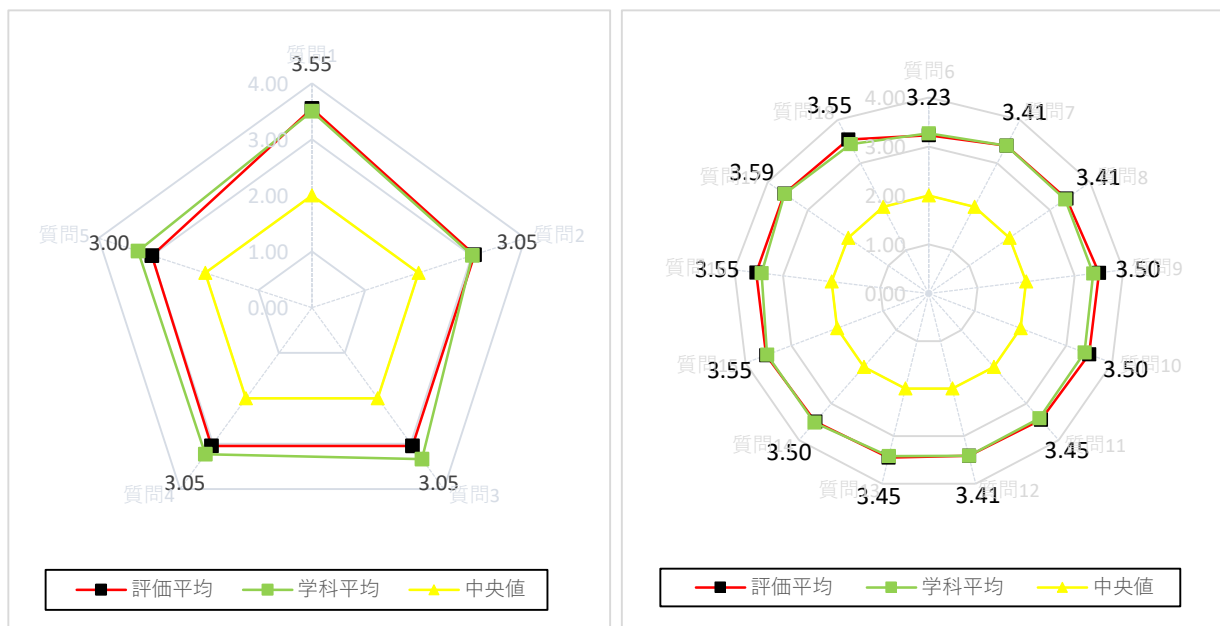
授業評価には概ね満足している。今年度の授業をつくるに当たって、授業が終わった春休みの時期にいろいろな場所を訪れて資料収集に当たった。とりわけ、山口県長門市仙崎にある「金子みすゞ文学記念館」を訪れたことは私自身の大きな学びとなった。文学を教えるに当たっての研修が十分にできたことで、授業で学生に対して心から語ることができ、自分にも自信が生まれたように感じている。このことが学生の授業評価に出ているのではないかと考えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も「足で稼ぐ教材研究」「教師自ら現地に出かけ、体験を通して学んでいくこと」。この二つの姿勢を大切にして、授業の質のさらなる向上を図っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉		脳と認知科学	69名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

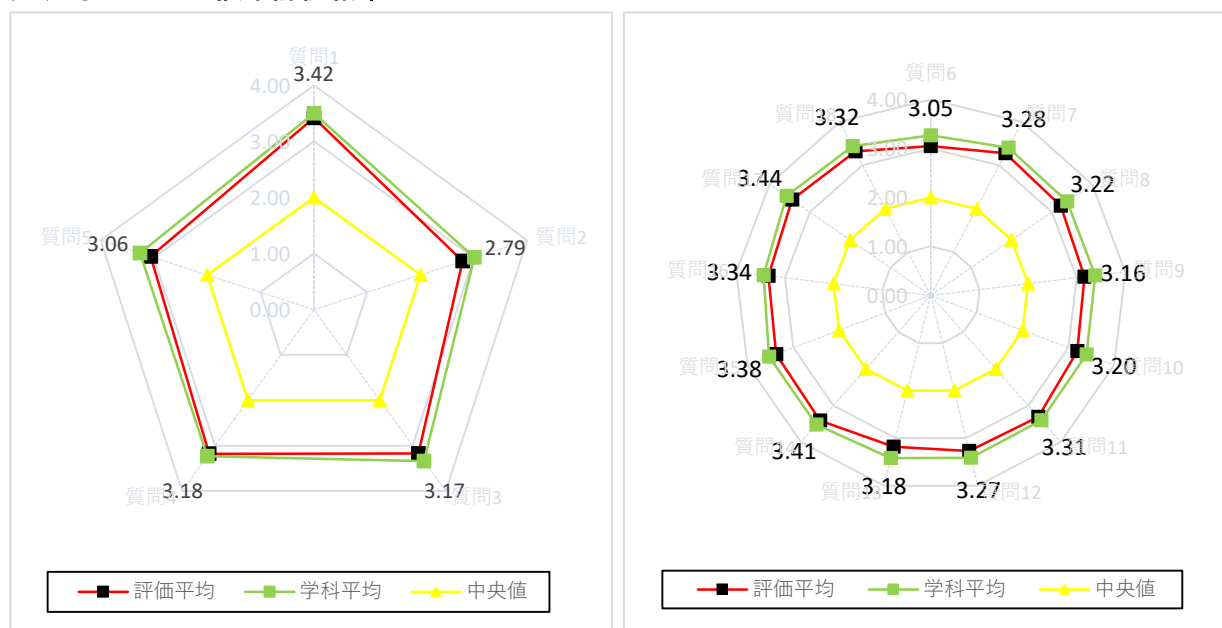
全学的に興味を持ってもらうための工夫が教員間でできていたと思われます。

(3) 次年度に向けての取り組み

さらに興味を持って頂けるように、身近な内容を取り込みながら講義を進めていきたいと考えます。単位取得のみを狙って受ける上級生がおり、受講態度などで悪影響も出ており、それらの学生さんに注意を促すなどの措置も考えたいと思います。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉		法学	154名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

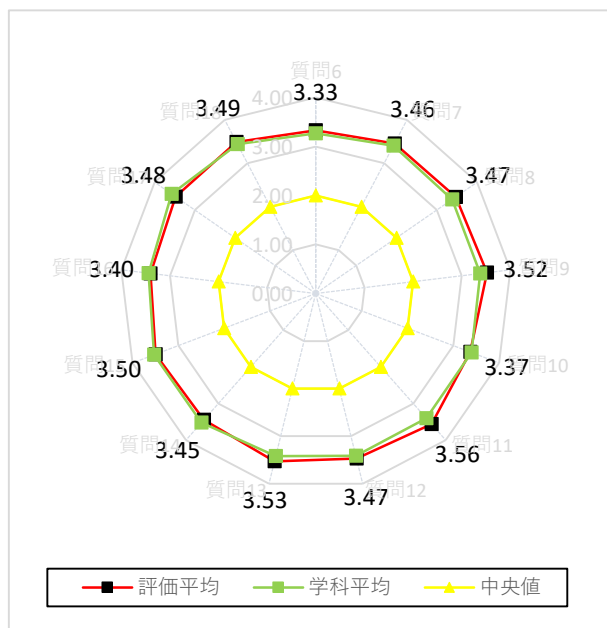
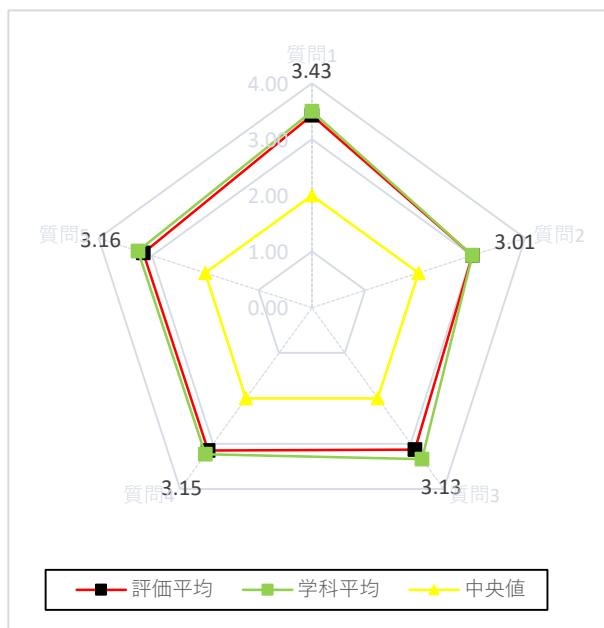
基本的には平均値と同様の分布であったが、全体的に平均値をやや下回る結果となった。100人を超える大講義なので、やむを得ない部分もあるが、細かな対応をすることで、学生からの評価を得られるようにしたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生対応（質問対応など）を細かくしたい。授業中に質問に対応する時間を作ったり、リアクションペーパーの配布を試みたい。それらを授業内でフィードバックすることを予定している。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉		くらしと経済	222名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

授業評価の結果は、概ね学科平均に収斂するものとなったが、特定の項目では学科平均を下回るものもあった。これは今後改善していくべき課題であり、工夫していきたいと考える。学科平均との比較があることによって課題が明確になるので、この分析結果はとても参考になる。また、授業評価は学生諸君の意見を直接きくことのできる稀有な機会であり、授業の改善に大いに役立つものとする。くらしに役立つ経済の知識を習得していくことが授業の狙いであったが、授業評価から鑑みてこれはある程度達成できているものとする。ただ、黒板の文字が見えにくいなどの意見もあり、今後改善していきたい。□

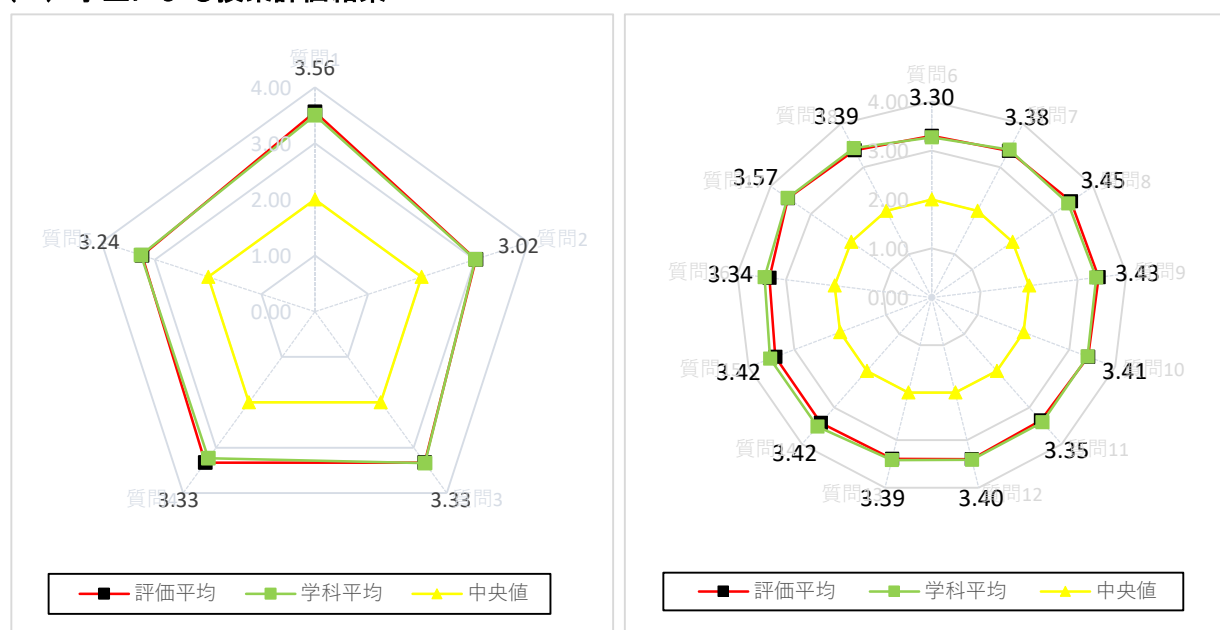
□

(3) 次年度に向けての取り組み

シラバスの説明についての項目に関してはやや評価が低かったが、これはもう少し時間をさいて、丁寧に説明したいと思う。初回の授業で話してはいるのだが、多岐におよぶ項目で、理解しにくいのかかもしれないと思われる。したがって、今後は論点をしぼって、わかりやすく説明したいと思う。さらにシラバスそのものを使用しつつ説明を加えていきたいと思う。黒板の文字が見えにくい場合は、配布資料でカバーするなどしていきたい。次年度においては、わかりやすい資料の作成と説明をさらに向上させていきたいと考えている。また、学生諸君が飽きないように時々穴埋め形式のプリントなども作成し配布したいと思う。そして、学生諸君が経済に関する知識をできるだけ増やせるように全力で取り組んでいきたいと考える。□

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉		身近な生活の化学	176名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

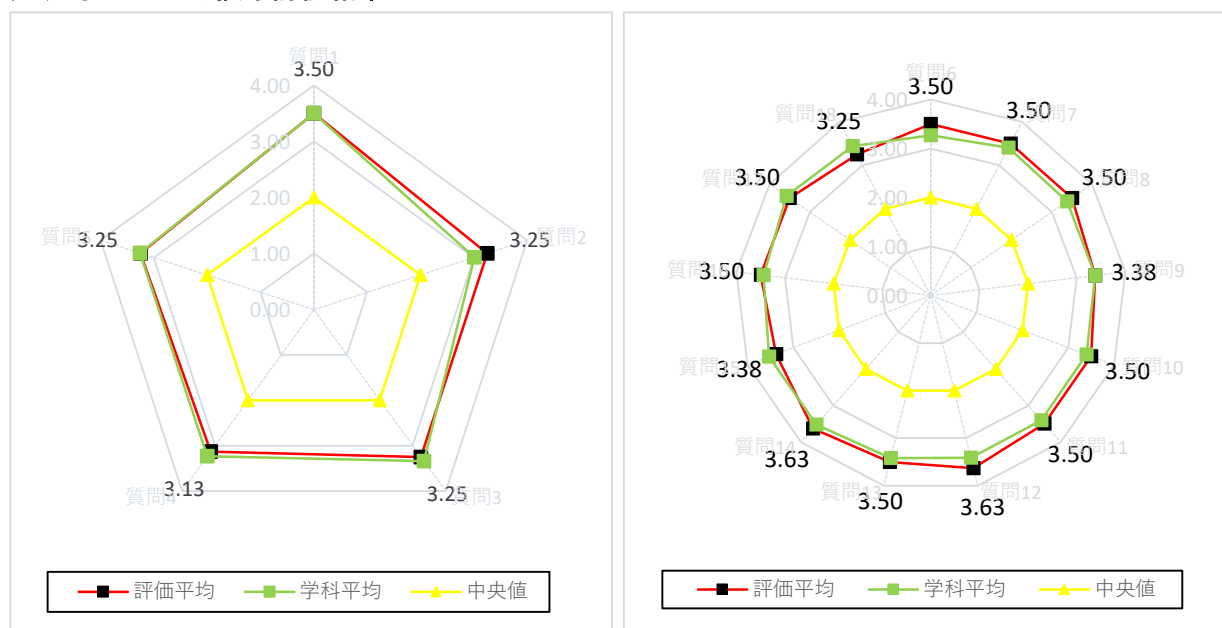
概ね学科平均と同等の結果であった。教養科目であるため、すべての学科の学生が受講しているため、どのレベルに標準を合わせるべきか、いつも悩んでいる。また、大人数なので油断するとすぐうさくなるので、授業に集中させるのが大変だった。工夫した点と言えば、興味を引くようなDVDを見せたり、難しい反応を例を挙げて説明したりと、できるだけわかりやすく、そしておもしろく説明することを心掛けた。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も、理系文系を含めた大人数が受講することが予想される。化学と言えば、難しいというイメージがあるので、身近な例を挙げてわかりやすく教えることをモットーとしたいと思う。よい教材を探し、興味を引くような工夫をしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		ウェルネス・スポーツ	87名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

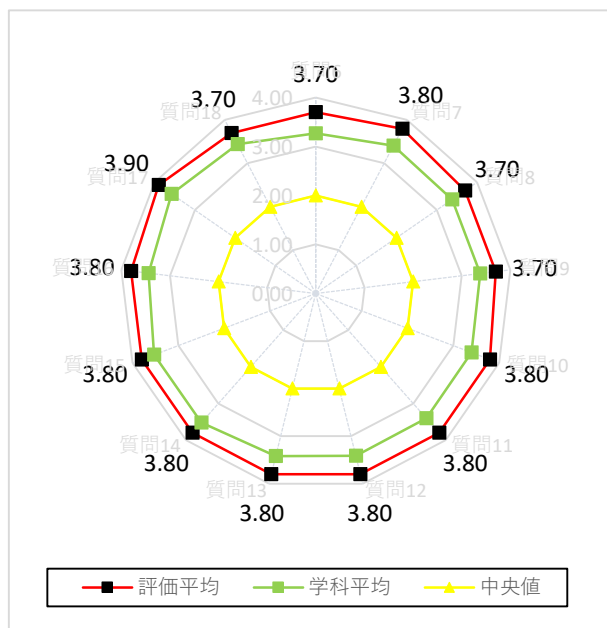
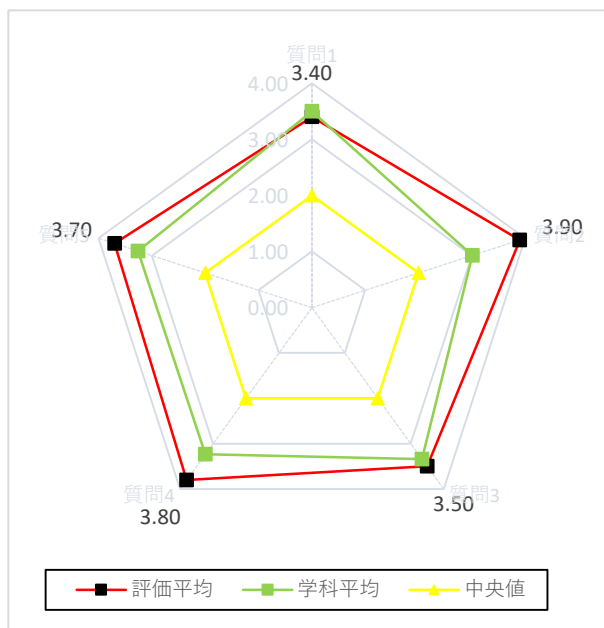
ほぼ学科平均と同様の数字である。質問17と18に関して学科平均より若干低評価であるところは大きな反省材料である。特にこの授業は学生主導でスポーツを遊ぶことを目指しているため、ややもすれば放任的に捉えられたかもしれない。そこに関しては今後留意する必要があるだろう。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度以降この授業は担当しないが、今後同様の授業を担当する際には、学生中心であっても教員の熱心さ等が伝わるような授業を展開していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部	健康栄養 社会福祉 リハビリテーション		文化人類学	21名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

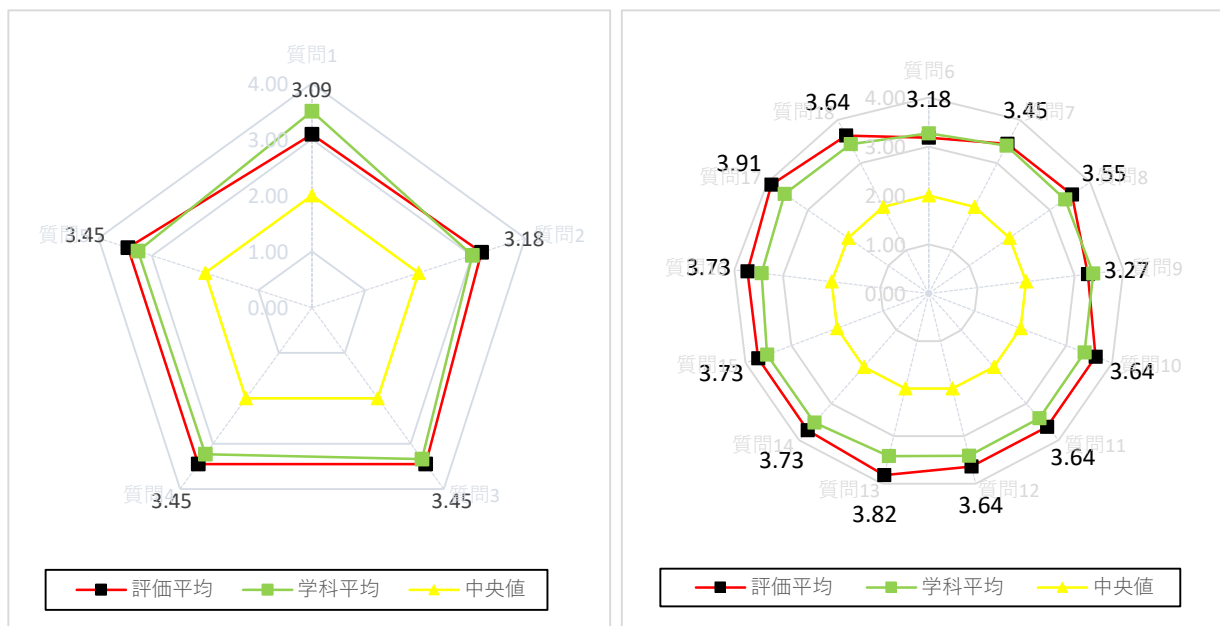
全体的には高評価であったと思う。
ただし、学生に何か作業をさせるという面において
不十分だったと思われる。もちろん、講義時間中ではなく、
講義外に発展的にしてもらいたいというのが本筋だと思うが、
より能動的なものも積極的に取り入れたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生へのワーク的な内容を取り入れたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉		変わりゆく国際社会を生 きる	36名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

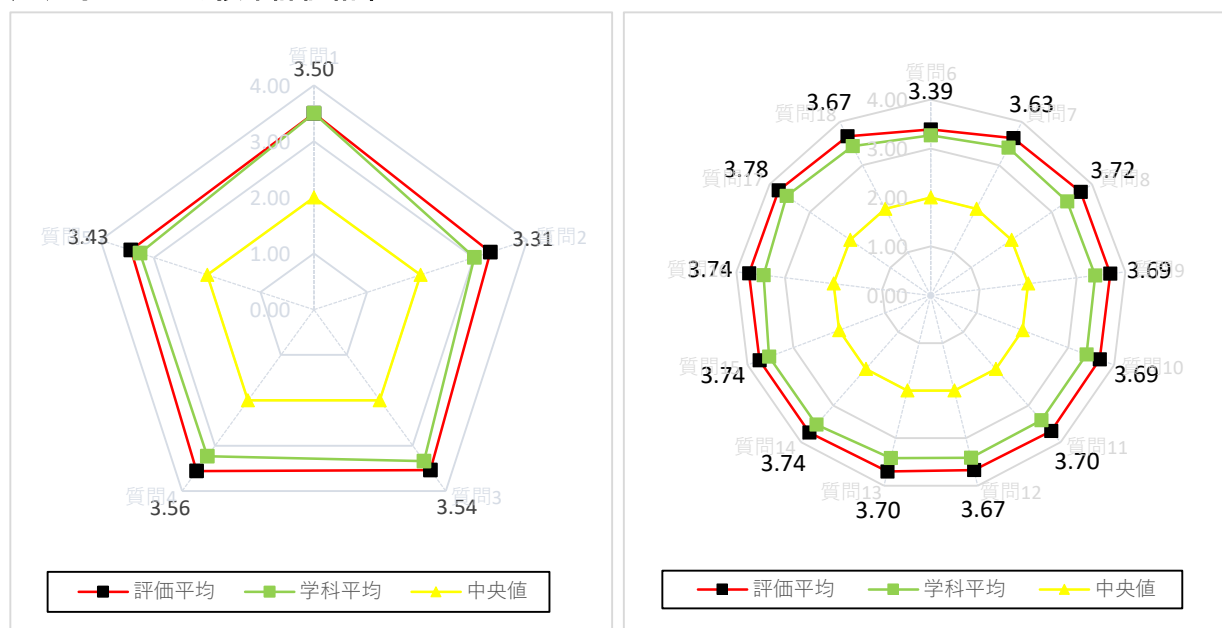
授業の分かりやすさのみ、学科平均値を下回っている。

(3) 次年度に向けての取り組み

学科平均値を下回った項目については、担当者間で話し合い、強化していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		英語コミュニケーション I	95名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

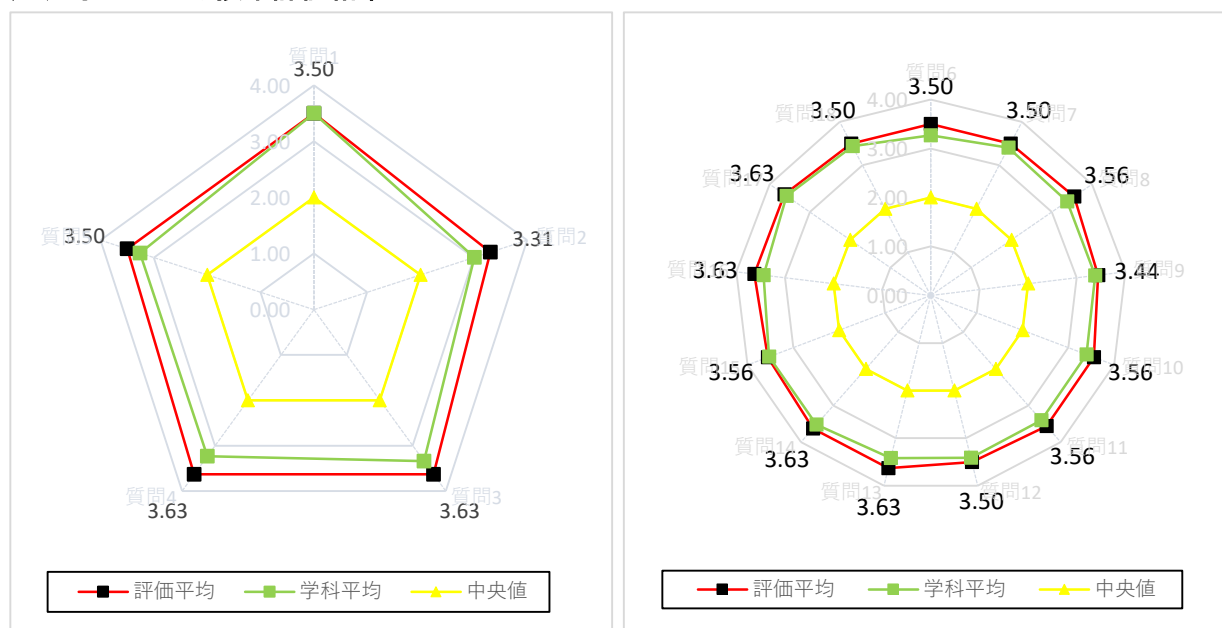
今年からテキストを変えました。したがってシラバスも変えました。学生の反応はよかったと思います。質問1－5に関しては学生の授業に対する取り組みで評価がよかったと思います。学生の出席率、真剣に取り組む姿勢や自己評価は平均並みでした。質問6－18に関しては、質問6は評価平均と同じで、ほかの答えは評価平均より少し下回る数字となりました。

(3) 次年度に向けての取り組み

まずは、学生がこの評価を積極的にするように指導します。パソコンになってから、学生が回答したかどうかの確認が難しいと感じます。回答率が100%になったらいいデータだと思いますので、100%を目指して回答してもらいたいです。次年度は回答するようのリマインドを行いたいです。データを見ますと授業の内容ややり方を変える必要はないと思います。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		英語コミュニケーションⅡ	94名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

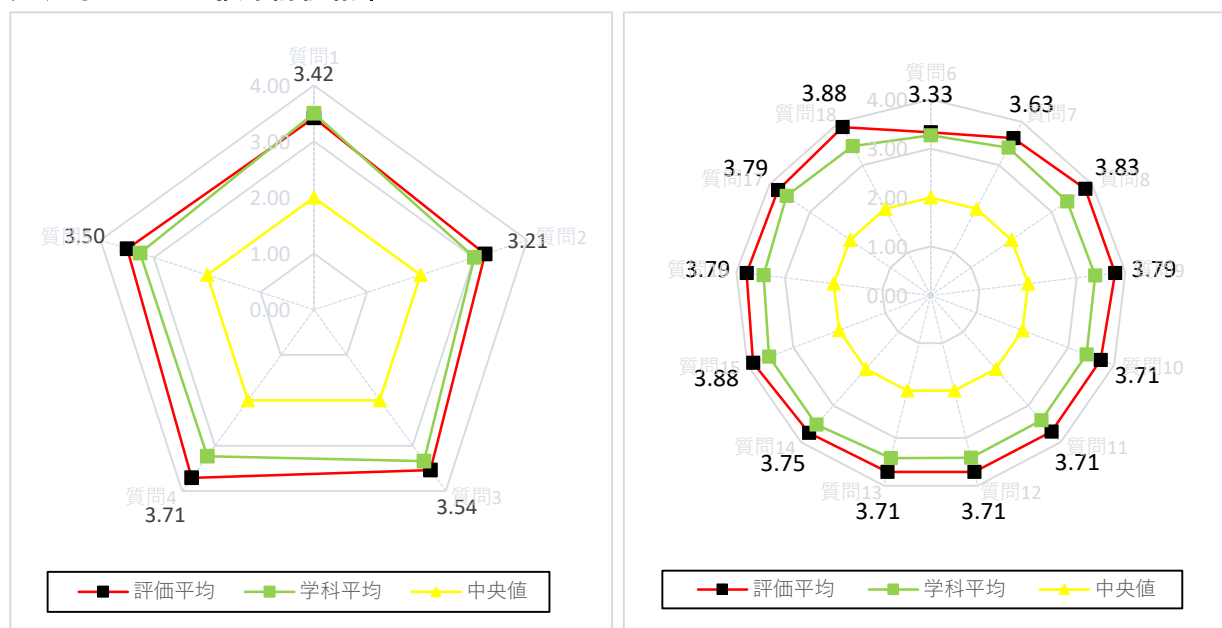
年からテキストを変えました。したがってシラバスも変えました。学生の反応はよかったと思います。質問1－5に関しては学生の授業に対する取り組みで評価がよかったと思います。学生の出席率、真剣に取り組む姿勢や自己評価は平均並みでした。質問6－18に関しては、質問6は評価平均と同じで、ほかの答えは評価平均より少し下回る数字となりました。

(3) 次年度に向けての取り組み

まずは、学生がこの評価を積極的にするように指導します。パソコンになってから、学生が回答したかどうかの確認が難しいと感じます。回答率が100%になったらいいデータだと思いますので、100%を目指して回答してもらいたいです。次年度は回答するようのリマインドを行いたいです。データを見ますと授業の内容ややり方を変える必要はないと思います。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 リハビリテーション学部	健康栄養 社会福祉 リハビリテーション		Global Communication (English)	34名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

今年内容や先生の変更がありました。学生の反応はよかったと思います。

質問1－5に関しては学生の授業に対する取り組みで評価がよかったと思います。学生の出席率、真剣に取り組む姿勢や自己評価は平均並みでした。

質問6－18に関しては、質問6は評価平均と同じで、ほかの答えは評価平均より少し下回る数字となりました。

(3) 次年度に向けての取り組み

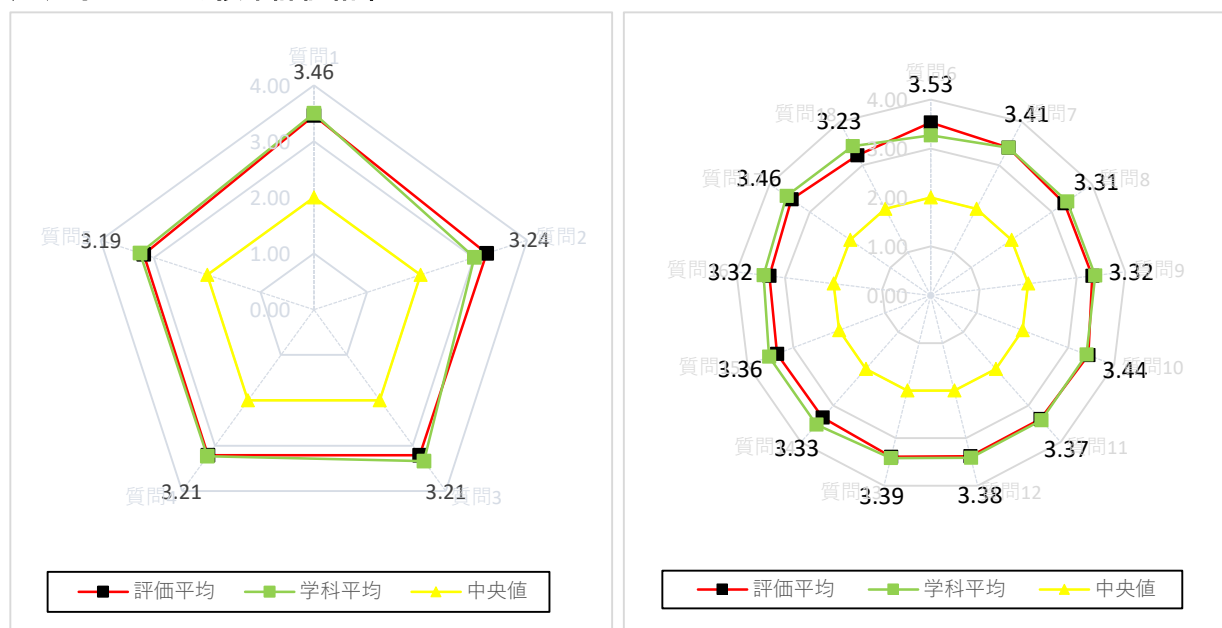
まずは、学生がこの評価を積極的にするように指導します。パソコンになってから、学生が回答したかどうかの確認が難しいと感じます。回答率が100%になったらいいデータだと思いますので、100%を目指して回答してもらいたいです。

次年度は回答するようのリマインドを行いたいです。

データを見ますと授業の内容ややり方を少し変える必要あると思います。前年度より英語の基本理解の授業が物足りない反応がありましたので、POST GCEで工夫をして次年度に生かして行います。先生方の熱心が伝わっていると思います。全体の評価画はとて素晴らしいと思います。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		子ども学総論	139名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

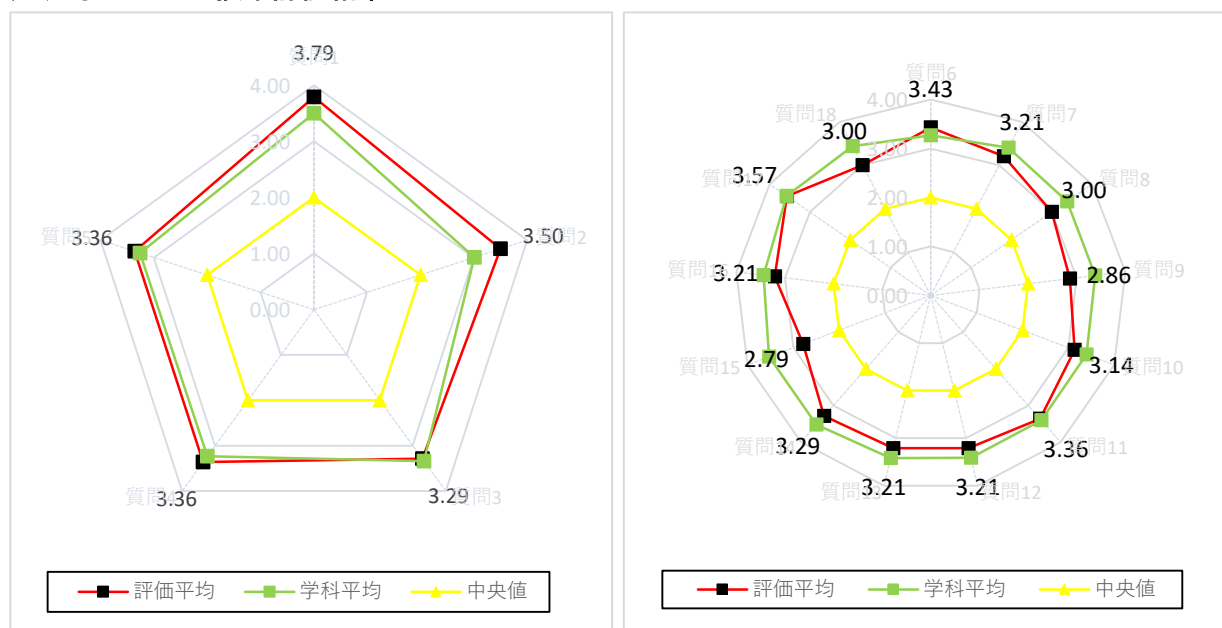
子ども学部基幹科目である本科目は、両学科合わせて148名の受講生に対してオムニバス形式で展開している。学生の授業態度に関する項目は、ほぼ学科平均値に近く、熱心な姿勢が窺える。また、授業の内容や方法については、ほとんど全項目で、学科平均値と同一であった。大人数の受講生ではあるが、7名の教員の担当分野について、熱心かつコンパクトに講義を実施した結果であると考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

子ども学部の基幹科目としての重要性を鑑み、学生の興味をそそるような、豊かな内容と思考力を高める授業の仕方を工夫する必要がある。担当者間での情報共有や振り返りの機会も検討が必要であろう。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育原理	92名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

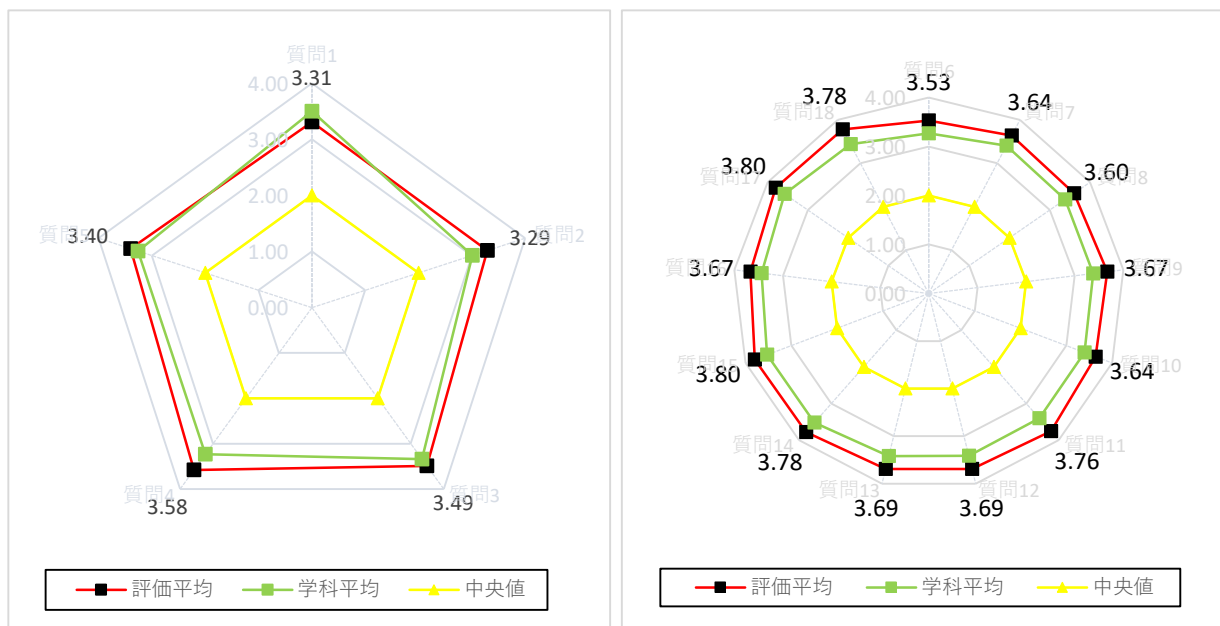
受講学生91名のうち14人のみが回答。回答者数が低いですが、回答した学生の自己評価はおおむね高い。熱心な学生たちであることが分かる。授業に対しては、おおむね良好だが、質問9と質問11の数値が低い。学生にはもう少しわかりやすく工夫知ってほしいという思いがあることが分かった。公平に接しているつもりであるが、ゼミ学生への声掛けの仕方など、おそらく気になったのだろう。たしかに、そこへの配慮も必要だ。回答者の低い分、隠れている評価を引き出す必要がある。

(3) 次年度に向けての取り組み

年々理論的な内容への対応が難しくなる。能動的な学習内容を取り入れて指導を行っているが、100名近い学生数では、元来そのような指導はなかなか効果をあげにくい。そのことを考えながら、指導方法を工夫していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学概論 I	47名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

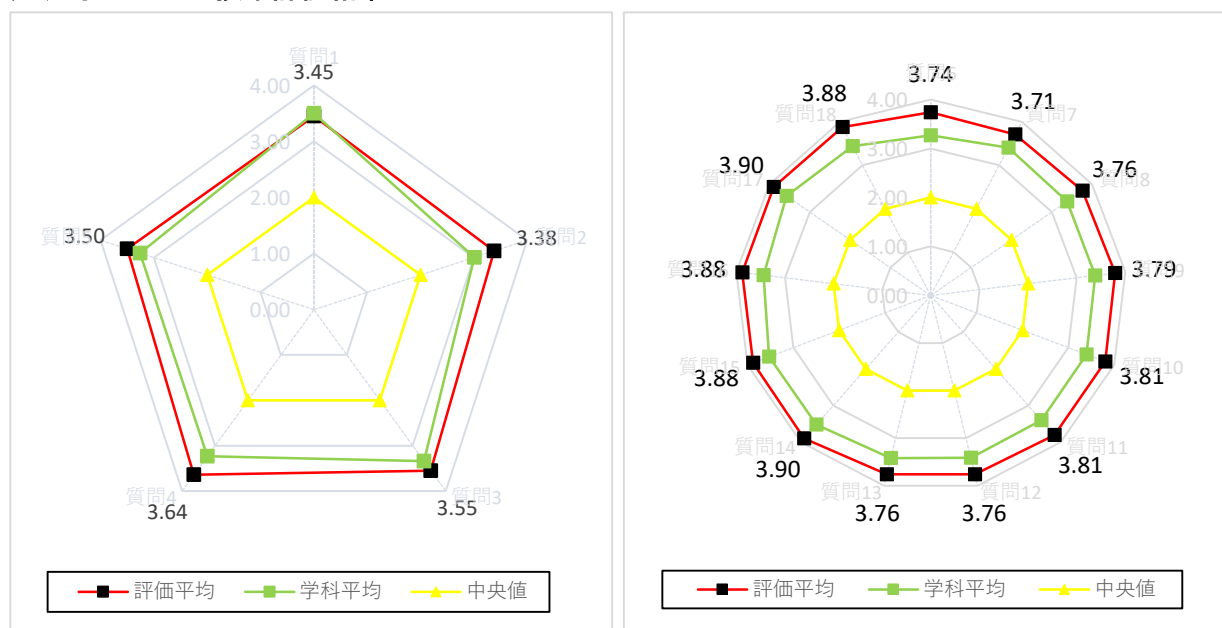
各項目の評価は学科平均を上回るものであった。この科目は、本学科における4年間にわたる心理学の学びの基礎となる科目であるゆえに、個々の学生に内容が十分に理解できるように授業方法を工夫してきた。このような方法が学生の学び方に合っているのではないかと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

基本的には本年同様の授業内容、授業方法を用いて、さらに具体的な例や最新のトピックスなども取り入れながら、学生の興味を喚起できるように工夫していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学概論Ⅱ	46名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

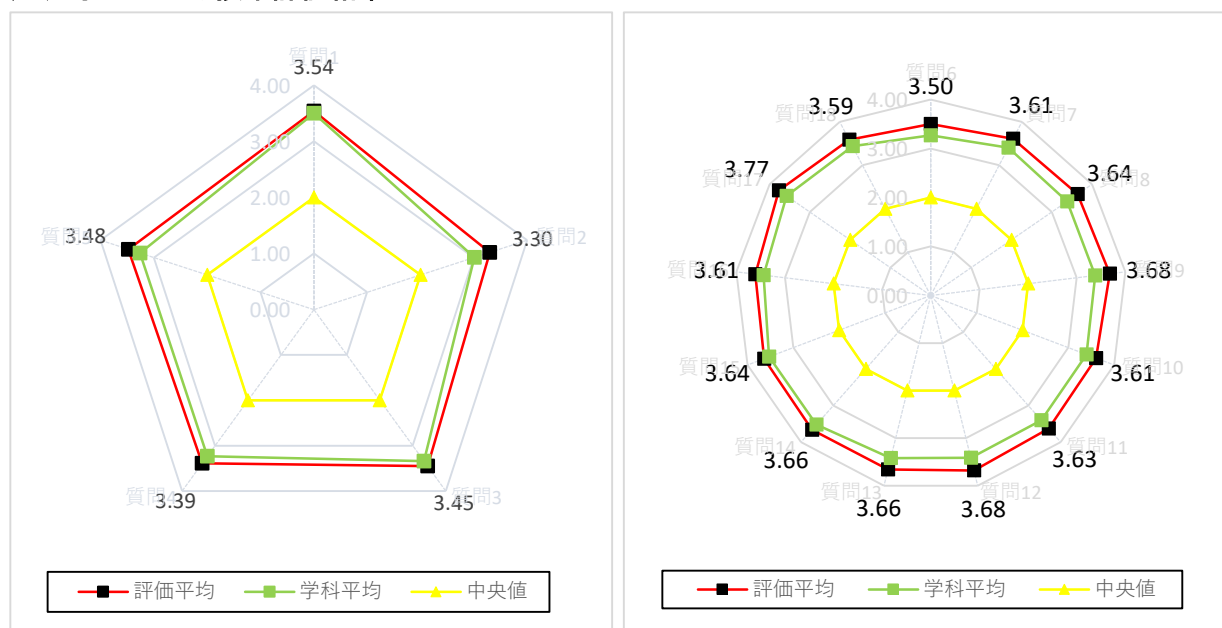
総合評価で3.88であり、各評価項目は学科平均を上回るものであった。心理学概論Ⅰと同様に、4年間にわたる心理学の学びの基礎となる科目である。特にこの科目は、カウンセリングの実践に通じる授業内容であり、学生に対しては今後のカウンセリングの学びにつながるようにDVDを活用し丁寧な説明を加えた。授業メモを活用して学生の質問にも答えるようにしたので双方向性を確保することができたと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は太田准教授の担当となるので、直接改善を提言することはできない。しかし、1年生にとってのこのような科目の場合、授業ノートの配布、授業メモを活用するといった授業方法自体については、大学での学びにおけるスムーズな導入になると考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		発達心理学	99名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

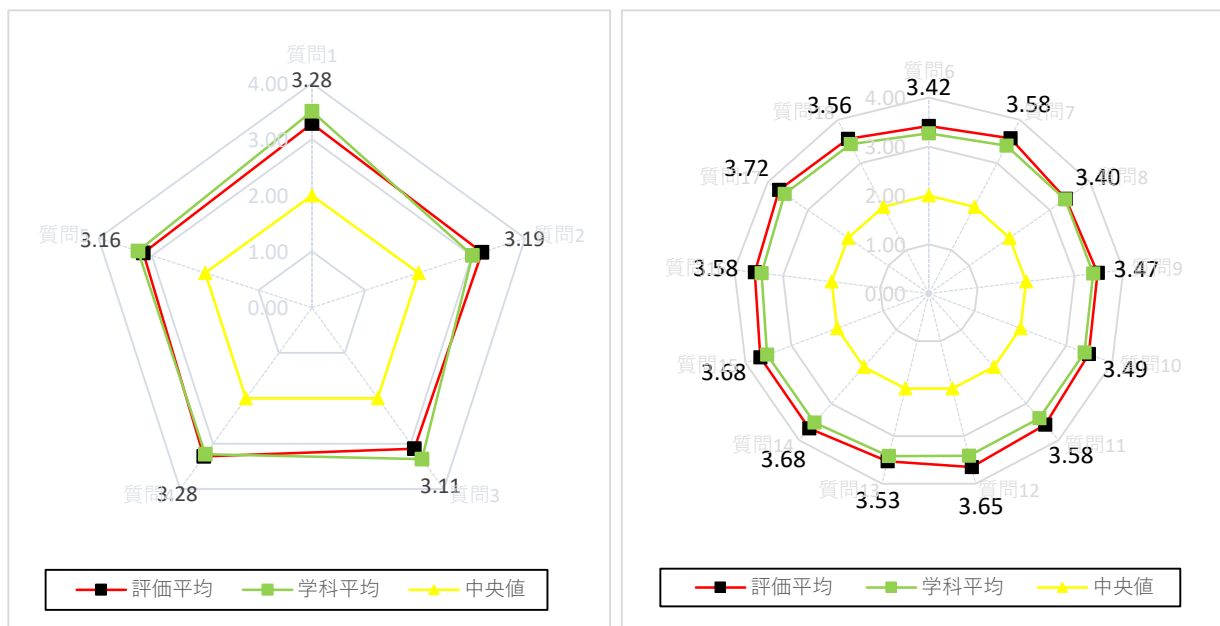
55%の回答率である。1年生にしては低率と思われる。今後授業評価の回答を勧奨する必要がある。その時、学生にとってもメリットを推奨する側がどのように認識できているかが問われる。回答した学生に直接的な利益をもたらすとは考えにくい。この評価の恩恵は次年度の受講者である。評価者は次の後輩のために評価する、そのような後輩に対する思いが評価の動機になる。このことを受講者に伝えることが必要である。さて、授業評価の中身についてである。学生の自らの授業態度等への評価はすべてに亘って高い。特にシラバスを活用したかについては、コンマ3の開きがある。これは授業者がやや詳細にシラバスを説明したための高い評価と思われる。今後ともこの取り組みを続けたい。次に授業者についての評価である。すべての項目について、子ども学科の平均以上の評価となっている。中でも「興味・関心を持てる工夫がされていましたか」「分かりやすくする工夫がなされていましたか」についてはコンマ3以上の差がある。両者とも授業者が、受講学生の興味を刺激し、分かりやすくする構成や方法を実践したため、この結果となったと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

(2) 結果の分析と評価で記述の通り、本「発達心理学」に対する学生の評価は、学生自らの態度に対する自己評価及び授業に対する評価両者共に全項目にわたり、平均よりコンマ2以上高い。今後ともこれまでの授業への取り組みを継続したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		特別支援教育総論	80名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

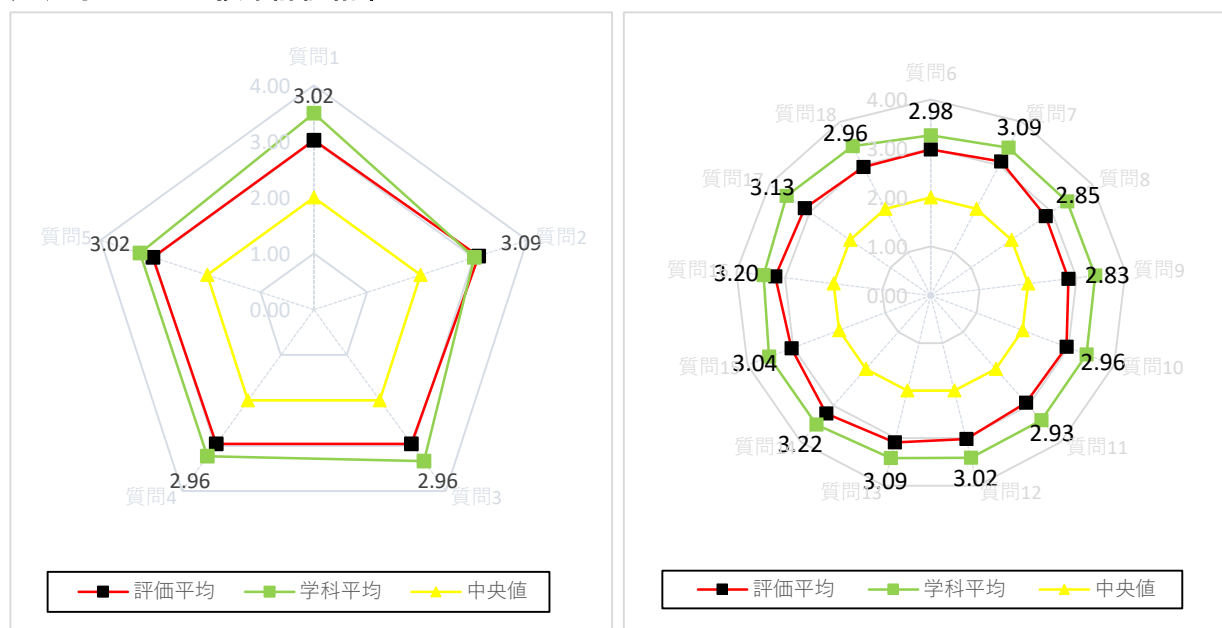
評価平均が3.46と高い評価で、すべての項目で学科平均を超えていた。
教室が80名の教室で、満席の状態であり、ワークショップなどの活動を展開することができなかった。

(3) 次年度に向けての取り組み

教室は広い教室で、ワークショップができる環境がほしい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学研究法	48名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

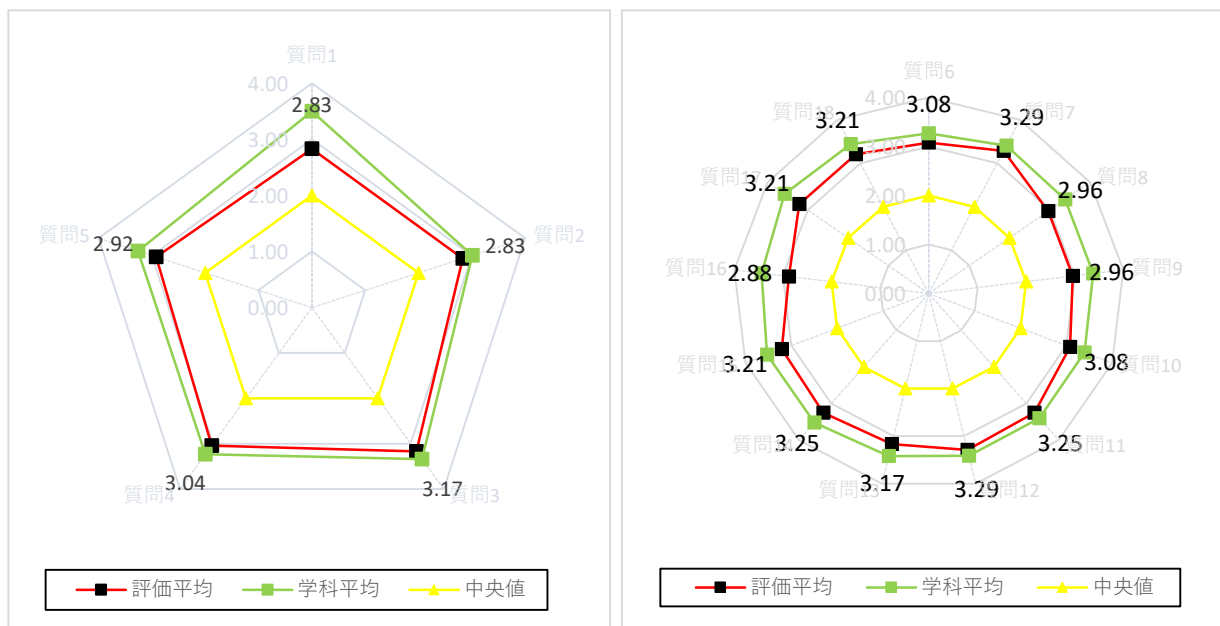
本講は、各回の授業を、概ね「前回の宿題に対するグループ共有と質問（30分）、講義（50分）、宿題（10分）」というフォーマットで実施したものである。いわば授業の約半分を宿題にかける構造にあったが、宿題に取り組んだ学生とそうでない学生とでは、半分の時間の過ごし方や成果の質が異なり、それが項目8,9を中心に評価を分けたと考察する。

(3) 次年度に向けての取り組み

「宿題の『結果』を共有する」時間を無くすか少なくする代わりに、「宿題に取り組む」時間をとるよう意識して授業に取り組みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学統計法	36名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

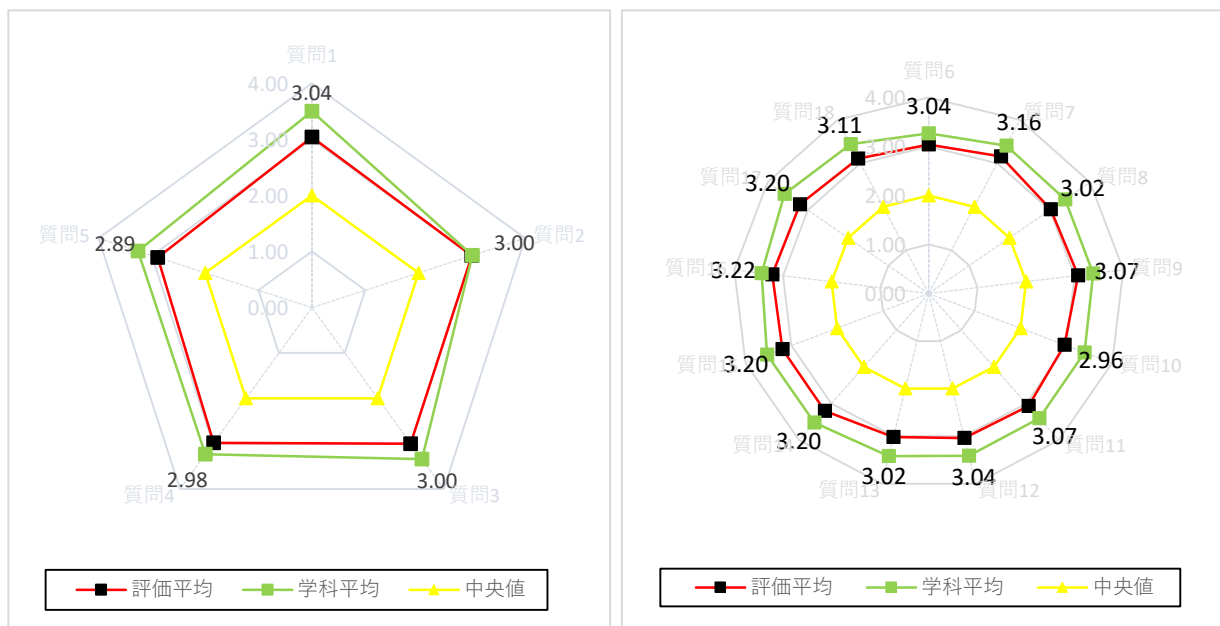
授業の大半をいわゆる「講義」が占めていたことが、項目16の評価に現れたと考えられる。講義内容もテキストの再生と補足を中心であったことで、項目8,9の評価に影響したと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

テキストの内容について予習してもらったうえで授業では必要な所だけを話し、あとは練習問題を解いてもらうという「反転学習」を行って様子を見ることにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学実験演習 I	49名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

まずは、学生には、担当教員のやむを得ない事情による授業日程等の変化に対応してもらったことに御礼を申し上げる。

さて、本講では8つの実験レポート課題に取り組んだが、複数人より同一のレポートが提出されるという事態が生じ、書き直しを命じたこととなった。

これは当該学生の倫理意識を特別に教育する機会となったが、倫理教育を含む心理学実験のリテラシー、及び、課題の多さ（＝一単元あたりの進捗の速さ：項目13関連）に改善の余地を残すものとなった。

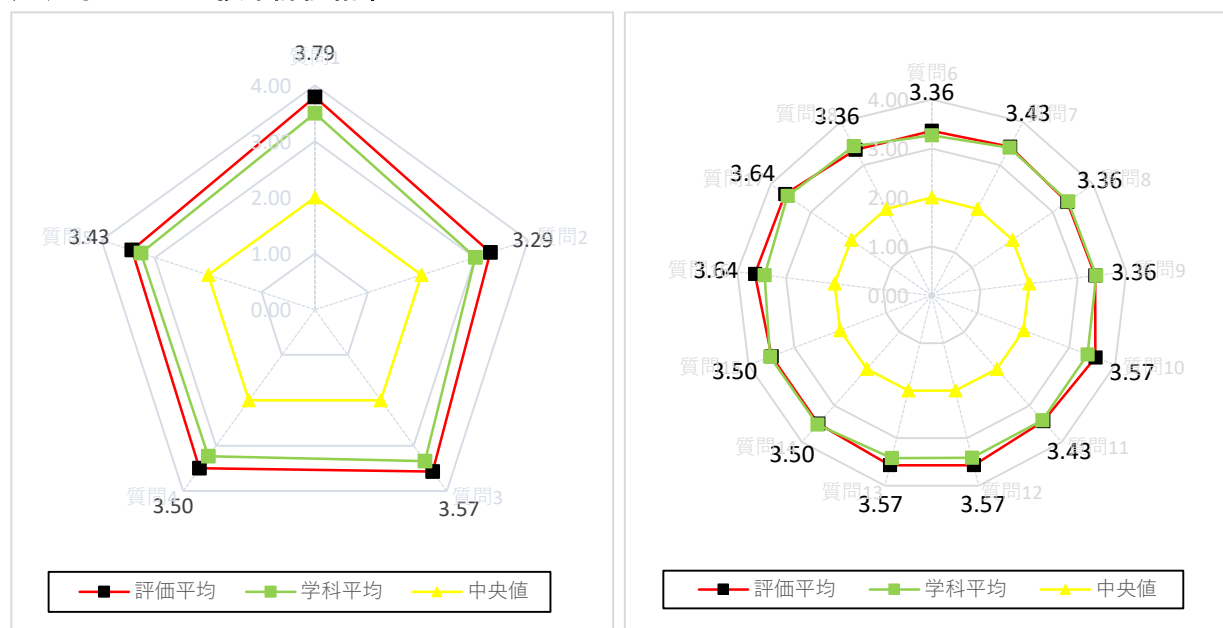
(3) 次年度に向けての取り組み

実験課題を8つから5つに減らして、倫理を含む心理学実験におけるリテラシー教育の充実をはかる。また、レポート作成のための時間をとることとする。

PC演習室を利用するとともにTeaching Assistantにレポート作成指導補助をしてもらうことで、剽窃行為を防ぐと共に、現場でのリテラシーの向上をねらう。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼児理解の理論と方法	80名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

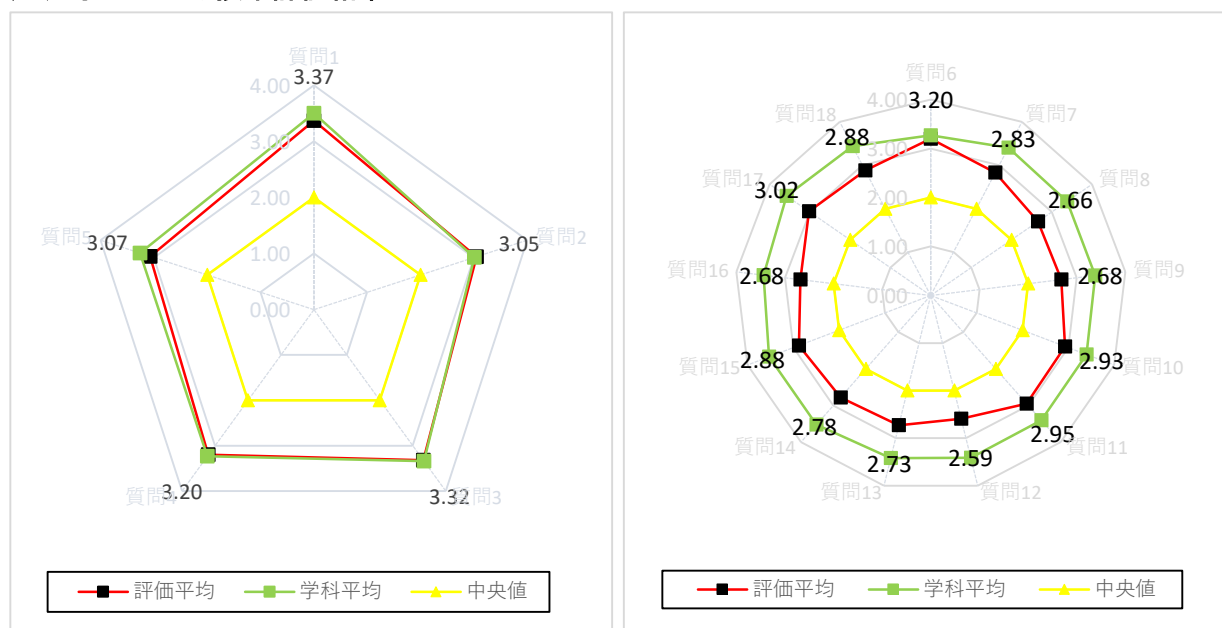
受講者80名に対して回答者14名である。回答率17.5%である。同種の受講者である前期の発達心理学では回答率55%であった。この低下はどういった要因が影響しているか。一般に高等学校時代は教師の要請に答えないと何らかの実質的なペナルティーが与えられる。高校時代はそうした環境で学校生活を送っており、その延長としての入学したての回答態度であったと思われる。しかし、回答しないからと言って何ら影響はない、一方利益も感じられないとなったら、回答意欲は低下するのが自然であり、その結果が今回の回答率低下と思われる。さて、授業評価の中身である。学生の自己評価は高い。問題はないと思われる。一方授業についての評価は全ての事項で学科の平均を超えている。特に質問8の興味関心、10の視聴覚機器・板書についてはコンマ3以上に高い。両者ともに授業者がこのことを意識して取り組んだ成果と思われる。ただし、質問18について、学科全体の平均をコンマ02上回る評価となっており、改善が望まれる。各項目の評価はコンマ2程度は上回っているにもかかわらず、総合が低評価になっているのは、どのようなことが影響しているのか、考察が必要である。

(3) 次年度に向けての取り組み

回答率の低下が最大の課題である。例えば、欠席については、コンマ5ポイント以上の差で学科の平均を上回っている。これは回答者の特性ともいえる。これに代表されるように、回答率や回答者の特性によって授業評価が内容が大きく異なると思われる。回答率の低い授業評価は授業者の授業改善について示唆を与える資料となりにくい。今後授業評価の回答率の上昇策を講じたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教師論	94名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

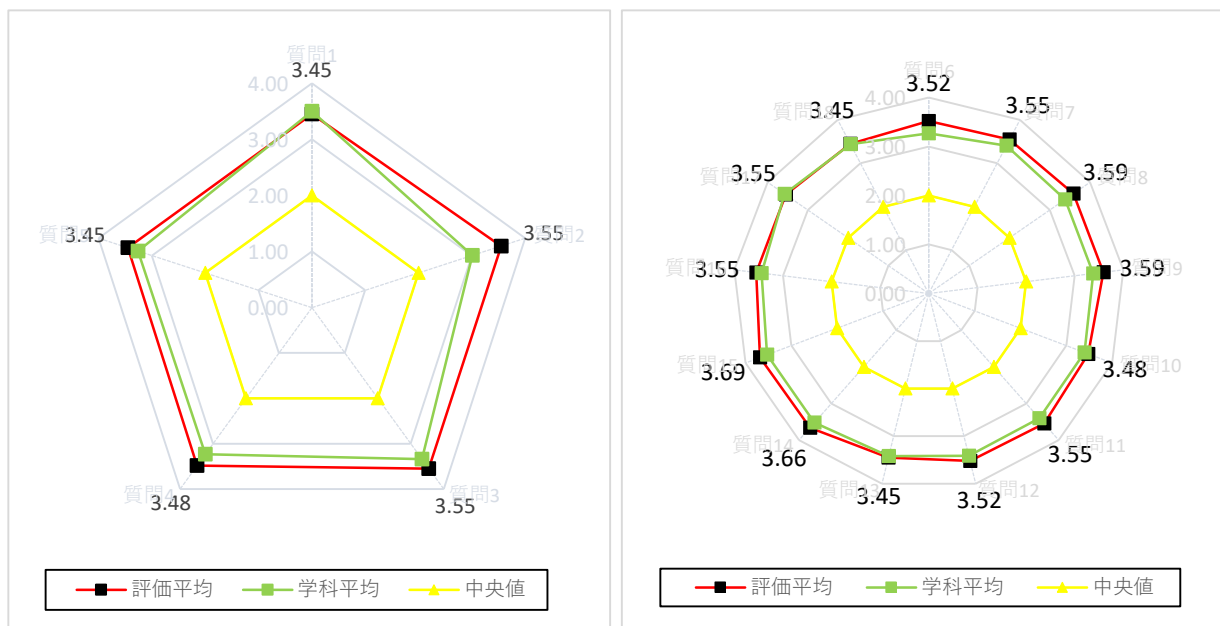
回答者は91名中41名である。全般に、自己評価はまあまあであるが、授業のやり方については厳しく、満足度が低い。どの項目についても1や2を付ける学生数が意外と多かった。それだけ、質の低い授業であったのかと思うと解せないところも多いが、学生の期待する授業とのかい離があったのだろう。それは、学生との信頼関係づくりがうまくいかなかったのかもしれない。不満があるのだろう。また、2年生の段階で、コンプライアンスなどの問題を扱い、VTRを多く使って実践的に考える授業であったので、大学の授業方法の一般的な基準とは少々違っていると言えよう。授業内容は、VTRを使っている分、内容のレベルが高く。法規的な知識と解釈も多くあったので、理解しにくかったかと思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度の評価を反省として、学生を主体として授業に参加させる方法を、もう少し工夫してよいものとして高めていき、授業を学生の手に戻すように工夫したい。授業の効果を高めるためには、学生の参加度をより促し、学生の負担感を高めず、授業の質を保証することのできるやり方、授業方法、授業で活用するツールを工夫していく必要がある。また、学生との信頼関係の構築に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学実験演習Ⅱ	48名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

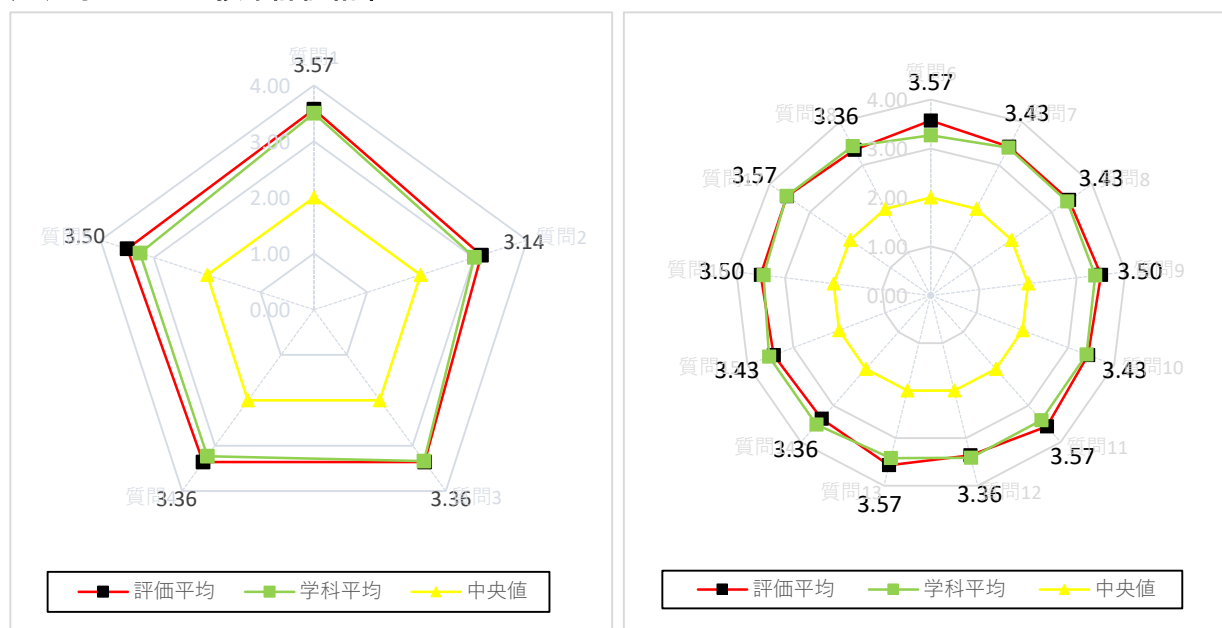
全ての項目において、学科平均より高い得点であった。この授業は、学生に実験を行わせデータ収集からレポート作成まで能動的に学習展開したことの結果と考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度同様、能動的学習を行っていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容総論	76名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

学生の授業評価については、すべての項目で一定以上の高い評価を得ている。座学であり、一方通行になる可能性があるため、できる限り双方向的な学習ができるよう工夫したことがこのような評価につながっているのではないだろうか。

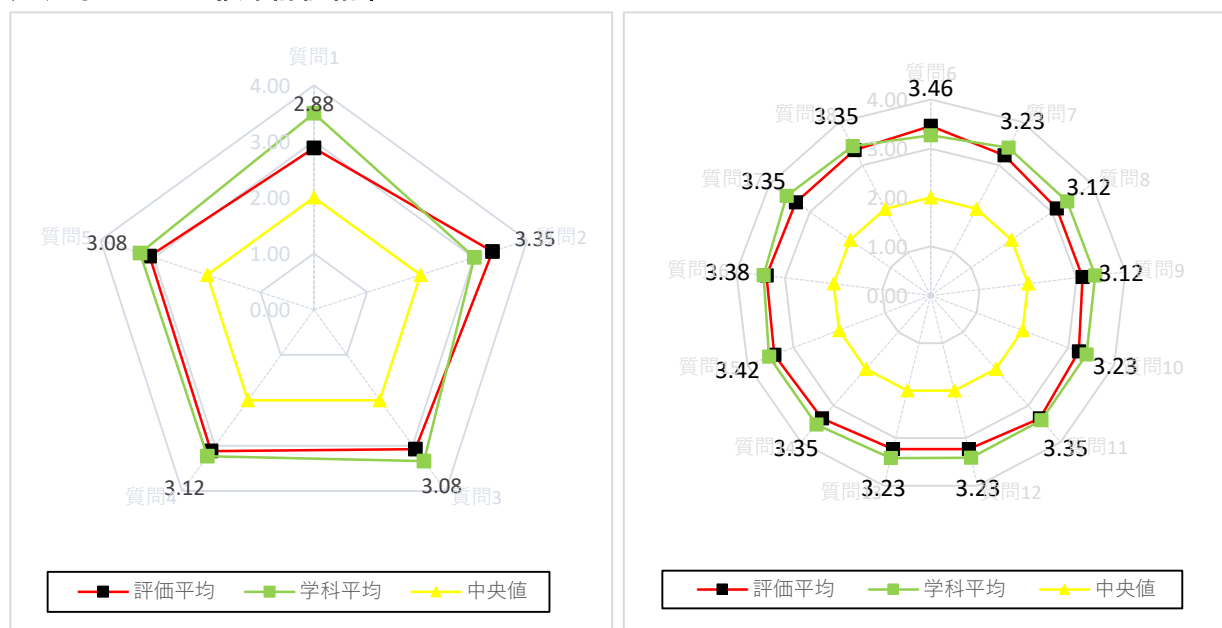
また、本授業は1年次後期の授業である。次年度には初めての実習体験をすることを視野に入れて、学生が子どもの姿や保育所・幼稚園の1日の流れをイメージできるような授業が期待されていると考える。ただ教科書を読んで説明する授業ではなく、一人ひとりの学生が自分自身の課題として捉え、体験的に学べるような進め方が必要である。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度については、基本的には今年度と同様の方法で授業を展開したいと考えている。保育現場では平成30年4月に改訂された新法令のもと、保育が展開されている。学生たちがその内容をしっかりと把握した上で実習に出ることができるようサポートしていく必要がある。より現場に即した内容の授業ができるよう、アクティブラーニングの形式で行っていききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学検査法 I	38名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

概ね学科平均と同程度の評価となった。シラバスについては、初回に説明を行い、評価基準については学期末にも再度シラバスを利用して説明を行ったことで、質問6の点数は平均を上回る結果となりました。講義では、各回授業後に感想や疑問点を求め、翌回に疑問点に答えるなどすることで、疑問を疑問のまま持ち越さないように配慮した。最終授業を終えての感想にはプリントの重要語句などが分かりやすいという評価や、実際の検査用具を書画カメラを用いてICT活用を行うことで、理解が深まったという評価を得たので、ICT活用や分かりやすい配布資料の活用などを引き続き行いたい。

今回、時間の関係で授業時間内に授業評価の時間を設けることが出来なかったため、回答率が低い結果となったことが反省点として挙げられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

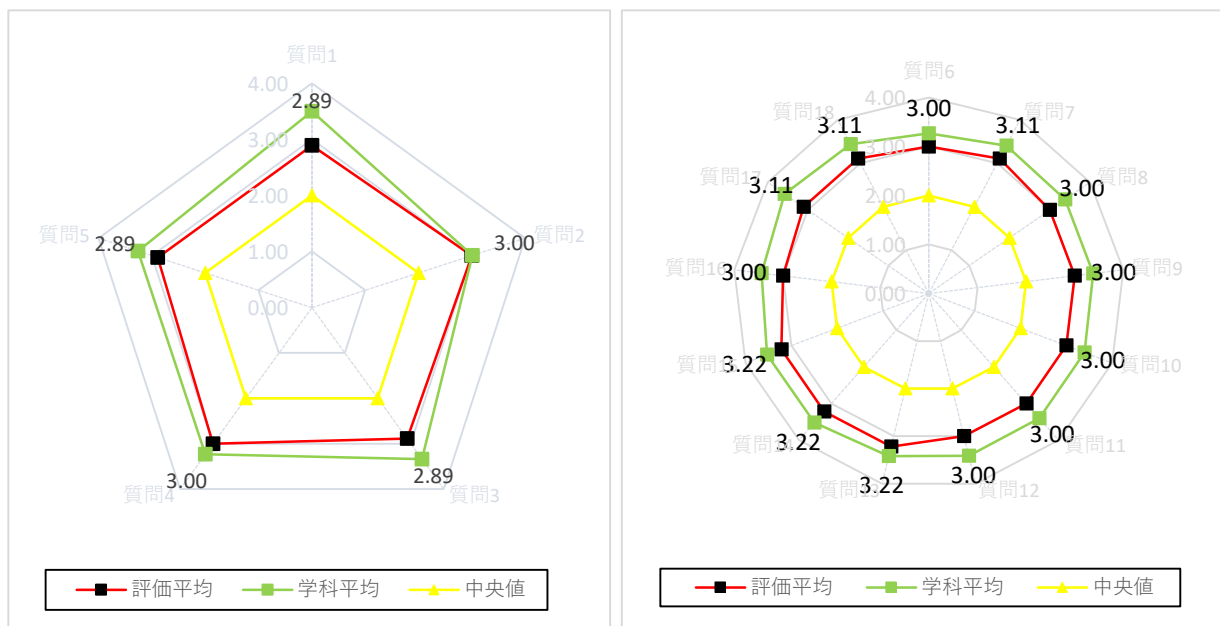
次年度においても、各回の感想・疑問を求める形式を踏襲し、授業内で生じた疑問等に適切に対応したい。また、引き続きICT活用を行い、検査用具の数の関係で多くの学生が手に取ることができない検査用具についても視覚的に理解を深める取り組みを続けたい。

時間の関係で授業時間内に授業評価の時間を設けることが出来なかったことが反省点として挙げられるため、次年度は講義時間内に授業評価を行う時間を設けることで回答率の上昇をねらいたい。

また、次年度については授業内で適宜グループワークやディスカッションの時間を増やすことで、学生がより主体的に授業に取り組むことができるよう改善を行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学検査法Ⅱ	34名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

学部学生にどの程度心理検査自体を見せ、理解させ、体験させるかに戸惑いながら授業をした経緯が、そのまま反映されている結果です。わたしの伝えたいことが、学生の関心事かどうかを考えず、わたしからの一方的授業になりがちだったと考えられます。

学生自ら考えることに興味を持つことよりも、学生の様子を見ながらの授業となりました。言い訳になりますが、後期からの勤務で、かつ当大学のことを詳細に分らぬまま、つまり準備不足で授業に入ってしまったことを反省する結果となりました。

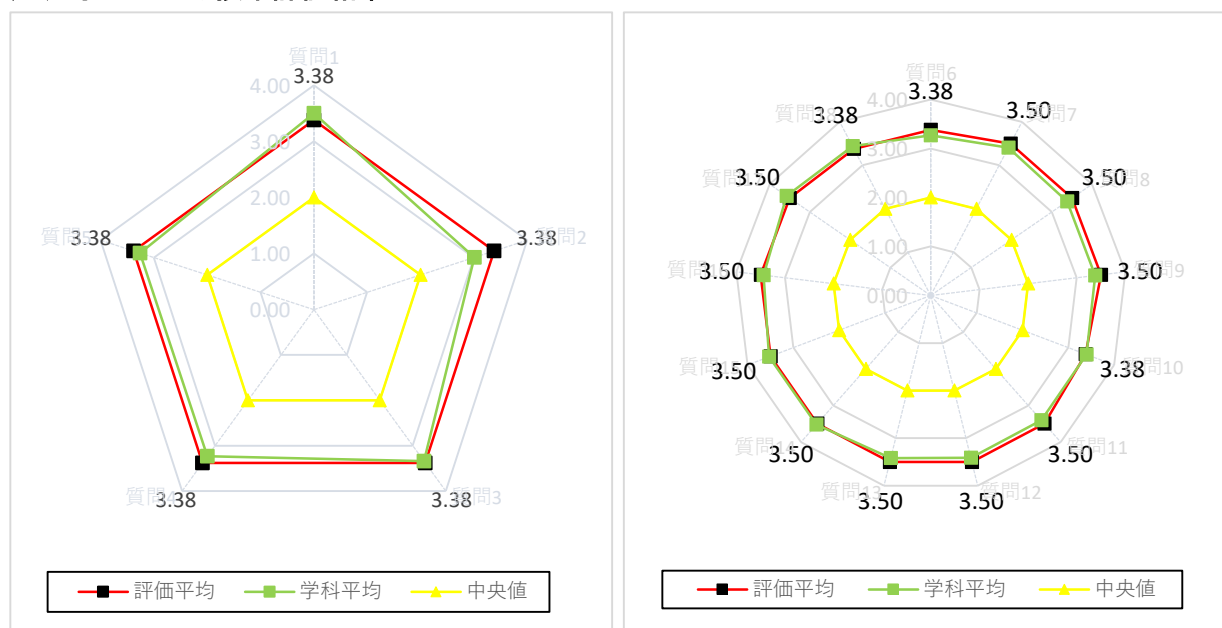
繰り返しになりますが、特に、学生との対話が少なく、こちらが教えたいことを一方的に話していたことが、反省点だと考えます。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度に向けて、伝えないといけないことはしっかりと伝えるとともに、学生に考えさせ、表現させる機会を取り入れる機会を多く設けて、心理検査の意義を身につけられる授業にしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（健康）	83名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

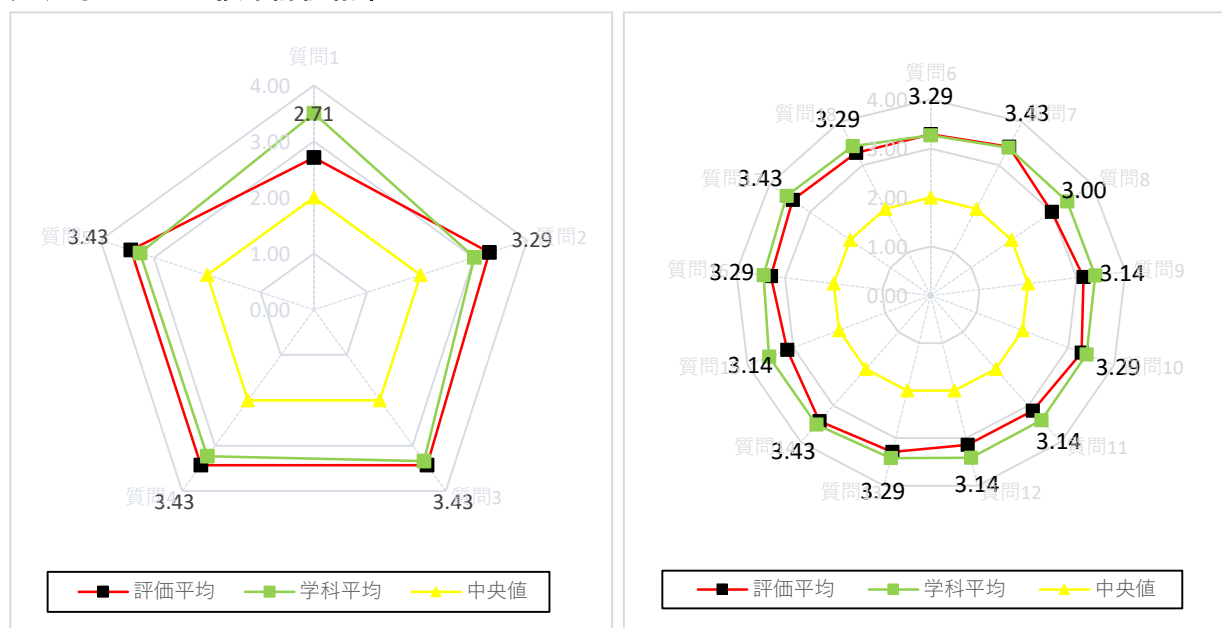
質問の項目 6 から 1 8 に関しては学科平均とほぼ同様であるが、質問 6 のシラバスについては説明不足であったため、質問 7 の得点もやや低いものになっているといえる。低くはないが全体的に平均程度となっており、全体的に質の向上が望ましいと言える。

（３）次年度に向けての取り組み

シラバスの説明をより丁寧に行い、到達目標や授業を通して身に付けたい力等を意識させながら授業展開を行っていきたい。また全体的に質を向上させる必要もあると言える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（人間関係）	81名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

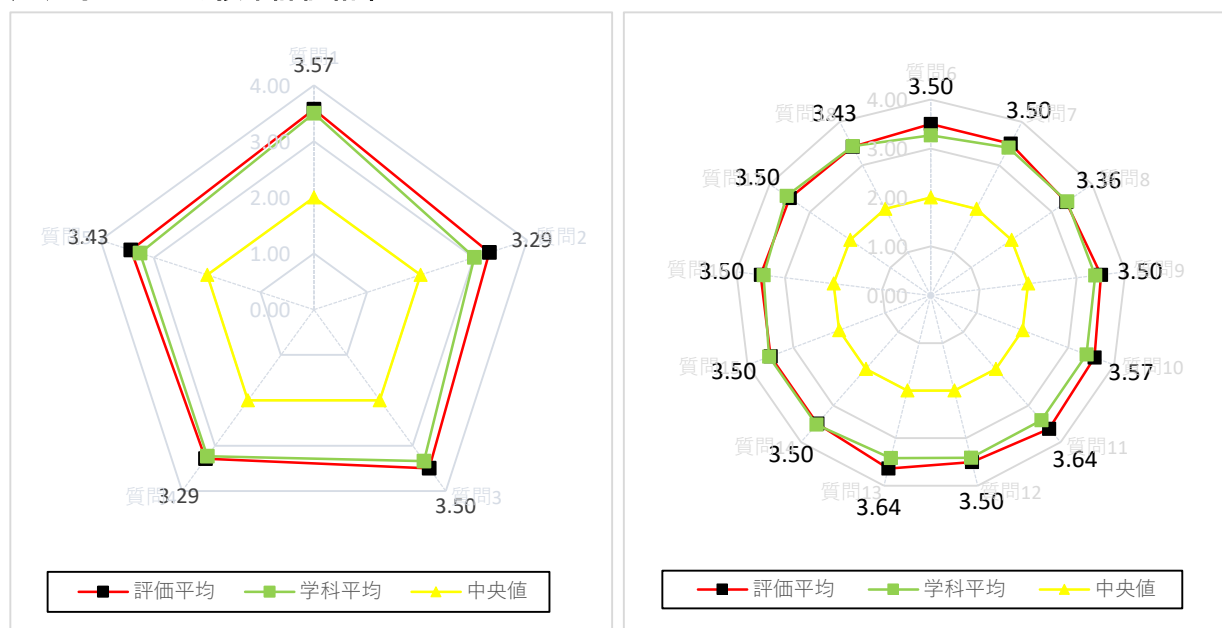
全体的に平均値であった。その中で質問8の興味関心の工夫、15の公平に接するという点は改善点である。また、到達目標を明確にして授業を展開するの項目の評価がわずかに高かった。わずかな値だが、分析すると、幼稚園実習期間を挟んでの授業だったので、子どもの姿を交えての内容だったので共有でき、分かりやすかったのではないかと考える。授業方法としては、学生の授業参加を重視し、考えを発表する機会や、手遊びの発表経験を公平に入れていった。また、授業後に感想を書いたラベルを活用していたので、学生の反応は把握できたと思う。ビデオは、特に「人とのかかわる力の発達と課題」「支える保育者の役割」という点で、とても良い教材だと思われる保育の実際のドキュメンタリーを編集したもので、見る視点と捉え方についての説明を丁寧にしていく必要を感じた。

（３）次年度に向けての取り組み

低い評価項目は、欠席があったこと。体調を崩す学生がいた。内容的には、強いて言えば教科書・配布資料等の活用なので、もっと深める必要があるのだろうと考える。一回一回の授業の目的やねらいは持っているので、伝わるように表現する事を念頭に置きたい。そのためにも、毎回の内容をどうとらえたか、今後とも授業感想のラベルをとりたい。出来るだけの確かな発問と感想を求めるよう努力したいと考える。また、人間関係における実習体験を大事にし、子どもの内面をどう捉え、かかわっていくかディスカッションが出来ればと思っている。ディスカッションの深まりを実現するには、時間の確保が肝心であり、グループワークの話の進め方にも注意を払う必要がある。学生とコミュニケーションをとりながら、発言しやすい雰囲気を作っていききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（言葉）	90名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

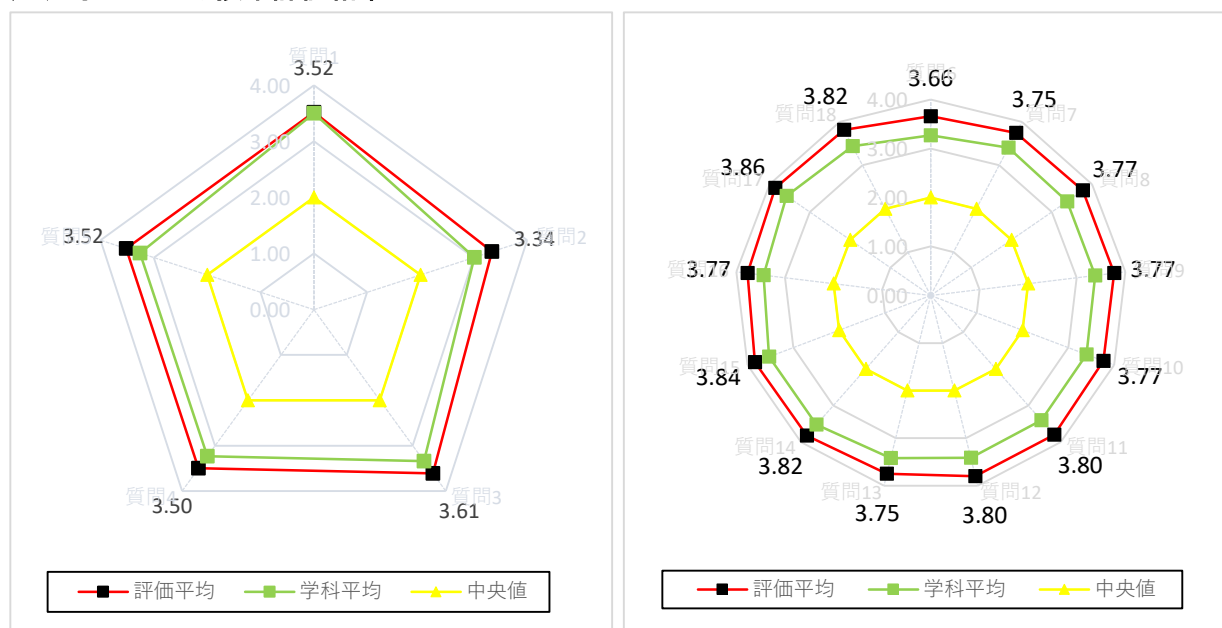
全ての項目で平均を上回ることができた。昨年度よりも受講者の欠席が少なく、受講態度も良好であった。今年度は、学生の実態を考慮し、事例が豊富に載っているテキストに替えたことで学生にとって理解しやすい授業になったのではないと思う。本授業は、これから幼児教育を専攻する学生にとって最初の保育内容指導法である。保育園や幼稚園実習に行く前の事前指導にもなる授業と考えている。ゆえに、保育活動案の作成や子どもを想定した言葉遊び、ゲーム、読み聞かせなどの演習を数多く取り入れてきた。このことが学生の意欲にもつながったのではないと思う。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度も今年度の方向性を踏まえた授業実践を行い、個々の学生に子どもの前に立って保育をするという責任感と喜び、そして自信をつけさせていきたいと思う。また、事例研究なども取り入れながら、2年次から始まる実習につなげられるような授業実践に努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カウンセリング基礎演習	49名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

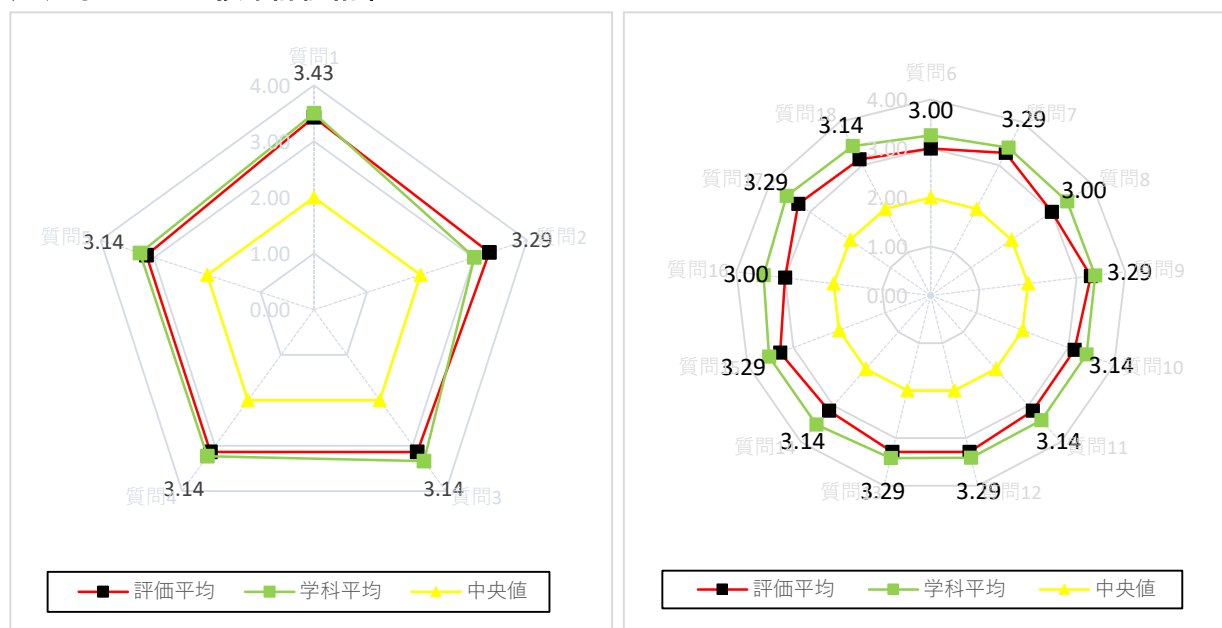
全般的にとっても良好な評価であった。集団体験や心理テストを通した自己分析や他者理解活動を、楽しみながら行えていたようである。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、授業回数は15回であるものの、通年を通して開講されることになる。このため、特に前期では、入学直後の学生の心理面に配慮し、学科内の学生間のコミュニケーションを促進する内容を取り入れた授業内容や日程を検討することになる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（表現）	78名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

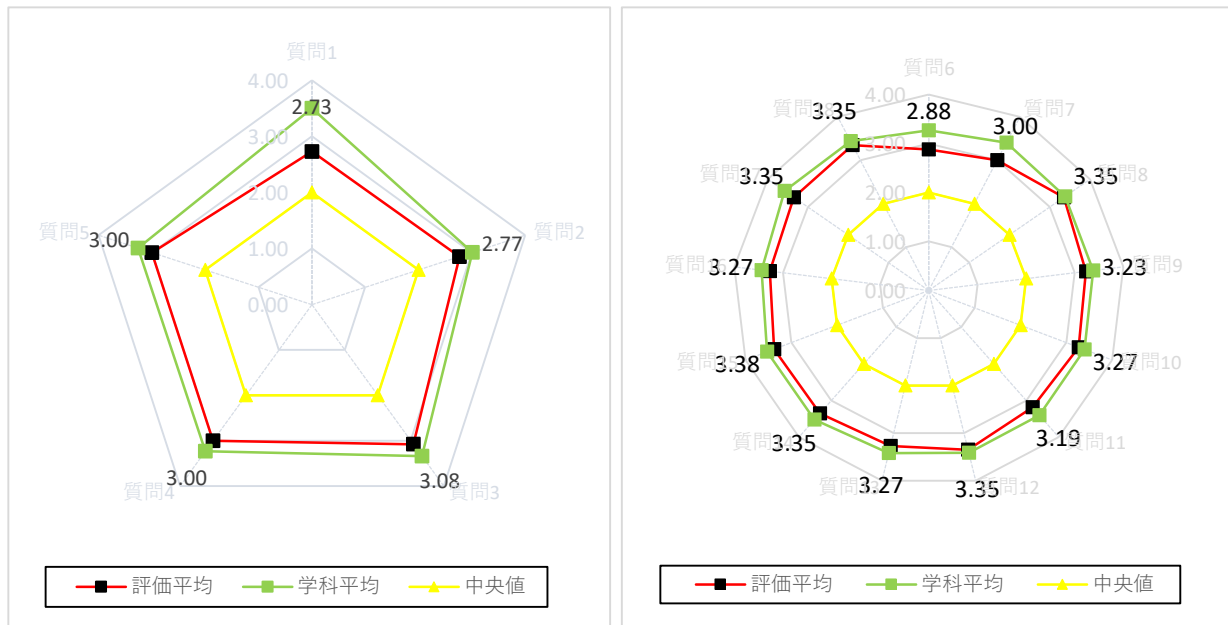
この科目はオムニバスで行っており、前半と後半で指導担当教員が交代する。いずれの担当時においても、各学生が実技に取り組んでいる時間が含まれている。学生自身が個々の作品と向合い、表現する過程で得る気づきは、保育者としての援助のあり方について考えるための貴重な時間となっている。そのため、学生との双方向的なやり取りを意図的に控えておくことがある。学生自身が自らの創作過程での気づきを言語化し、意見交換を行う段階になってからは、双方向的なやり取りを積極的に組み入れている。表現系の授業では、各自が表現することと向合う時間を確保する必要があり、毎時の授業において常に双方向的な係りを行うわけではない。このような授業の特性があることが、質問?に関する評価に繋がっている可能性は否定できない。

（３）次年度に向けての取り組み

今年度の学生の取り組みを十分に振り返り、次年度からの教材検討に活かすことによって、学生自身の表現活動の充実を図りたいと考えている。諸々の表現活動での実体験を踏まえながら、将来、保育者として子どもたちに対して適切な援助ができるよう学生の実践力を培っていききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		倫理学概論	40名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

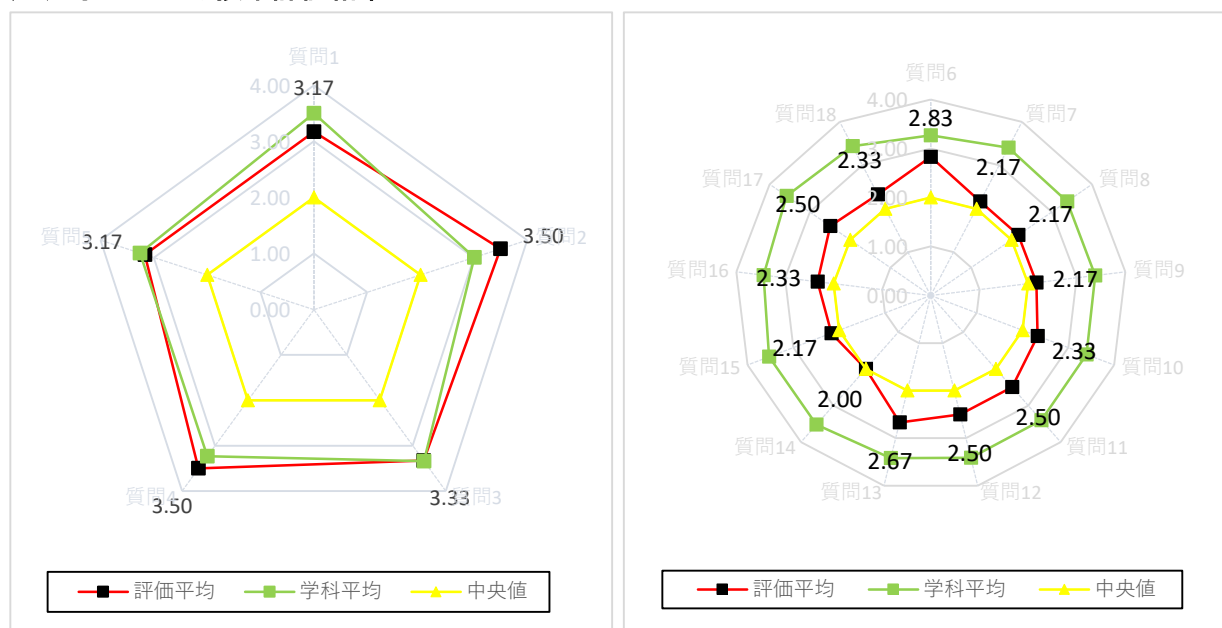
シラバスの説明、授業目標の説明が不十分であることが分かる。

(3) 次年度に向けての取り組み

学科平均値に美奈たない項目については、次年度授業で改めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育行政学	82名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

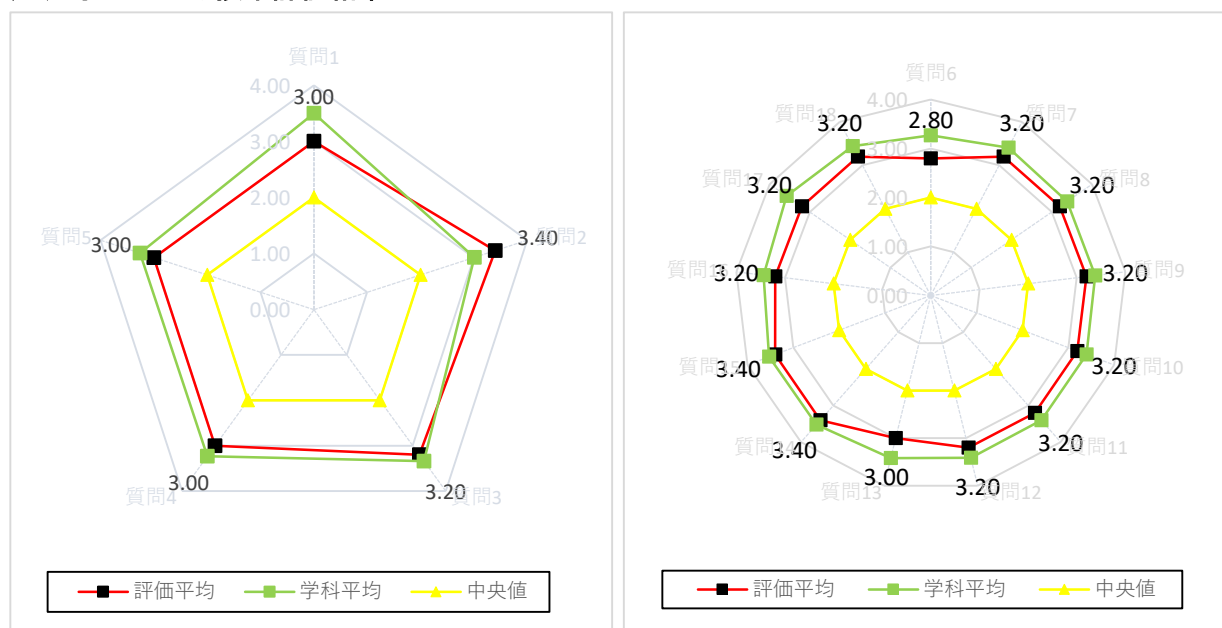
回答者は、受講学生82名中6名のみである。全般に、自己評価はまあまあであるが、授業のやり方については厳しく、満足度が低い。法令という難しい内容を理解させるため、色々と工夫し、参加型の授業を目指したが、回答した学生には届いていない。したがって、授業方法には、多くの課題が残っていることは間違いない。途中で実習等があり、授業をバラバラに抜けていき、学習が中断する。そのため、問題意識を継続して高めていくことが困難で、かなり苦労した。この制約はやむを得ないものである。より多くの回答者を引き出すことが課題である。

(3) 次年度に向けての取り組み

引き続き、授業の効果を高めるためには、学生の参加度をより促し、学生の負担感を高めず、授業の質を保証することのできるやり方、授業方法、授業で活用するツールを工夫していくことが必要である。また、学生との信頼関係の構築にも努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		経済学概論	20名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

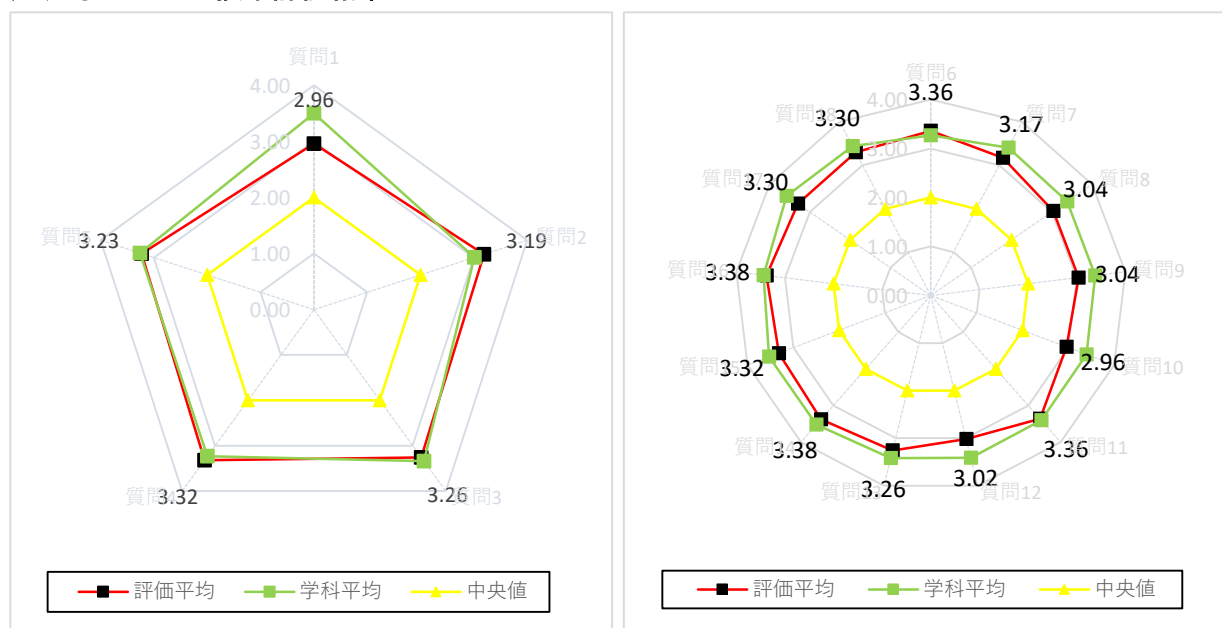
授業評価の結果は、概ね学科平均を下回るものが多かった。やや難解な経済学をできるだけ平易に説明してきたつもりだが、まだ改善の余地があるようだ。授業評価は、学生諸君の意見を直接聞くことができるため、授業の改善に大いに役立つものとする。この授業では現代経済学を構成するミクロ経済学とマクロ経済学を取得することにあつたが、理論的な分野のでの説明では、やや高度な数学などを使用したため、難解であったようだ。今後はできるだけ平易に説明し、よりわかりやすい授業を心がけていきたいと考える。□

(3) 次年度に向けての取り組み

やや評価の低かった項目であるシラバスの説明については、初回の授業で簡単に触れてただけであったのを抜本的に改善し、時間を割いてより丁寧に説明していきたいと思う。また、シラバスの項目がミクロ経済・マクロ経済と多項目に及ぶために理解しにくいのかもしれない。したがって、もう少し論点をしぼって、シラバスそのものも使用しながら、わかりやすく説明することを心がければ評価も改善するのではないかと考える。今後はもっとわかりやすい資料の作成を心がけつつ、少人数でもあるため、一方通行的な授業ではなく、学生諸君と対話し、意見や質問を聞きながら、より興味深い授業に改善していきたいと思う。また、穴埋め形式のプリントなども作成・配布して学生諸君が飽きない授業を心がけたいと考えている。□

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		カリキュラム論	88名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

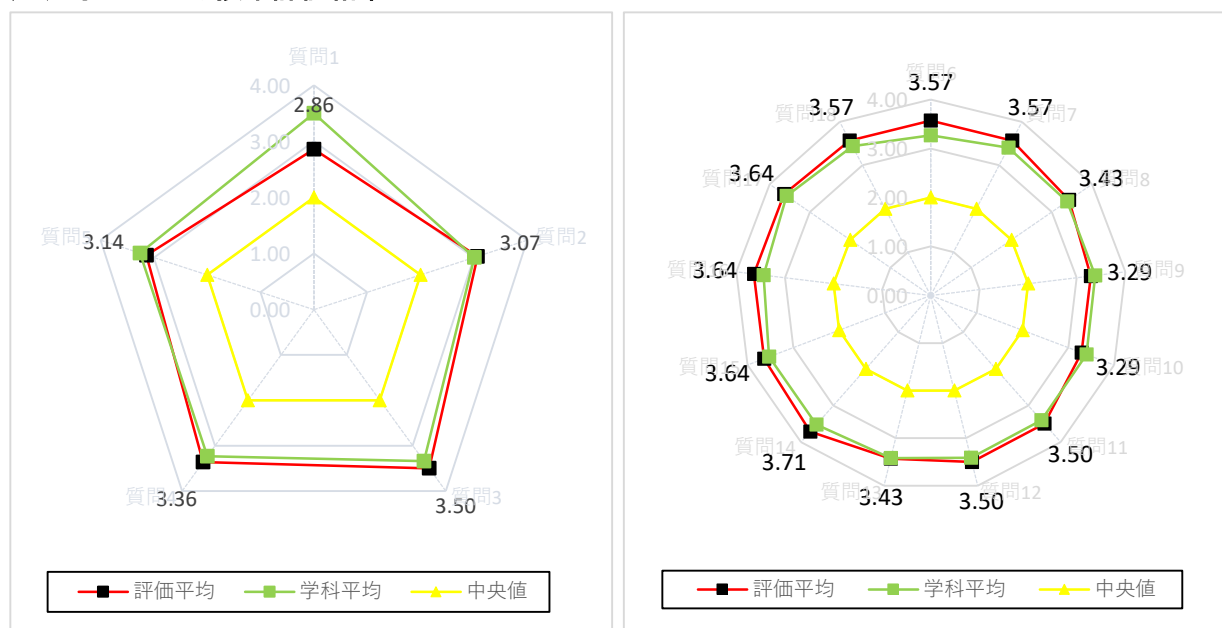
回答者は88名中47名である。全般に、自己評価も授業のやり方についてもまあまあの評価である。学生の授業参加の状態はよく、授業のあり方もある程度の水準を確保できたように思う。しかし、授業評価のそれぞれの観点では、おおむね非常に良い評価となっているが、いずれの項目にも1や2をつける者が多くはないが若干名おり、なかでも1をつける者が1～2名いる。そのことが気がかりである。したがって、課題が残っていることも明らかである。授業者は丁寧に対応し、公平に対応しているつもりでも、声掛けなど、その必要性を学生が皆同じように理解しているとは限らない。課題があること自体課題がないよりは、授業者にとっては、良い授業であった部分もあることを忘れないようにしたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生が一層授業に参加しているという実感を持ち、自分の課題を認識することが大事だと思う。したがって、授業の効果を高めるためには、学生の参加度をより促し、学生の負担感を高めず、授業の質を保証することのできるやり方、授業方法、授業で活用するツールを工夫していくことが必要である。また、学生との信頼関係の構築にも努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		家族心理学	17名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本講義は、学生がテーマ毎にまとめたレジュメやパワーポイント資料を作り発表する演習形式を主に行った。また、発表後に受講生全員でディスカッションを行う主体的学習を行った。そのため、学生自身の取り組みについて高い評価となったと思われる。また、質問9、10については、教員が主導しての講義ではなく、板書等も必要時以外は行わなかったため、評価が低くなっていることが推察される。しかし、学生の発表テーマに関連する資料などは教員側も準備し、その教材に関しては、質問11にあるように、平均以上の評価を得たと思われる。

質問14、15、16、17については高評価を得ており、学生・教員間の双方向的なディスカッションを行う形式の本講義が一定の評価を得たと思われる。

しかしながら、授業時間内に授業評価を行う時間的な余裕がなく、授業評価回答数が低くなったことは今後の課題であり、今後さらに多くの学生からの回答が得られるよう工夫していく必要があると考える。

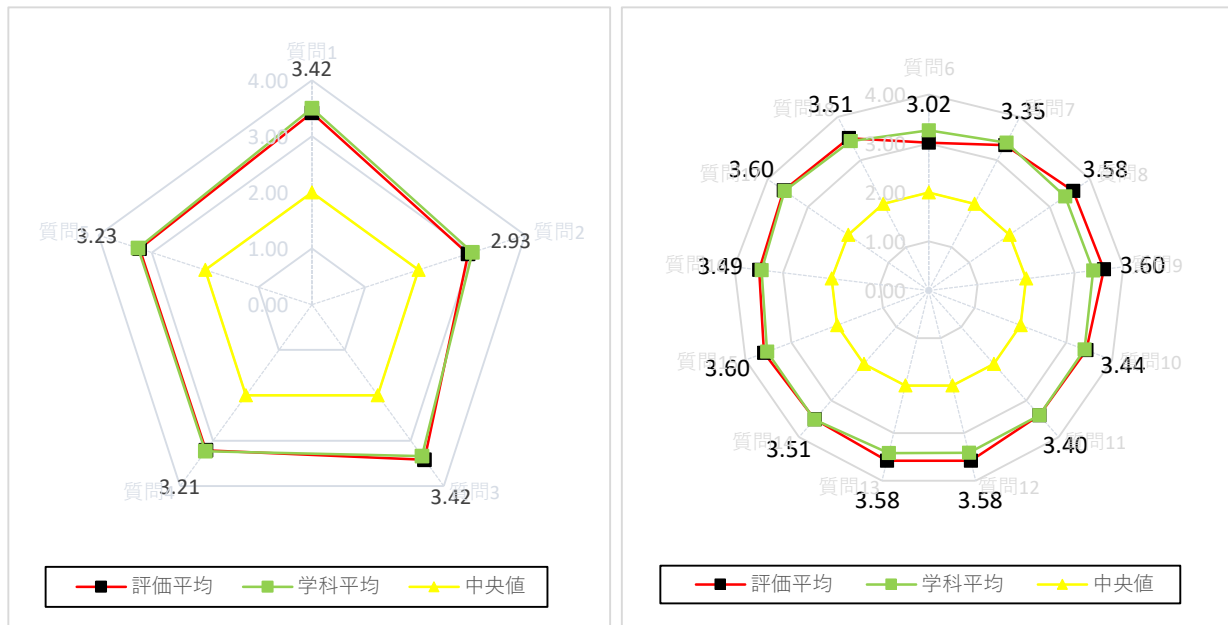
(3) 次年度に向けての取り組み

受講生がテーマに関する発表を行い、また積極的にディスカッションを行うという本講義形式は、学生自身の主体的な学びにつながるため、今後も踏襲していきたい。回によっては、発表時間とディスカッション時間のバランス調整が難しかった回があったため、次年度以降は時間配分にさらに留意しながら進めていきたい。

また、今後の課題に挙げた授業評価回答数についても、授業時間内で授業評価に取り組む時間を確保することで、多数の学生からの回答が得られるよう工夫を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		命の尊厳	46名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

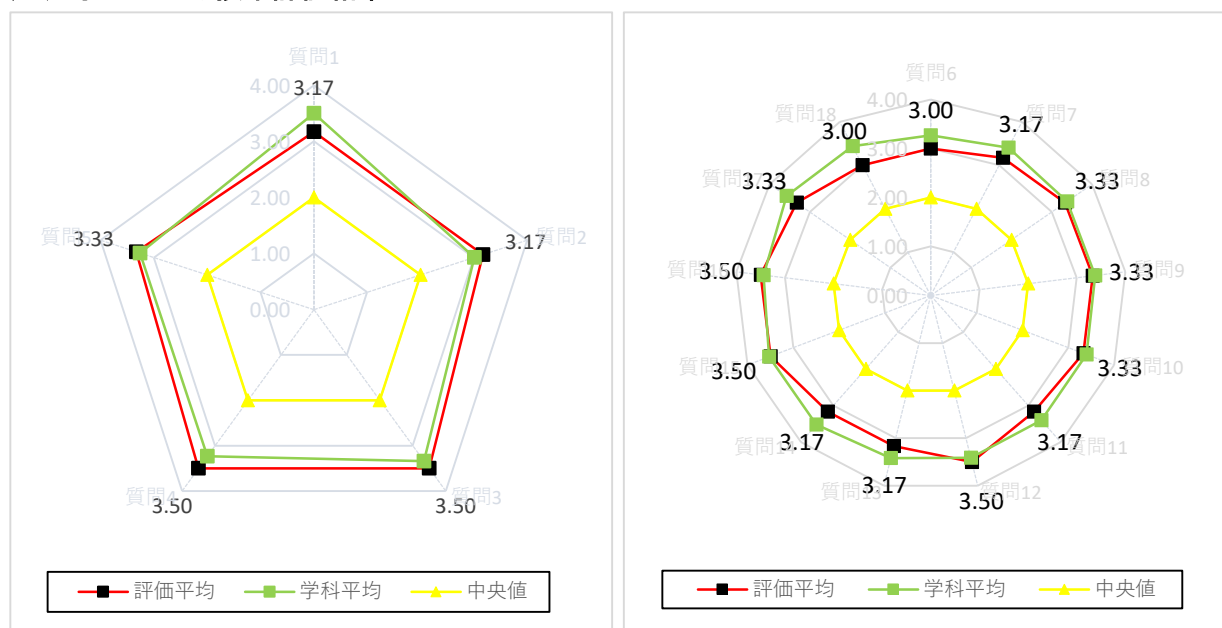
シラバスの説明以外ですべての項目で学科平均を上回っている。

(3) 次年度に向けての取り組み

シラバスの説明について強化したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育相談の基礎と方法	83名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

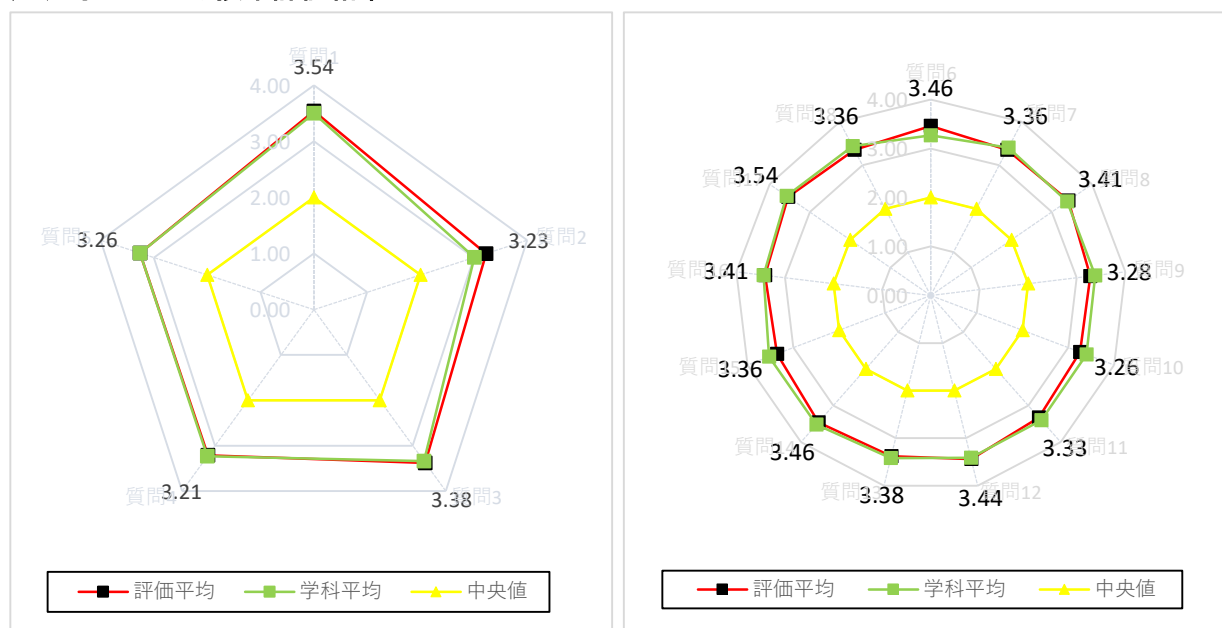
83名受講者の中で回答者は6名である。7.2%の回答率である。大きな特徴は学生自身の自己評価の総合点は3.33と学科平均より高く、授業評価は3.00と学科の平均に比べコンマ35も「低いことである。これは授業自体の特性というより、評価者の特性を表したものであると思われる。各項目では、質問6のシラバス説明、11の教科書・配布資料、?の進む速さ、14の質問への対応、これら4項が学科平均より低い。授業者はシラバスについての一定の説明、教科書の適宜活用、配布資料の工夫、質問の対応を実践したつもりであるが、6名の評価学生には不十分だったと思われる。今後の課題としたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

取り組むべきは授業評価の回答率上昇である。1年生前期は回答率が他の時期に比し高い。こうしたことも考慮し、回答率上昇策を講じたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語科指導法	85名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本授業でも概ね予想した評価が得られたように思う。昨年度に比して次のような工夫を施した。「学生の実態を把握し、授業づくりに当たっては、学生の疑問や問題意識からねらいを定めたこと」「毎時間の始めに前時の復習を行ったこと」「毎時間、教師自作の資料を使用したこと」「丁寧に構造的な板書を心がけたこと」「今年度は、班を単位とした模擬授業を行ったこと」などである。

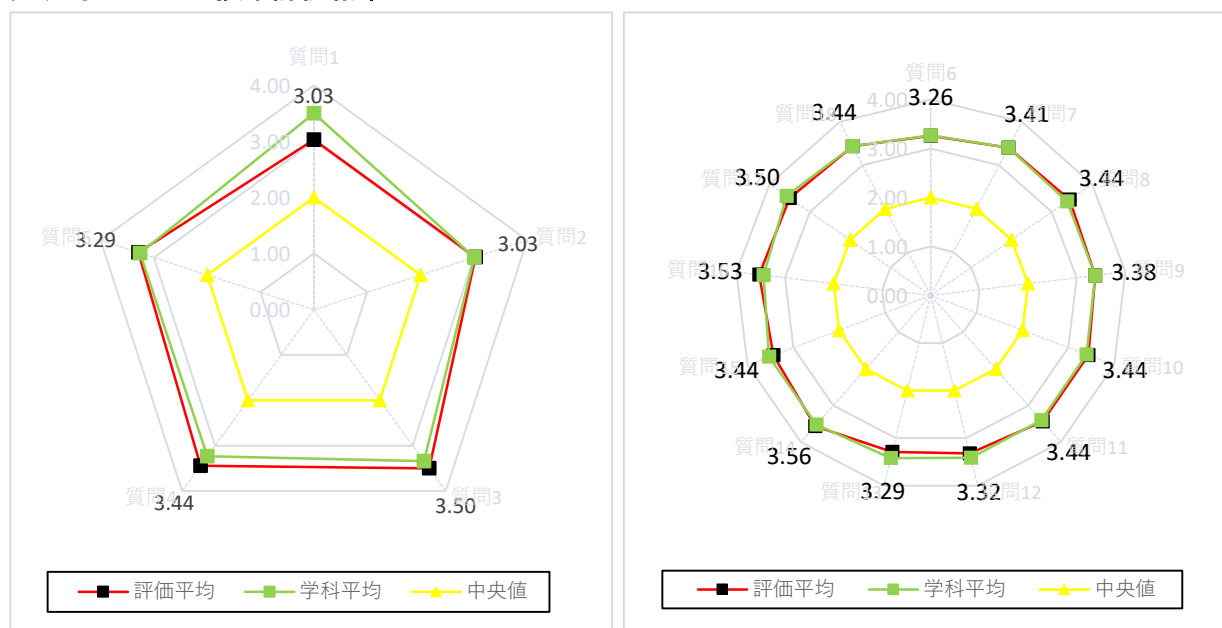
こうしたことから、個々の学生が国語の授業に対して具体的なイメージをもつことができるようになってきた。

(3) 次年度に向けての取り組み

本授業は、将来小学校教諭を目指す学生にとって、最初の指導法を学ぶ授業となる。それゆえ、私の責任は重大であると考えている。小学校教育の基盤である国語教育（国語科教育）の充実のため、さらに学生個々の実態を詳細に把握し分析するとともに、国語科指導を大きく左右するところの「知識・技能」を確実に身に付けさせねばならないことを痛感している。鉛筆の持ち方から始まり、文字の書き方、板書の書き方など、4年次の教育実習や採用試験を見据えた系統的かつ計画的な指導にさらに努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会科指導法	78名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

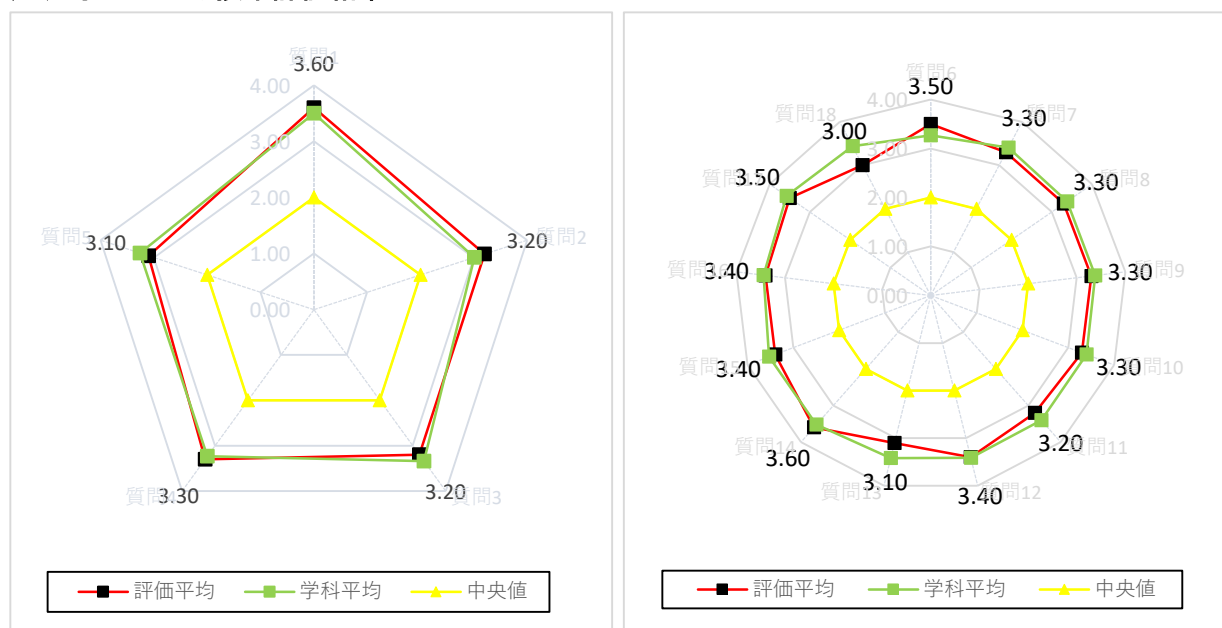
質問1「授業は何回欠席しましたか。」以外は、ほぼ学科平均であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も、同程度以上を目指したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		算数科指導法	94名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

小学校学習指導要領解説編を用いて、小学校で算数科の授業を実践していく上での留意点についての講義を行った。

教員採用試験での専門科目（小学校全科）での過去の出題内容を参考に、2回の小テストを実施した。

後半は、教育実習での実践授業を想定しての指導案作成を、グループワークで行った。人数と時間の関係で、模擬授業までは実施することはできなかった。

(3) 次年度に向けての取り組み

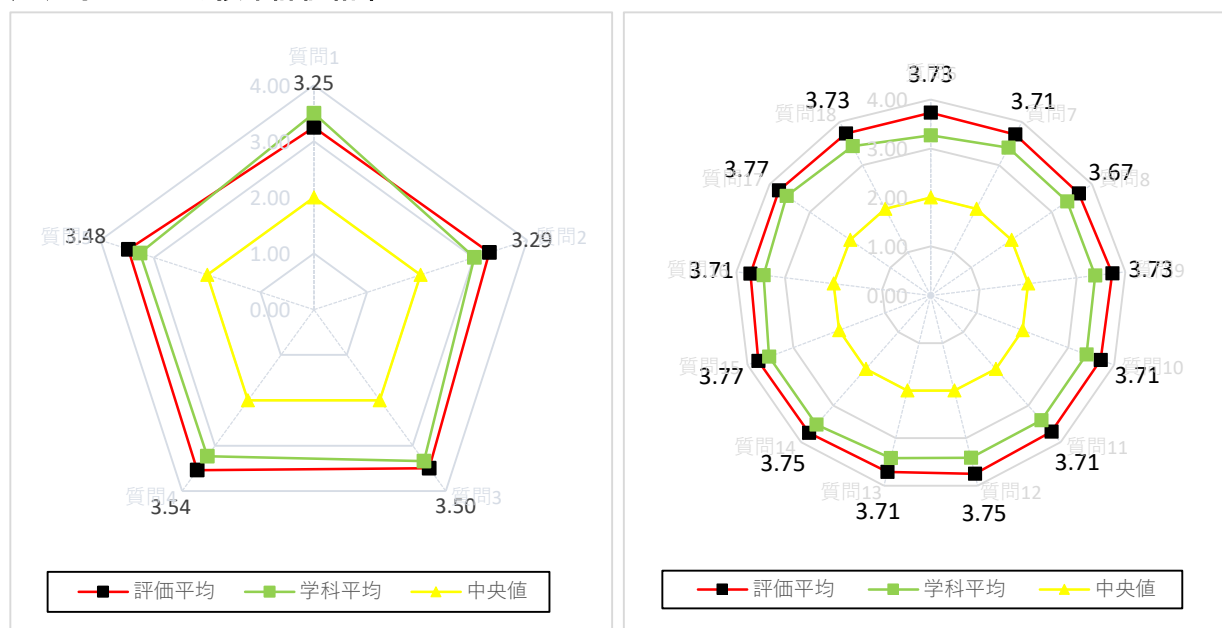
人数と時間の関係から、模擬授業の実施は難しいと思われるが、指導案の作成については、グループワークの中で、実践的見直しができるような時間・場所を確保したい。

シラバスに予習すべき内容について記しているが、学生が十分な予習を行ってこない現状を打破するために、より具体的な手立てを準備して、授業の中で、グループディスカッションができるような状況を作り出していきたい。

小テストについては、内容・回数を工夫して、授業内容の理解・定着に結びつくものとなるよう工夫していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		発達心理学Ⅱ	55名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

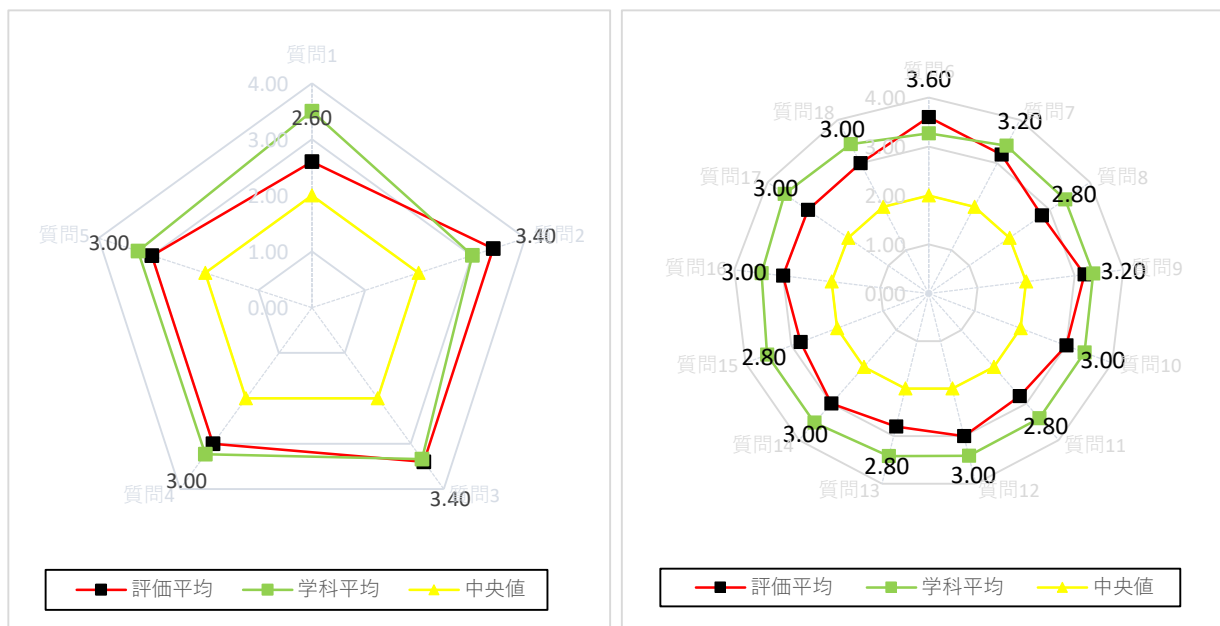
総合評価が3.78で各項目とも学科平均を上回る高評価であった。
公認心理師の受験資格にかかわる科目であり、発達心理学の中では、成人期以降高齢期までにわたる学生にとっては未経験の年代について学ぶ内容であった。
できるだけ、学生の想像力を掻き立て、当事者の身になって考えられるように、DVDや新聞記事などを活用した方法を取り入れた。その結果、学生たちも興味をもてる部分も出てきたと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

特に大きく改善する点はないが、今年度同様、授業メモを活用して、学生たちの質問に答える形で双方性を持ち、グループ討議の時間を工夫して多く入れることで、学生たちの能動的な学びを促進していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		生活科指導法	67名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

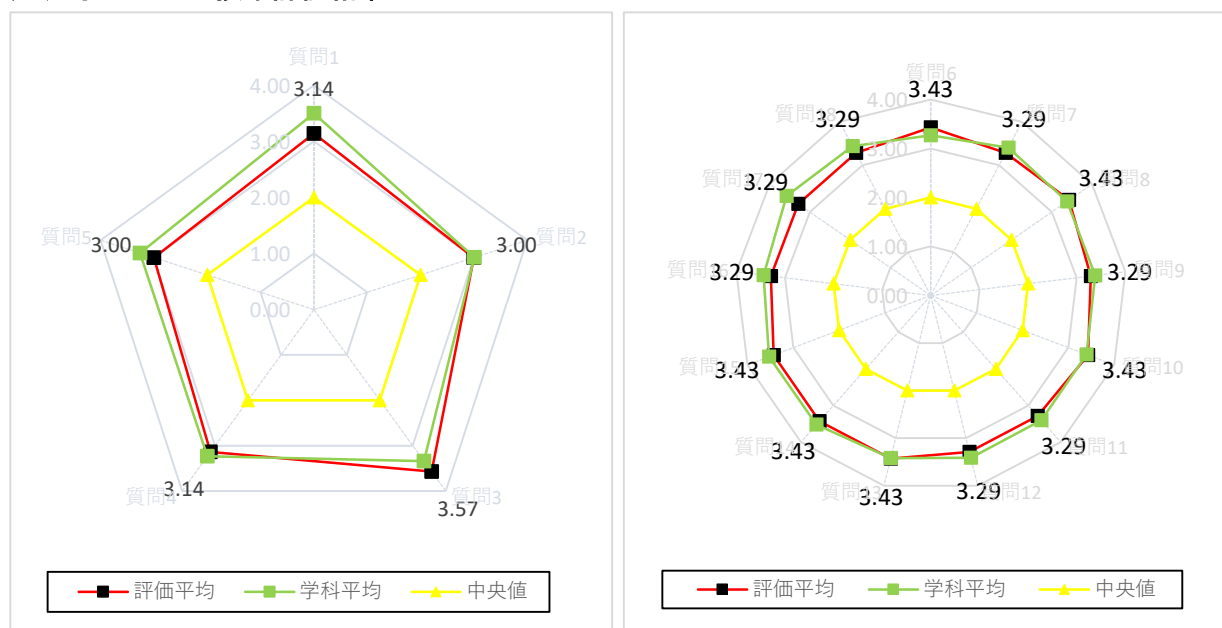
質問2，質問6（シラバスの説明，活用）については意識して行なったので，学科平均を上回った。
質問7～18が学科平均を下回っているなので，次年度は改善を図りたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

質問7～18が学科平均を下回っているなので，次年度は改善を図りたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽科指導法	80名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

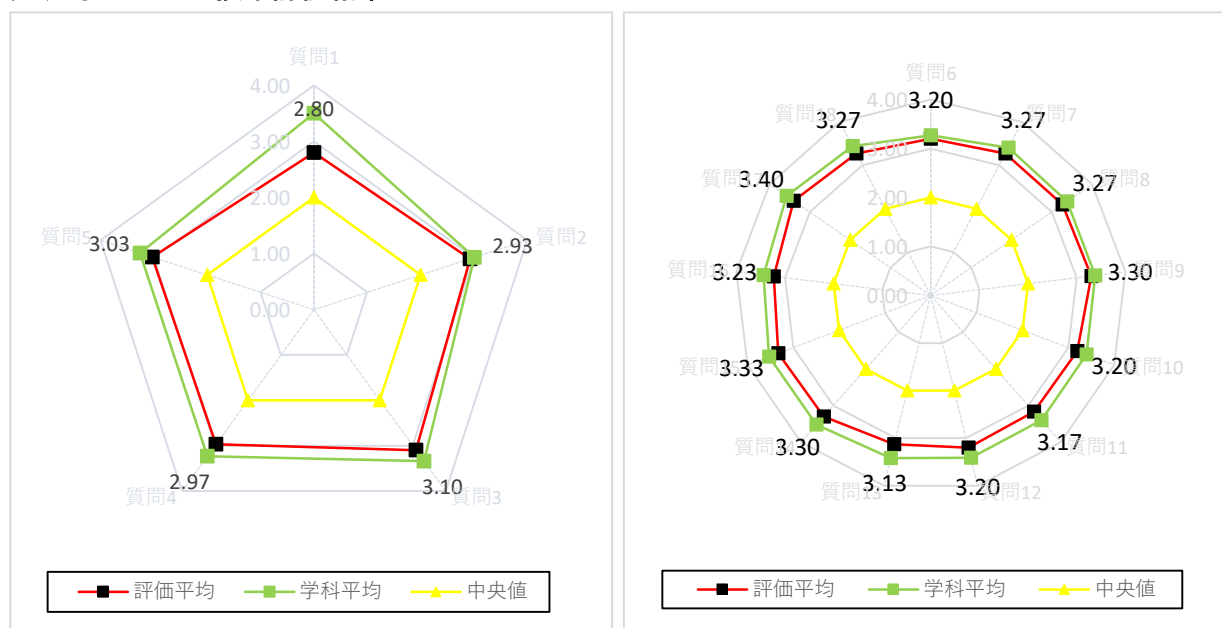
この授業は、小学校教員免許取得のための専門科目群に属する。音楽関連科目は、授業時に実技も取り扱う。この科目では教員採用試験対策として、特に、共通教材の伴奏課題を課した。実技は短期間での習得は困難であるため、継続的に取組んでいく必要がある。しかしピアノが苦手な学生にとって伴奏課題の実技は、かなり負担を感じたと思われる。例年、音楽に対する苦手意識を持つ学生が相当数いるため、授業の進度が学生にとって早すぎないよう留意しながら進めた。今回の評価から、進度については特に問題は無いという確認が取れたことから、次年度以降も今年度の授業進度を参考にしながら進めていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

小学校での教育実習期間中には、様々な科目の授業を実践することになる。音楽科ならではの指導上の留意点について受講学生が理解しやすいよう、次年度以降も模擬授業の時間を取り入れ、より実践的な場面を想定した授業内容となるよう工夫していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		知的障害者教育総論	38名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本科目は、特別支援学校教員免許状を取得するためには必修の科目であり、知的障害の定義や知的障害者の発達・障害特性、特別支援学校、特別支援学級における教育の内容・方法、教育課程、就学支援や保護者のニーズと対応、合理的配慮の概要等について理解を深めることを狙いとしている。今期は38名が履修した。

項目ごとの評価平均点は、おおむね学科平均点と同様か、少し下回る結果となった。その中で、質問11、12、13は学科平均点との開きが比較的大きかった。

教科書を用いず、パワーポイントやその他の必要な資料を随時配布して授業を行ったが、質問11に関しては、資料の作成方法に改善の必要性を感じる。質問12、13に関しては、授業の時間が不足気味になる回が少なく、そのことで説明のスピードが速くなってしまったかもしれない。

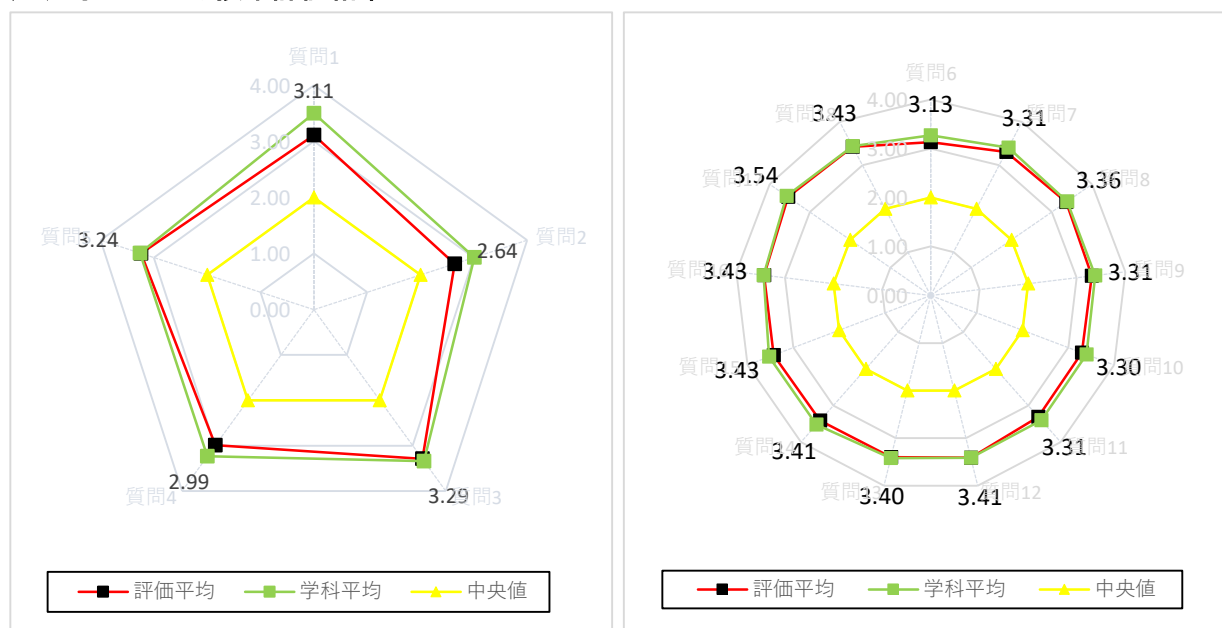
授業ごとに要点整理シートを配布し、復習しやすいようにしたことは、学習内容の理解・定着に一定の効果があったのではないかと考えるが、プレゼン内容や配布資料の作成方法の改善と併せて、授業中の説明について内容を精選し、学生が授業中に十分思考する余裕のある展開について、今後工夫していきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・ パワーポイント資料、配布資料の作成方法の改善
- ・ 授業中の説明内容の精選
- ・ 学生の思考をより一層促す授業中の活動の工夫

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育・教職実践演習 (幼・小)	78名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育・教育実習終了後、現場に就職する前の「総仕上げ」として、理論と実践の往還となるように内容を工夫した。

オムニバス形式の中で、「地域・課程との連携」をテーマにロールプレイ形式の授業を行った。学生がロールプレイ形式の授業に慣れていなかったため、内容に入る前に、形式、目的などを説明する必要があり、ロールプレイ後の振り返りに時間が十分ではなかった。

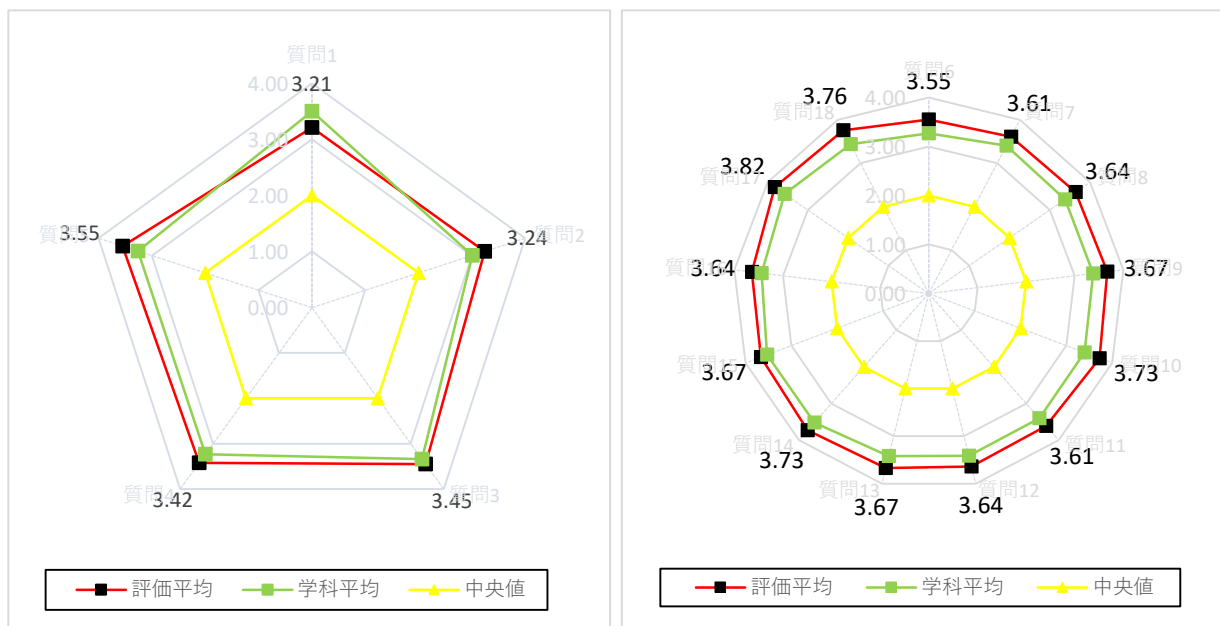
内容が、実践的であればあるほど、保育士、施設職員、幼稚園教諭、小学校教諭、一般企業とその進路の違いが授業に対するモチベーションの違いになったようである。

(3) 次年度に向けての取り組み

ロールプレイ形式を充実させるために、台本の内容をもっと工夫していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育科指導法	76名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

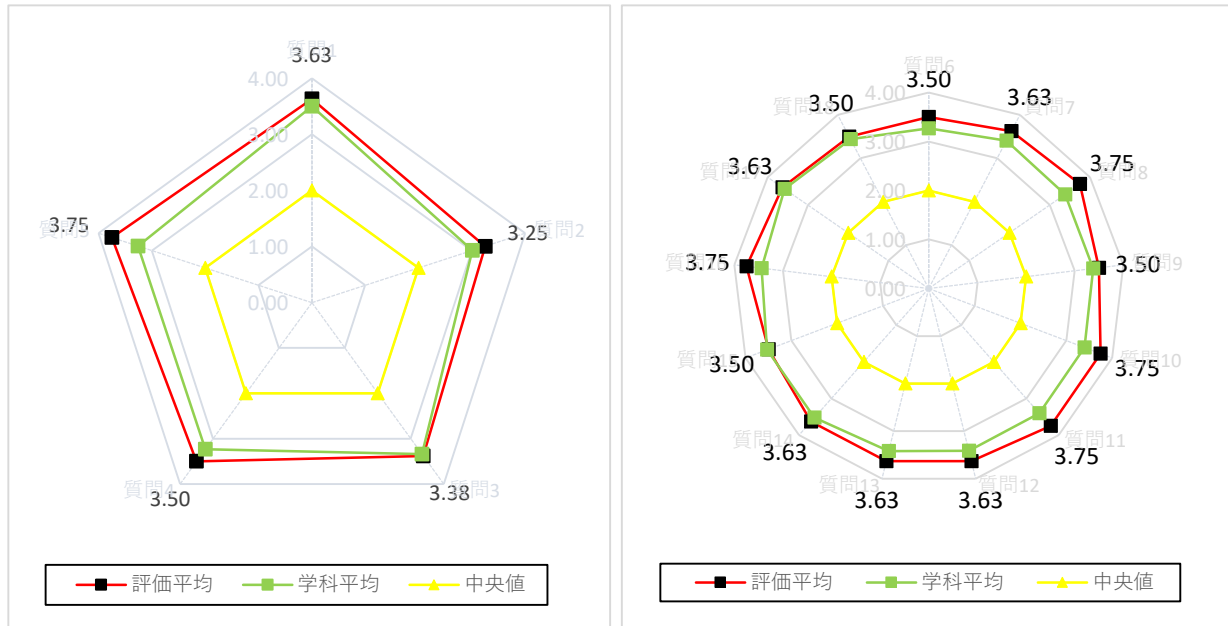
質問の項目 6 から 18 に関しては学科平均より高く、概ね高得点である。質問 6 のシラバスについては説明不足であったため、質問 7 の得点もやや低いものになっているといえる。

(3) 次年度に向けての取り組み

シラバスの説明をより丁寧に行い、到達目標や授業を通して身に付けたい力等を意識させながら授業展開を行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会的養護	59名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

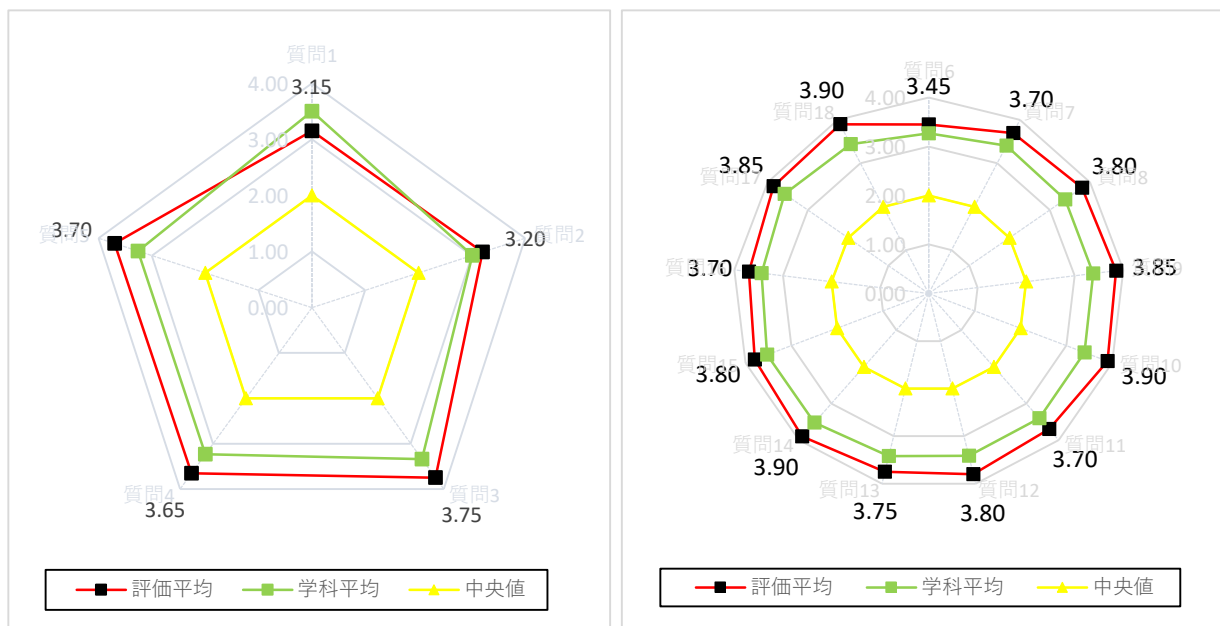
回答者が受講生58名中8名で13.7%で、昨年の36.4%を大きく下回ったことがまず大問題である。回答者8名はの結果をみると、全項目が学科平均を上回り、3.59の総合評価となり高評価あった。

(3) 次年度に向けての取り組み

回答率を上げるための取り組み、対策を学科で検討することが急務である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		発達障害者教育総論	28名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

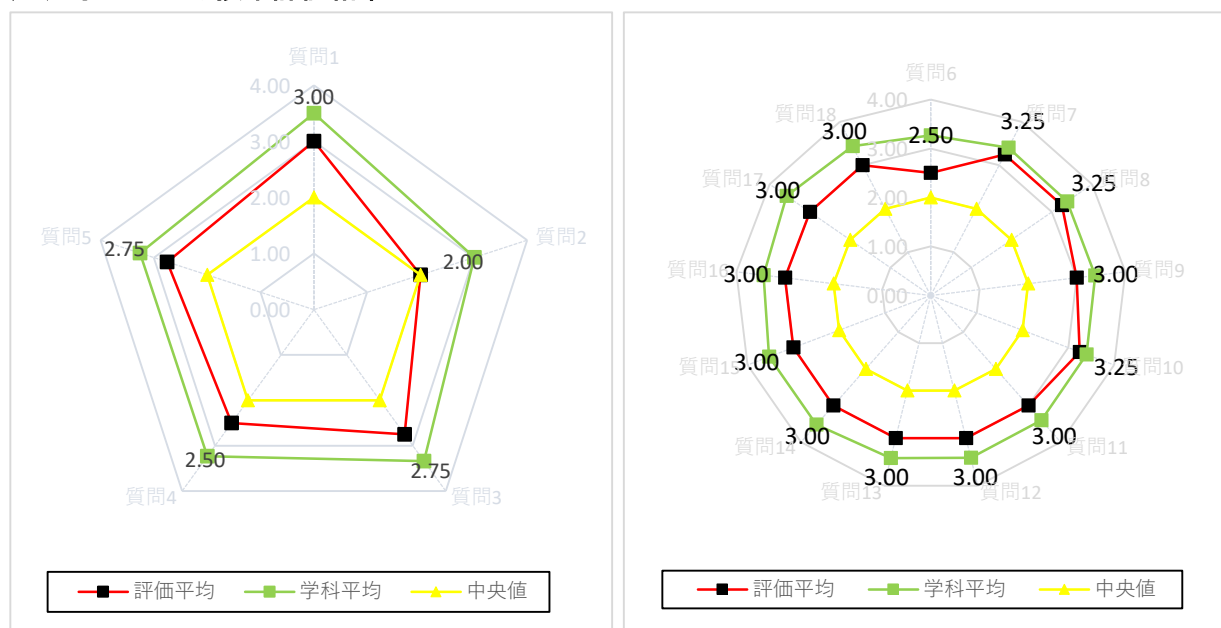
おおむね、どの項目も学科平均得点を上回っていた。
質問1「授業の欠席」と質問2「シラバスの活用」が平均程度になっている。

(3) 次年度に向けての取り組み

1回目の授業時に、欠席のリスクについて教職としての意味を考えてもらうように導入を行う。
また、シラバスで次週の確認と予習を図るように指導を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		相談援助	63名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

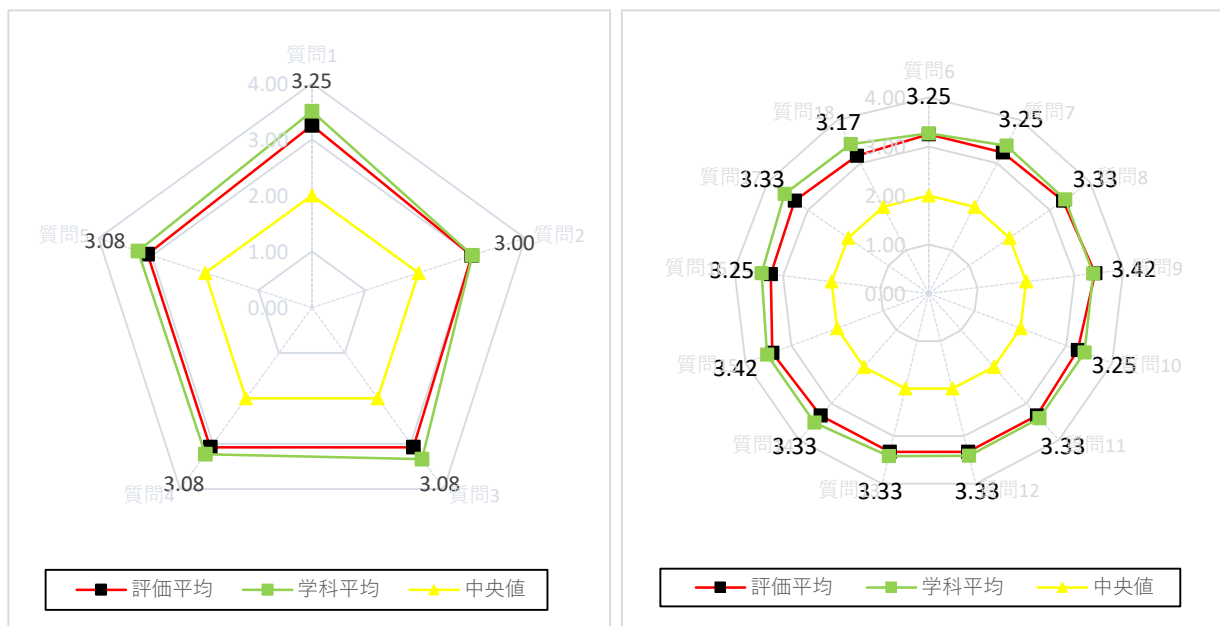
受講生63人中4人しか評価をしておらず、全体的な評価とはいえない状況であった。しかしながら、学科平均と比べても全体的に低い数値であった。詳細にみていくと、特に質問2「シラバス（授業計画）を活用しましたか。」と質問6「シラバス（授業計画）について説明がありましたか。」の項目において数値がとて低くなっていることがわかった。しかしながら、本講義においては初回の講義時にシラバスに関する資料の配布とともにパワーポイントを使用して一項目ずつ丁寧な説明を行っている。実際に昨年度の授業評価アンケートでは同様の方法で実施し、特に高い数値を表していた。また、他学科の同講義の評価は高い数値となっていたため、原因の把握とともに今後検討する必要がある。

(3) 次年度に向けての取り組み

本講義は学期途中での終了となるため、授業評価アンケートの時期には入力の依頼を直接行うことができない。そのため、今後は専任の教職員に依頼し入力を勧めていくこととする。また、授業における出席率を向上させるための取り組みを行っていく。さらに、グループ学習の積極的導入を図り、導入-展開-発展といった段階的な学びを自己で構築できるような働きかけを行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		医療心理学	32名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

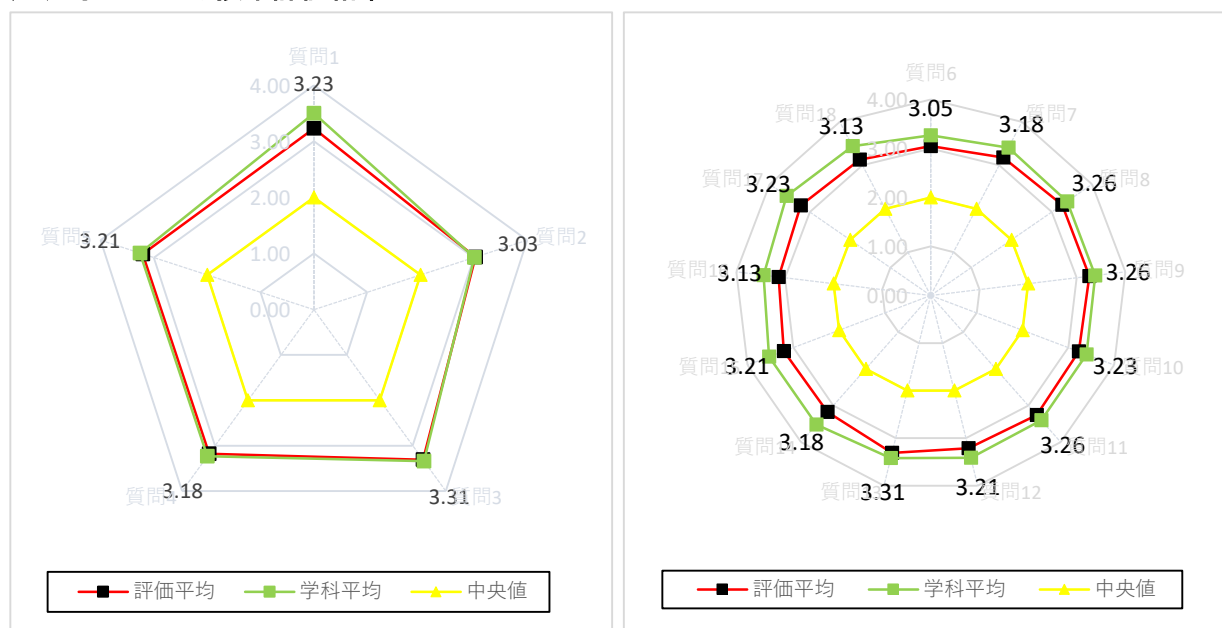
1限目の授業なので、書かせることを取り入れ、眠らないように工夫をしたが、眠る学生は眠っていました。裏返せば、そうした学生には興味を持てなかった授業だったのかもしれませんが。ただ、医療において臨床心理学がいかに意味ある働きをするのかについては、学生たちに興味を持ってもらえたと考えます。

(3) 次年度に向けての取り組み

active learningを取り入れ、医療における臨床心理学の重要性を考えられるようにしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		知的障害者の心理・生理・病理	45名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

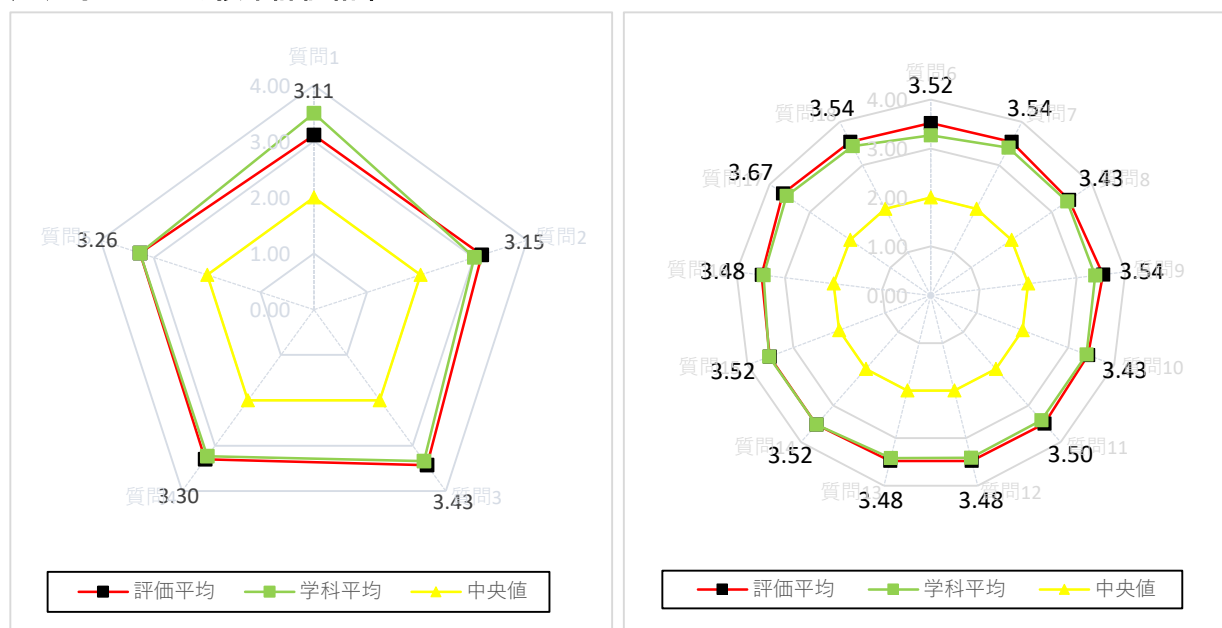
回答率 (39/45、86%)、自由記述：声が聞き取りにくいことがあった。配布資料がわかりやすかった。
 本授業は、知的障害心理に関する基礎知識や、心理機能と発達支援、知的障害児(者)に対する心理検査やアセスメントについて理解することを目的とした。
 質問6～18の評価については、3.05～3.31の範囲であり、学科平均と同等の評価であった。
 自由記述については、オムニバス形式の授業のため、評価についての分析には課題がある。(心理担当)

(3) 次年度に向けての取り組み

本授業は、専門的な用語や、考察が求められることが多い授業内容である。学生同士の意見交換なども取り入れながら、主体的に学ぶことができるような環境の設定に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		家庭支援論	96名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

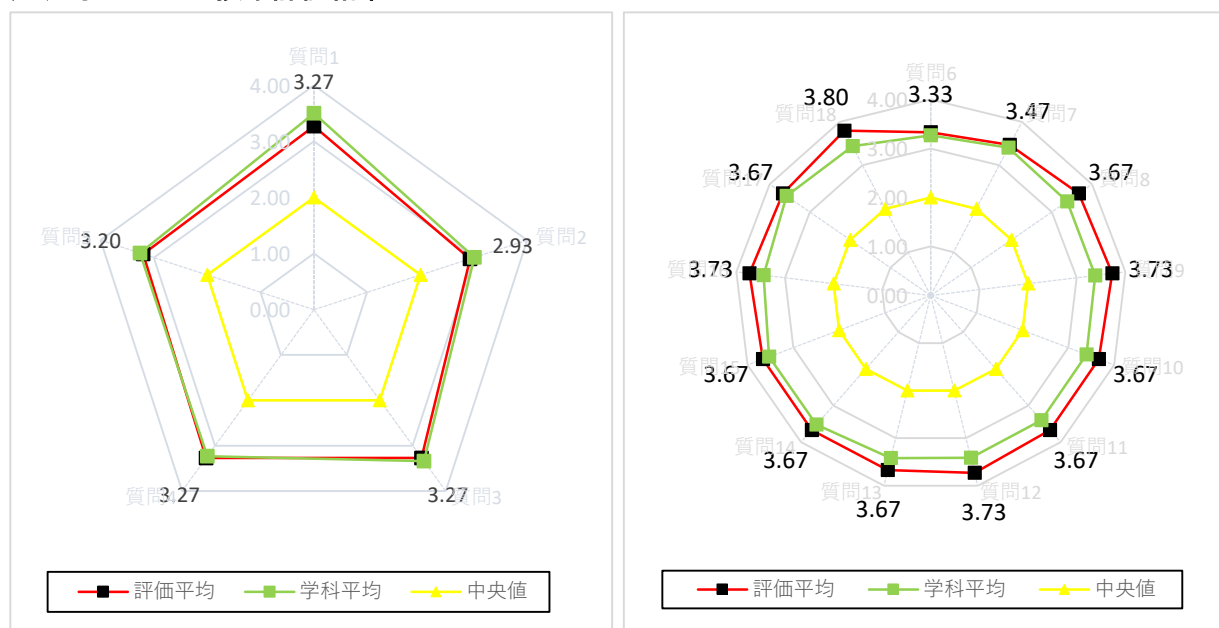
回答率は、95名中46名で48.4%で約半数の学生の回答となった。本授業への授業評価を行った学生は、質問1を除く全項目学科平均を上回り総合評価は3.45で高評価であった。授業の目標設定、分かりやすい工夫、教員の熱意を感じつつ、学びを深めていった学生が多かったようだ

(3) 次年度に向けての取り組み

来年度も学生のモチベーションがあがり、学びが深まる授業内容の実施に努めていきたい。回答率をアップする手立てを検討することも大きな課題と言える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		聴覚障害者の言語障害指導	29名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

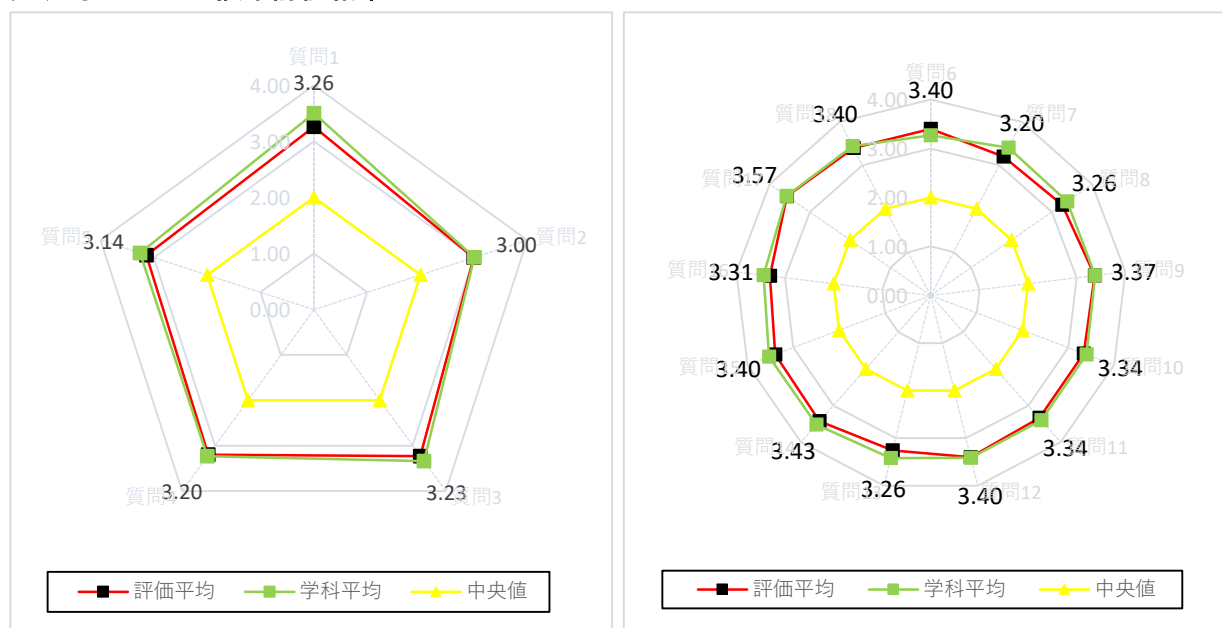
実際に聴覚障害がある人との触れ合いの機会が少ない受講者のみなさんに、どうやって、想像力を働かせながら、「きこえない・きこえにくい」状態を理解しても会うことができるか工夫が必要と考え、聴覚障害に関する映像や、「絵本」など具体的な教材を活用する方法を試みました。手ごたえはありましたが、知識と実践をつなげていくためには、もう少し工夫が必要だったと思います。シラバスとの関連をもっとはっきりと持たせる必要があったと思います。

(3) 次年度に向けての取り組み

なぜ、なんのために「絵本」や「1枚絵」をもちいるとよいのか、聴覚活用およびコミュニケーションの発達の両面から実感できるような準備をしてもらえるように課題をつくっていこうと思います。学生さんが、自ら気づき、クラスの中に「きこえない・きこえにくい」子どもたちがいた場合に、彼らが普通に学習活動に参加できているかどうか、制限や制約はなにかに気づき、どうすれば、みんなといっしょに学習活動に参加できるか、なにが必要かを発信していく力を発揮してくれることを望んでいるという、こちらの思いをもっと積極的に伝えていくようにします。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		乳児保育	85名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本授業は、保育現場の保育士と共にオムニバスで進める授業である。学生の授業評価については、すべての項目について一定以上の評価を得ている。

概論的な内容は櫻井が行い、具体的な園での子どもの姿や保育者の役割、遊びの実際等については保育士が行うというように分担をしている。

学生については、ほとんどが家庭や地域において幼い子どもと接する機会がない状態で入学しているため、既存の視聴覚教材や実際に保育所で撮影された映像をもとに進めているが、学生がよりイメージしやすい内容となっており、そのことがこのような評価の理由であると考えられる。

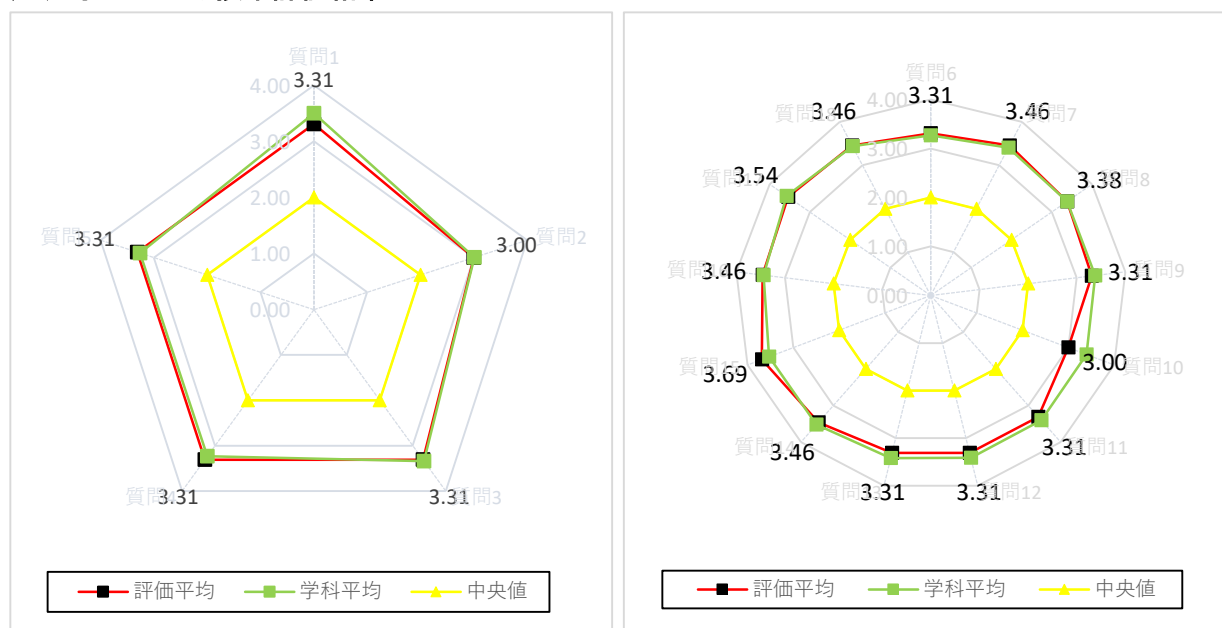
(3) 次年度に向けての取り組み

平成30年4月より、保育現場においては改訂された新法令のもと保育が展開されている。その中では、「乳児保育」に関するねらい及び内容が強調され示されている。今後、保育現場においても、なお一層「乳児保育」が重視されるであろう。平成31年度入学生からは「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」という形でさらに内容が深められる予定である。

今後行われる保育実習の際、保育現場において非常に役に立つ授業であるため、可能な限り現場を想定した授業ができるよう工夫し行う必要がある。そのためには、オムニバスで進める中で、それぞれの立場でやるべきことを確認し合い、これまで以上にお互いの教員が連携し、学生にとって有益で効果的な授業が構成できるよう努力していきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども心理カウンセリング		学校ソーシャルワーク	32名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

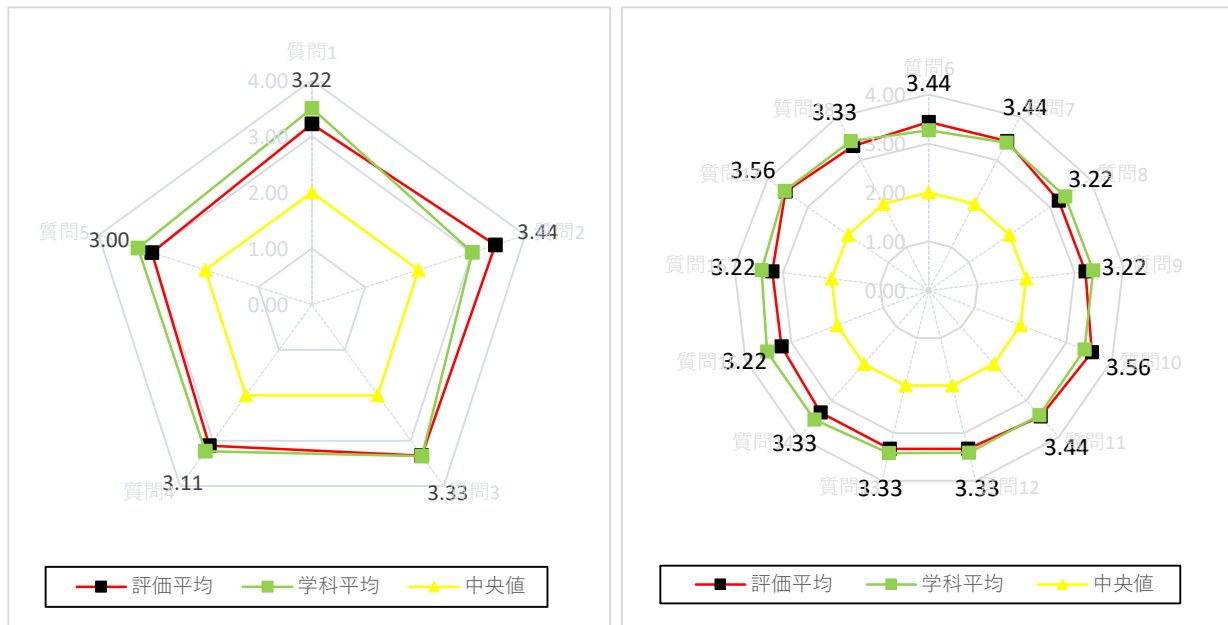
概ね学科平均と変わらない数値の3.5の評価を得ているが、「視聴覚教材や板書の用い方」についてやや評価が低い。パワーポイントを活用し、資料としてスライドのコピーを配布しているが、これについては学生より好評だったように聞いている。しかし、演習を多く取り入れているが、講義中にワークシートの活用の仕方での質問がみられた。また個人作業から小集団作業への展開では同じワークシートを用いており、活用に混乱をきたすなどのこともあったことが推測される。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・ワークシート自体に関する工夫として、ワークシートに活用方法の補足を記入しておく。
- ・講義の展開としても演習に入る前にワークシートの活用に関する説明の聞き漏らし等がないように、学生の注目を集めてから説明を行うようより配慮する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		障害児保育	80名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

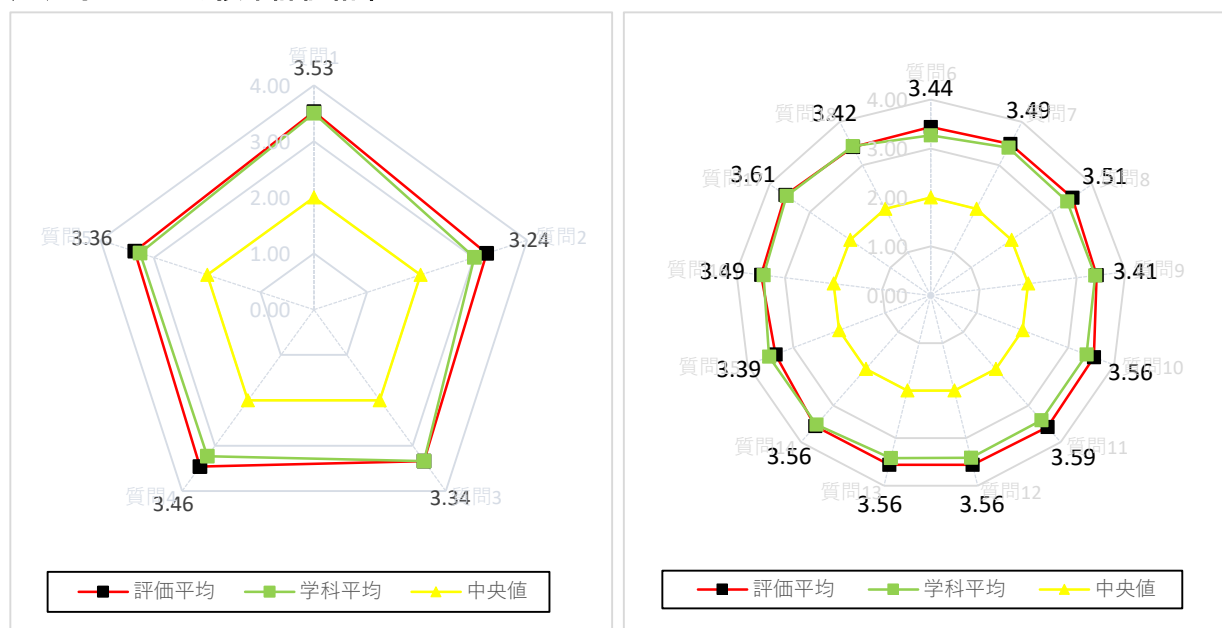
回答した受講生は80名中9名で、回答率が11.2%であることは大問題である。
 本結果は受講生の1割の回答ではあるが分析すると総合自己評価は3.33で比較的高い評価ではあった。学科平均をやや下回ったものとして、興味を持てる工夫、公平性や、双方向のやりとりであったことから、授業の組み立て方や学生とのやりとりの見直しが必要であるとする。

(3) 次年度に向けての取り組み

まず、回答率を上げるための取り組みを検討することが急務である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語	103名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本科目は、保育士資格、及び幼稚園・小学校教諭免許取得のための必修科目である。そのため、大人数の受講となり、学生個々の学力やニーズに合った授業づくりが難しいと感じてきた。そこで、本年度は開講に当たって、学生一人一人の思いや考え（国語に対して抱いているイメージ、自分が今後身に付けたい国語力など）をアンケート形式で把握することからスタートした。

そしてそれを全学生に知らせることによって、互いの課題意識や授業に対する見通しをもたせたり、さらには、学生から出された課題を授業の中で取り入れたりしながら、授業がアクティブに鳴るように努めてきた。また、授業終了時には毎回、学習の振り返りを短作文の形で書かせてきた。

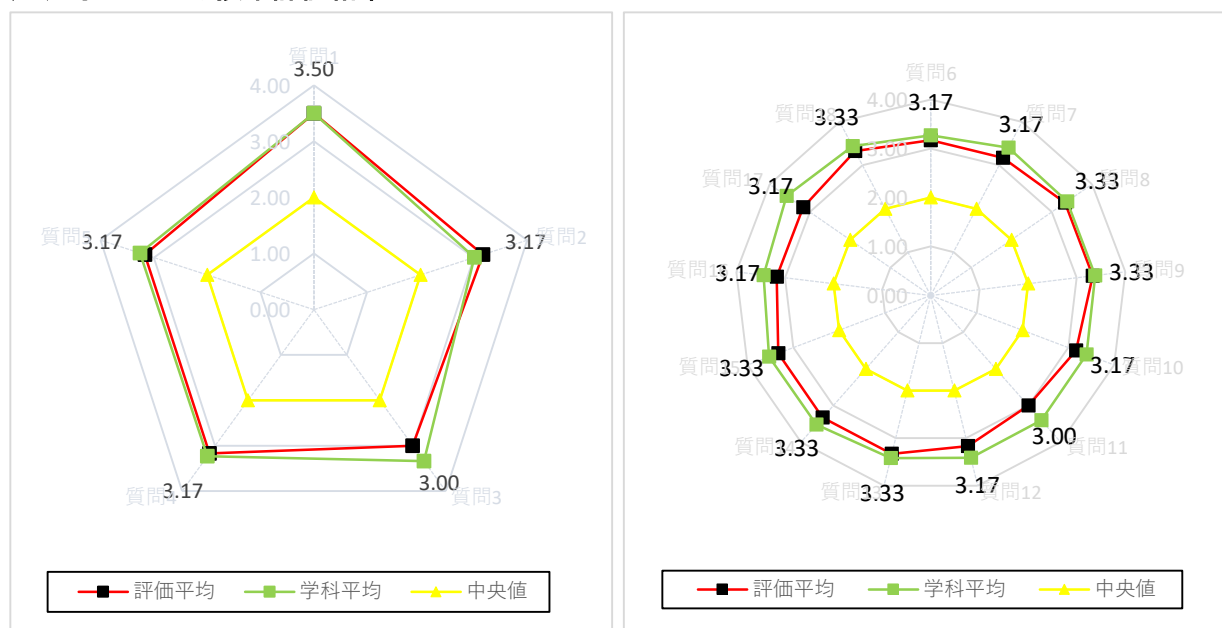
こうした取り組みが定着化し、他の言語関係の科目（保育内容指導法「言葉」・文学と言語・国語科指導法・国語科演習）とのつながりを意識して学習を進める学生が増えてきていることを実感している今日この頃である。

(3) 次年度に向けての取り組み

全体として成果は上がっているものの、個別に見ていけば、まだ基礎学力が十分に身に付いていない学生も見受けられる。毎年、IRTテストや習熟度テストなどを実施しているので、次年度はそれらの結果をしっかりと分析し具体的な対策を練っていく。そのために、一人一人の学生に対しては、自分自身が付けるべき具体的な国語力を認識させること。全体に対しては、落ち込んでいる箇所や領域を授業で取り上げながら国語力の定着を図っていくこと。この二つに力点を置いた指導に努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		社会福祉学	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

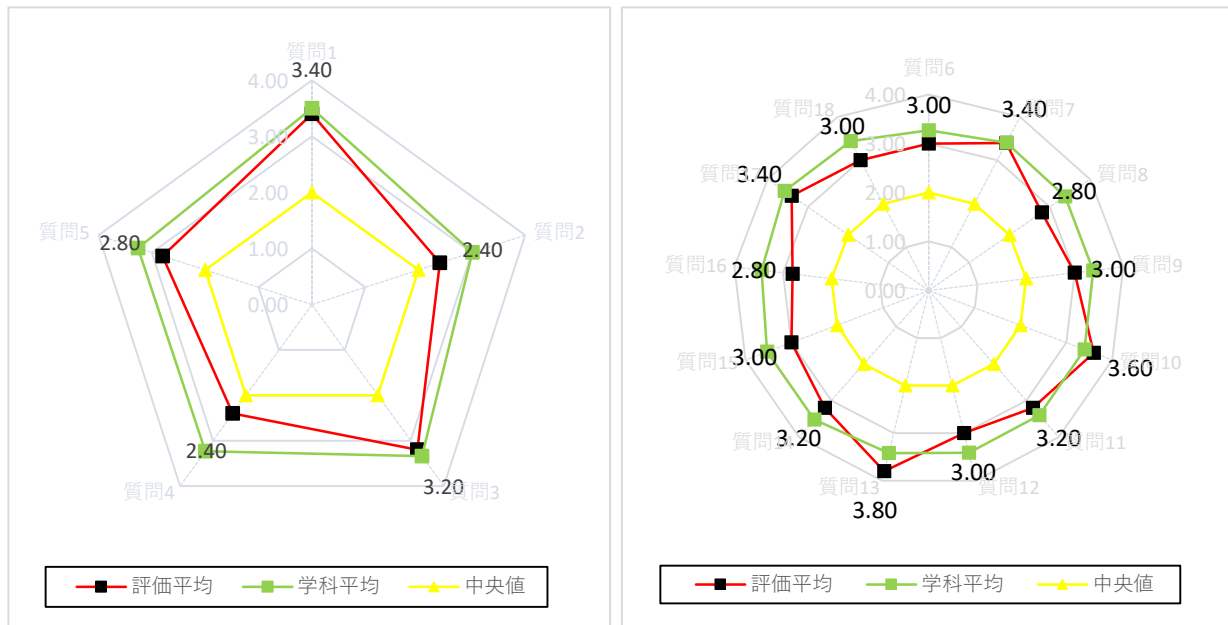
授業アンケート結果の分析と評価として、学科全体との比較においても平均的な数値となっていた。しかしながら詳細にみていくと、質問3「授業中に居眠り・私語等をせず真剣に取り組みましたか。」、質問1「教科書・配布資料等は役に立ちましたか。」、質問17「教員は熱心に授業に取り組んでいましたか。」の項目において数値が若干、低くなっていることがわかった。また、受講生10人中6人しか評価しておらず、全体の状況を把握するには少ない回答数であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

比較的评价が低かった質問項目は授業の計画と準備が影響するものが中心となっているため、全体的なシラバスを見直し、受講ニーズに合わせたテキストの再選定とともにアクティブラーニング形式の実践をさらに進めていくこととする。また、本講義は選択授業であるため、将来のビジョンにつながる学習内容をより多く取り入れていくことを心がけていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育相談支援	64名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率は、64名中5名の回答で7.8%であることが大問題である。

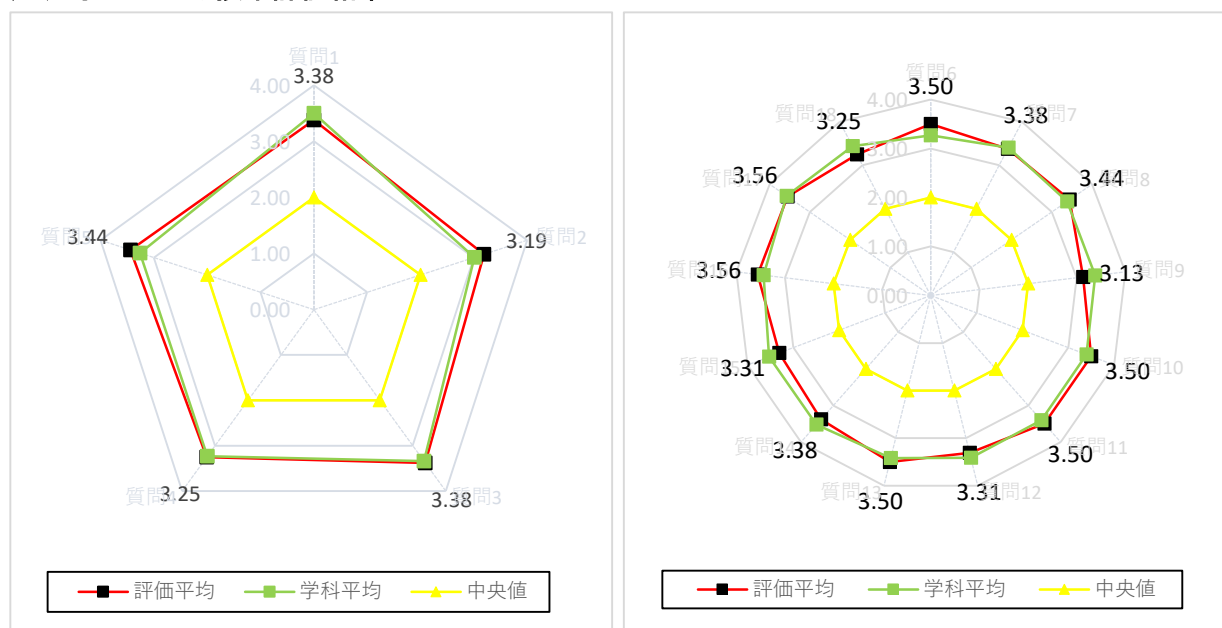
分析評価に値しない数値であることをふまえた上で、本授業への授業評価を行った学生について、総合評価は3.08であり高いものとはいえない。授業への興味関心、分かりやすさ、双方向のやりとりを取り入れることなど、次年度は工夫していきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

まず回答率の向上を図ることが必要である。次年度は回答率80%を目指す。授業終了時に行う授業評価の意味、意義をより丁寧に伝え、学生の学びのモチベーションを高めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		算数	77名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

シラバスに示した内容に沿って、授業を進めたテキストの内容は、現行の学習指導要領、資料としての学習指導要領は平成32年度からスタートするもの、と若干の内容の食い違いはあったが、小学校算数で指導する内容の数学的背景については、十分に解説ができたと感じている。

テキストの各章末に、教員採用試験の過去問を例として、算数・数が苦に関する問題が掲載され、毎回の授業での課題とした。各都道府県の高校入試問題レベルではあったが、苦勞する学生も多く、授業中に適宜解説を加えた。1年生であることから、高校時代の数学を覚えている期待と、卒業後の進路に直結する教員採用試験過去問と言う、やや先の目標による意識の薄さの影響もあったものと思われる。

学生の「数学」に対する学力を考慮して、底上げを図りながらも、小学校算数を授業していくにふさわしい数学的思考力、判断力や計算技能を身に付けることができるように指導していくことが必要である。

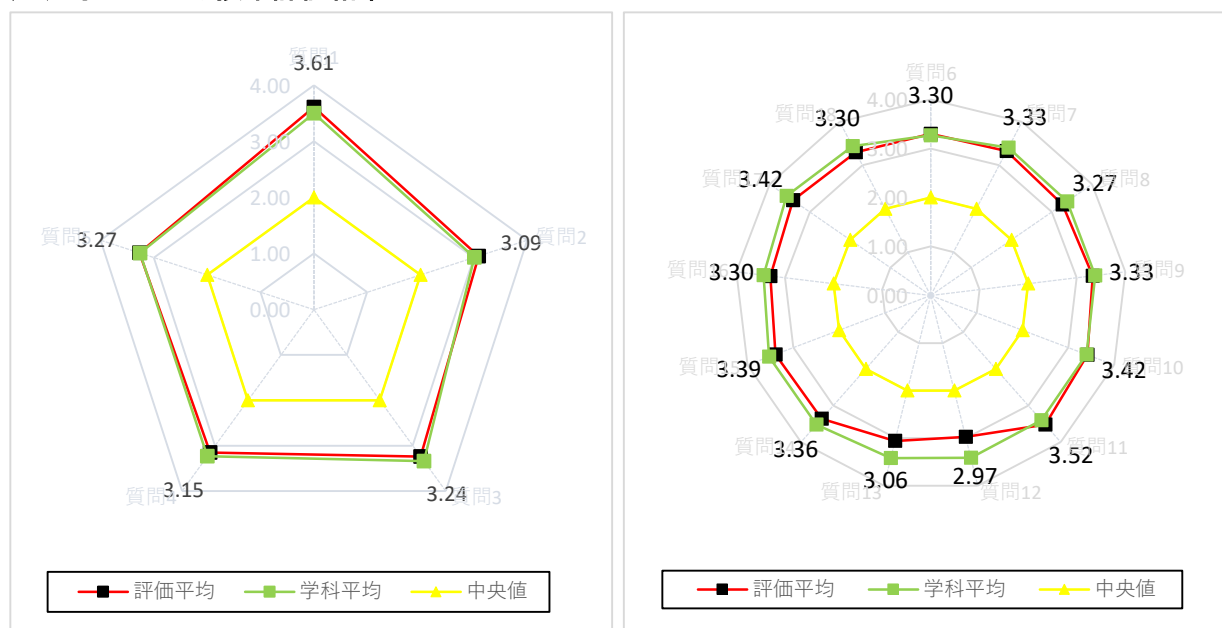
(3) 次年度に向けての取り組み

何より、「大学生としてふさわしい」算数・数学の能力を身に付けさせることを目標としたい。

数学的素養なくして、学習指導要領の内容やその背景を理解すること、ましてや小学校で「算数」の授業をしていくことは困難である。学生自身がそのことを意識して、積極的に授業に参加できるような「予習課題」や「復習課題」について、工夫していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会	84名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

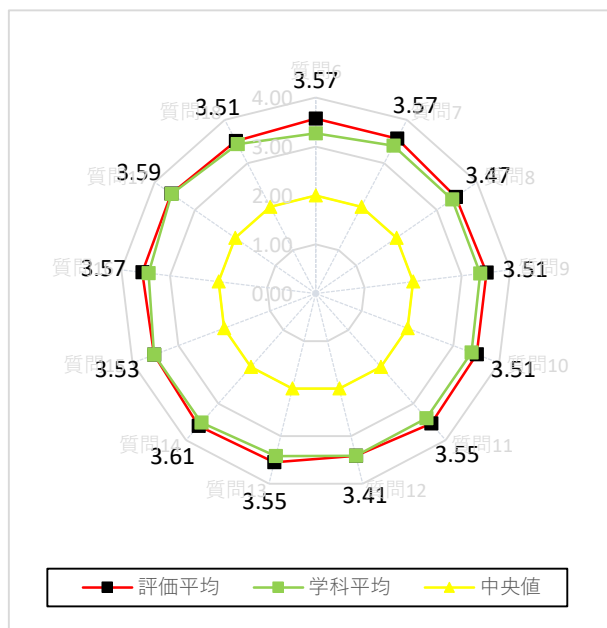
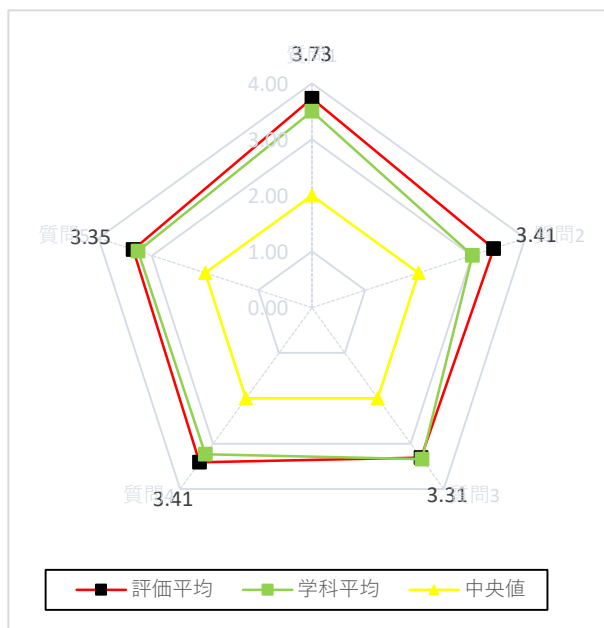
質問11「教科書・配布資料等は役に立ちましたか。」が、学科平均を上回った。毎年、刷新し工夫をしていることより、よい評価を得て安堵した。質問12「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか。」と質問13「授業の進む速さは適切でしたか。」については、毎年、学科平均を下回るので自身の課題である。但し、質問13に関しては、大教室で急けている学生ほど授業についてこれない傾向もみられる。真面目な学生からは適正な速さとの声もある。次年度以降、注視していきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

上記に記した点を中心に改善していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		生活	89名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

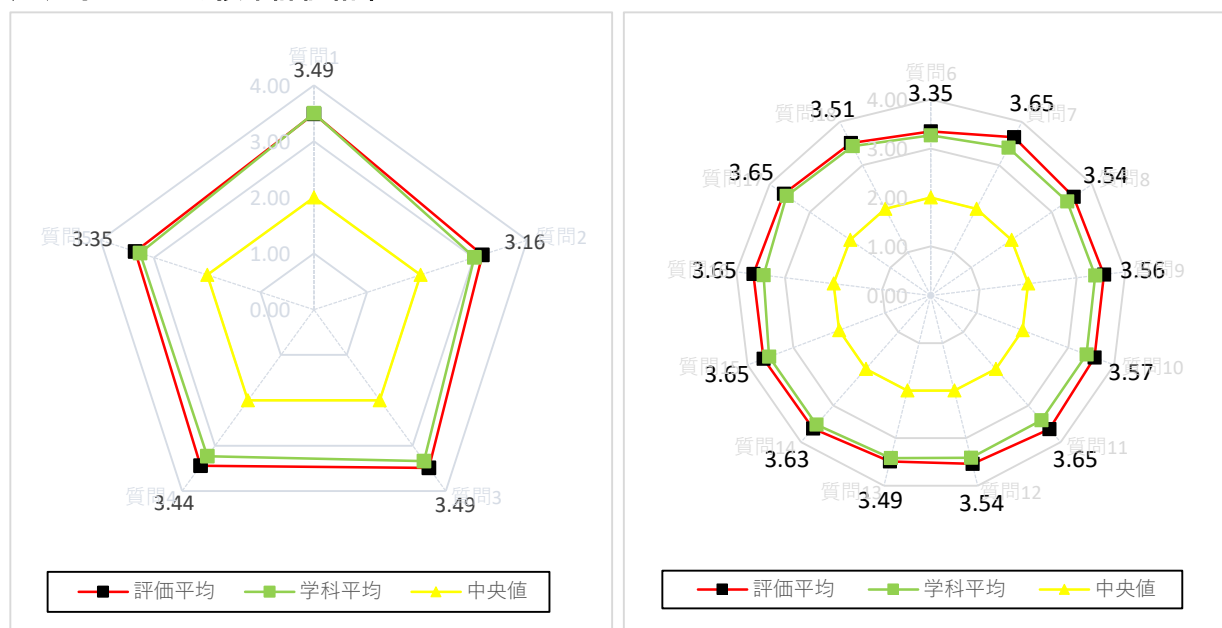
各項目、ほぼ学科平均を上回っている。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も、本年度と同程度以上の評価を得られるように心がけたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽	109名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

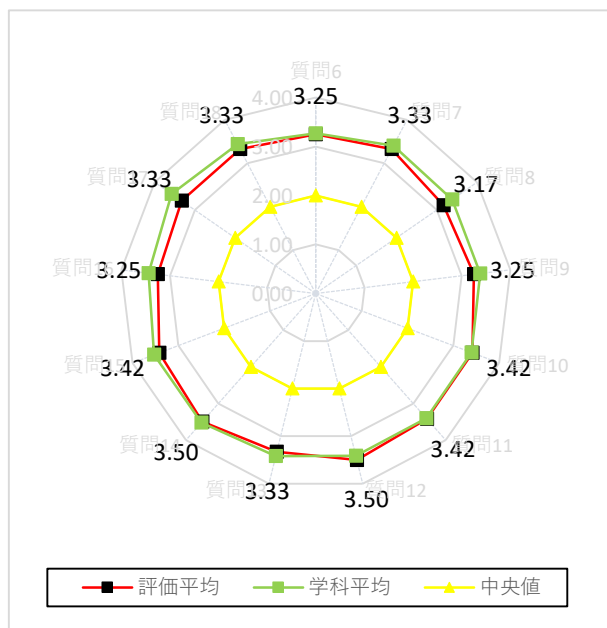
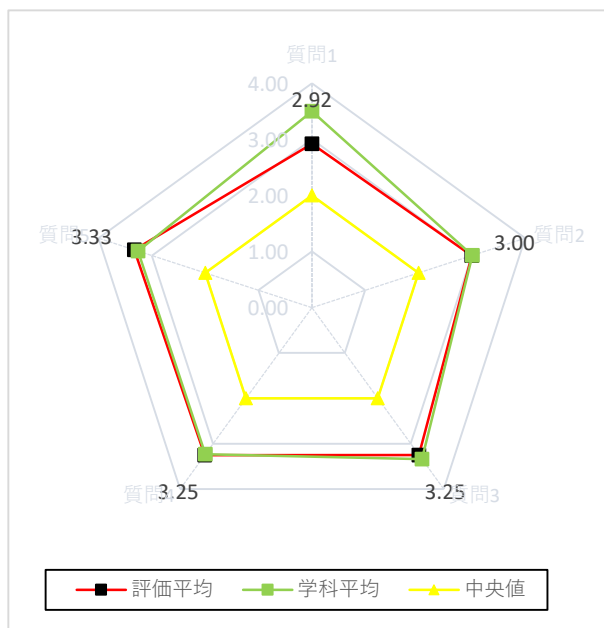
学生自身の自己評価及び授業者への穂評価のいずれも、極端に低くなっている項目は見当たらない。例年、この授業は、子ども学科の学生に加え、小学校教員免許状の取得を目指す他学科の学生も履修している。そのため、授業開始段階で、音楽に関する他学科の学生の現状を把握する必要がある。彼らに対しても、子ども学科の学生同様、細やかな指導を行っていく必要がある。音楽に対して苦手意識を持っている学生にとっては、難解な内容も取り扱うことになるため、最後の2回は学習内容全体を復習するための期間を設け、復帰試験に備えさせた。このことが、授業の総合評価に表れていると思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生自身の自己評価及び授業者への穂評価のいずれも、極端に低くなっている項目は見当たらない。次年度以降、この上端を保ちながら、各項目の数値を上げていきたい。この授業は1年次前期に開講されていることから、個々の学生の質問に丁寧に応えていくことによって、意欲的に学習に取り組めるよう導いていきたいと考えている。そのためには、授業時間中に質問しやすい雰囲気を用意することが求められよう。この点についても、細やかな配慮を行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		理科	34名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

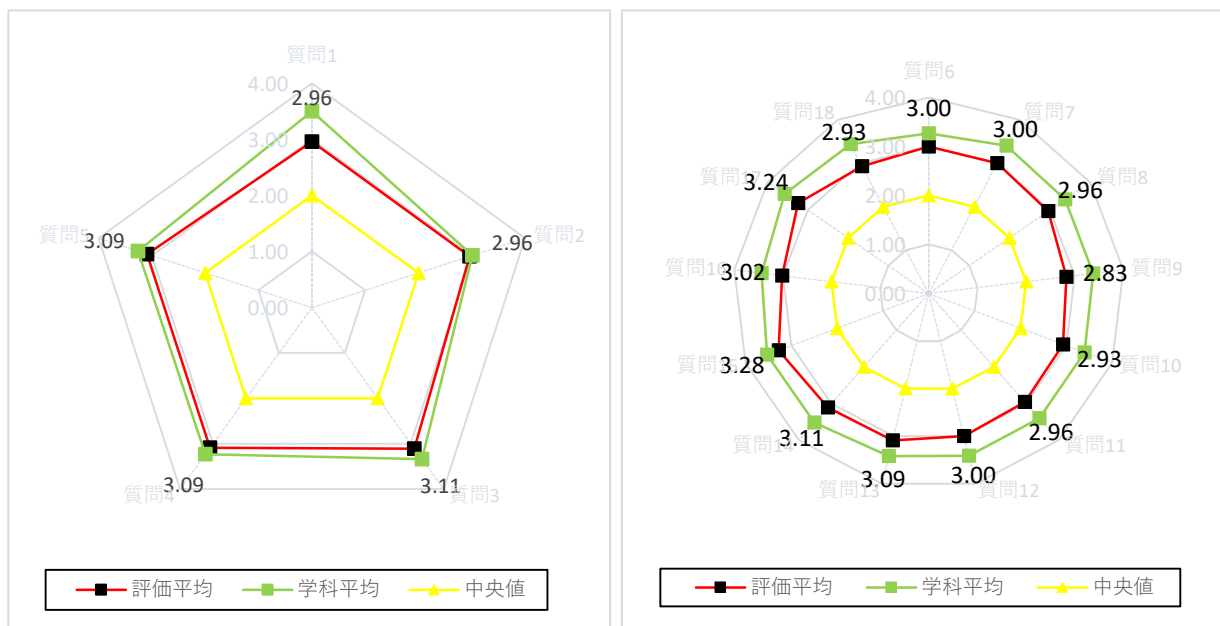
学科平均とほぼ同じ評価であったと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

理科に興味を持ってない、苦手である学生が見られるので、それらの学生についても興味をもてるような講義を行う予定である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		臨床心理学 I	51名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回収率は90%であった。学科平均より全体的に低い、具体的にどう感じているのかがよくわからなかった。

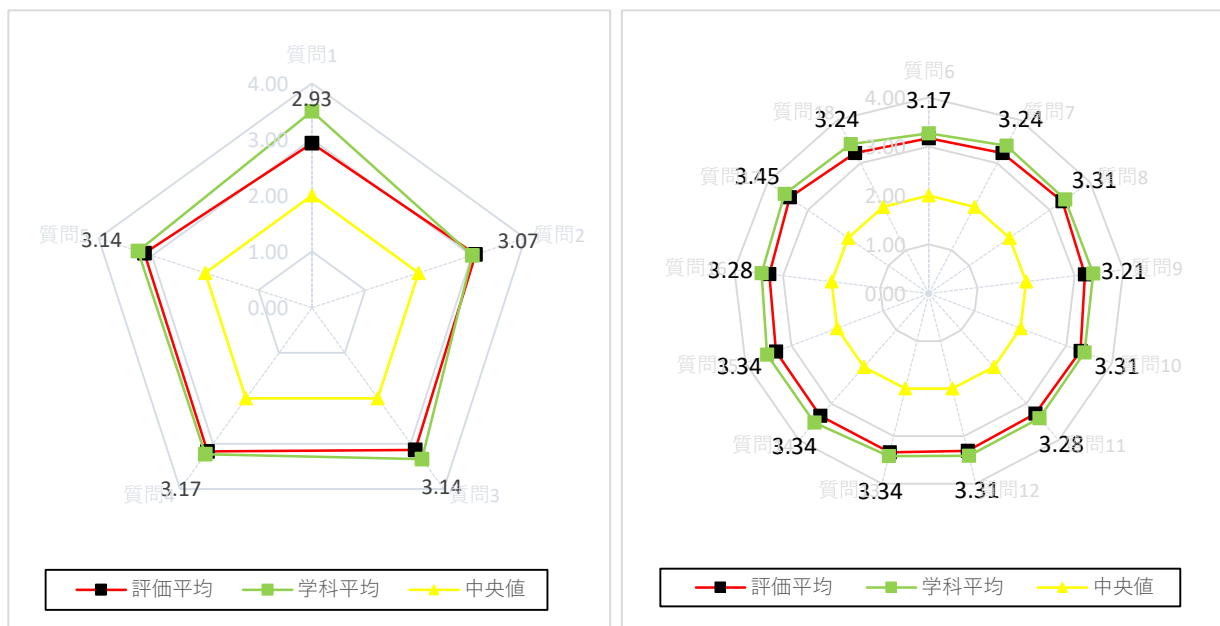
授業の進む速さは、早いのか、遅いのか、や、声の大きさは大きすぎるのか、小さすぎるのかなど、自由記述でも特記はなかったため、より具体的に記述をしてもらえると、さらに参考になると考えられた。

(3) 次年度に向けての取り組み

シラバスの説明などについてはさらに改善の余地があると思われるので、学生の意見を真摯に受け止め、丁寧な説明を心がけていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		臨床心理学Ⅱ	55名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

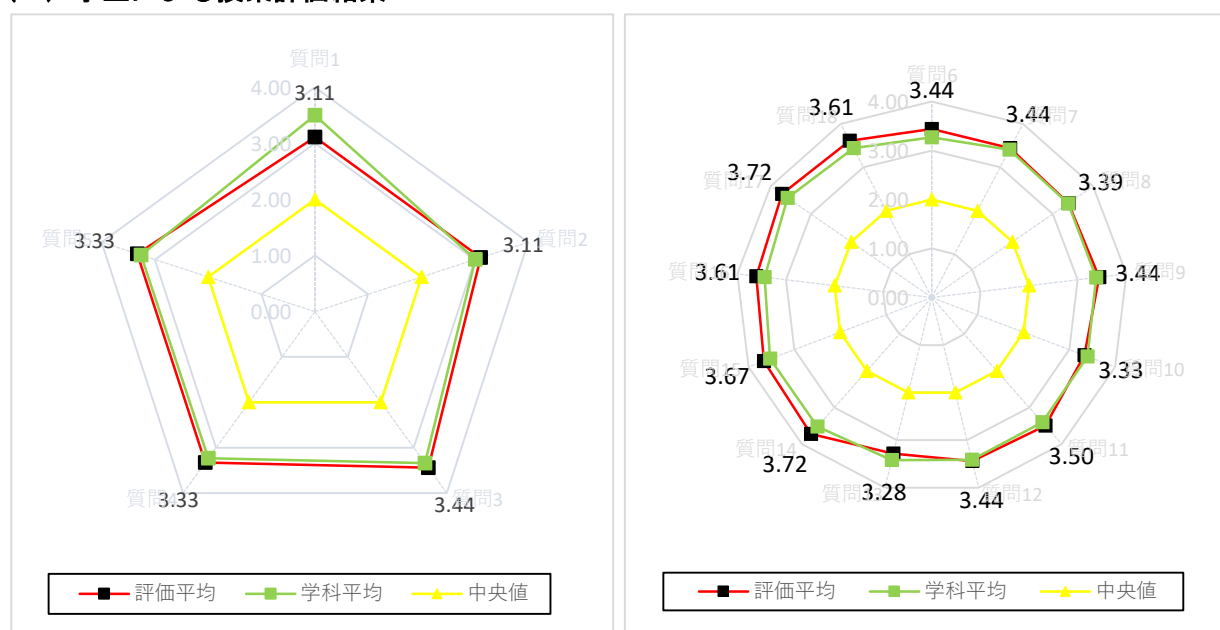
回収率54%。ほぼ学科平均と重なる。可もなく不可もなし、といったところか。
回収率から見て、比較的真面目な学生の評価が中心ではないかと考えられる。
それなりに真面目な学生から見れば、学科の平均的な授業として受け取られているのではないかと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

来年度も本年度同様、学生の声を真摯に受け止め、学生の期待に応えられるよう丁寧な授業を重ねていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		人格心理学	33名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

多くの項目で学科平均を上回る結果となった。講義では、各回授業後に感想や疑問点を求め、翌回に疑問点に答えるなどすることで、疑問を疑問のまま持ち越さないように配慮した。そのため、質問14や質問15の点数につながったと考える。ただ、自由記述において、質問への回答の時間が長いという評価も得たので、今後時間配分をより意識しながら進めていきたい。

各回や授業を終えての感想からは、「これまで他の授業で習ってきた事柄を“人格（パーソナリティ）”の視点から見直すことができ、さらに理解が深まった」という感想も得たので、講義の目的も達成できたと考える。配布資料は重要語句が分かりやすいよう工夫し、視聴覚教材の視聴やテーマに関係する質問紙を利用することで、自己理解とテーマ理解も深まることも狙った。視聴覚教材視聴の際の電灯の使用の仕方などについての意見もあったので、次年度は見やすさにも配慮したい。今回、時間の関係で授業時間内に授業評価の時間を設けることが出来なかったため、回答率が高くない結果となったことが反省点として挙げられる。

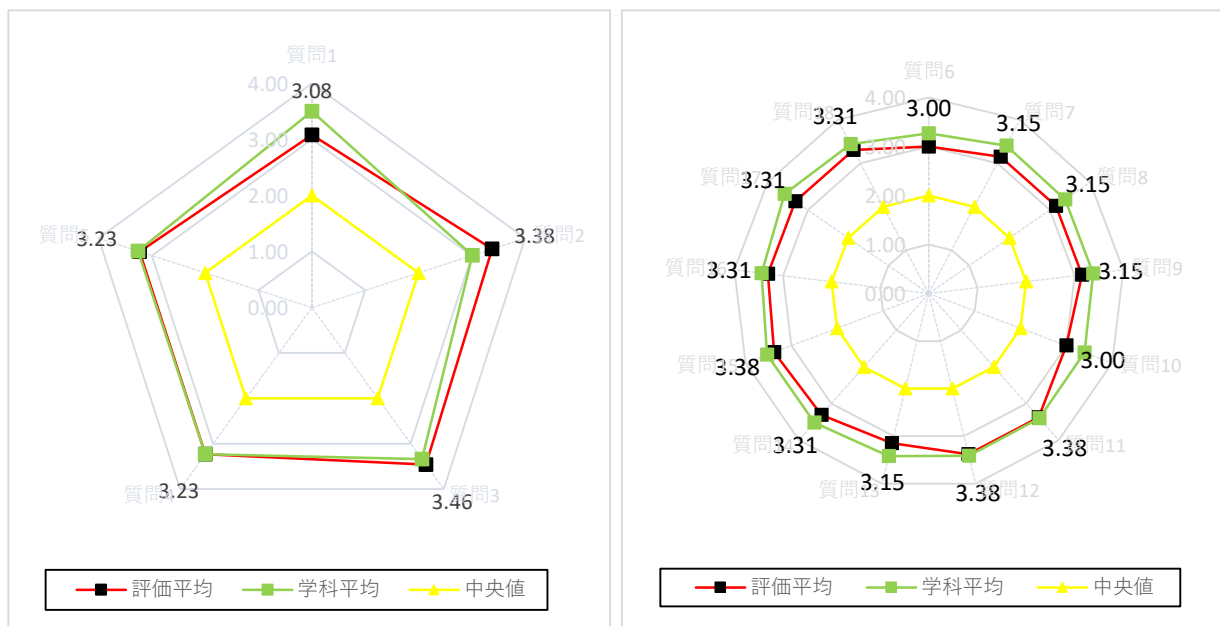
(3) 次年度に向けての取り組み

次年度においても、各回の感想・疑問を求める形式を踏襲し、授業内で生じた疑問等に適切に対応したい。ただし、自由記述において得られた疑問点の解消の時間についての意見にも配慮し、時間配分をより意識して疑問への回答などを行ってきたい。

また、引き続き視聴覚教材やICT活用を行い、テーマを視覚的に理解を深める取り組みを続けたい。時間の関係で授業時間内に授業評価の時間を設けることが出来なかったことが反省点として挙げられるため、次年度は講義時間内に授業評価を行う時間を設けることで回答率の上昇をねらいたい。その他、次年度については授業内で適宜グループワークやディスカッションの時間を増やすことで、学生がより主体的に授業に取り組むことができるよう改善を行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		精神分析学	16名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

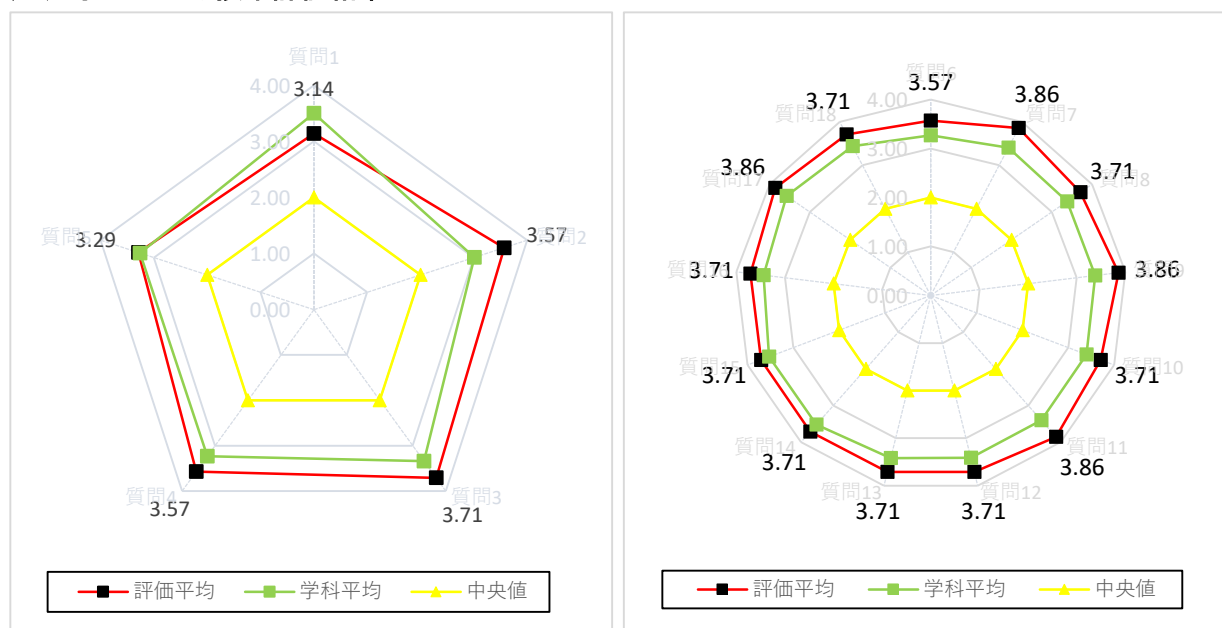
81%の回収率であった。学科平均とほぼ重なる結果であった。
 質問10について、学科平均よりも点数が低くなっているが、視聴覚機器は使用しない内容であり、また学生の発表中心の授業であったので、この評価に対して特に対応などは難しい。

(3) 次年度に向けての取り組み

学科平均とほぼ同様の評価ということで、他の授業と同じ程度には評価して頂いていると考えられる。
 学生の意見を真摯に受け止め、今後も丁寧な授業・説明を心がけていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育	61名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

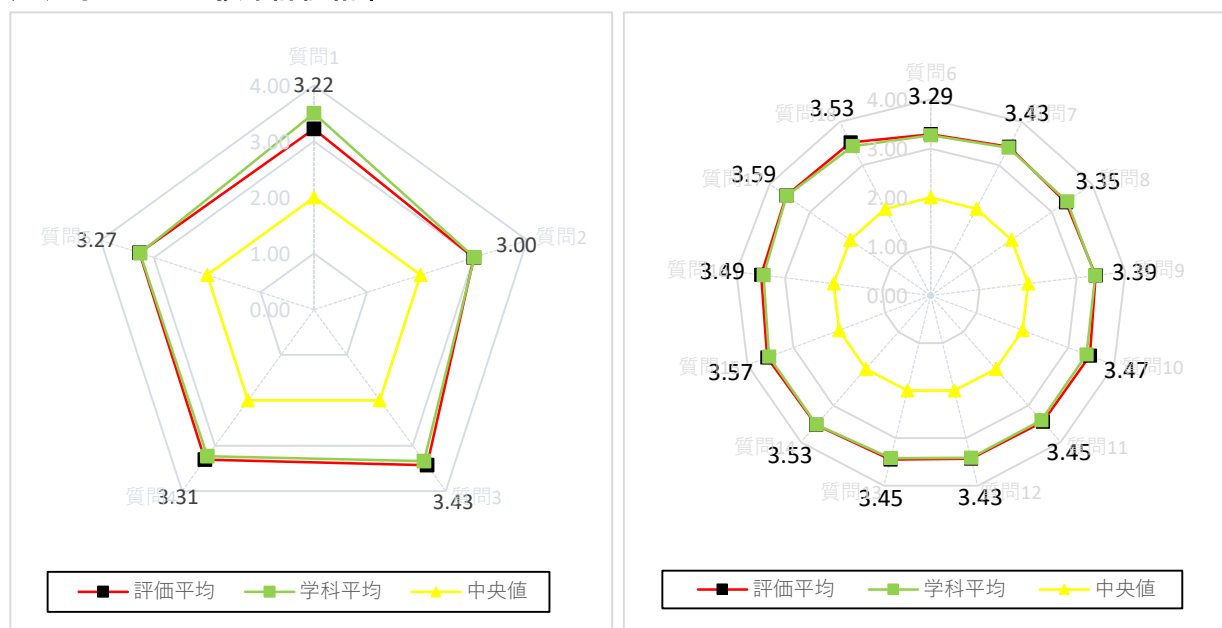
質問の項目 6 から 18 に関しては学科平均より高く、概ね高得点である。質問 6 のシラバスについては説明不足であったため、質問 7 の得点もやや低いものになっているといえる。欠席する学生が多い授業になっているところも留意したい。

(3) 次年度に向けての取り組み

シラバスの説明をより丁寧に行い、到達目標や授業を通して身に付けたい力等を意識させながら授業展開を行っていききたい。またそのことと関連して授業への出席を促していききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅱ（保育所）	56名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

保育実習Ⅱでは、保育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各保育所の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観や倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会として捉えることが必要とされる。

この評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価したものであるが、質問内容が実習そのものにはあまりそぐわない内容ではあるものの、概ね一定以上の評価になっている。

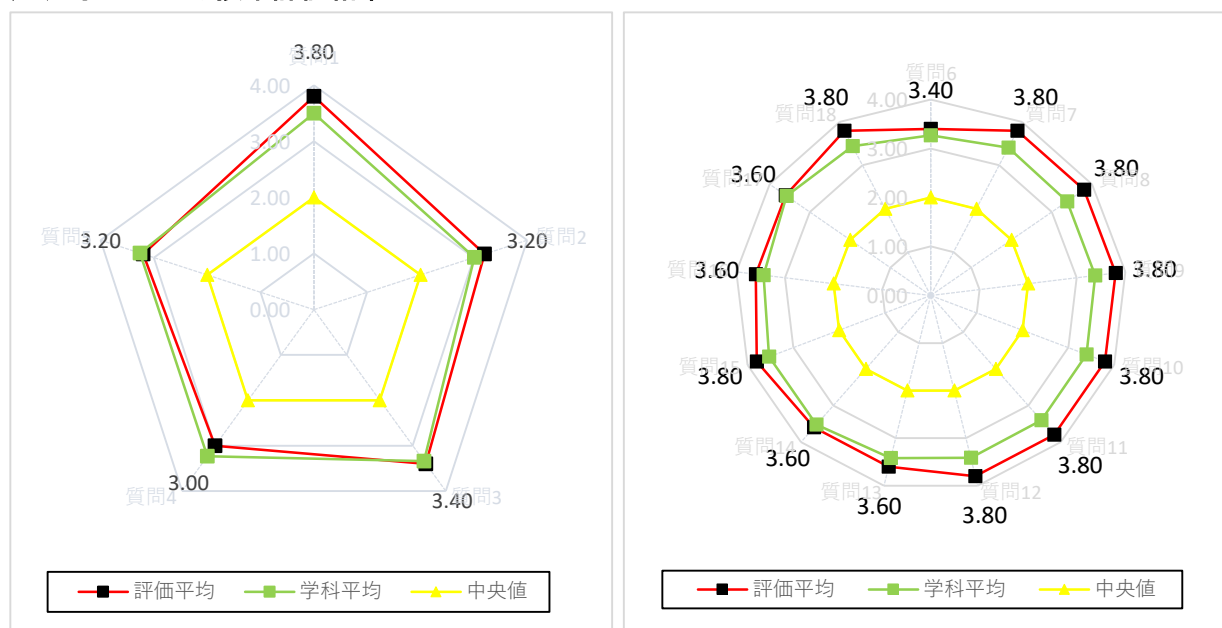
（３）次年度に向けての取り組み

保育実習Ⅱは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定める上でも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解や実践についても学習することが求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、次年度は実習園とも連携をさらに密にし、各自の保育観や倫理観を確立していけるよう支援していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅲ（施設）	11名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

保育実習Ⅲでは、保育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各施設の特性や一人ひとりの利用者の実態、保護者の状況、社会資源との連携等について理解し、利用者に対する適切な支援を行うことが目標になっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観・倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会として捉えることが必要とされる。

この授業評価は、一人ひとりの学生がそれぞれの実習施設でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価したものであるが、すべての項目について一定以上の高い評価をしており、学びが素晴らしいものであったことがうかがえる結果である。

仕上げの実習として、大学において振り返りを行い、課題や問題点を解決し、社会に出ていけるよう各自が努力していくこと、さらには教員がそれを支援していくことが必要であると考えられる。

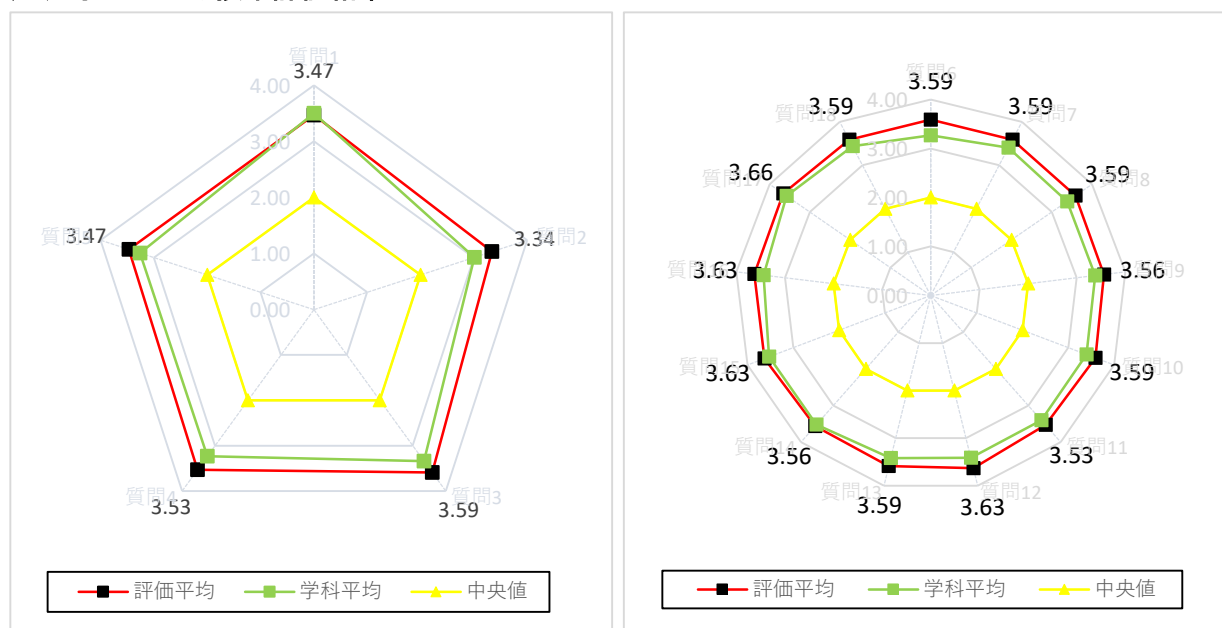
（３）次年度に向けての取り組み

保育実習Ⅲは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定める上でも非常に重要な実習であると言える。特に支援を必要とする利用者に対する個別支援や地域社会における支援の現状、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、次年度は実習施設とも連携をさらに密にし、各自の保育観や倫理観を確立していけるよう支援していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅰ（保育所・施設）	65名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

保育実習Ⅰでは、大学で習得した知識・技能を基礎にして、実際に保育の現場において実践を通してその役割や子どもの発達状況、1日の流れを把握することが目標となっている。また、専門職としての保育士の役割や職務内容について、実際に保育士の仕事内容を経験しながら理解することが必要とされる。

授業評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価をしたものであるが、すべての項目について一定以上の高い評価をしており、学びが素晴らしいものであったことがうかがえる結果である。

この体験的な学びを基盤にして、大学において振り返りを行い、課題や問題点を解決できるよう各自が努力していくこと、さらには教員がそれを支援していくことが必要であると考えられる。

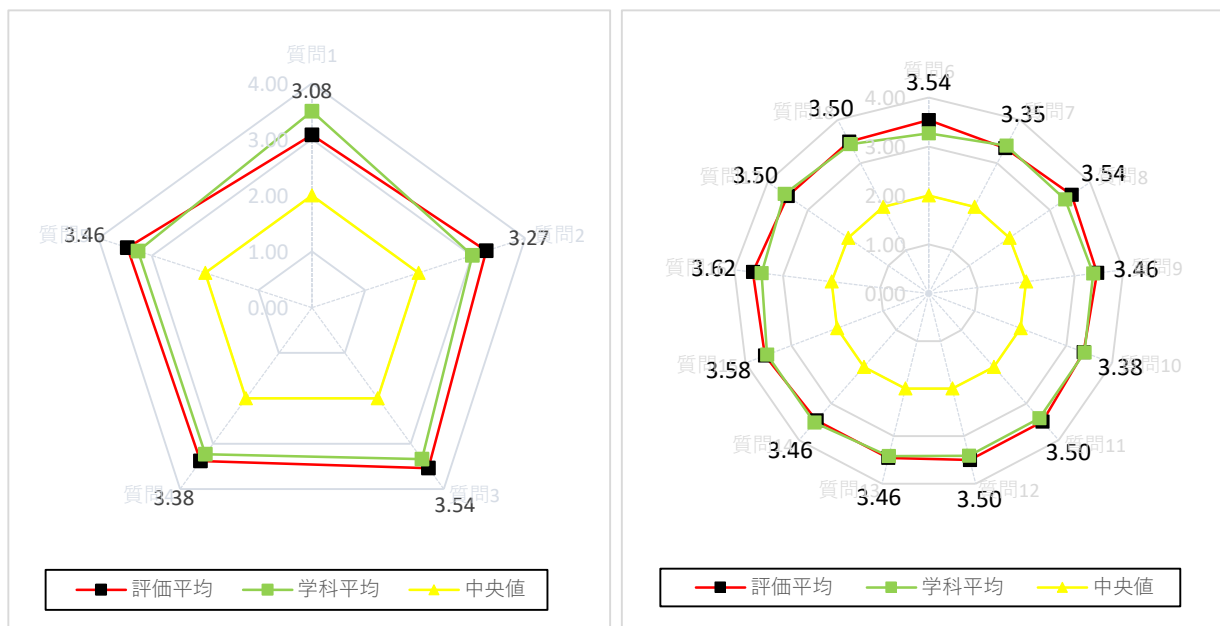
（３）次年度に向けての取り組み

保育実習Ⅰ（保育所・施設）は、学生にとって初めての外部実習である。今回は実習期間中、体調を崩した学生も数名おり、保育職にとって体調管理がいかに重要であるか、改めて指導する必要がある。また、マナーや明るさ、積極性、関わりさ等の人間性が問われる実習でもあり、このことについては、評価表を見ると少し不足している学生が散見される。保育者にとって、その部分が重要であることは言うまでもないことであるため、今一度確認し、個別指導を行う必要があると考える。

これらを踏まえ、次年度は実習園ともさらに連携を密にし、細かく配慮した実習指導を行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カウンセリング実践演習 I	45名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

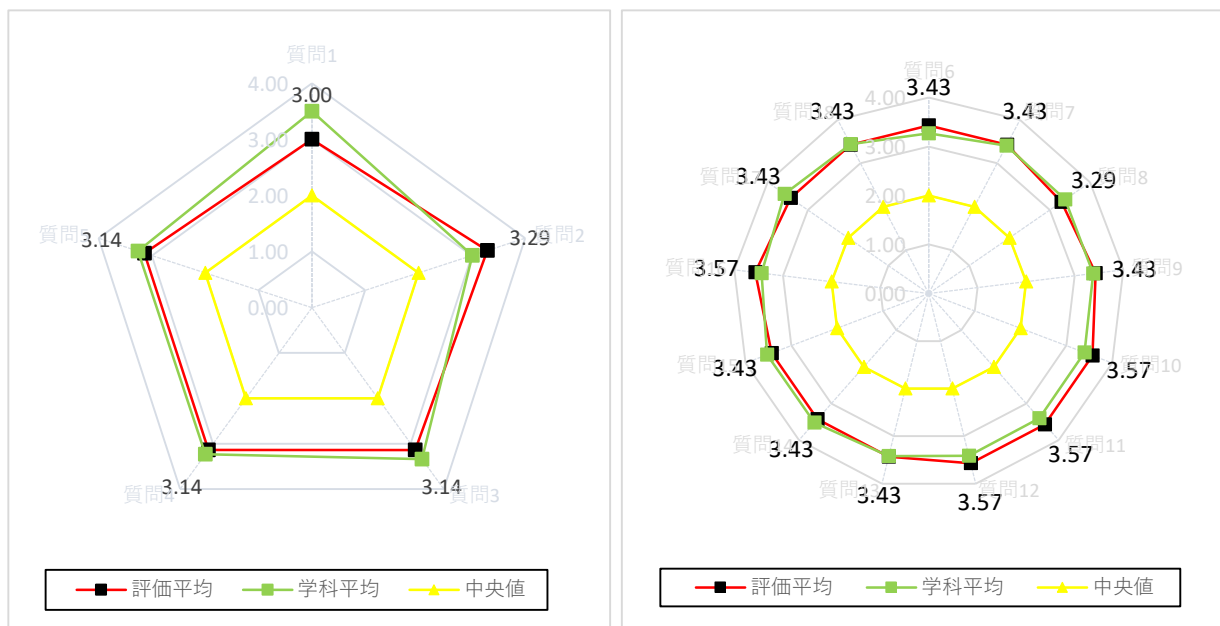
回答率が56% (25/45名) 名と低かったため、受講者の全体を表しているとはいえないが、表示された評価平均はよいものであった。

(3) 次年度に向けての取り組み

評価をもとに改善する点は見つからないが、見学実習日程の分散化を図るようにして、最後の実習報告を、学生が余裕をもって取り組めるようにしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カウンセリング実践演習Ⅱ	29名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

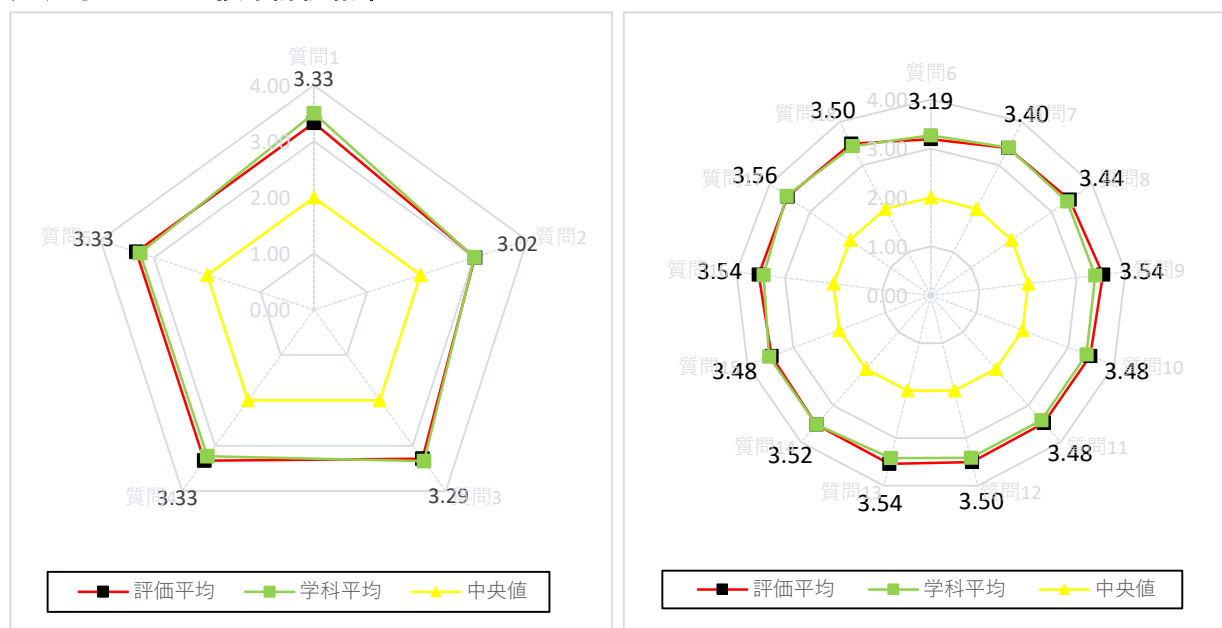
回答率は24%である。前期後期通年授業であり、また担当も内容も前期・後期で異なるため、学生にとっては評価がしづらかったのではないかと考えられる。
自由記述でも特記事項はなし。

(3) 次年度に向けての取り組み

学科平均よりも評価が高いか同等ということなので、来年度も学生の意見に真摯に耳を傾けながら、丁寧な授業・説明を行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅱ	111名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育実習Ⅱでは、保育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各保育所の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観・倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会として捉えることが必要とされる、一人ひとりの学生が、それぞれの実習園でさまざまなことを学び、その結果について自己評価をしたものであるが、すべての項目について学科平均をやや上回っており、学びのものがあつたことがうかがえる。授業計画については実習を念頭に丁寧に説明しており、問題はないように思われる。

仕上げの実習として、大学において振り返りを行い、課題や問題点を解決し、社会に出ていけるよう各自が努力していくこと、さらには教員がそれを支援していくことが必要であると考えられる。

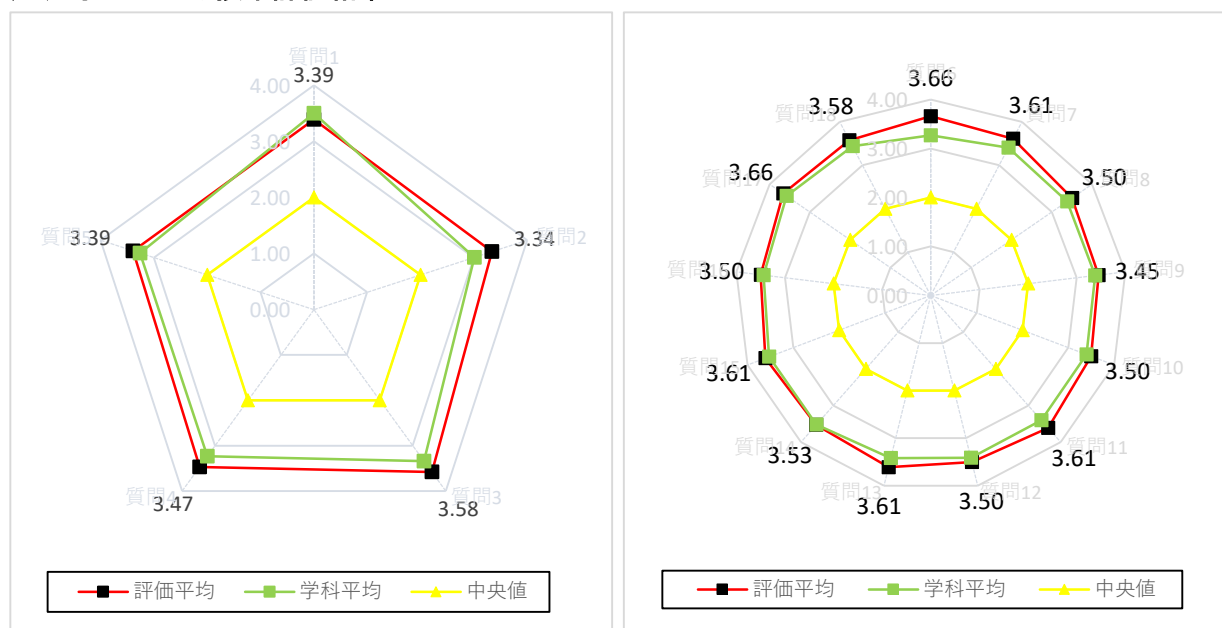
(3) 次年度に向けての取り組み

保育実習Ⅱは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定める上でも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。今回も実習の自己評価分析表を用い、実習を振り返ると、現場でどのような保育を目指したいかを明確にしている学生も多く見られた。

これらを踏まえ、次年度は実習園とも連携をさらに密にし、各自の保育観や倫理観を確立していけるよう支援していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導 I	128名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育実習指導 I においては、初めての外部実習である施設・保育所実習に向けて、実習の意義・目的・心構えを学習するとともに、対象となる子どもや利用者の年齢や状況に応じた保育・支援、また指導計画・支援計画立案等さまざまな内容の習得できるよう指導を行っている。特に学生にとっては、経験のない未満時や障がいをもつ利用者についての理解が非常に難しいため、視聴覚教材等を適切に使用したり、保育現場の保育者や指導員を招へいし、具体的な指導を盛り込むなどの工夫をしている。

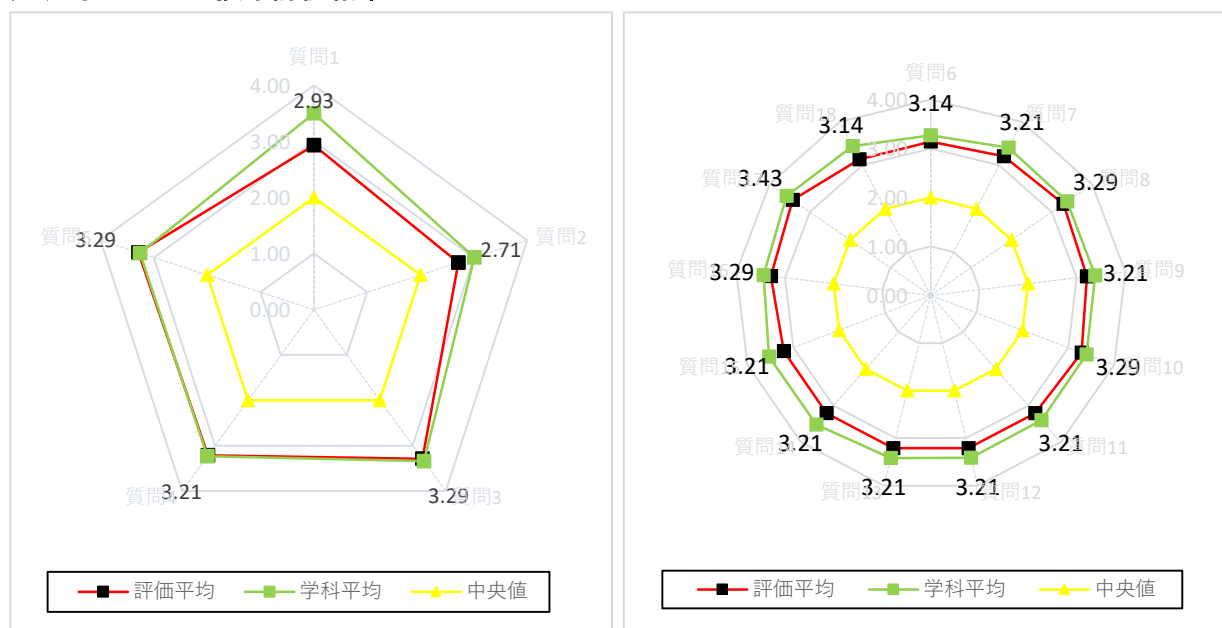
授業評価については一定以上の高い評価を得ており、特に大きな問題点はない。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も、概ね同様の方法で進める予定である。課題としては、特に未満児や障がいをもつ利用者についてしっかりと理解した上で実習に臨めるような工夫が必要である。また、記録や指導計画・支援計画等の書き物については、書くことが苦手な学生も多くいるため、「書く」というたくさんの経験ができるように視聴覚教材等の適切な使用も含め検討したいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅲ	27名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育実習指導Ⅲについては対象となる学生が少ないため、ゼミ形式の授業を展開している。しかし、少人数であるにもかかわらず、実習先施設の種別としては、養護系・障がい系、利用者についても児童・者であるなどさまざまである。その前提のもとでの指導であるため、指導方法に配慮を要する。今回は、状況に応じて全体的に進めたり、実習直前期は個別に対応するなど、指導の方法を工夫して臨んだ。

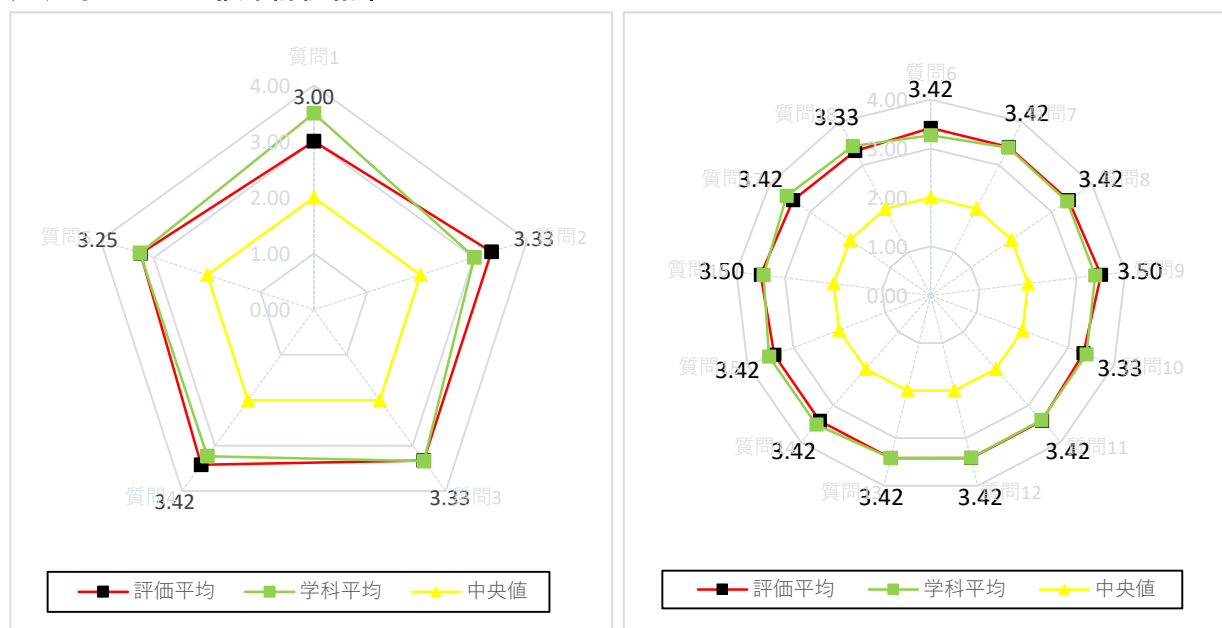
授業評価については、質問1から5の自らの学びの評価が低いようである。もう少し、学びの目標を明確に設定し取り組むことができるよう配慮する必要があると考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も対象学生は少ない人数である。今年度と同じようにゼミ形式で進めていくことになる。学生それぞれが実習に臨むうえで事前に調べたことや、実習後に学んだことを報告する機会を設けて、学生間で双方向的に学習できるような環境を整える必要がある。また、教員もその環境の中に存在することによって適切な指導ができるよう努力したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		子どものストレスマネジメント論	36名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

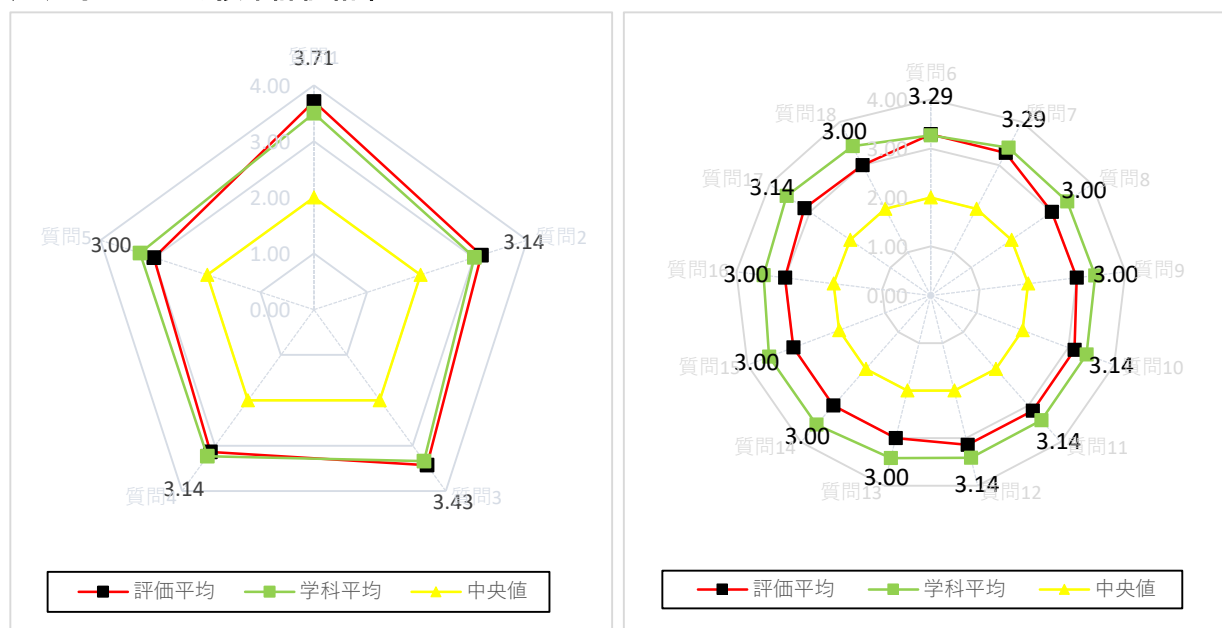
評価者が11名ということで、受講者の3分の1程度の人数であるが、おおむね学科平均と同様の評価点であった。特に低得点の項目はない。ストレスマネジメントの方法をより実践的に学ぶために、リラクセーションの実技を5回取り入れたが、欠席するものもあり、どれだけ学生の実感を伴った学びになったかという点について検討の余地はある。

(3) 次年度に向けての取り組み

講義形式と実技形式を取り入れた授業方法をとってきたが、次年度は講義形式にさらに多くのディスカッション場面を取り入れて、興味を喚起できる授業方法をとっていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習Ⅰ	71名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

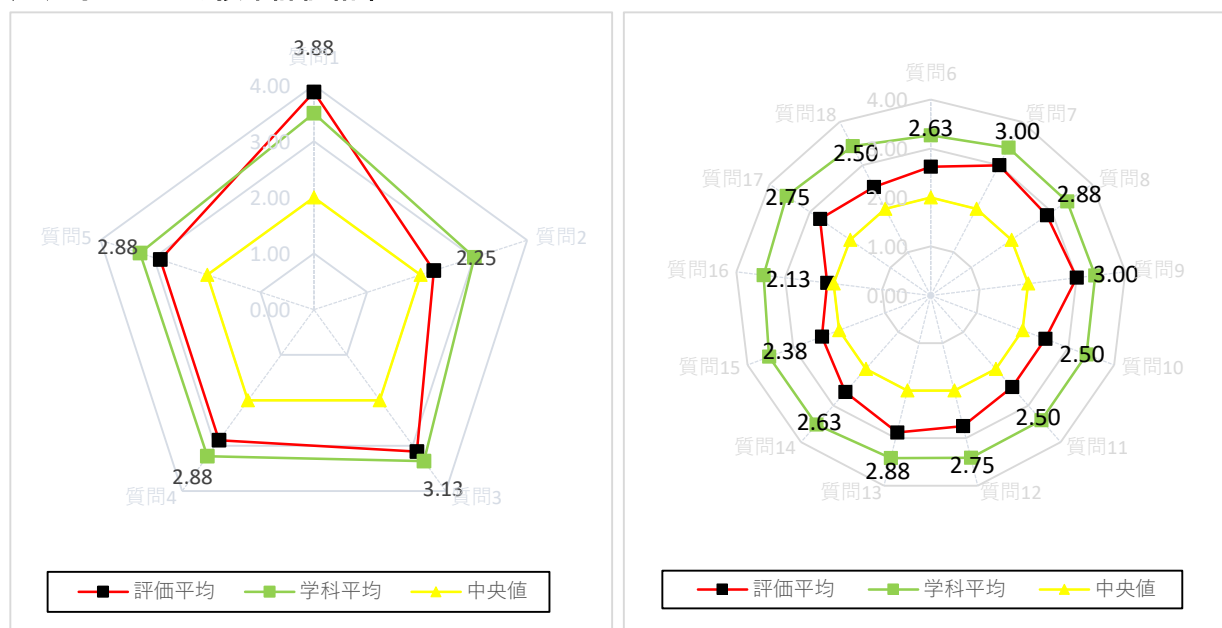
各評価とも全体的に高めである。幼稚園実習Ⅰは、学生にとって初めての实習であり、附属幼稚園での実習である。現場の受け入れ体制が整っているので、実りある実習になっていると分析できる。実習日誌からも実際に子どもにかかわり、体験からたくさんの学びを獲ていることがうかがえる。園のクラスに配属された実習生同士の助け合いや学び合いも観察できる。また、夏休みから、現場の先生に指導計画案の添削を委ね、子どもの興味関心をひく内容を考えてきた。観察実習、参加実習、部分実習、責任実習の段階を踏まえ、子どもや保育者から多くを吸収していると捉えている。今年度はA,Bクラスが実習を継続的に進めたので、実習の学びの図解作りがスムーズに進んだ。そして、現場に御礼の言葉を添えて学びを報告出来たことは教育効果が高かったと捉えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も、体調を整え、礼儀やマナーを身につけ、謙虚な気持ちで実習に臨みんでほしい。幼稚園実習Ⅰが以降の実習の取り組みに大きく影響するので、個人の実習への姿勢や取り組みを重視していきたい。また、現場の先生と連携をとり、実習生指導をより充実させたいと考えている。日誌や指導計画案が書けない学生もいると指摘を頂いているので実習の事前事後指導でもう少し対応できるようにしたい。各配属クラスの実習生で、「実習で学びたいこと」を目標に掲げている。学内のみでなく、実習期間中に振り返り、実習の意識をより高めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習Ⅱ	76名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

幼稚園教育実習Ⅱでは、幼稚園教育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各幼稚園の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての幼稚園教諭の役割や職務内容を理解し、自らの保育観や倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会として捉えることが必要とされる。

この評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価したものであるが、質問内容が実習そのものにはあまりそぐわない内容となっている。また、調査に回答した学生が7名と極端に少ないことも、この回答結果の一因であると考えられる。

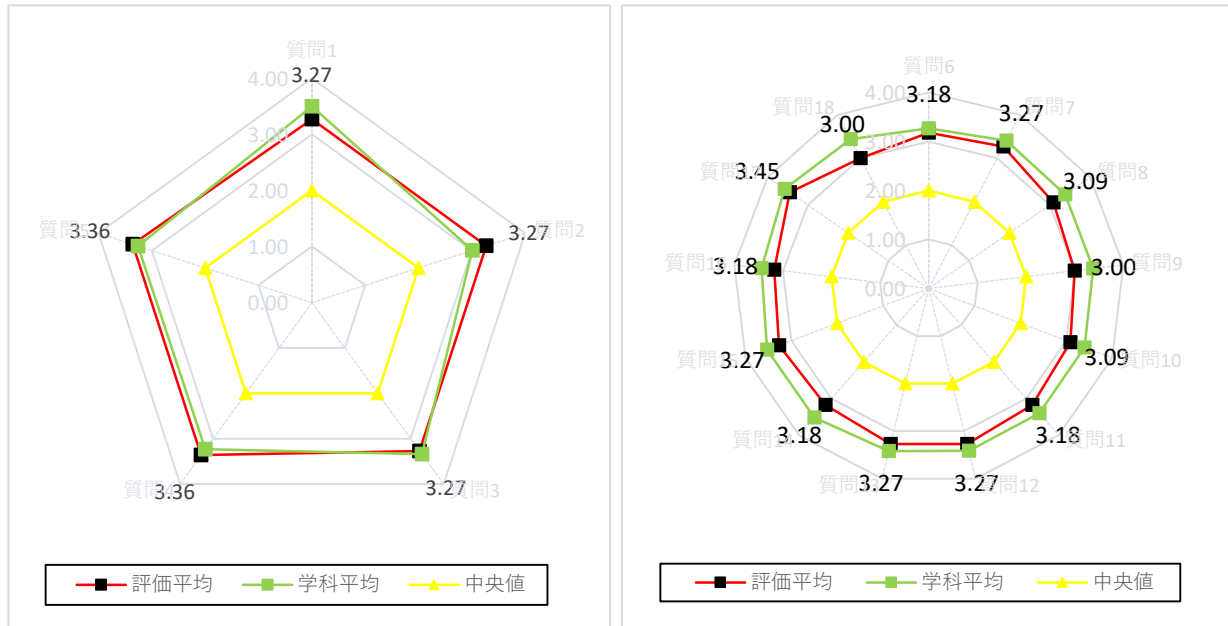
(3) 次年度に向けての取り組み

幼稚園教育実習Ⅱは、3年生で行われる幼稚園実習の仕上げの実習である。自らの今後の進路を定める上でも重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、次年度は実習園とも連携をさらに密にし、各自の保育観や倫理観を確立していけるよう支援していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		スクールカウンセリング と学校臨床	37名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

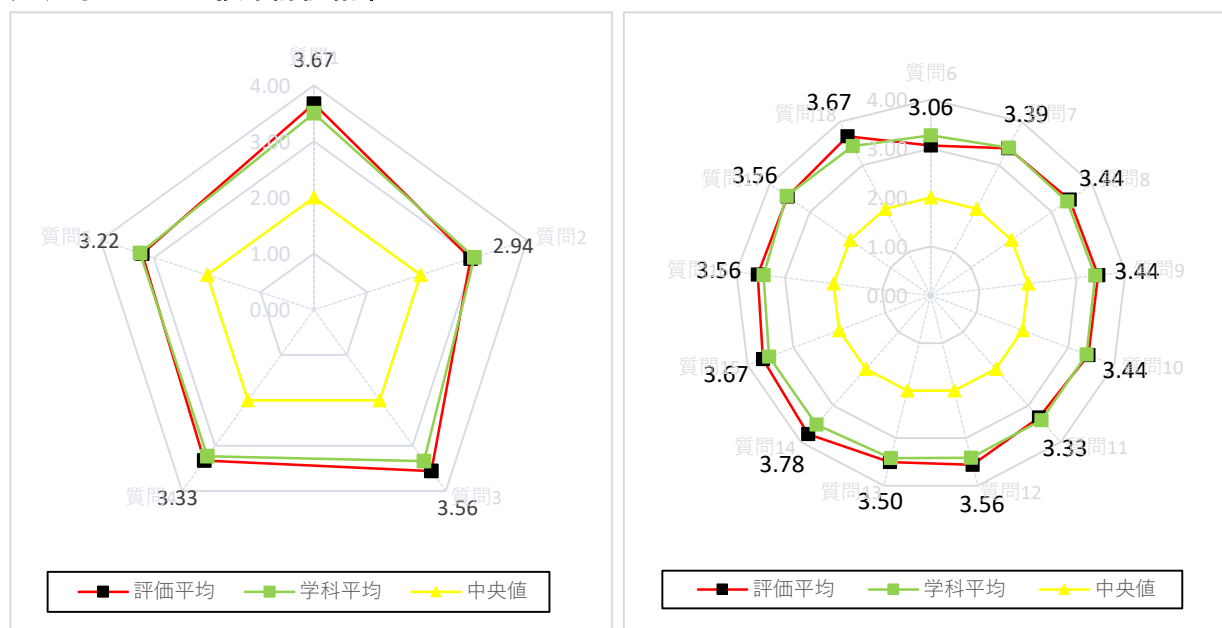
30% (11/37) の回答率であった。しかも、解答した11名中3名は、存在しない問19～25までも回答があり、この評価の正当性には疑問がある。自由記述も特に記載はなく、どう受け止めて良いか、分析も困難を来す。

(3) 次年度に向けての取り組み

回答率が低いため、来年度はまず、丁寧な説明により、回答率の向上を図るところから始めたい。その上で回答に信頼性がおけるようであれば、真摯に受け止め改善していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		小学校教育実習	49名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

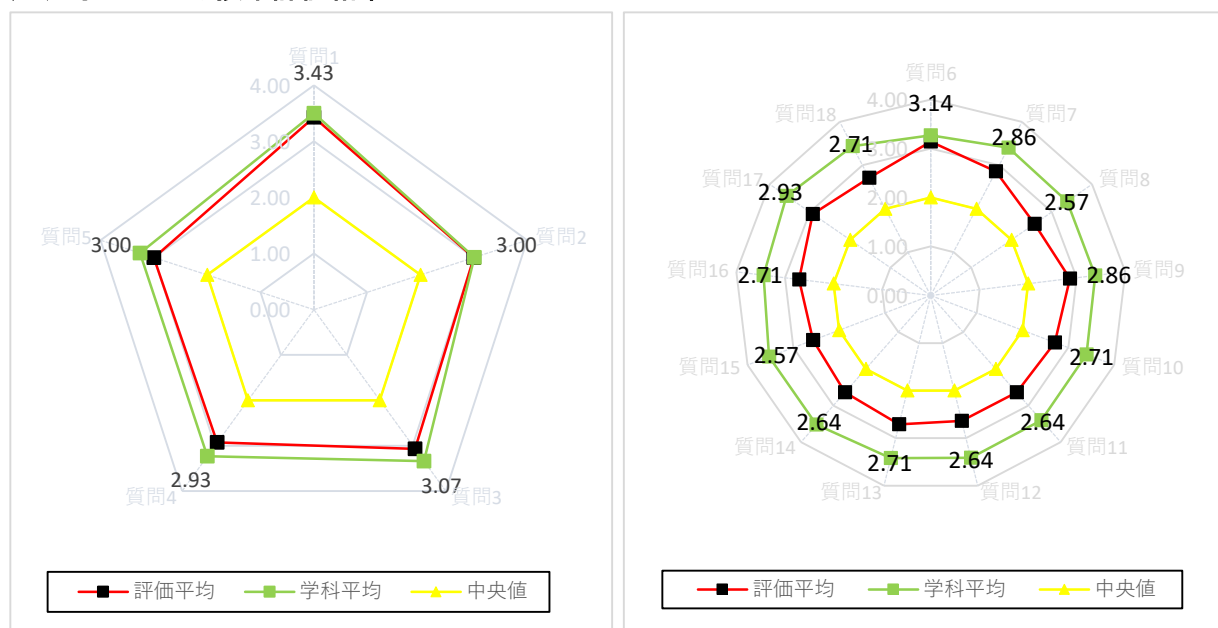
学生の教職に対する意識の差があり、前年度と比較すると評価の下がった項目が2～3あった。保幼少と特別支援の資格・免許取得可だが、混在していることでその弊害が出てくるのではないかと危惧している。そのことも評価の下がった一因であると考え。

(3) 次年度に向けての取り組み

早い段階から体系的・継続的、そして、組織的に小学校教育員養成に取り組んでいく。そして、子どもとしっかり向き合い、寄り添いながら、粘り強く「生きる力の育成」、そして、「子どもの夢実現や課題解決」に取り組む教員養成を目指したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習指導	148名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

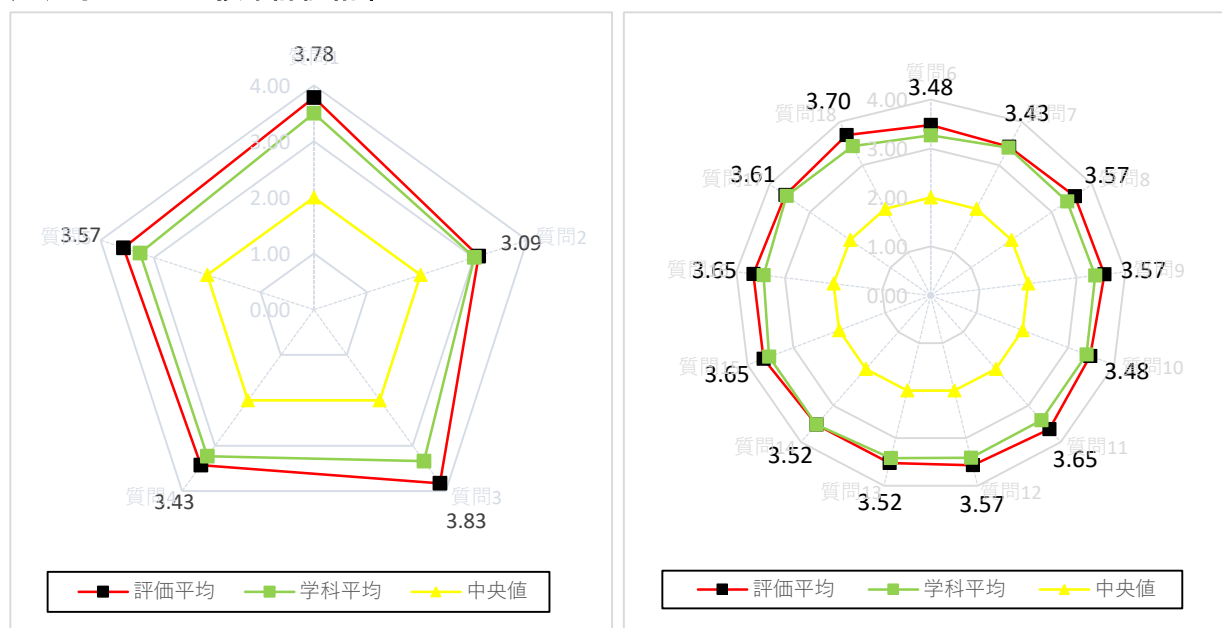
幼稚園実習指導については、全体的に平均を下回る数値だった。実習事前・事後の活動は、各自が実習に向けて取り組む目標と課題があり、受動的に参加した結果が数値に表れているのかと推測している。特に、授業内容に興味関心が持てる工夫がなかったようで、例年にはなかった意見である。初の実習で附属幼稚園に尽力頂き、園との協力体制と連携もとれており、充実した実習指導になっていると考える。その基盤をもとに学外実習へ各々がそれぞれに取り組むというステップを踏んでいる。しかしながら自由記述に、実習が終わってから指導案を書く意図が分からないとあった。その後も指導案を立てる必要性から必須であるので、その意味を伝えないといけない。いずれにせよ、少人数の授業評価結果なので、この意見も大事にしつつ、全員の学生が授業評価を行うよう呼びかけることが重要である。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業評価の項目で、これからの改善の余地があると思われる。グループワークで「実習で何を学びたいか」の明確な視点を持つため、図解作成を行っている取り組みは有効である。説明にも作業にも時間と労力をかけており、初めての図解作成に苦戦している姿と楽しんで取り組む姿が見られる。結果的には学び取ったものを共有し、学生自身が満足いくグループワークになっているようである。今後も、説明を分かりやすく行い、効率よく時間配分できるように改善していきたい。そして、この学びのスタイルが、子どもの成長発達を願い、保育現場で生かせるように取り組んでいきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		小学校教育実習指導	49名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

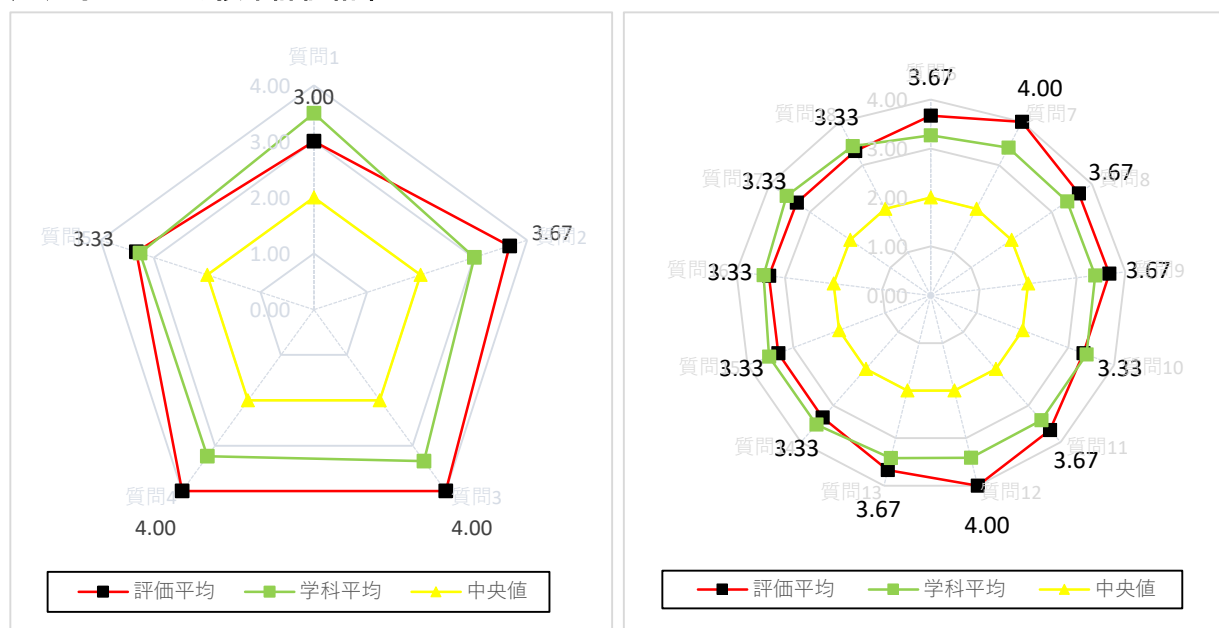
小学校が主、保幼が主、さらには特別支援が主という学生が混在し、温度差がある中でおおむね学科平均と同じかそれを上回る評価となっている。授業は、実践的指導力の育成ということで、学習指導案作成とそれをもとにした模擬授業実施である。1コマの中で2名がそれぞれ40分ずつ模擬授業を行うが、負担感はあるものの、次年度の小学校教育実習にむけ、ほぼ全員が真摯に取り組んでいることが、おおむね良好な評価につながっていると思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

小学校教育実習指導についての温度差をなくすように、保幼小特のどれが主であっても必要・必ず役に立つということで、一年生時から継続的・段階的に指導していくことが重要であると考え。そのためにも学科FD研修会等での検討が必要であると考え。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		小学校教育実習指導	62名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

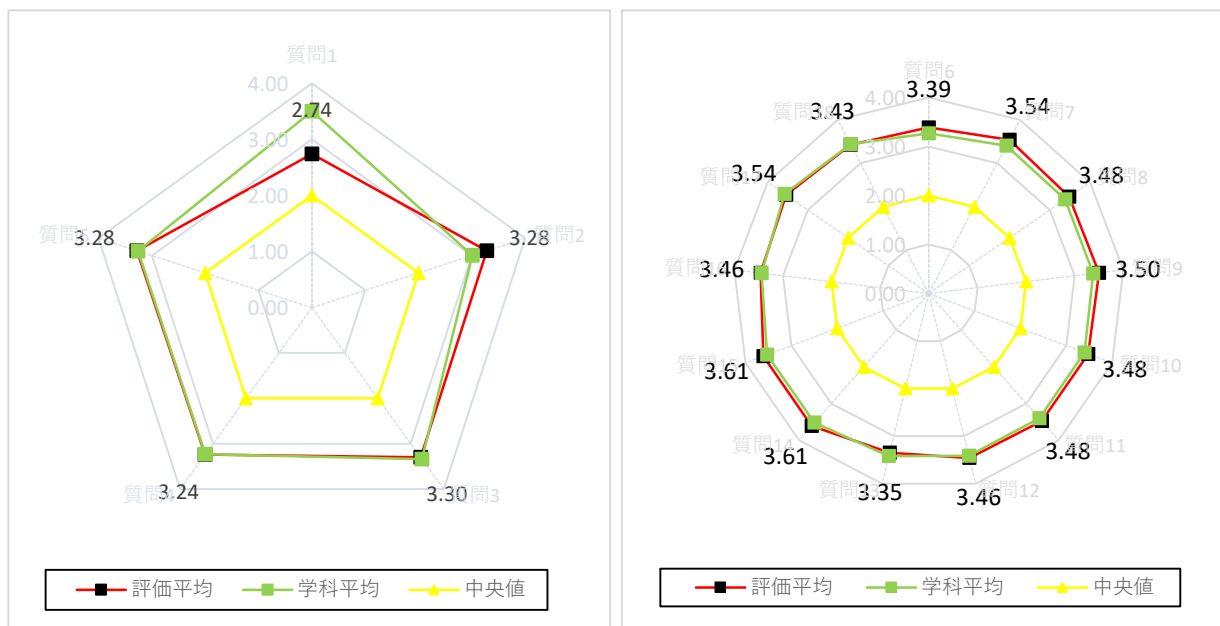
小学校が主、保幼が主、さらには特別支援が主という学生が混在し、温度差がある中でおおむね学科平均と同じかそれを上回る評価となっている。授業は、実践的指導力の育成ということで、学習指導案作成とそれをもとにした模擬授業実施である。1コマの中で2名がそれぞれ40分ずつ模擬授業を行うが、負担感はあるものの、次年度の小学校教育実習にむけ、ほぼ全員が真摯に取り組んでいることが、おおむね良好な評価につながっていると思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

保幼小特のいずれが主であっても、小学校教育実習指導の重要性を指導することで、学生の温度差をなくすように努めたい。そのためには学科FD研修会等での検討が必要であると考えます。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		障害児臨床心理学	51名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

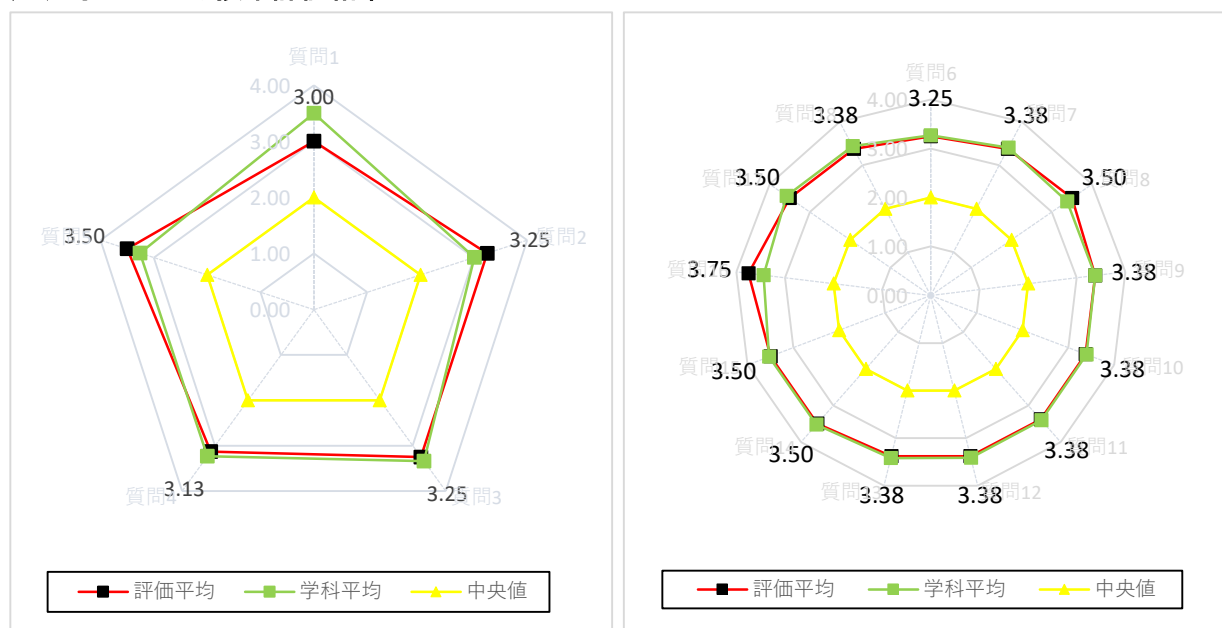
おおむね学科平均同様の結果であった。
 しかし、質問1「欠席について」は、平均より低い回答であった。
 これは、学科必修科目でありながら、1限目開講への意識が希薄である学生が多いことを示している。

(3) 次年度に向けての取り組み

欠席についてのリスクと、この授業が必修であることの意味について、授業のオリエンテーションで指導を行っていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナール I	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

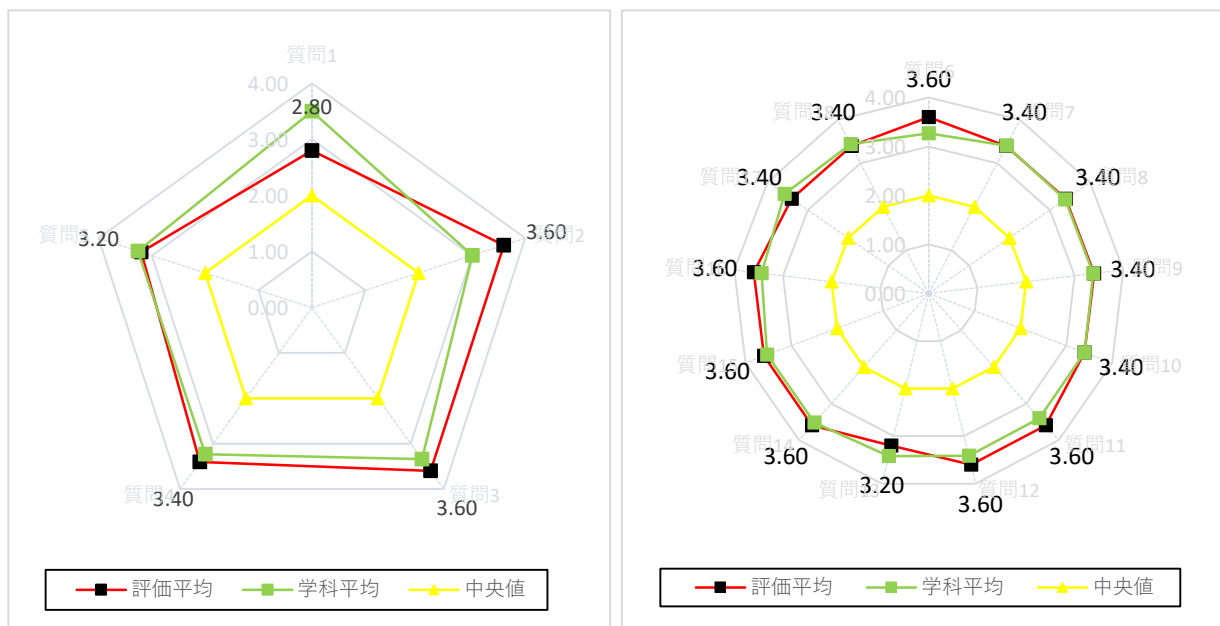
2年生のゼミでは教員と学生の距離の近さ(親密性)が達成できたと考えています。楽しみながらアカデミックスキルを鍛えることができたと考えています。

(3) 次年度に向けての取り組み

2年生はモチベーションが下がりやすく、ゼミにも欠席がちになる学生が増えやすい時期ですので、出席したいと思える授業ができるよう心がけていきます。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナール I	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

すべての項目で高い評価点であった。授業の進む速さは学生の実態に応じて、検討していかないといけない。

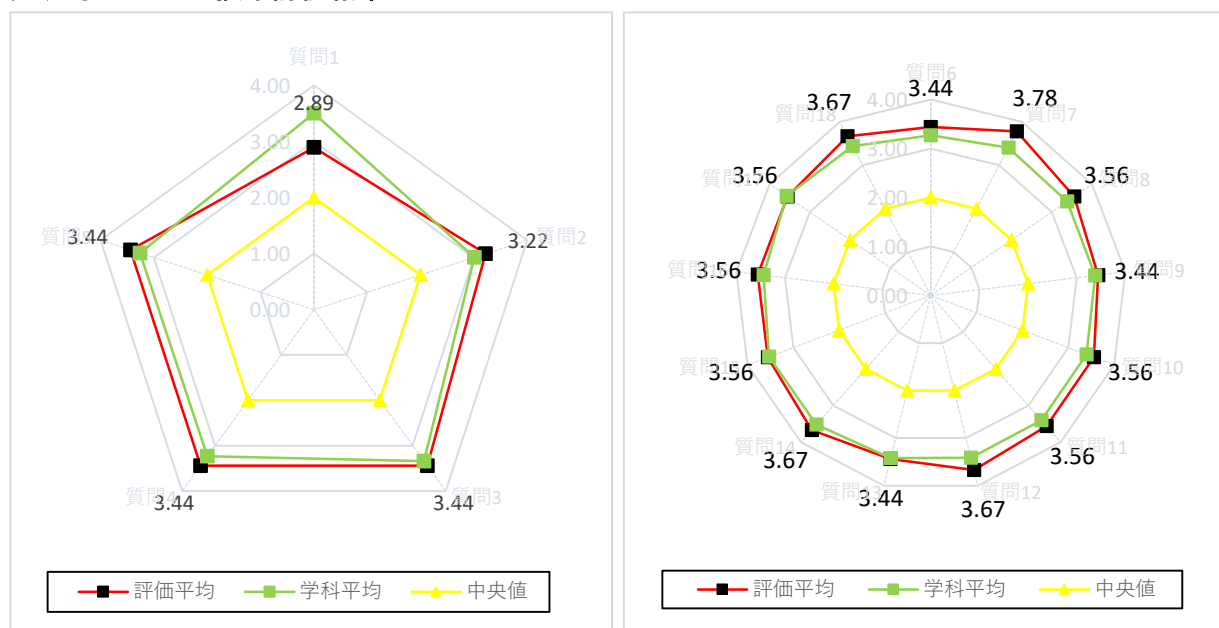
シラバス（授業計画）で年間の見通しをもたせたが、中には見通しが持てない学生がいた。キャリアプランニングなど外部講師による授業は、今後も計画的に入れ、進路に対する意識を高める必要がある。

(3) 次年度に向けての取り組み

レポート作成のための、個別的な研究指導の時間がもう少し必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナール I	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本科目は、1年次の「あすなろう I 基礎」を基に、大学生としてのスタディ・スキルの定着を図るとともに、自分の将来像を熟考しながら学生生活を計画して行くキャリアプランニングの内容も取り扱う科目である。授業の多くをゼミ形式で行っており、当ゼミは今期9名が履修した。

項目ごとの評価平均点は、どの項目も学科平均点を上回っていた。質問6～18の平均も3.53で、おおむね良好に授業が展開されたと考える。授業の到達目標の明確性に関する項目の評価平均点が最も高く、授業のねらいや目標については学生によく伝わっていたと考える。一方、授業の進む速さに関する評価平均点は他の項目と比較して最も低かったため、授業の進捗について適宜学生に確認するなどの改善が必要だったかもしれない。

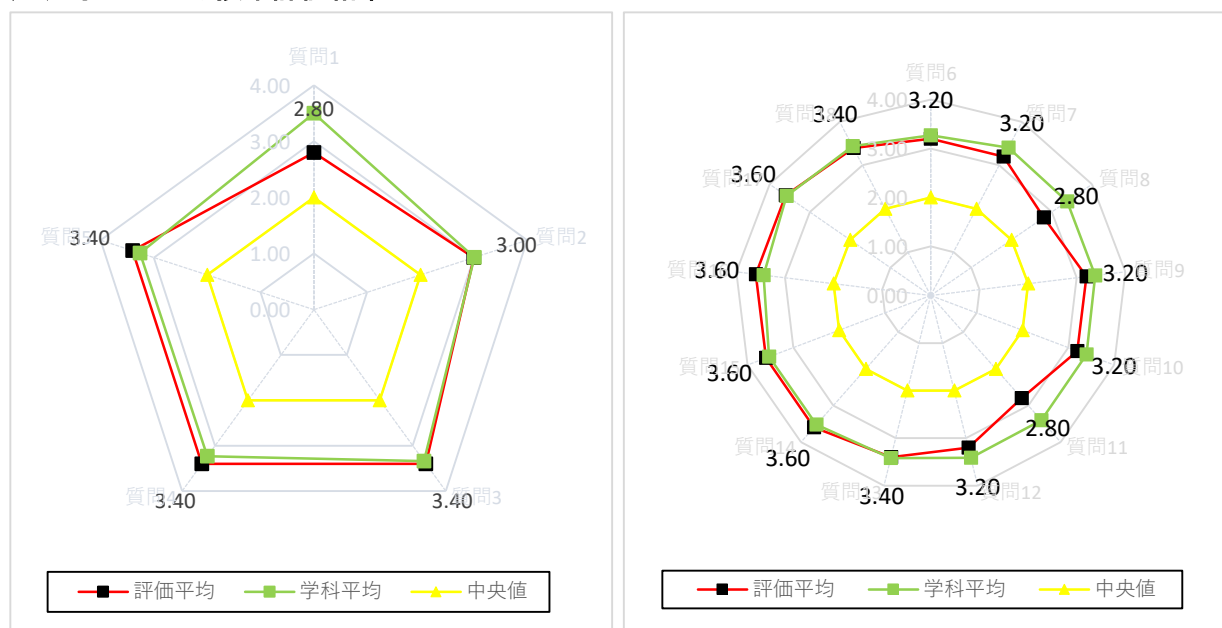
このほか、スタディスキルとして文献の検索や入手、研究レポートのテーマ設定及び当該レポートの作成、レポート内容の発表（プレゼン）等については、学生の習得状況に個人差が大きく、丁寧な個別対応が必要であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

※担当教員の学内異動により、次年度以降、本学科における本科目は担当しない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナール I	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本講義は、ゼミ指導・個人指導と学科全体での授業形式とが混在しており、ゼミ指導においても各教員の指導体制が揃うよう、事前に調整を行って授業が行われた。質問10が平均を下回ったのは、ゼミ授業において視聴覚機器や板書を行う機会が少なかったことが要因として挙げられる。

質問8の興味・関心が持てる工夫についての回答が平均を下回ったことについては、個別ゼミ指導で使用した教材がアカデミック・スキルの向上を目指すものであり、専門科目等との直接の関連がなかったことが要因と思われる。しかしながら、卒業論文に向けてのモチベーションを上げる言葉かけなどをより増やすことによって、興味・関心を向上させることは可能と思われるので、今後の課題としたい。

授業評価回答数については、ゼミ指導時間内に授業評価実施を促して時間をとったものの、時間が十分にはとれずに複数の学生が評価に回答しない状況となった。今後、さらに授業評価回答のための時間的余裕を提供できるよう、授業の時間配分などに留意したい。

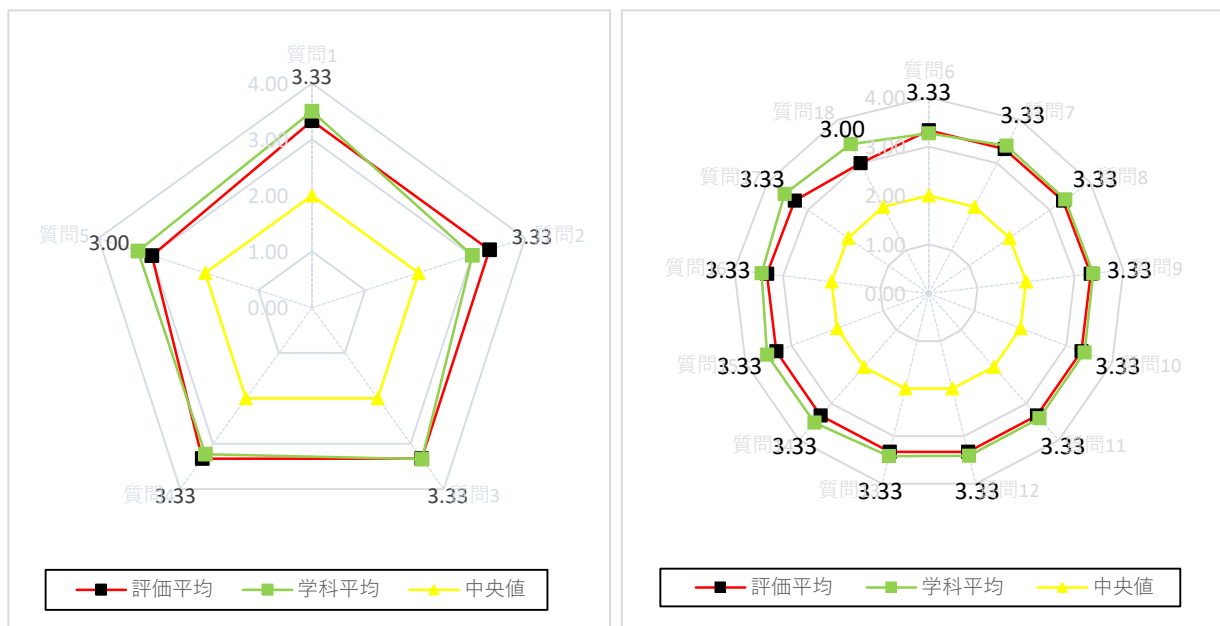
(3) 次年度に向けての取り組み

次年度に向けて、授業担当の複数教員で授業内容や教授方法などについて十分話し合いコンセンサスを得る時間をとることで、より分かりやすい授業構成を目指したい。また、上記にも述べたように、個別ゼミ指導で使用した教材が卒業論文に向けてどのように関連するかなどの見通しを詳細に伝えることで、課題に取り組むモチベーションを上げるよう工夫したい。

授業評価回答数を増やすためには、授業評価回答のための時間的余裕を提供できるよう、授業の時間配分や授業内容などを修正していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナール I	12名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

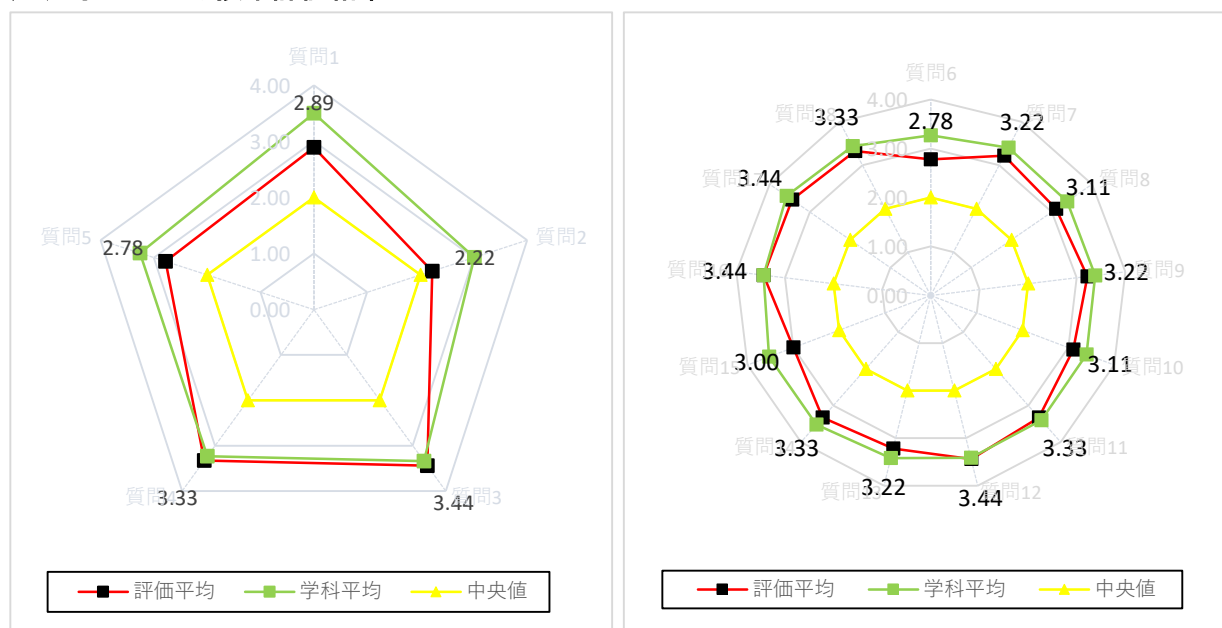
ほぼ学科平均得点同様の結果であった。
 しかし、質問5「自己評価」と、質問18「総合評価」は、学科平均を下回る結果であった。
 1年間通年開講科目であるため、学生のモチベーションをどのように維持させるかが課題である。

(3) 次年度に向けての取り組み

前期終了時、後期終了時に、学生との個人面談を持ち、学生と教員との間に達成度の齟齬が生じていないか指導を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率90% (9/10) であった。

質問15は学科平均よりも低くなっているが、確かに、目立って進み方の遅い複数の学生は

特別に呼び出して指導する回数が多かった。

もし公平に指導していたらそれらの学生は卒業論文が締切までには完成できなかったと推測できるので、卒業論文作成という特殊性を考えたときに、学生の進捗によって必ずしも公平な指導がよいというものではないと考えられる。

また質問8も、卒業論文作成という性質上、教員が興味・関心を持たせると言うよりは、学生が興味・関心のあるテーマを

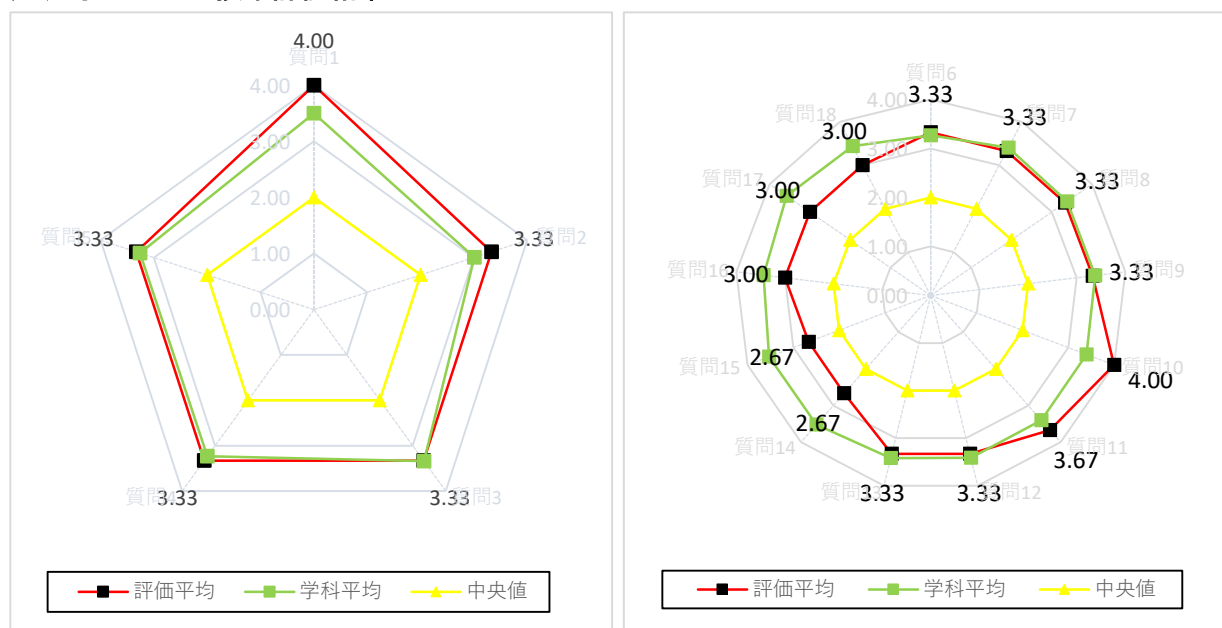
いかに見つけ出すかが求められていると考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

卒業論文作成という性質上、なかなか一律の指導では目標が達成できないため、来年度も学生毎の進捗や状況に応じて、臨機応変に対応できればと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナールⅡ	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

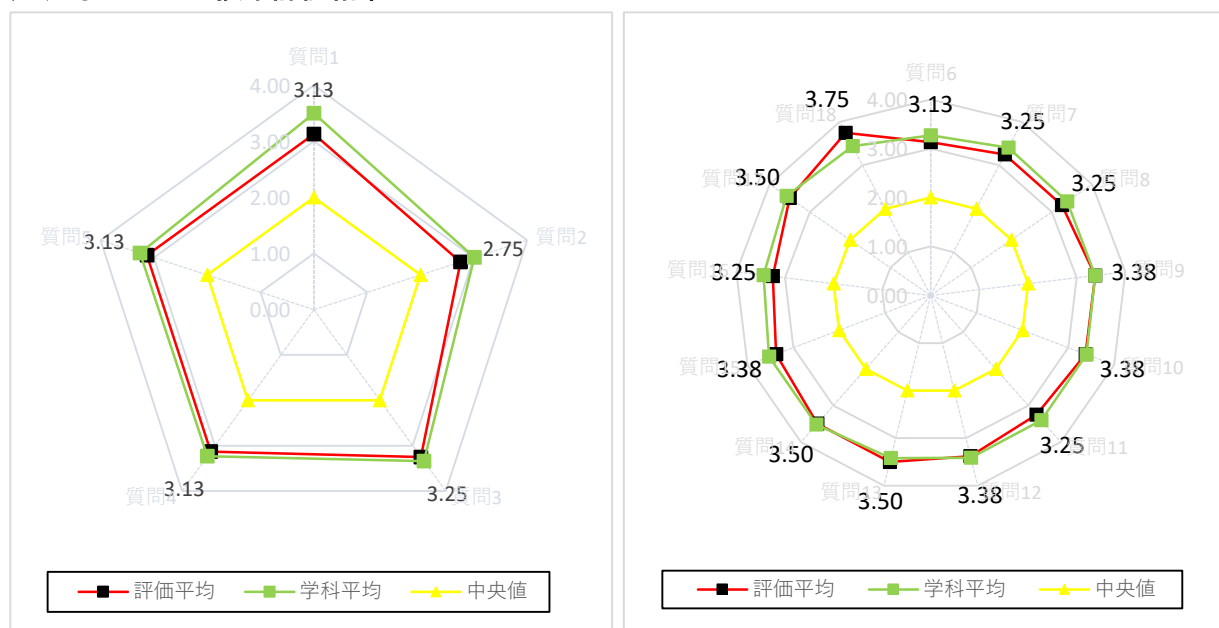
33%の回答率 (3/9) であった。
 そのうち一名は、設問の設定がない質問19～25までも回答していて、この評価自体がどれだけ全体の評価を代表しているのかは評価が難しい。
 高評価の項目と低評価の項目と差が大きいが、これも、3名からしか回答が得られていないので、一人一人の評価のウェイトが大きく、
 このような極端な結果になったものと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

サンプル数が少ないので、評価・分析・判断は難しく、またゼミナールでは一人一人の学生に添った対応が求められるため、
 次年度も画一的な対応にならないように、一人一人の学生に応じた対応を、学生の声に真摯に耳を傾け、丁寧な対応・説明を重ねていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

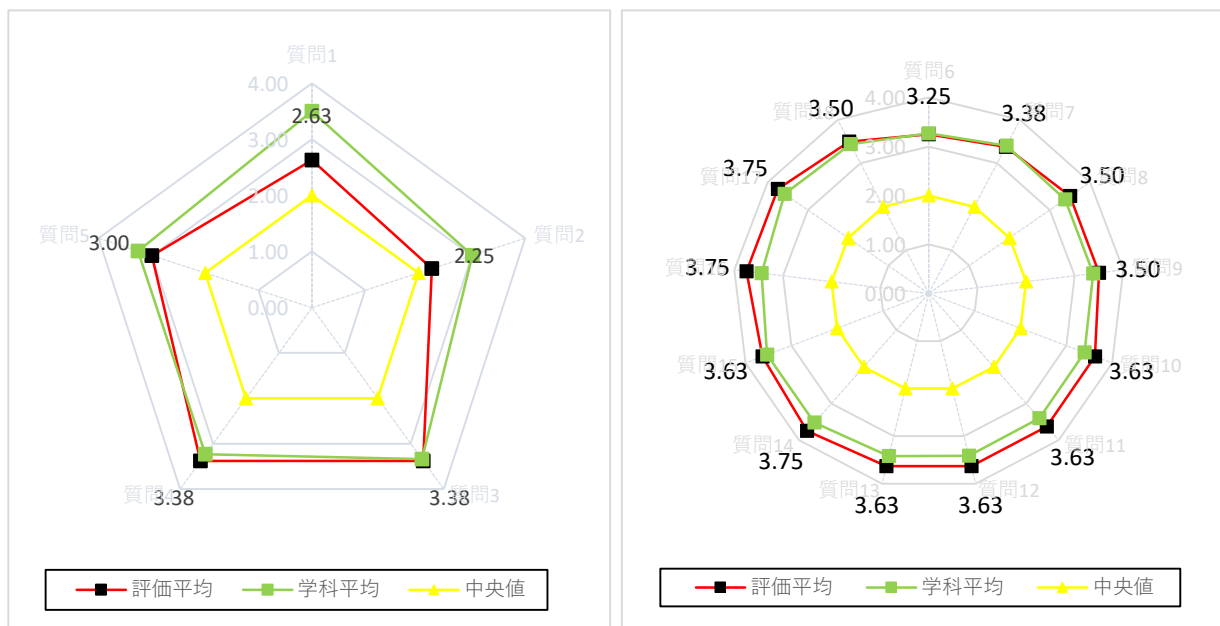
回答者は9名中8名である。高い回答率で、全般に、自己評価も授業のやり方についてもまあまあの評価である。卒業研究は、学生が主体的に進めていくものである。学生は、おおむね満足したということであるが、運営上は、なお、工夫が必要であることを指導教員として自覚している。

(3) 次年度に向けての取り組み

このような評価尺度に頼ることなく、学生が自主的に、ある程度満足のいく成果を収められるように、学生自身と対話し、学生間のコミュニケーションを円滑にしながら、指導していくことを肝に銘じる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

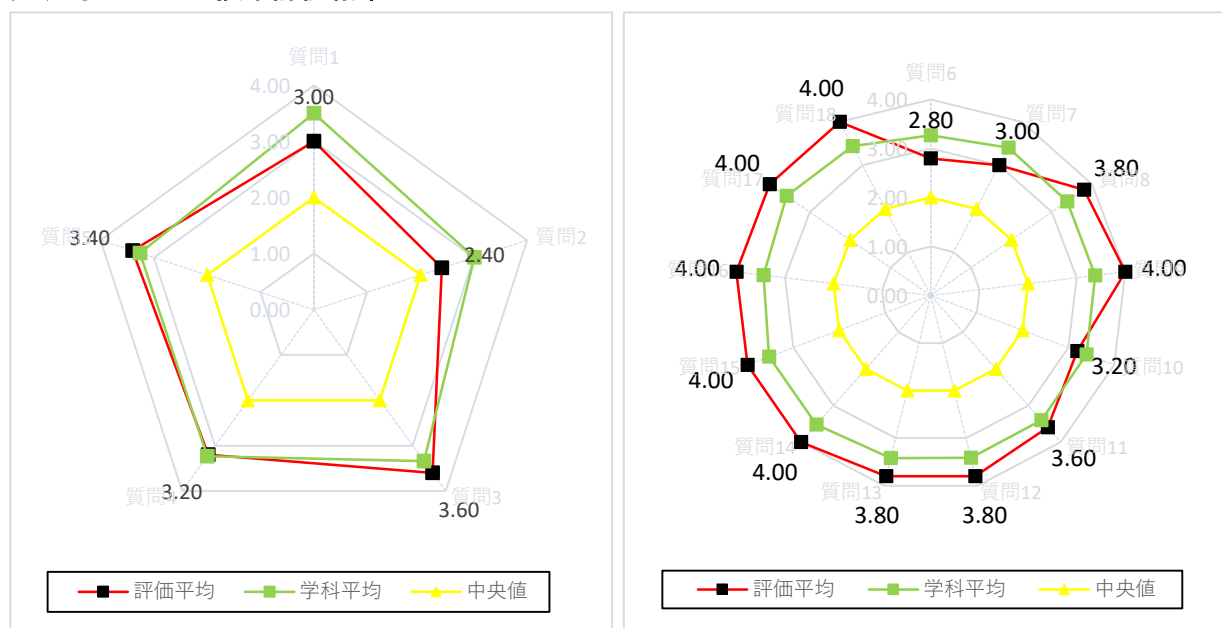
「質問2」「質問6」（シラバスについて）が平均を下回っていた。他は学科平均を上回っていた。

(3) 次年度に向けての取り組み

シラバスの説明等を加えていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	5名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

卒業研究についての授業評価は難しいと思う。なぜならば、卒業研究とは学生一人一人が自分の力で取り組むべきものであり、教員は極力、学生の支援に力を入れていくべきであると考えている（もちろん、ここはという箇所での指導は必要であることを踏まえた上ではあるが）。ゆえに、卒業研究の「授業評価」は、他の科目と同様の項目での評価はなじまないと思う。

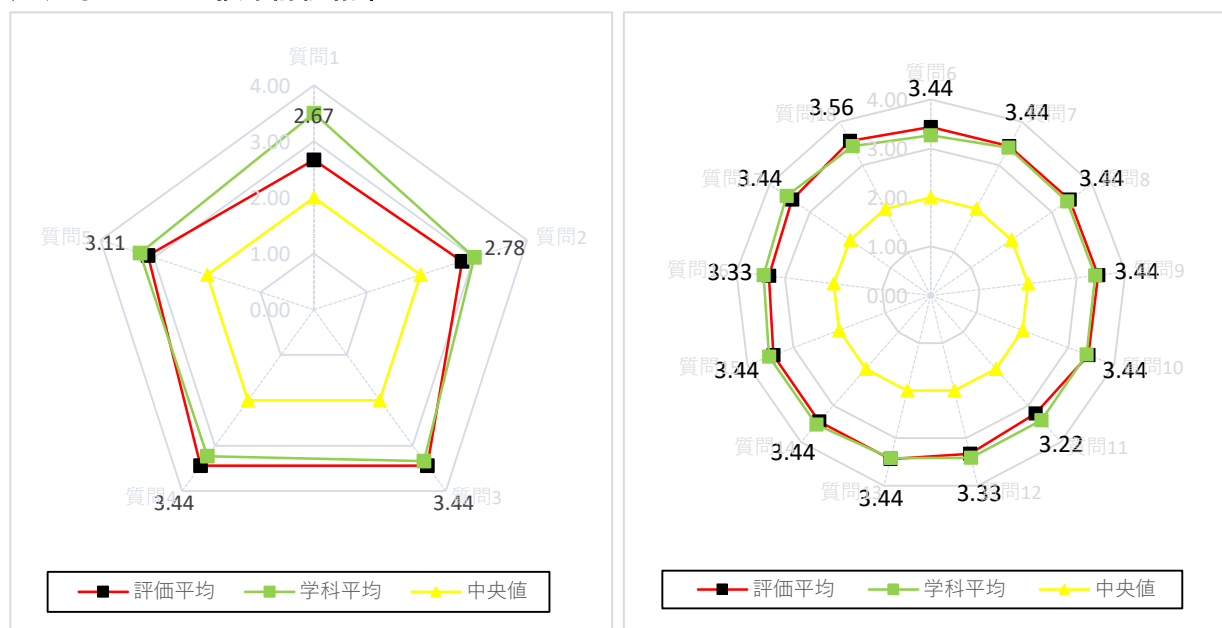
本結果を見ると、欠席が多かったという学生が数名あったが、その学生の授業評価は低い傾向にあった。自分自身の学びに対する取り組みや姿勢が問題であったと認識しているものと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度初めて卒業研究を担当したので、見通しがつかず苦労したのは事実であった。卒業研究に臨む厳しさ、学問を追求するという謙虚で真摯な態度、学びを自分の成長に重ねていける豊かな人間性など、学生一人一人の心に落ちるような支援・指導を積み上げていかねばならない。将来子どもの前に立つ学生を指導する立場にあるので、学問や研究を通して私が自分の成長を感じ取れるよう、教員として厳しくかつ温かく指導していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

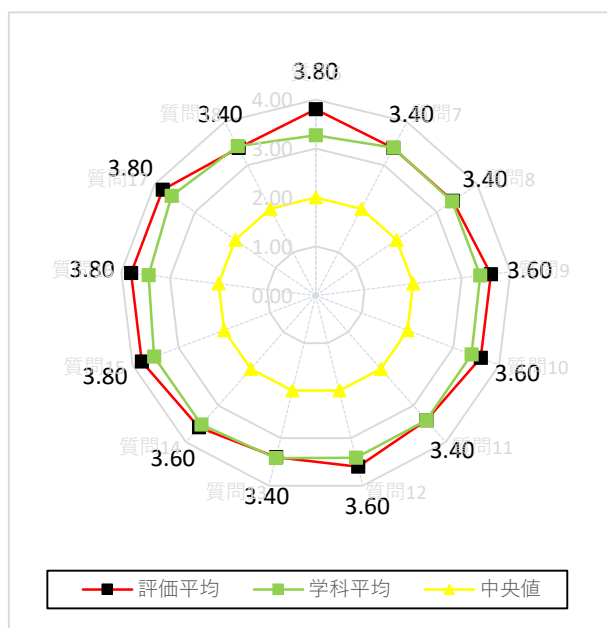
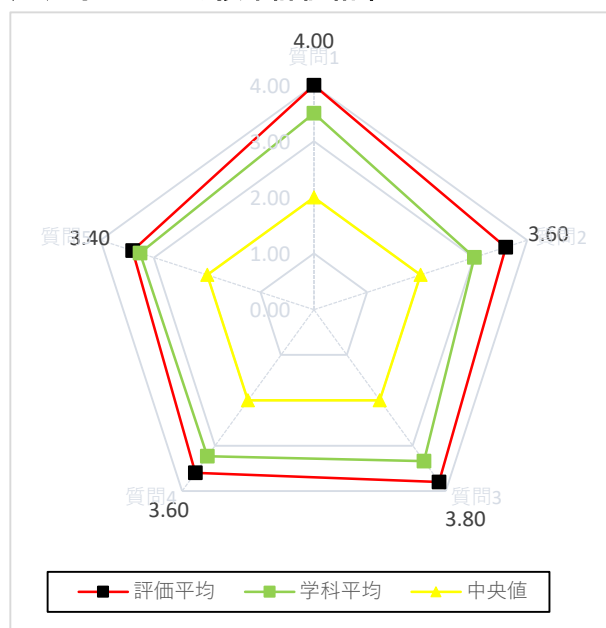
今年度の学生の自己評価を見ると、欠席回数の項目の評価が低い。これは実習中の公欠となる欠席を、カウントしているものと思われる。学外実習期間中は卒業研究は行えない為、実習期間の前後に個別に指導時間をもって対応を行ってきた。それにより、卒業研究そのものの進捗状況には何ら影響することはなかった。指導に関する評価については、極端に低い数値の項目は見当たらない。そのことが総合評価の数値に繋がっていると思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

毎年、卒業研究のテーマは各学生が設定する。次年度の受講学生に対しても、個々の学生の興味や関心、及び将来の就職に関連する事項等を検討しながら、細やかな指導を心掛けていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		学校インターンシップ	55名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

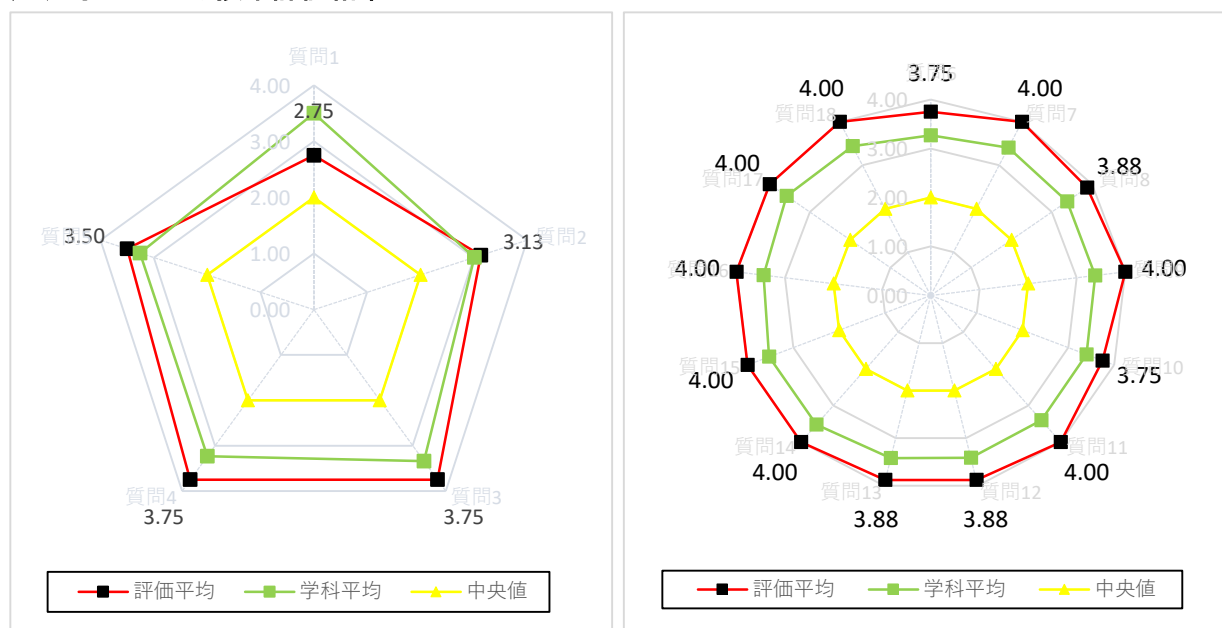
どの項目の評価も学科平均と同じか上回っている。その理由としては、学生が将来の夢実現に向けた学校インターンシップの必要性を理解していることと、受け入れ校の先生方の熱心な指導によるものと考えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

受け入れ校との連携・協力をこれまで以上に図るとともに、事後指導の充実により、学生の夢実現に向けた学びの意欲喚起に繋げていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

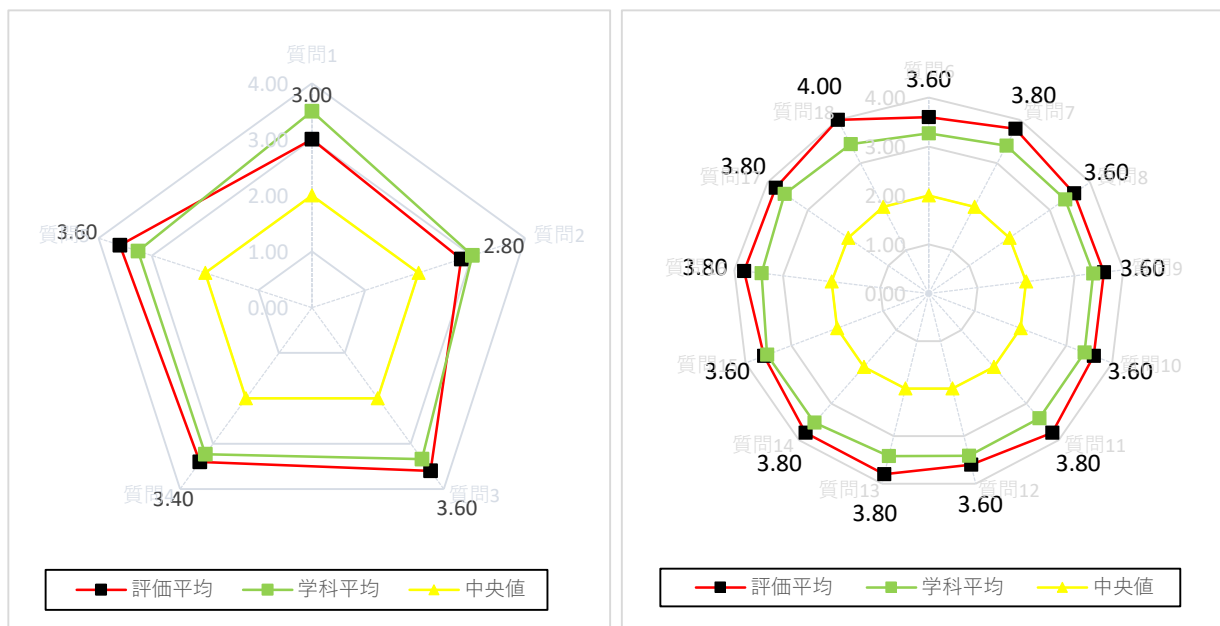
回答率は昨年からの目標であった100%を達成できた。9名中8名の回答ではあるが、1名は病氣療養中のため長期欠席中である。学生の総合評価は3.78であり、質問1を除いて、全て学科平均を大きく超えていた。卒業研究の成果や達成感を学生自身が実感していることがうかがえる。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度同様、学生の興味関心を探求し、研究論文作成とその成果発表を行い、学生自身の学びの充実と自己理解を深めるための授業を展開していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

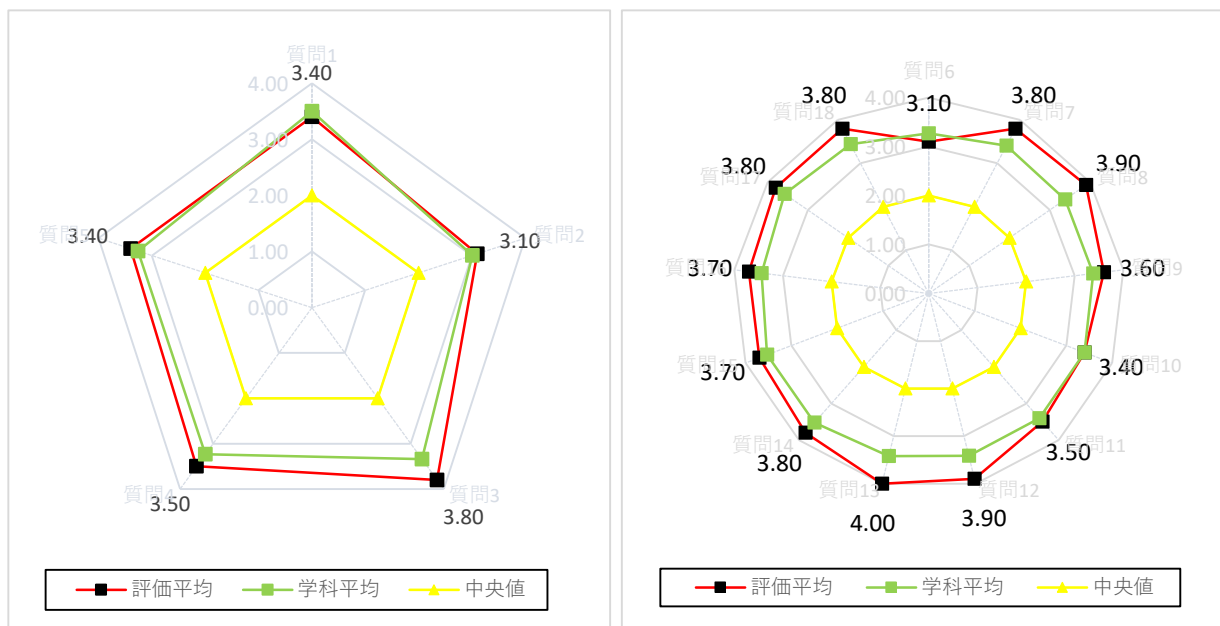
初任での卒業研究の担当だったが、良好な総評であったといえる。
シラバスはすべてのゼミで共通に作られているために教師自身が用いなかった（独自の授業計画を用意した）。

(3) 次年度に向けての取り組み

十分に良好な総評であったため、基本的には今年度と同様に取り組んでよいと言える。
ただし、今年度とは異なる新たな受講生にも、柔軟に対応できるようでありたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	12名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

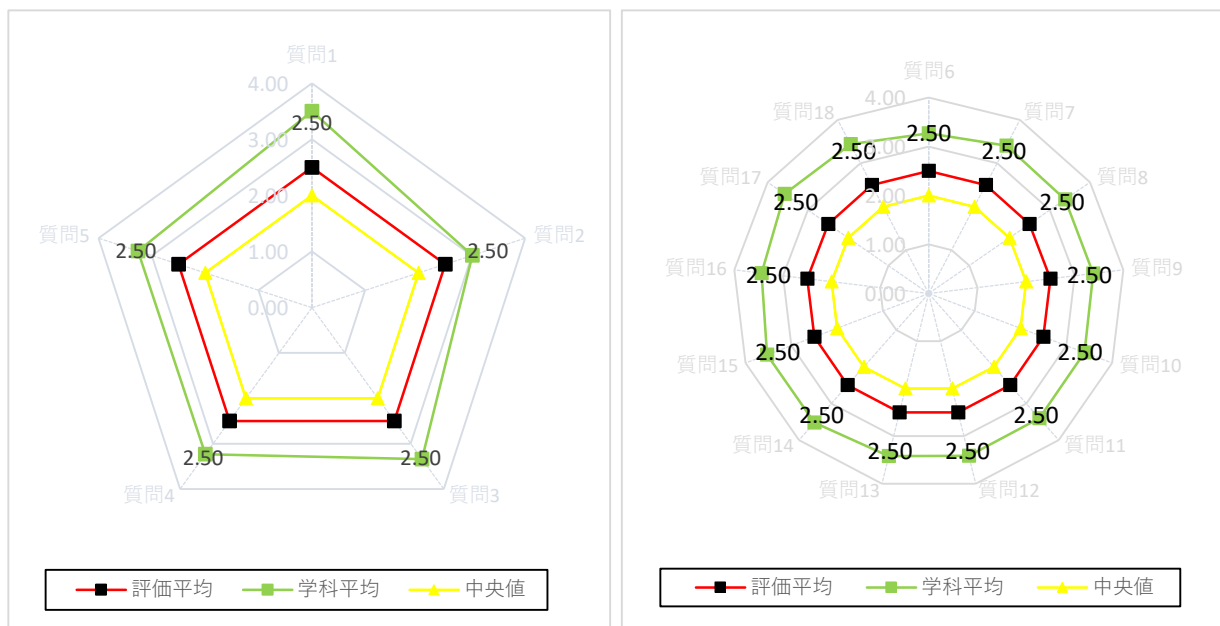
概ね全ての項目に関して。学科平均よりも高得点である。シラバスの説明に関しては、やや説明不足であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

これまで以上の学生の卒業研究への取り組み、特に意欲の喚起と、論理的な文章の作成に向けて指導を充実させる。またシラバスので説明を丁寧に行い、卒業研究の意義を意識させたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナールⅡ	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

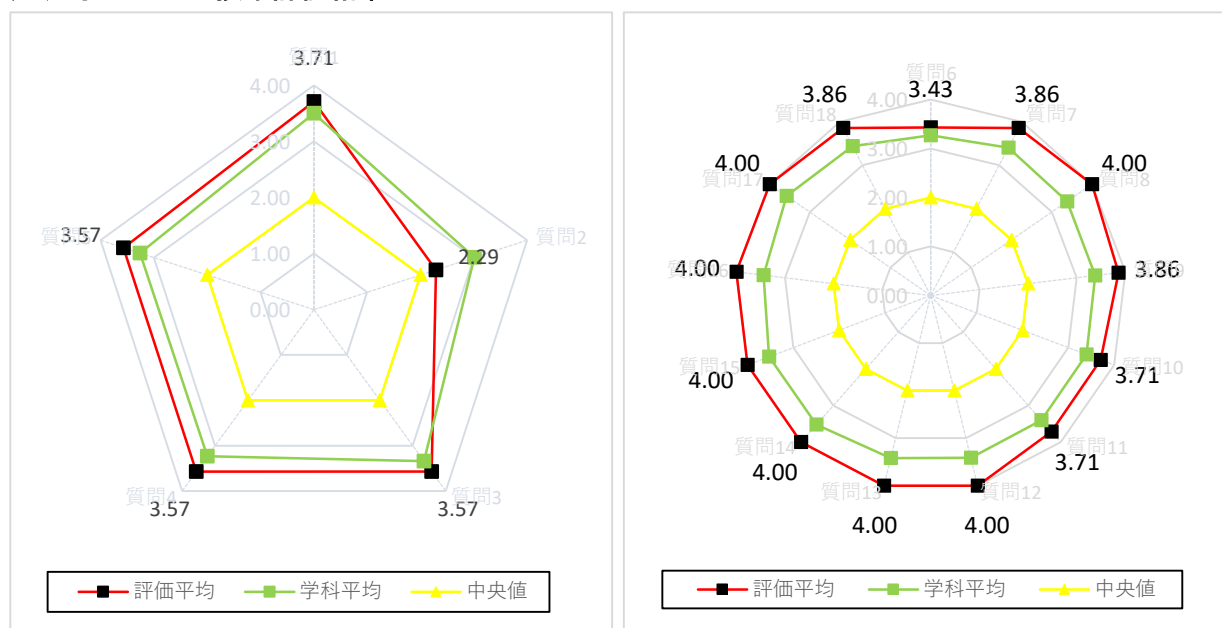
回答が2名のみの結果であるため、総合的評価とは言えない。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生が求める対応と、教員が心がける対応とは齟齬が生じる。
評価によって、授業改善が行われることを、再度学生に周知を図りたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

「子ども学」領域において、各分野・学問に応じた教育研究や学術研究等を遂行し、その結果を提出・報告することが求められている。本ゼミにおいては「子どもの環境と文化」に視点を置き、さまざまな角度からアプローチして疑問に思ったこと、もっと知りたいと思ったことなど、興味や関心に基づいた研究テーマを各自選択し、深めている。

集大成である「卒業論文」作成については、7名という人数であったにもかかわらず、その取り組みの姿勢や進度に大きな個人差があった。

授業評価については、すべての項目について一定以上の高い評価を得ている。

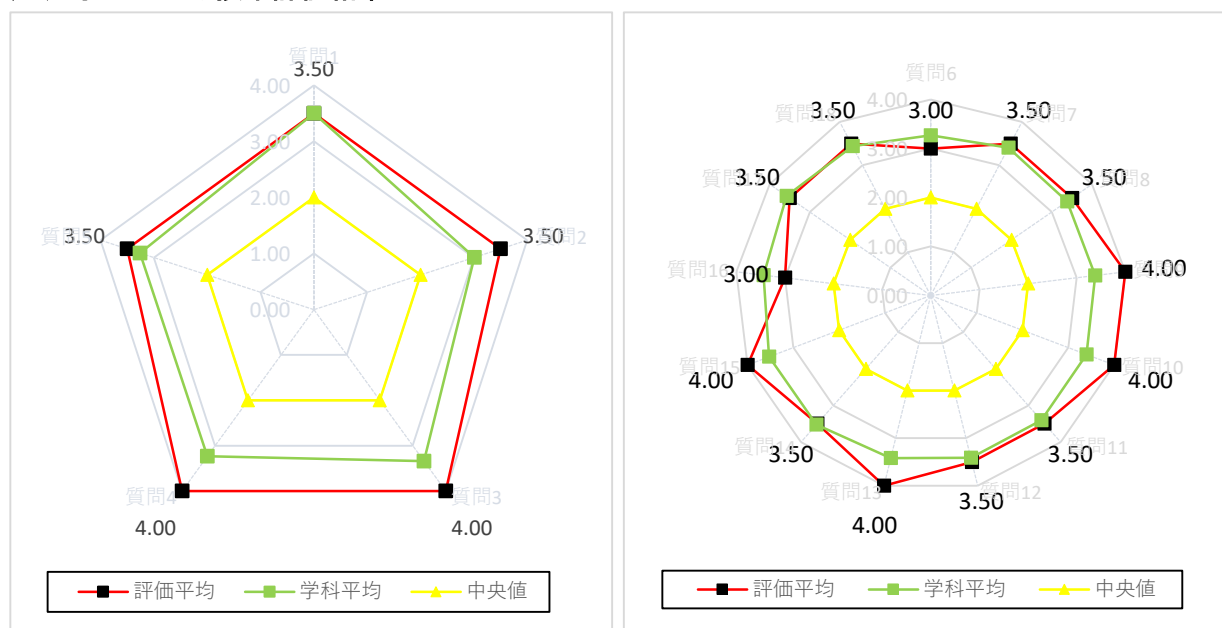
(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も概ね同じような形式で進めていく予定である。すでに仮のテーマを設定し、先行研究についてもある程度深め、ゼミ全体で中間的な発表も行っている。

今後は、学生が自らの「卒業論文」に対して主体的に取り組み、無理のないスケジュールで完成に至ることができるよう支援していきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	4名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

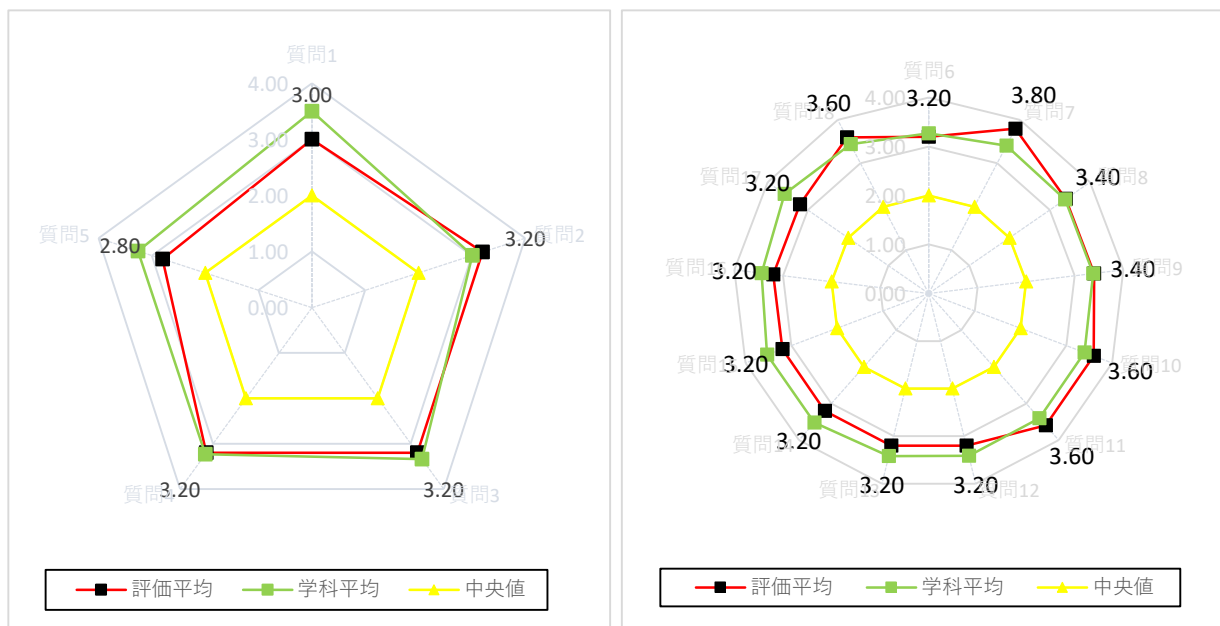
2名の回答であるため、結果の妥当性が疑わしい。授業評価の質問16の双方向的なやり取りの評価が3.0であった。これ以外の項目は3.5または4.0であり、学科平均より高い評価であった。卒業研究では学生の考え、意見に応じて、授業者のコメントを与えたつもりであったが、2名の評価学生共に「ややよい」の評価に止まったのは、謙虚に反省すべきである。より学生の考えを聞き、引き出す対応を心がけたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生の考えをよく聞き、考えを引き出す対応を心がけたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	5名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

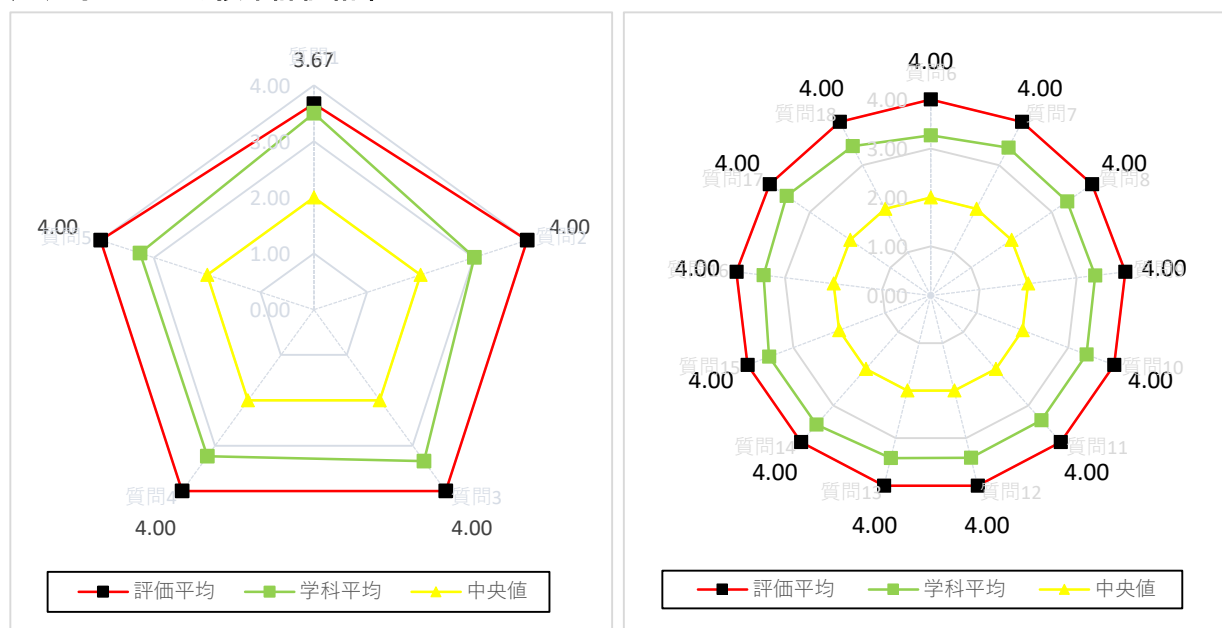
前年度評価の低かった問6のシラバスの説明については、授業計画表を作り、学生が見通しをもてるようにしたことで、少し改善され、学科平均までになったと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

どの項目もほぼ学科平均と同じ数値になっているので、さらなる向上に向け、卒業研究に対する目的意識を高めるとともに、見通しをもてるように計画的に授業に取り組んでいきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナールⅡ	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

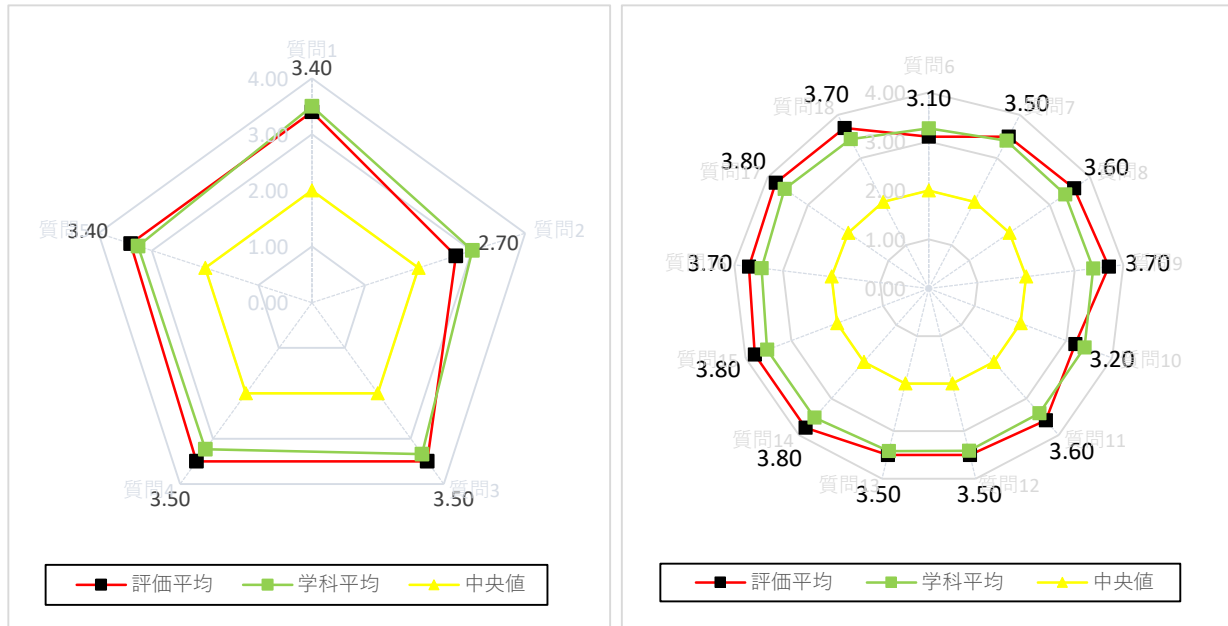
8名中3名の評価であったが、すべて4点という高評価であった。前期は文献講読、図書館による文献検索を徹底し、後期は各自のテーマで文献講読と要旨の発表を繰り返して積み上げていった。このなかで、確実に歩みを進めるものもいれば、休みがちで少しずつしか進展しなかった学生がいて、学生の進度に個人差があることは否めない。教員としてはどの学生に対しても公平に対応したつもりであるが、進度の個人差については今後の検討課題である。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も今年度同様の授業の進め方をしていきたい。学生の進度に大きな開きが出ないように、欠席をいかに防ぐかが課題である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

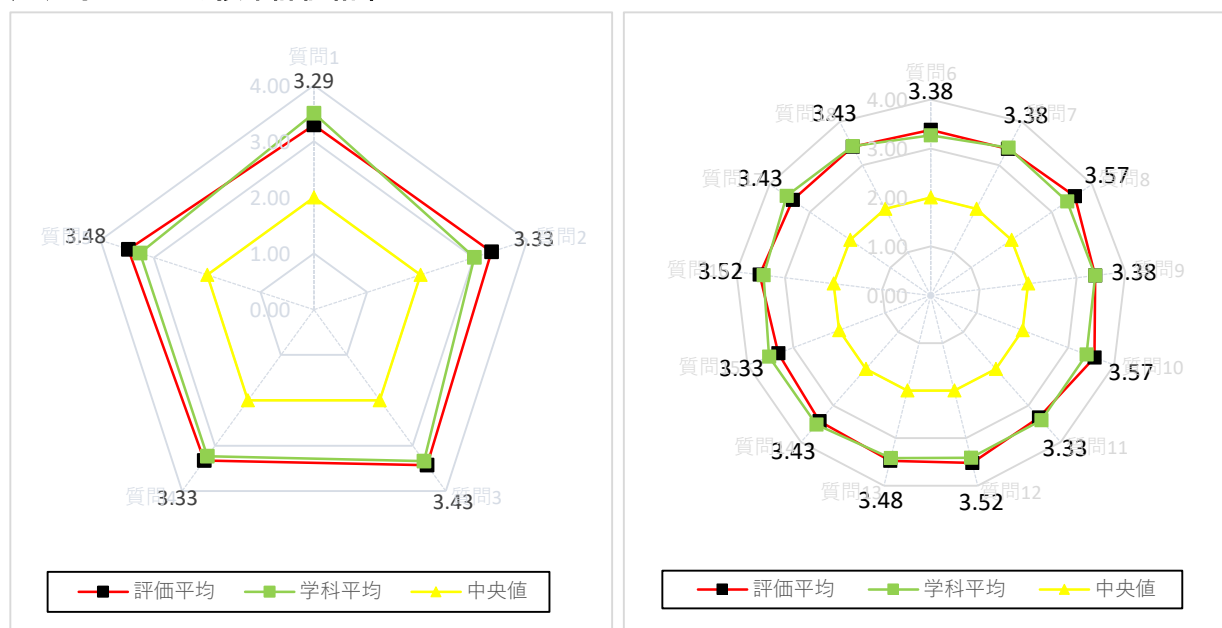
おおむね学科平均を上回る得点であった。
シラバスの利活用について、改善が必要である。

(3) 次年度に向けての取り組み

シラバスの利活用を、学期スタート時点で指導する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 子ども学部	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉		教職論	41名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

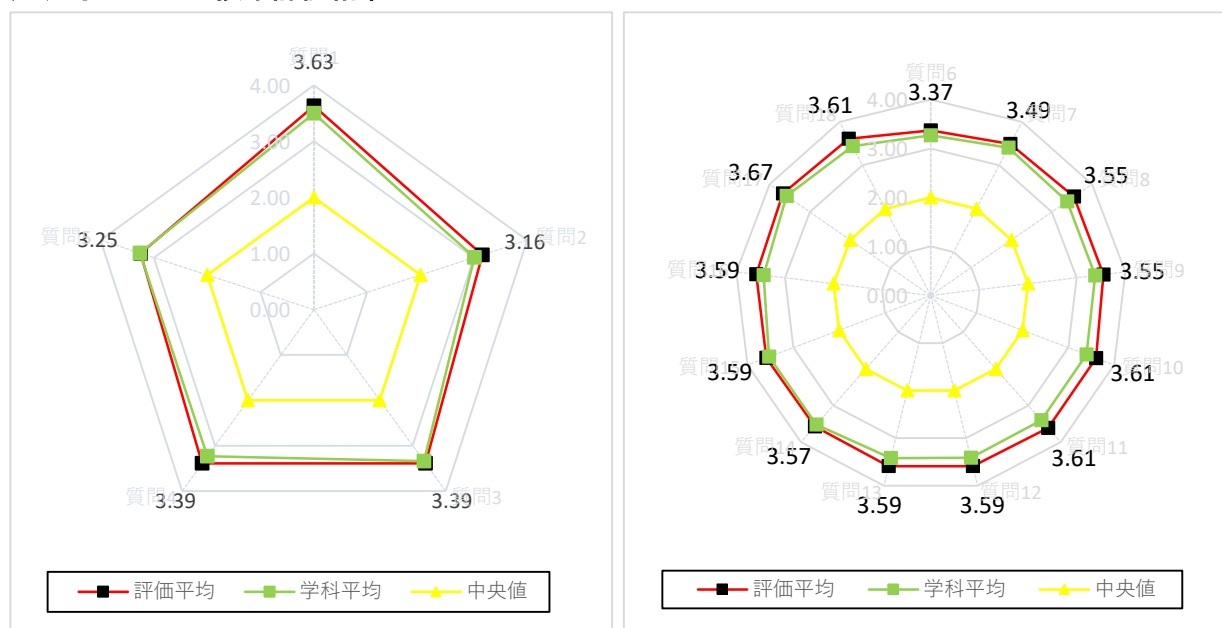
今年度はこれまでやっていなかったグループワークを導入しました。大人数の講義型でグループワークはやりにくい部分がありましたが、学生の学びを深められたと考えています。また、ワークシートの添削にも力を入れました。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は今年度よりも受講生が増えるので、さらに授業方法に工夫が必要かと思います。それぞれの学科の学生の特性に合った（最大公約数の）ような授業づくりを心がけたいと考えています。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		特別支援教育論	87名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本科目は、特別支援教育に関する基礎的事項について学修する科目であり、障害のとりえ方や特別支援教育の理念・制度・教育課程・教育的支援等について理解し、障害児（者）に対して共感的態度を持ち、教育・保育の実践者としての専門的スキルや実践力を向上させることをねらいとしている。今期は87名が履修した。

項目ごとの評価平均点は、どの項目も学科平均点を上回る結果で、おおむね良好な授業の展開ができていたと考える。

シラバスについては、初回の授業で説明したが、質問6の結果が他の項目より低く、より丁寧な説明等が必要であったかもしれない。

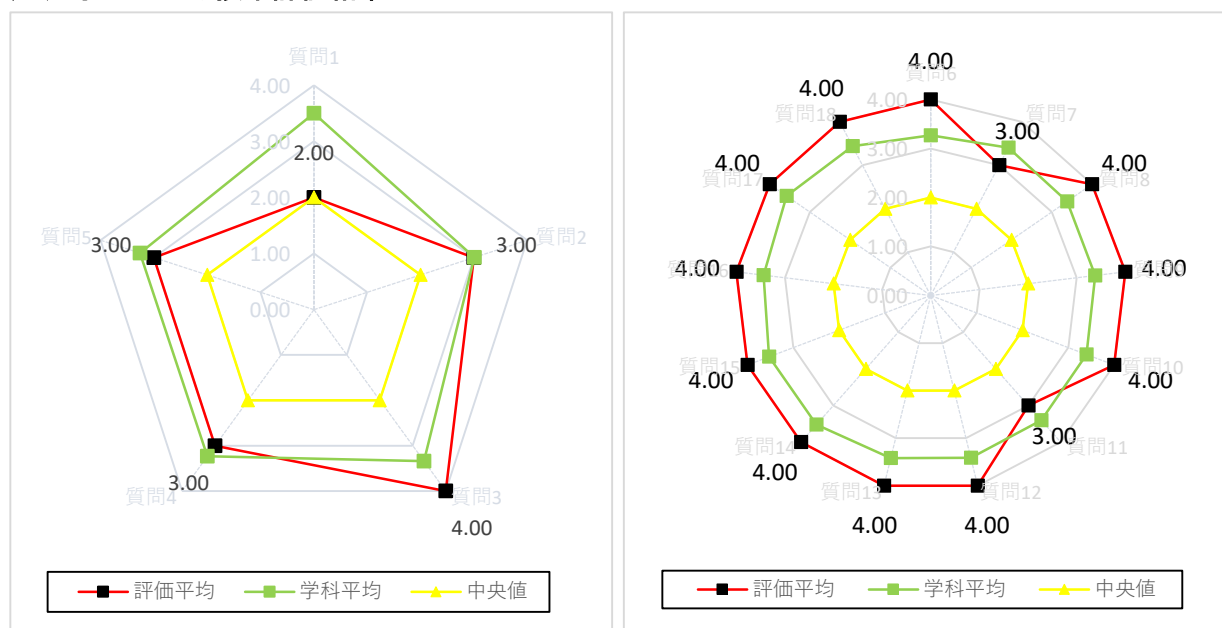
また、このアンケート結果とは別に、映像コンテンツを用いた授業が分かりやすかったとの学生の感想があり、特に1年次で障害のある子どもの教育について初めて触れる学生にとっては、理解を深めやすかったものと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

※カリキュラム改訂により、次年度以降開講されない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		発達障害教育論	3名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率 (2/1、50%)、自由記述なし。

本授業は、発達障害に関する基礎的知識や、その特性を理解し、支援方法について考えることを目的とした。

受講生が2名であり、回答者は1名のみであった。

質問1～5については、4年生の開講科目ということもあり、保育実習、教育実習での欠席のため、質問1の評価が低くなっている。

質問6～18については、質問7、11以外は4の評価を得た。質問7の到達目標の明確化については、毎回の授業でワークシートに示していたが伝わりにくかったと思われる。また、質問11の配布資料について、教科書は使用せず、毎回パワーポイントの資料を使用したため、提示資料と配布資料に差があったため、低い評価となった可能性が考えられる。

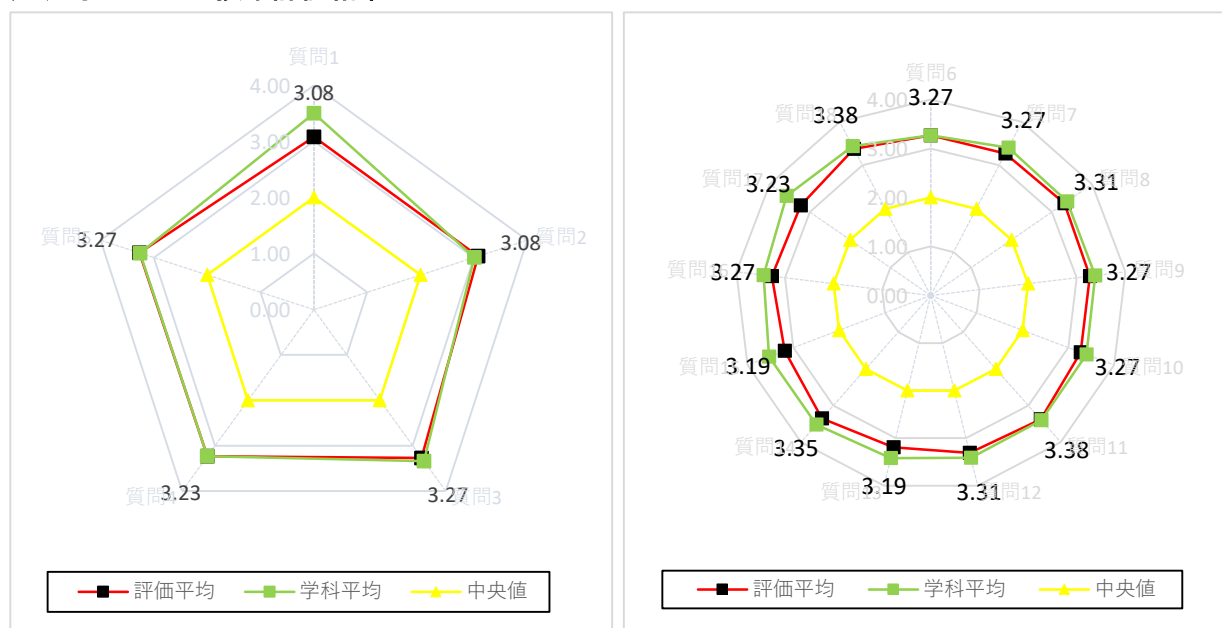
(3) 次年度に向けての取り組み

授業毎に、到達目標を明確にして授業を展開する必要がある。

配布資料については、穴埋め式にするなど、授業のポイントがわかりやすいような活用を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 子ども学部	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉		教育制度論	54名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

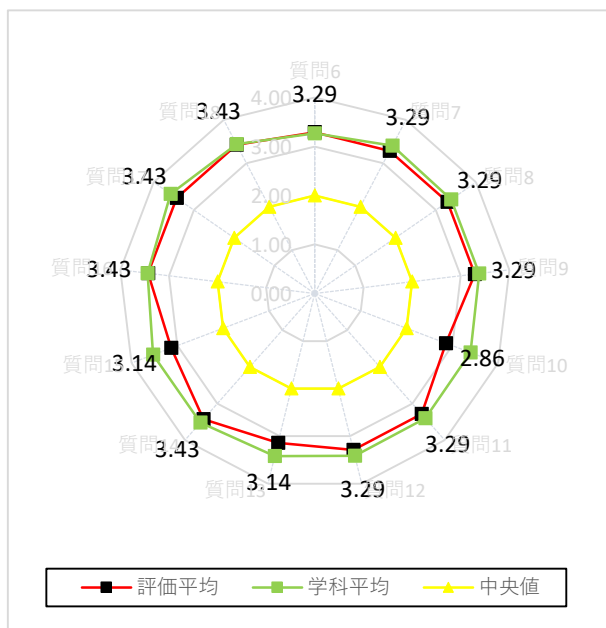
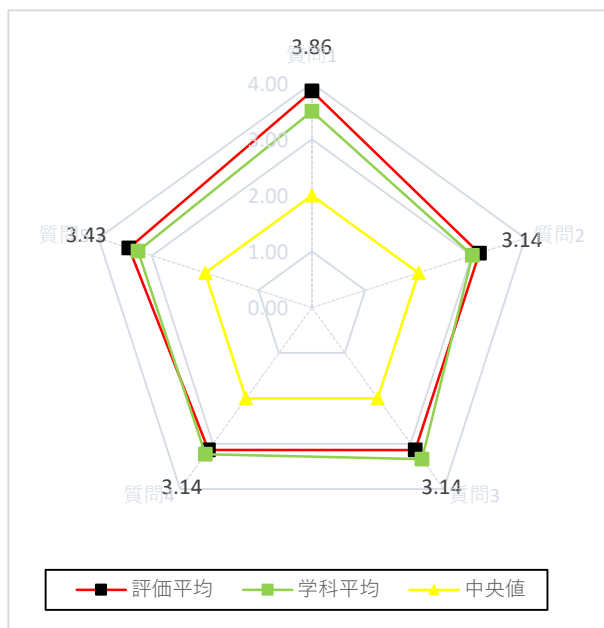
今年度はこれまでやっていなかったグループワークを導入しました。大人数の講義型でグループワークはやりにくい部分がありましたが、学生の学びを深められたと考えています。また、ワークシートの添削にも力を入れました。私としては授業準備や添削などにかなり時間をかけて力を入れているつもりですので、公平性と熱心さの評価が低いことに関しては理由がわかりません。次年度の授業を進めながら、原因を見つけて改善策を考えてみたいと思います。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は今年度よりも受講生が増えるので、さらに授業方法に工夫が必要かと思います。それぞれの学科の学生の特性に合った（最大公約数の）ような授業づくりを心がけたいと考えています。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康栄養学部 健康福祉学部 子ども学部	健康栄養 社会福祉 スポーツ健康福祉		教育課程論	41名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

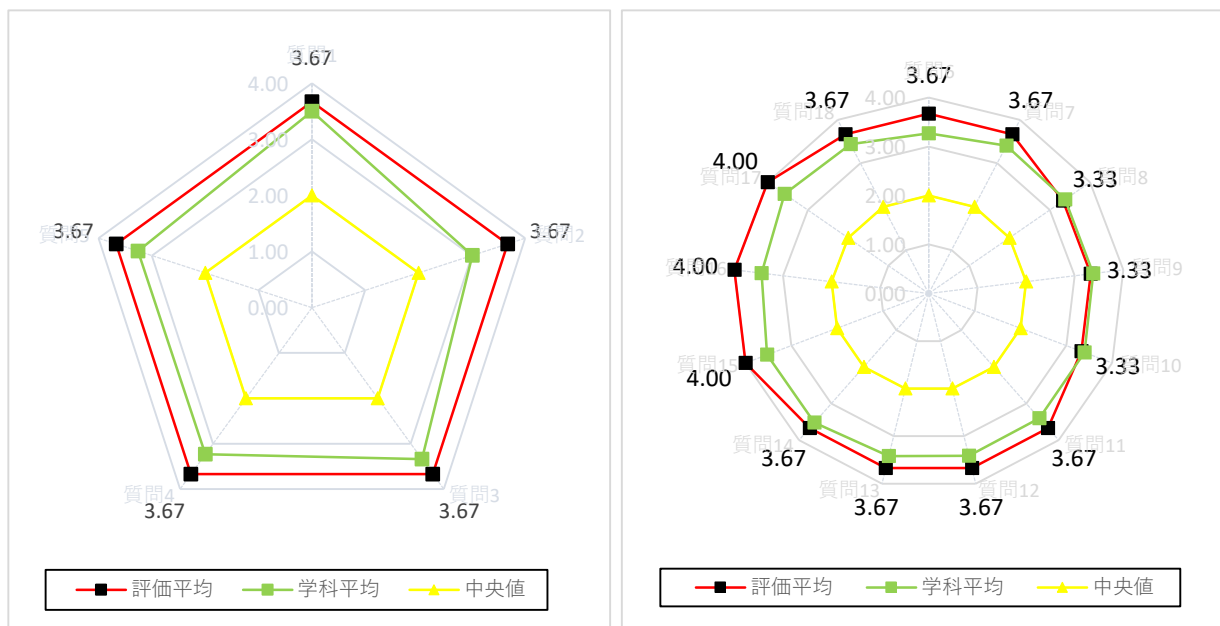
回答者は41名中7名である。全般に、自己評価も授業のやり方についてもまあまあの評価である。学生の授業参加の評価はよく、授業のあり方もある程度の水準を確保できたように思う。学生はまじめによく授業に参加した。人数も多くなく、大変楽しい授業であった。学生の授業への協力を得られたことが何よりであった。専門や興味の大きく異なる学生への授業であるため、どこに照準を合わせるか、苦勞した。それにしても良い評価をもらったと思うので、自己省察を厳しく行っていくようにしたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

今後も、複数の学科の学生を対象に行う授業であることに配慮して、学生の主体的な参加を中心に、学生と協力・協議しながら、授業のやり方を工夫していく。また、学生との信頼関係の構築にも努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子どもの支援Ⅰ（基礎・実習）	10名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

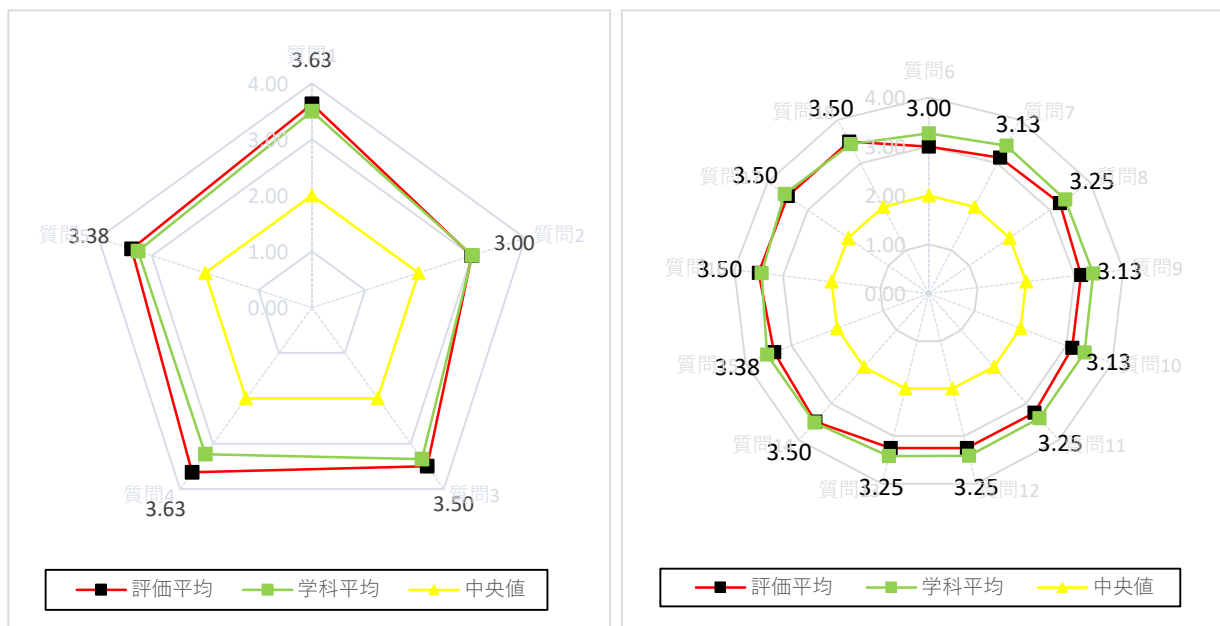
回答率をみると、10名中3名の回答で30%であることが大きな問題である。その上で、本授業への授業評価を行った学生について、総合評価は3.67であり高い評価であり、概ね充実した学びとなったことが窺える。

（３）次年度に向けての取り組み

受講生全員が授業評価を行うよう、あたためて、授業評価の意味、意義も伝え、学生の学びのモチベーションを高めていきたい。回答率の目標として100%を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康福祉学部 子ども学部	社会福祉 スポーツ健康福祉 心理カウンセリング		教職実践演習（中・高）	25名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

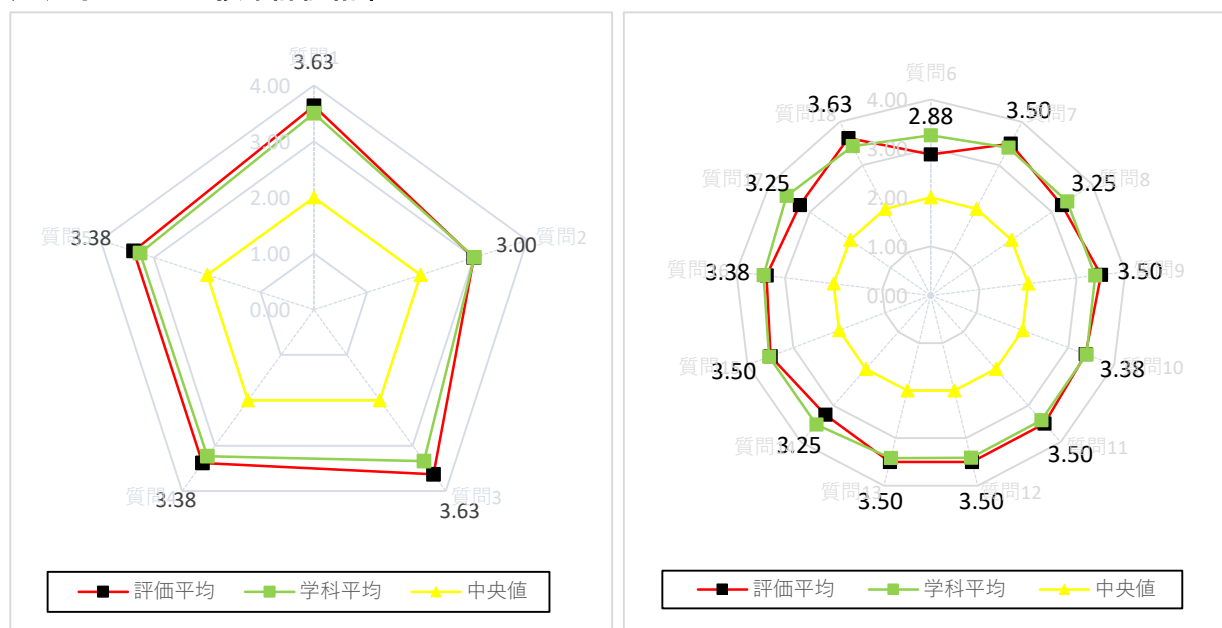
複数の教員で担当しているため、個別の評価を把握しにくい点がありますが、教職を目指す学生に必要な知識や考え方については、十分に伝え、感じ取らせることができたのではないかと思います。

（３）次年度に向けての取り組み

学生のニーズを具体的に把握し、そのニーズに合った情報や知識を高めることができるような授業づくりに努めたいと思います。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康福祉学部 子ども学部	社会福祉 スポーツ健康福祉 心理カウンセリング		教育実習事前事後指導	25名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

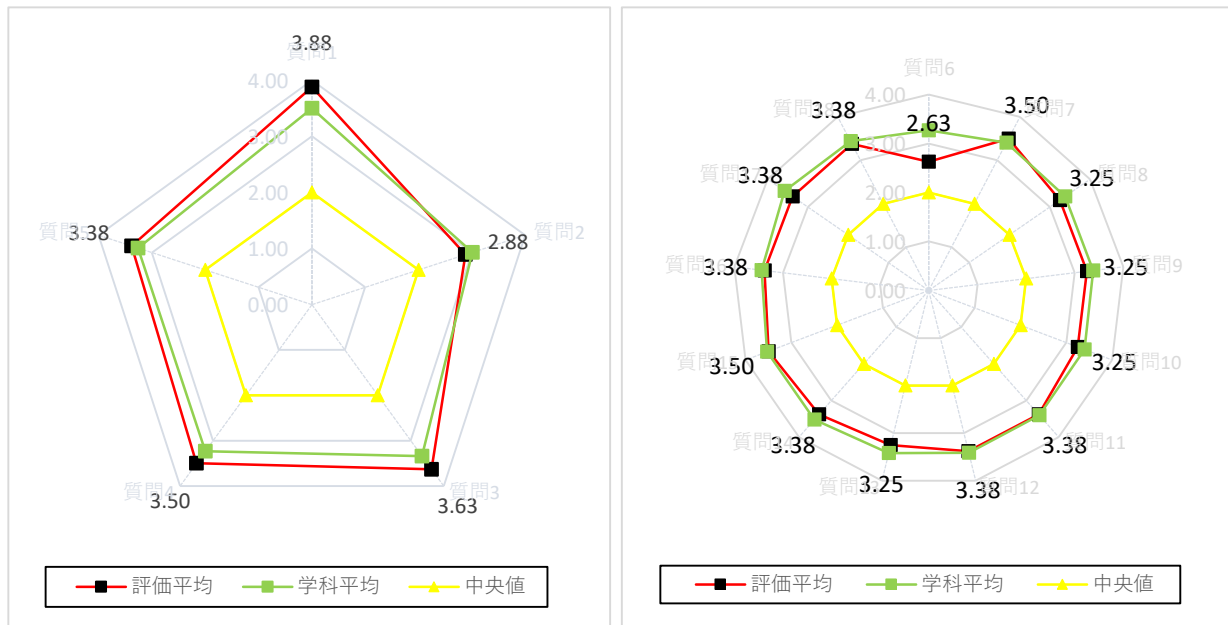
教育実習事前事後指導は、教育実習に向けての心構えを身に付けさせるとともに、実習の総括をする授業です。授業計画の説明の評価が低いところは反省すべきです。今年度は事後指導においてキャンパスを分けたり、3年生を参加させたり、授業をかなり効果的なものに改善できたと考えています。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業の全体像をもっと明確にしていきます。今年度うまくいった方法も次年度も継続していきます。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
健康福祉学部 子ども学部	社会福祉 心理カウンセリング		教育実習（高）	11名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

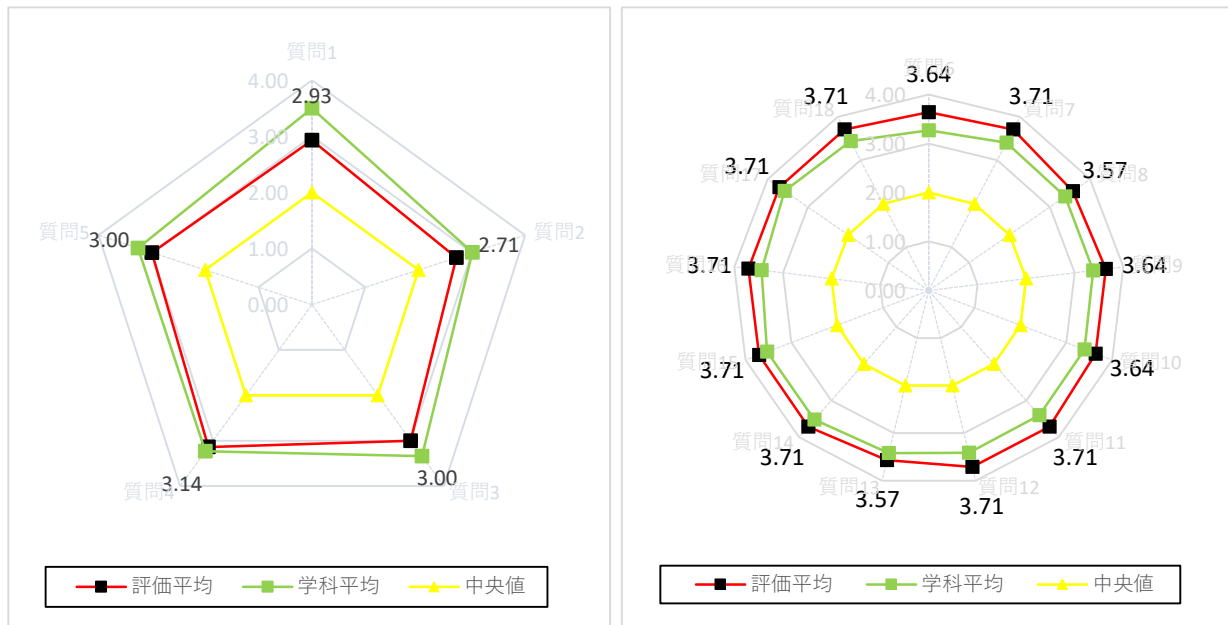
実習科目につき、この授業評価の項目は適さないと考えています。

（３）次年度に向けての取り組み

実習科目につき、この授業評価の項目は適さないと考えています。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		肢体不自由者教育	15名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

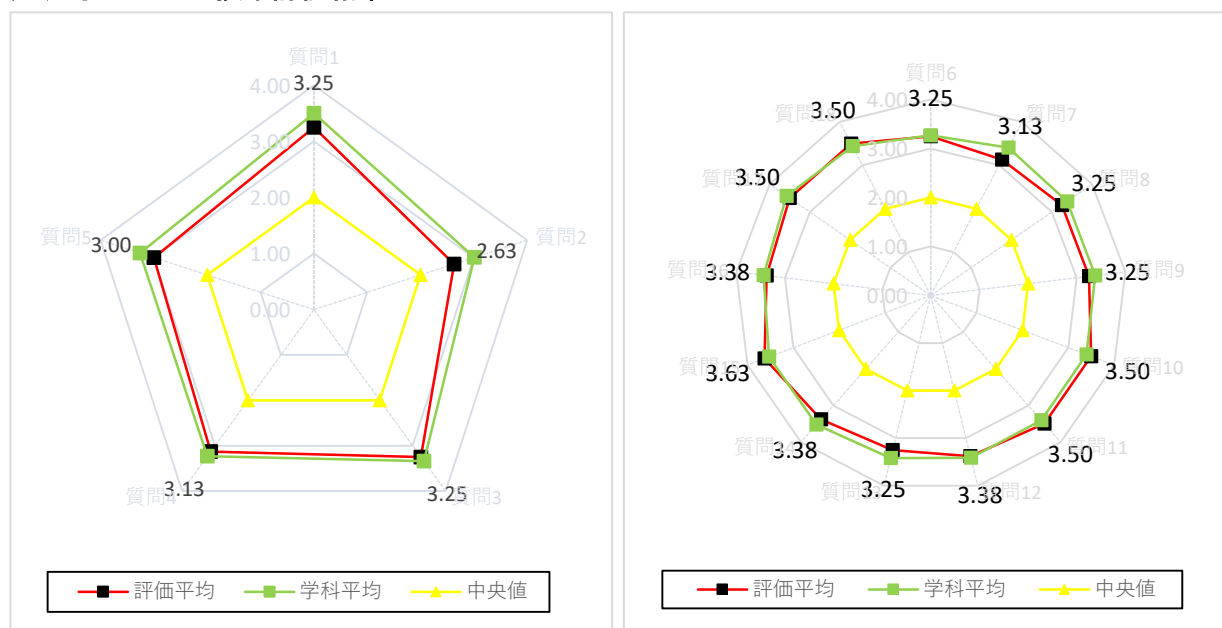
すべての項目で、学科平均を超える得点であった。
 学生の多くが肢体不自由の子供とかかわった経験がないため、ビデオ等で視聴覚機器を活用して授業を展開したが、理解が十分とは言えなかった。
 実際の授業等の見学や体験学習を展開していった方が良い。

(3) 次年度に向けての取り組み

実際に特別支援学校の授業の見学等を入れていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		知的障害者教育	27名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本科目は、特別支援学校教員免許状取得のためには必修の科目であり、知的障害の特性や知的障害児の教育の歴史、現在の特別支援教育における知的障害児の教育の現状と教育課程、自立活動の現状と課題、重複障害児の教育、キャリア教育や進路指導等について理解を深めることをねらいとしている。今期は27名が履修した。

項目ごとの評価平均点は、ほとんどの項目で学科平均点と同等かこれを上回っていた。質問6～18の平均は3.38であり、おおむね良好な授業の展開ができていたと思われる。

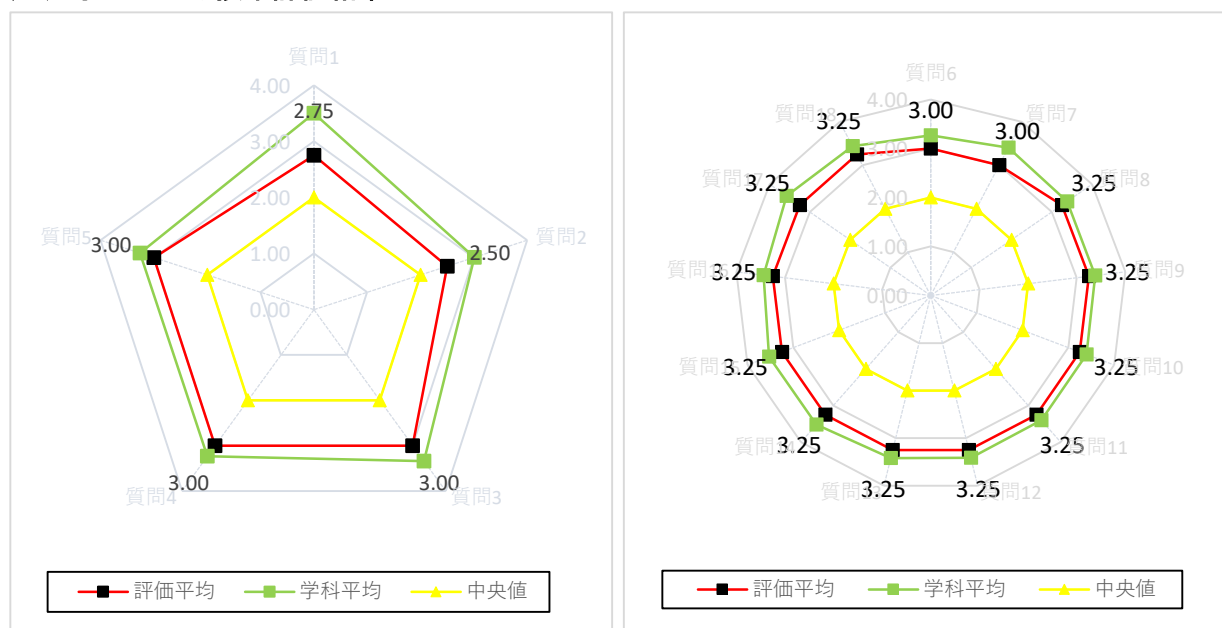
質問7は3.13で学科平均点を下回った。授業ごとのねらいを明確化し、その授業でどのようなことを学ぼうとしているのかについて、学生がより理解しやすいような工夫が必要であった。すべての授業でパワーポイントでプレゼンし、それを配布したことにより、質問10、11がいずれも3.50と評価が高くなったものとする。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ・ 授業ごとのねらいや学習内容を明確に学生に伝える工夫
- ・ 教科書以外の配布資料の作成と工夫

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		肢体不自由者教育の理論と実際	19名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

オムニバスの授業で、後半が集中講義のためか、学生の授業評価が19人中4名のアンケート評価であるため、結果の分析ができづらい。

授業計画については最初に示していたが、実際にワークショップで授業を展開したため、授業が予定通り進まなかった。

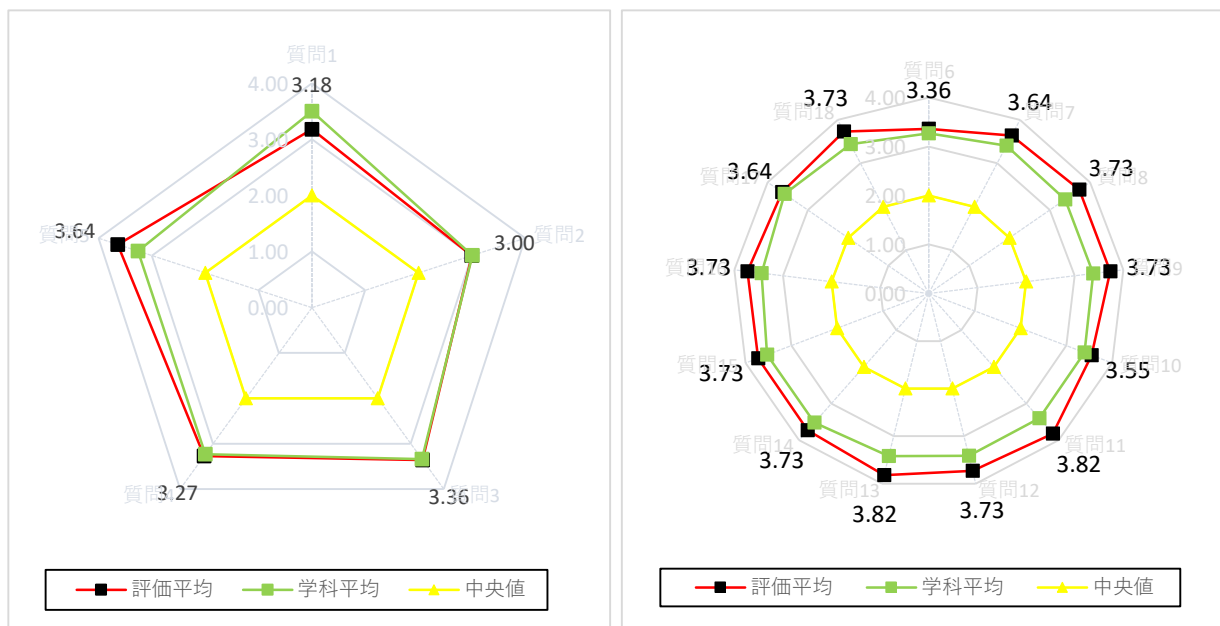
自立活動の個別の指導計画を作成する作業を進めたが、経験がなく内容が理解できず進まなかった。

(3) 次年度に向けての取り組み

実際の具体的な指導事例等をし、視聴覚機器を活用して示しながら、授業を展開していく必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育（応用）	14名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

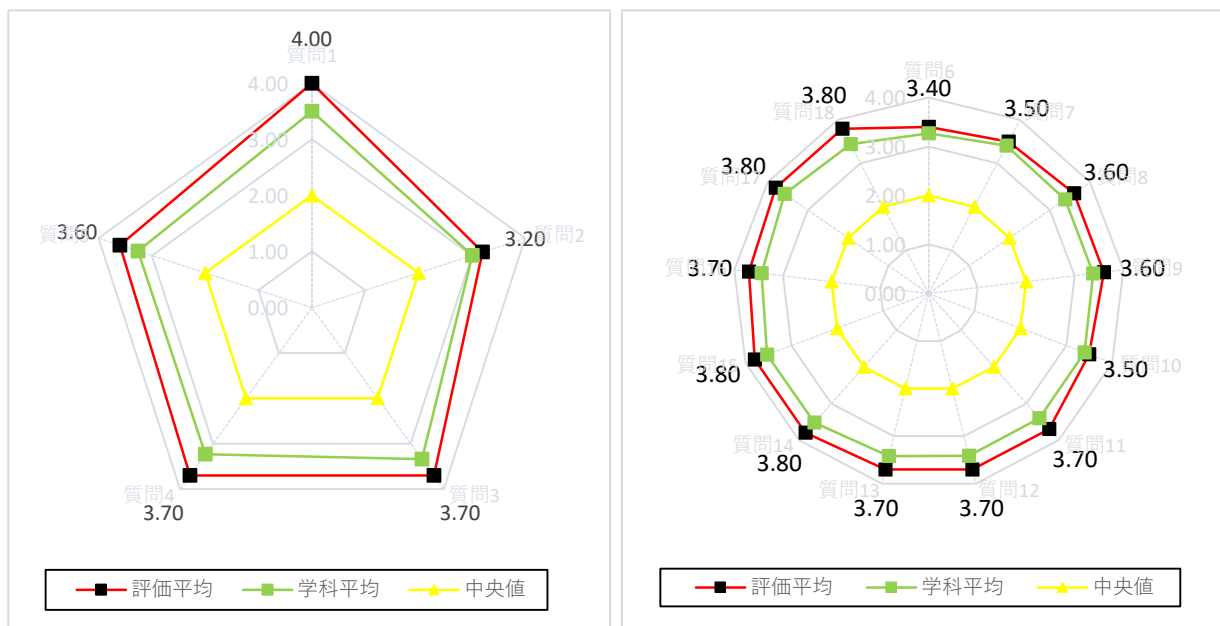
質問の項目 6 から 18 に関しては学科平均より高く、概ね高得点である。質問 6 のシラバスについては説明不足であったため、質問 7 の得点もやや低いものになっているといえる。

（３）次年度に向けての取り組み

シラバスの説明をより丁寧に行い、到達目標や授業を通して身に付けたい力等を意識させながら授業展開を行っていききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		特別支援教育実習事前事後指導	11名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

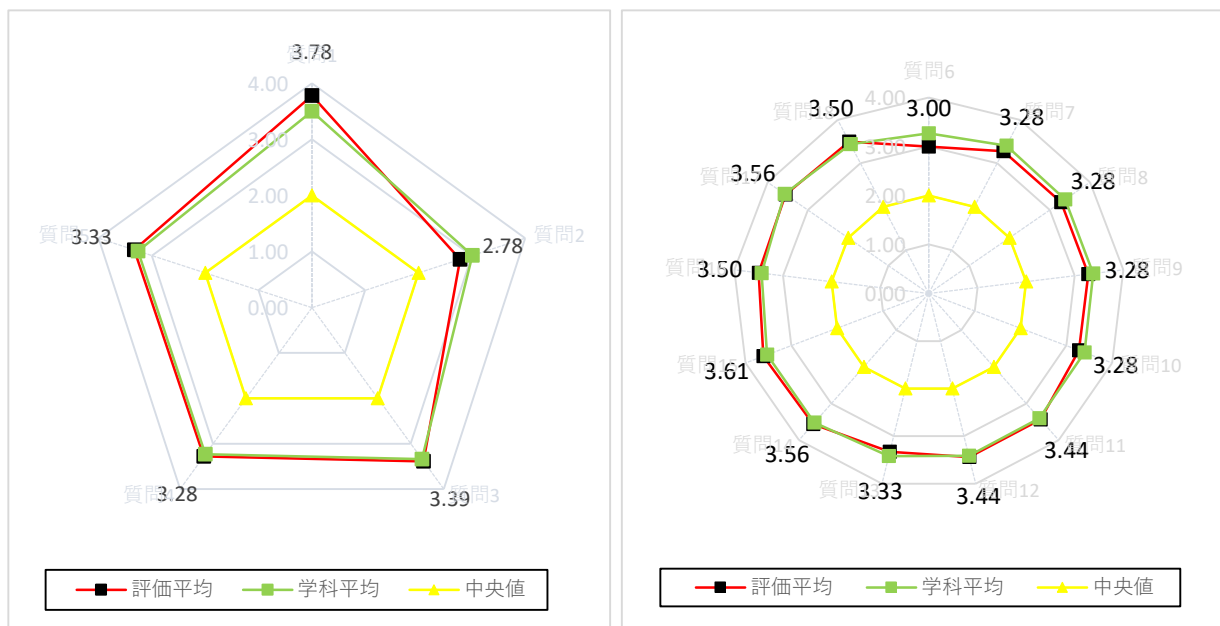
すべての項目で評価点が高く、評価平均も3.67であった。経験のない特別支援学校での教育実習に対する不安感もあり、意欲的に取り組んでいる。
学習指導案の作成については、個別に時間をとって指導を行った。

(3) 次年度に向けての取り組み

特別支援学校での教育実習に対する意識を高める必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		特別支援教育実習	21名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

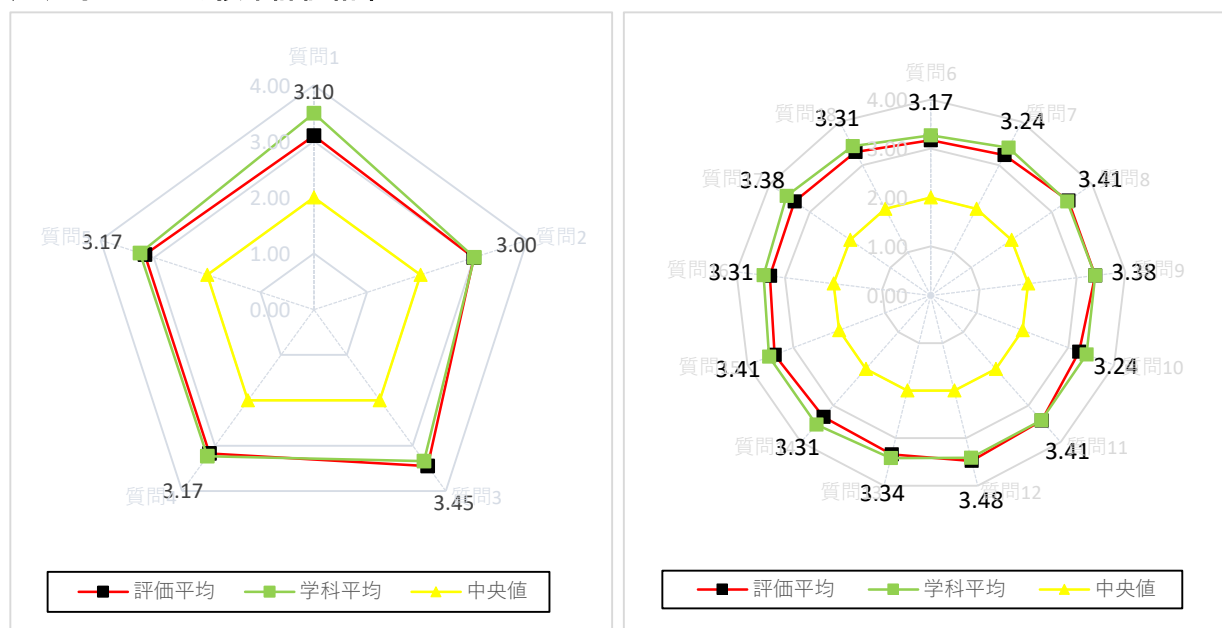
教育実習に対する評価は、学校現場での評価になると考えますので、ここでは評価を控えます。

(3) 次年度に向けての取り組み

特別支援学校での教育実習生が増えていきますので、実習先の確保が困難になってきます。そのため、実習先で意欲的に取り組んでもらうため、心得等を事前事後指導でしっかり指導していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽表現指導法	65名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

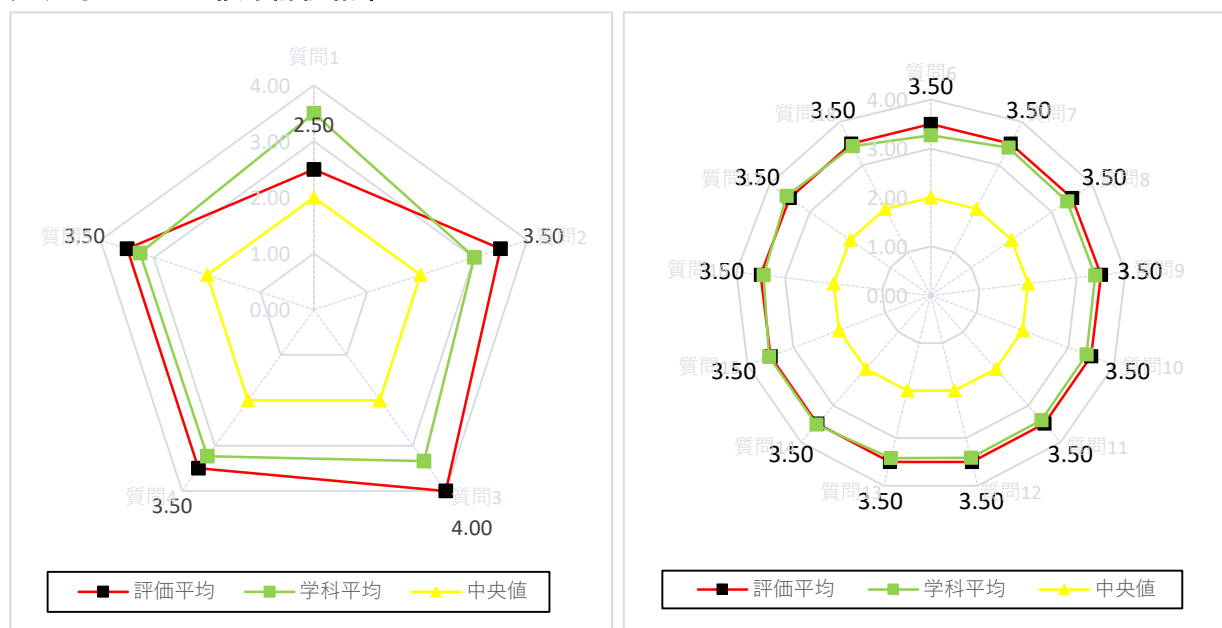
学生からの授業評価のグラフを見ると、極端に落ち込んでいる項目はない。次年度以降は、このグラフ形態のままバランスよく各項目の数値を挙げていきたい。授業で使用しているテキストは、全国大学音楽教育学会の九州地区の会員によって編集されたものである。したがって、テキストで取り扱っている内容は、保育者及び小学校教諭の養成課程で学ぶ学生の実態を踏まえた内容となっており、それを学習するための練習問題等の課題が組まれていることから、学生の評価からも使用しているテキストに関しては、特に問題は無いと思われる。学生によっては聴きなれない専門用語も多々あるため、授業時の声の大きさや話す速さは注意を要するが、音楽室にはマイクが常設されており、授業者側としても声を届けやすい環境が整っていると感じている。

(3) 次年度に向けての取り組み

例年、高等学校で音楽科の授業を履修していない学生が多数入学してきているが、このような学生の人数は増加傾向にある。したがって次年度も、同様の傾向が見られる可能性が大きい。この授業で取り扱う内容は、保育現場や学校現場で音楽の指導を行うために必要となる音楽の基礎的知識である。このことを踏まえ、授業を開始する時点で早急に学生の実態を把握し、それに応じた適切な指導を行っていきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語科演習	24名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

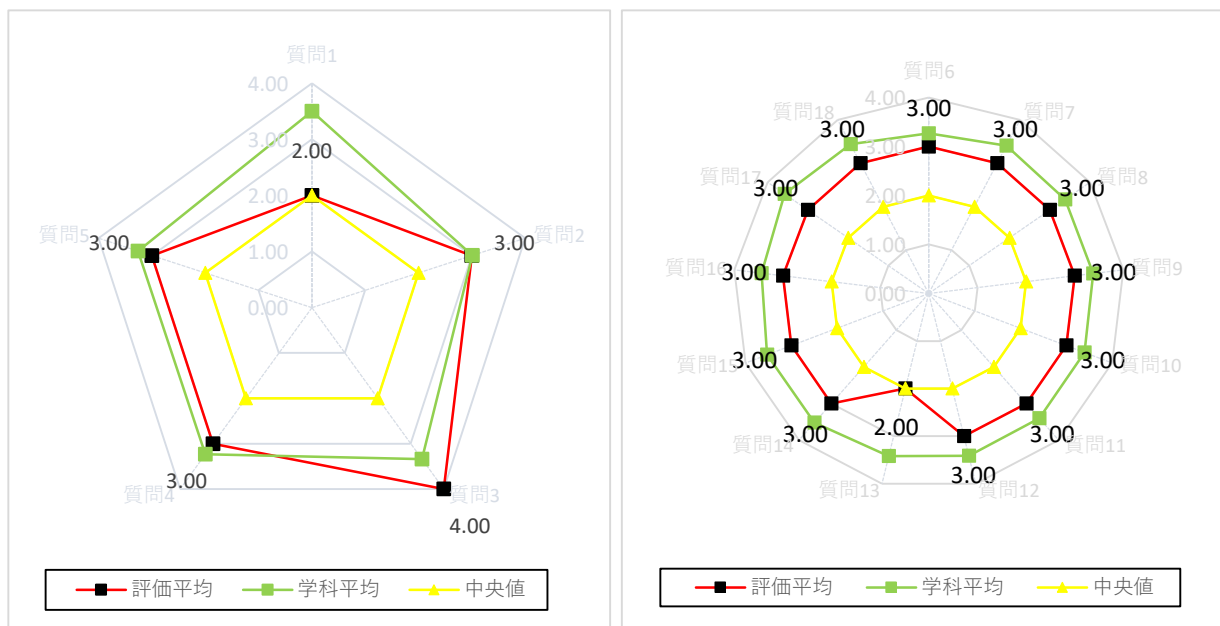
国語科指導法を受けて、演習主体の授業に心がけてきた。教材研究の具体的な方法、効果的な板書の仕方、教材の特性に応じた導入の工夫、発問や評価の工夫など、学生のニーズに応える授業を展開することができた。自身の学校現場での授業例や、教材研究の具体例などを紹介することで、受講生の意欲がとても高まった。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度以上に国語科指導法とのつながりを考慮した授業展開に努めていきたい。それは、国語科指導法で扱った指導に関する理論や方法を「国語科演習時にいかに活用していくか」という課題意識を受講生自身にはっきりと持たせていくことである。国語科指導法が2年次の前期、国語科演習は3年次の後期と、開講の時期が離れているので、本科目の前に位置する「小学校教育実習指導（3年次）」で経験した「模擬授業の課題や問題点」を学生一人一人にしっかりとつかませた上で、本科目に臨ませるように努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会科演習	20名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

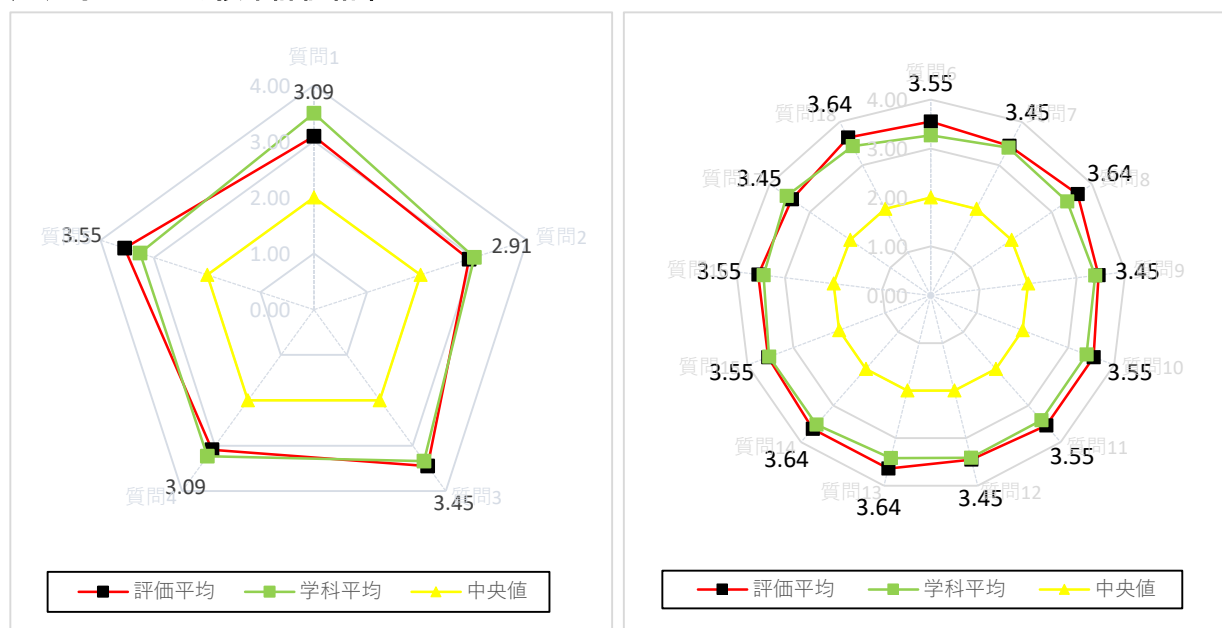
前年度からすると学科平均か、それを上回る項目もでてきたので、少しずつではあるが、改善に向けた取り組みの成果が表れていると考える。授業では、四年生時の小学校教育実習にむけた社会科の学習指導案作成、模擬授業実施と事後指導を行っているが、小学校教育実習指導の模擬授業と時期的に前後する学生にとっては負担感があるとする。

(3) 次年度に向けての取り組み

「社会科演習」と「小学校教育実習指導」の模擬授業が前後しないように、学生の授業計画を把握し、時期をずらすなどの配慮をする必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		算数科演習	26名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

2年次までの「算数」「算数科指導法」での学習内容をもとに、算数の授業についての指導案を作成し、模擬授業を実施した。本格的な模擬授業としては他の教科でもあまり行われていなかったこともあり、板書での誤字・脱字、漢字の書き順、机間指導の方法とその意義、といった、基礎的指導方法についての指導・支援が中心となった。授業や指導案作成の前提となる「教材研究」についても触れたが、基礎となる算数・数学に対する基礎学力が不足気味で、授業後の個別指導を何度か行った。

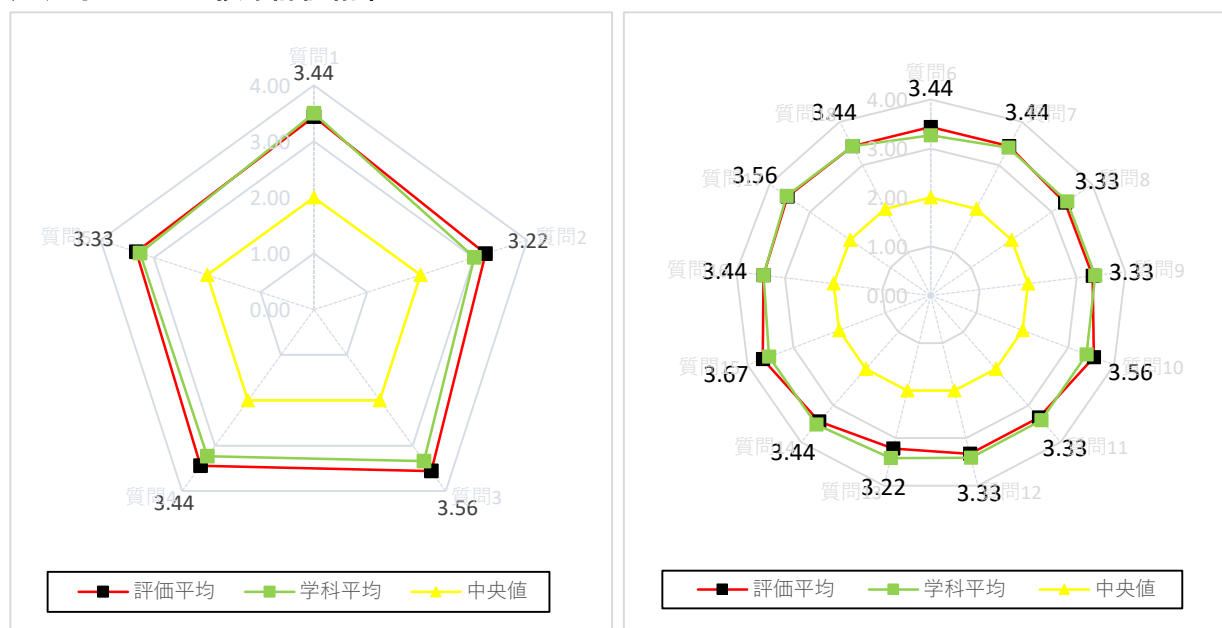
(3) 次年度に向けての取り組み

指導案作成、特に板書計画の在り方について、事前指導を充実させていきたい。模擬授業とその事後指導を密度の濃い者にしていくためには、受講人数を絞ることが必要であるが、現状として受講希望者が多く、各自による模擬授業は、45分のフルバージョンは厳しいものになるかもしれない。

模擬授業を見て、自分の授業校正を振り返ることができるような、アドバイスを行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		総合演習	21名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

卒業研究を意識して、「問いの立て方」、「研究の進め方」、「資料の探し方」を重点的に指導を行った。各自の興味・関心に基づく研究テーマは異なっていた者の、「研究」全般に共通するものとしての指導を行った。

4年生がいなかったため、学生自身もモデルとなる学生が無く、教員としても手探り状態でのゼミではあったが、課題意識や研究に向けての意欲の高い学生が集まってくれたため、レポートの内容としては、まだまだ十分とは言えないが、ゼミでのディスカッションとしては、当初予定していたレベルに近づいたものと思われる。

後期のゼミ活動の中心となった「子どもミュージアム」では、学生一人ひとりの持ち味を発揮して、全体として質の高い「かずやかたちであそぼう」が実践できたものと思われる。参加した子どもの数が少なかったことが残念であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

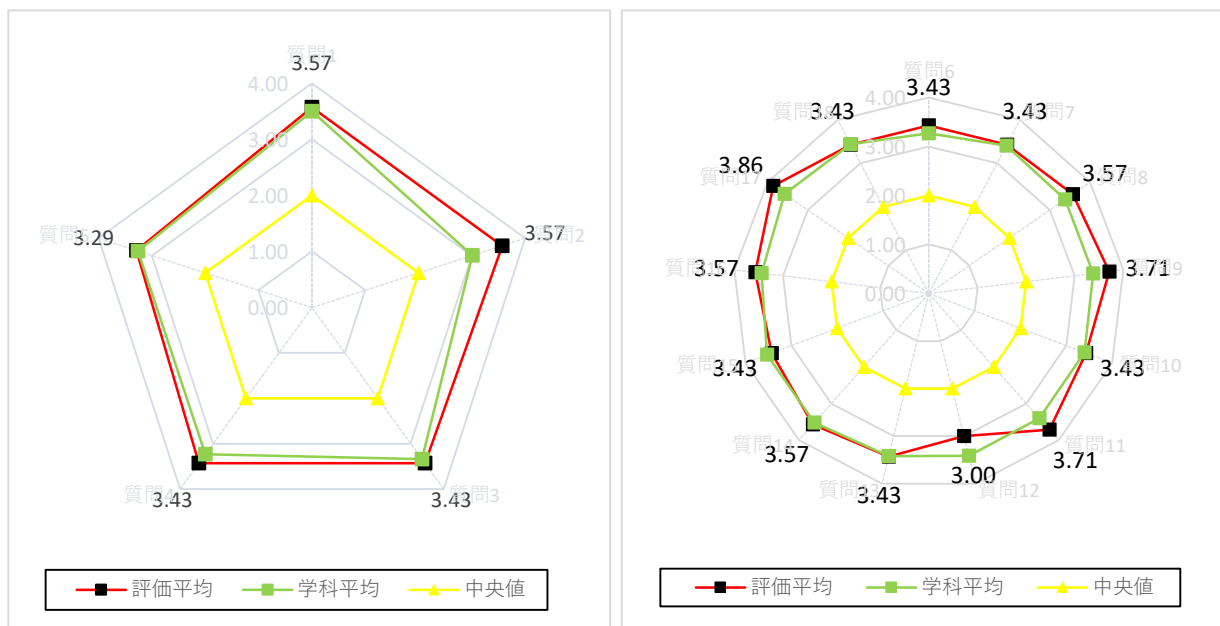
4年生の卒業研究と歩調を合わせながら、「問いの立て方」、「研究の進め方」などについては、モデルとなる4年生を活用しながら進めていきたい。

前期は、レポートの作成やディスカッションのすすめ方について、重点的に活動を進めていく予定である。

後期は、4年生の中間報告会に参加して、意欲を高めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		総合演習	18名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

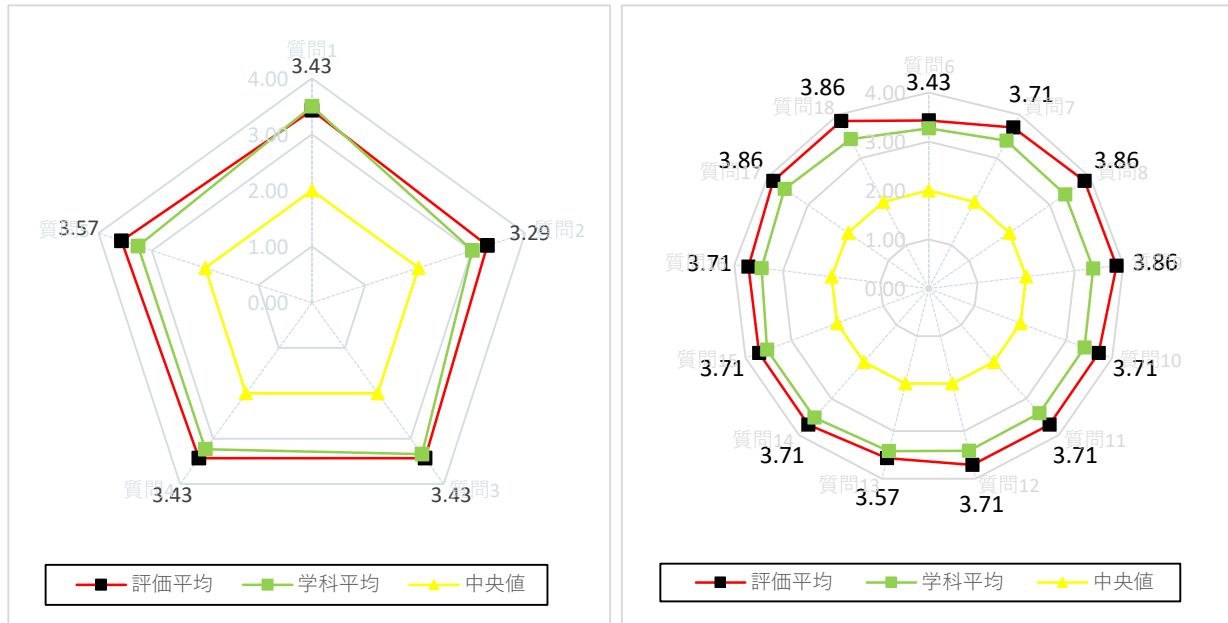
質問12「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか。」以外は、学科平均と同程度以上であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

質問12の改善を中心に取り組んでいきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		総合演習	22名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

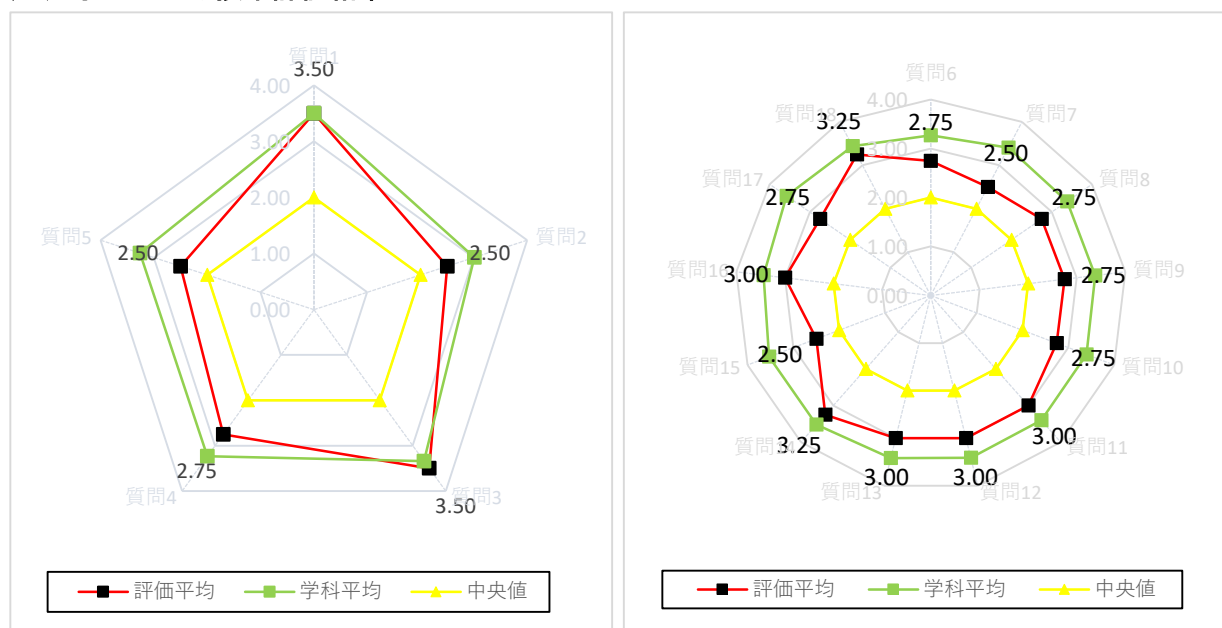
「総合的な学習の時間」の指導方法を研究することを明確にし、地域学習に一環として、「佐賀県の明治維新150年」の教材化に取り組んだことで、学生の興味関心と学習意欲が向上し、どの項目も学科平均を上回ることができたと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も「総合的な学習の時間」の指導方法の研究をテーマに、フィールドワークを取り入れた地域の教材化と学習指導案作成に取り組んでいきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		総合演習	19名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

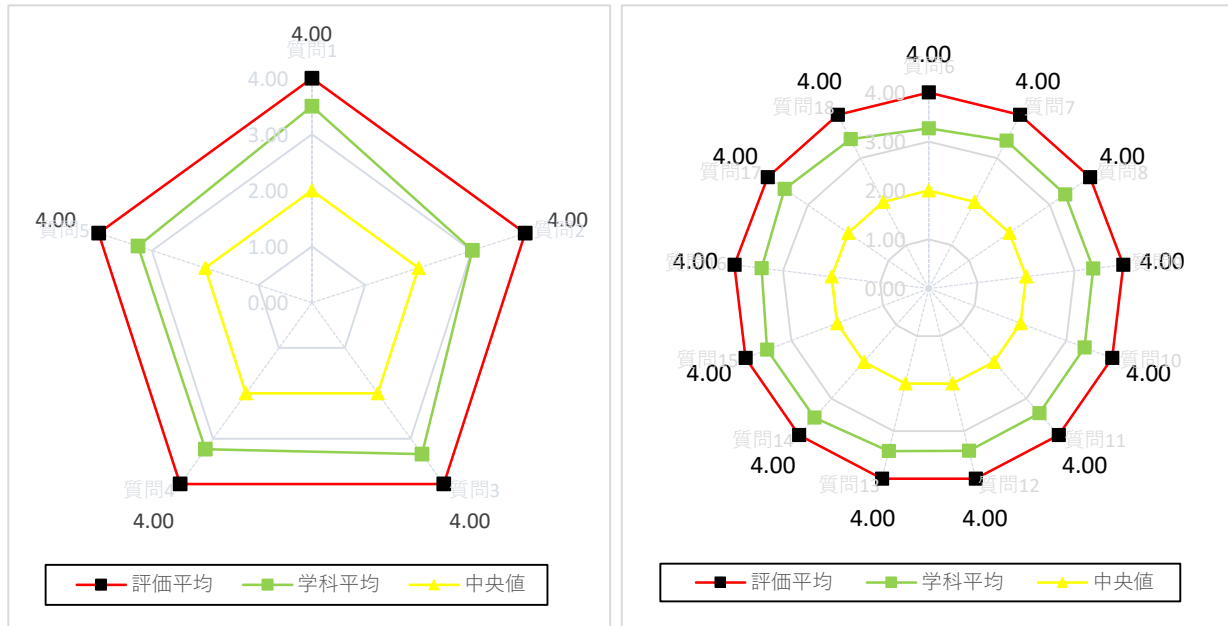
回答者は19名中4名である。回答率が低く、回答内容もばらばらである。参加度の高かった学生から低かった学生まで、4通りである。したがって、平均すると、学生の自己評価がやや低い。授業のやり方の評価もまあまあやや低めである。学生の主体的な参加が重要であるが、出席率など、問題も大きかった。まじめな学生への負担が大きかったことが反省点である。しかし、授業自体は、とても楽しかったそのことの価値も重要である。

(3) 次年度に向けての取り組み

引き続き、学生の主体的な参加を中心に、学生と協力・協議しながら、授業のやり方を工夫・改善していくことが大切である。学生との話し合いを大切にしたい。学生との信頼関係の構築とともに、楽しい授業を目指したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

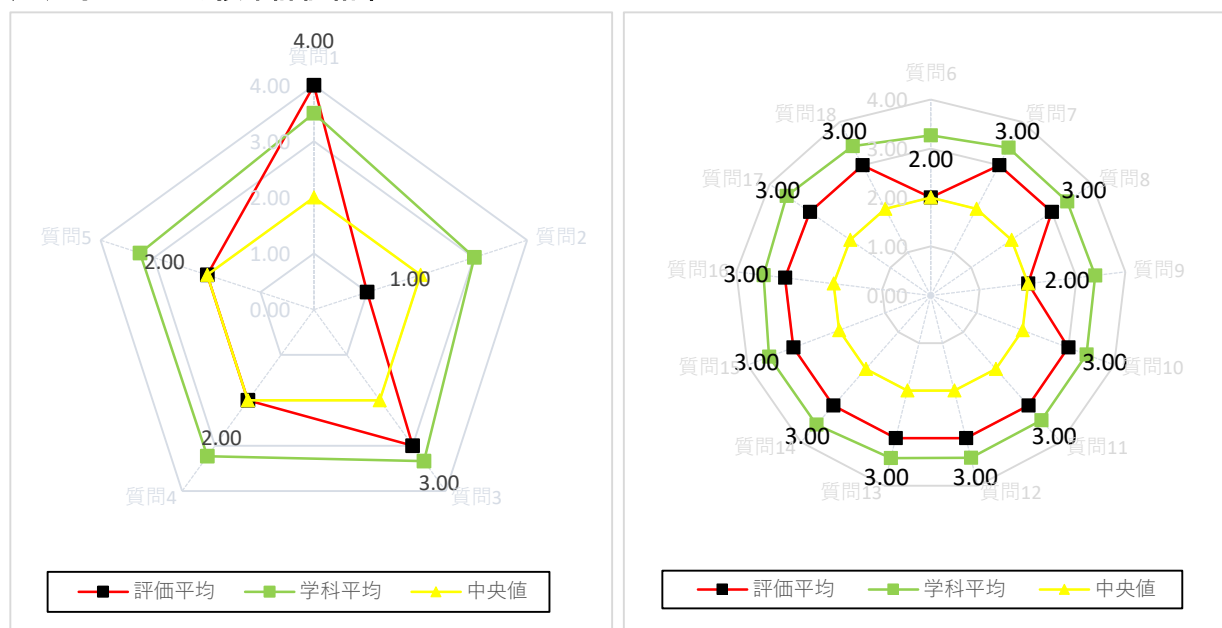
回答は9名中1名であり、結果の分析はできない状況となってしまった。回答者1名の総合評価4.00で、熱心に取り組む姿勢、充実した授業ととらえていることがうかがえる

(3) 次年度に向けての取り組み

受講生全員が授業評価を行うよう、あたためて、授業評価の意味、意義も伝え、学生の学びのモチベーションを高めていきたい。回答率の目標として100%を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	5名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

今回の授業評価については、5名の受講生のうち、1名のみしか回答していないことがそのその問題点であると考え。回答する時間をきちんと定めた上で全員の回答が得られるよう努力しなければならないと反省している。特にシラバスの確認については、さらにわかりやすく説明することが必要である。

現在は卒業論文の仮テーマを設定し、それに基づいた先行研究検索やその内容について検討しレジュメを作成して中間発表を行った段階である。学生にとっては、自分が興味のある分野において自らテーマを設定し文章を書くという経験があまりないため、かなり細かい部分まで指導する必要がある。

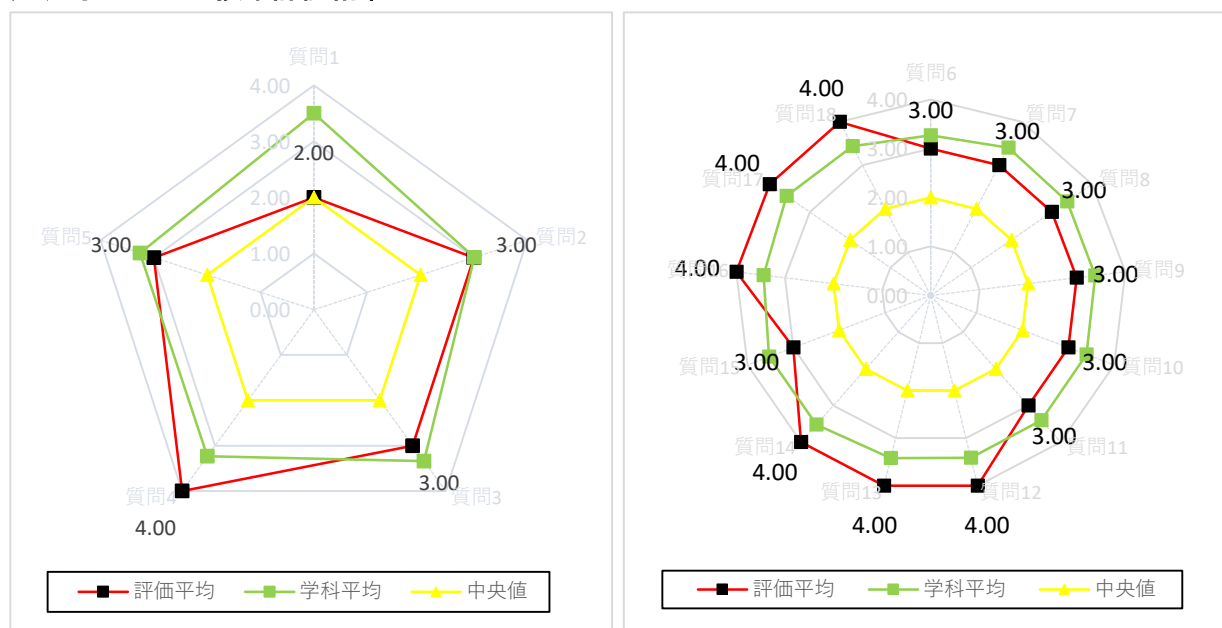
(3) 次年度に向けての取り組み

一人ひとりの学生の状況に応じた細やかな配慮を怠らず、学生が自分の考えをまとめて文章で表現したり、他人に対して自分の意見を発表するスキルを身に着け、4年次の卒業研究に進むことができるようしっかりと指導していきたい。

さらには、それぞれの考え方や研究成果をゼミの学生間で共有できるような時間を設けることも重要であるため、そのような機会を多く経験させていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

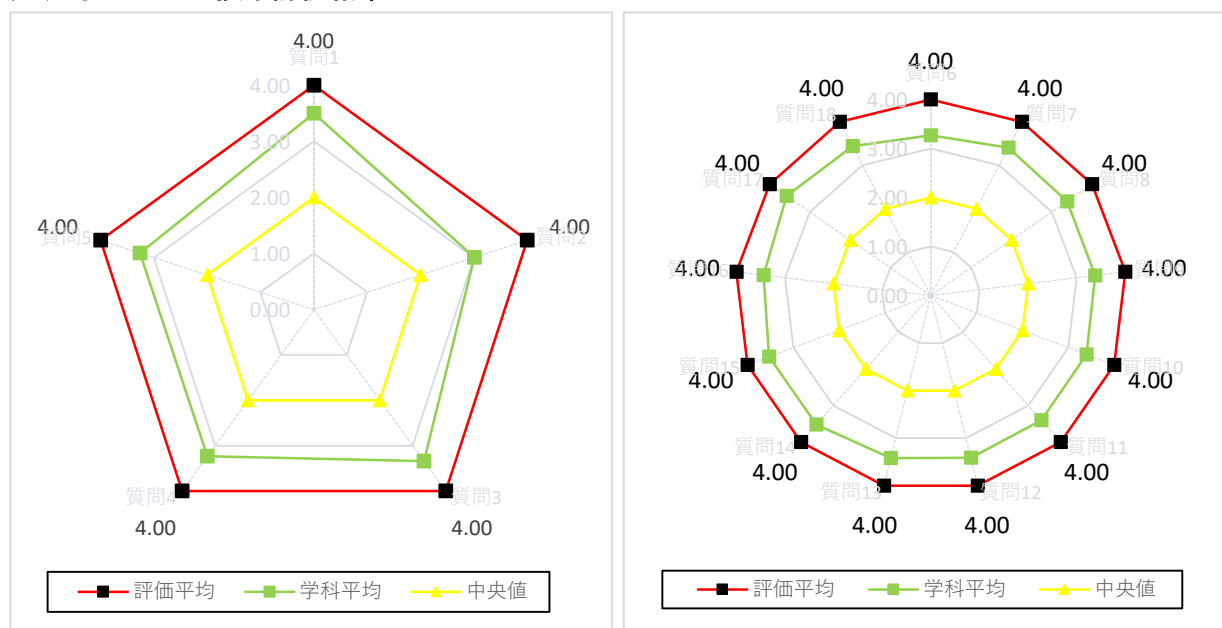
本ポータルサイトでの授業評価者は1名であったが、私自身は、機会を捉えて全員にレポート（紙媒体）を書かせてきた。必ず全員の学習に具体的な評価を返してきた。具体的には、7名のゼミ生全員が同じ文献や資料を読み、自分で気になった箇所や発展学習（調査研究）で学んだことを1,200程度にまとめて提出する。それを授業時に発表し感想を交流する。私も授業の途中や終わりに助言や示唆を与える。その後、一人一人のレポートに朱を入れて次週の授業時に返却するというものである。それを続けてきたことで、学生一人一人が自分の学習を真摯に振り返り、学習の成果と今後の課題を明確にもつことができていた。本ポータルサイトには表れていない真の評価があったことを確信している。

(3) 次年度に向けての取り組み

「評価をしてください」とただ呼びかけるだけでは回答率は上がらない。また、受講生が授業時間外で時間を見出して授業の評価を行うこともあまり期待できないと考えられるので、次年度は、授業の最終日に評価の場を設けて、受講生自身の取り組みと教員の指導の在り方について確実に評価させていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

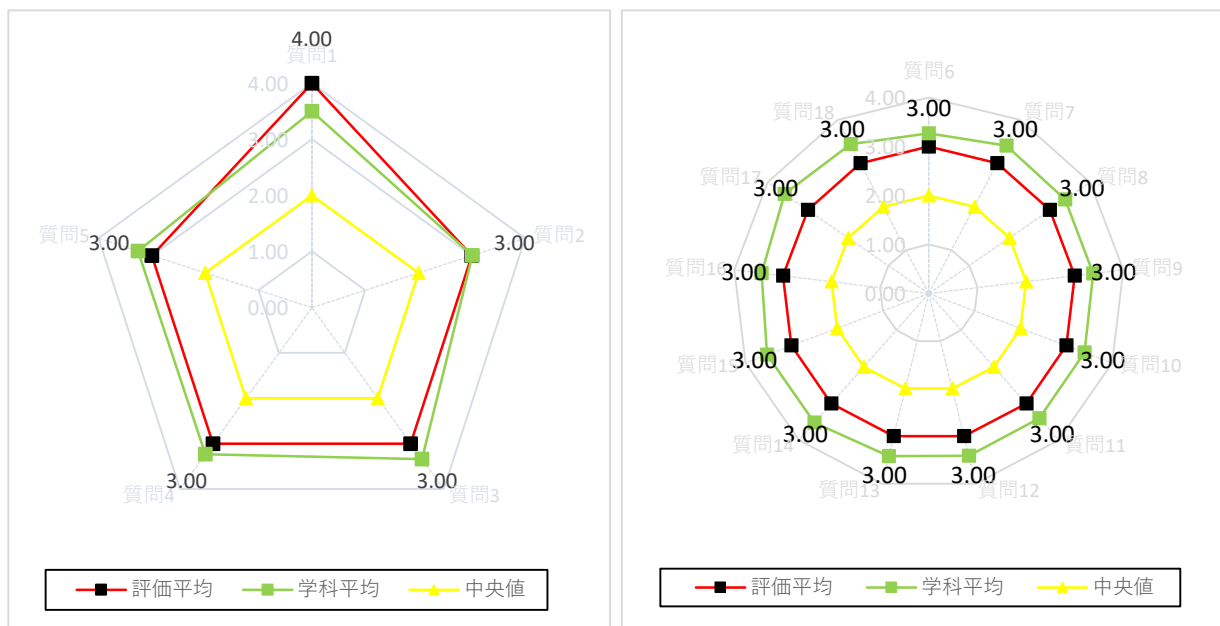
ゼミ生8人のうち、7名が小学校教員志望、あと1人は子どもに係わる施設職員志望ということで、全員が同じベクトルで授業に取り組んでおり、ゼミの雰囲気や学ぶ姿勢の良さなどが評価に表れていると考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

全員が採用試験、卒業研究、単位修得に向け、共に学び、前進するゼミであり続けるために、毎授業ごとに教師のみならず学生相互での学習の進捗状況の確認や助言等を行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

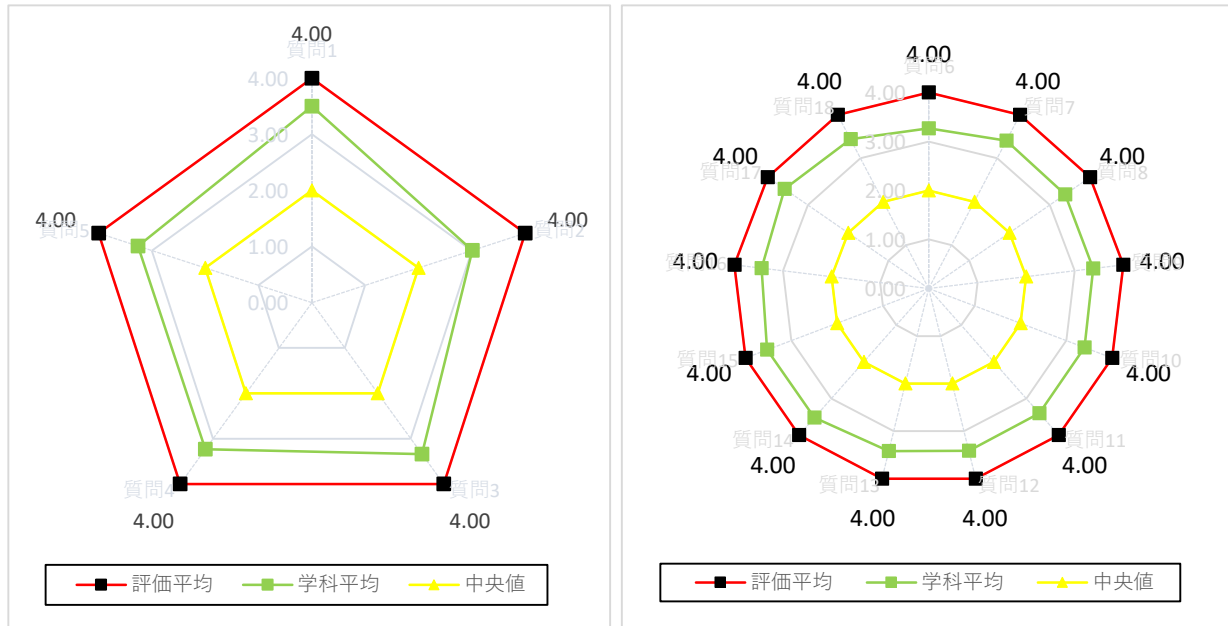
回答者は9名中1名である。回答率が低く、回答者は、交換留学生の1名のみである。自己評価も授業のやり方もだいたい3で、まあまあの評価である。本演習の授業は、学生の主体的な取り組みで成り立っている。評価項目が演習の評価に適するとは言えないが、制度上、評価回答が増えるように働きかけたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生の主体的な参加を中心に、学生と協力・協議しながら、学生との信頼関係を打ち立てるように努力するとともに授業のやり方を工夫していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	11名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

全ての項目が高く問題がないと言える。

(3) 次年度に向けての取り組み

これまでと同様にまたそれまで以上に授業を展開していきたい。